博士論文

近江における方形周溝墓の研究

2017 年 11 月

滋賀県立大学大学院博士後期課程
人間文化学研究科地域文化学専攻

浅井　良英
（1276001）

近江における方形周溝墓の研究

目 次

序章　　方形周溝墓研究史と研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・001
はじめに
第１節　方形周溝墓研究史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・001
第２節　問題の所在と研究目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・003
第３節　弥生時代の社会構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・004
おわりに

第１章　方形周溝墓の分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・008
はじめに
第１節　弥生時代の年代観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・008
第２節　方形周溝墓の分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・010
第３節　方形周溝墓の集成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・015
おわりに

第２章　近畿・東海地域の弥生前期の方形周溝墓・・・・・・・・・・・・・・・・・020
はじめに
第１節　弥生前期の方形周溝墓の集成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・020
第２節　弥生前期の方形周溝墓の様相－事例研究－　・・・・・・・・・・・・・・023
第３節　方形周溝墓からみた弥生前期の社会像　・・・・・・・・・・・・・・・・032
おわりに

第３章　近江の方形周溝墓Ⅰ（服部遺跡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・041
はじめに
第１節　服部遺跡の方形周溝墓群相　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・041
第２節　方形周溝墓からみた服部遺跡の社会像　・・・・・・・・・・・・・・・・045
おわりに

第４章　近江の方形周溝墓Ⅱ（湖南地域）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・051
はじめに
第１節　方形周溝墓の集成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・051
第２節　方形周溝墓の様相　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・059
第３節　方形周溝墓からみた湖南地域の社会像　・・・・・・・・・・・・・・・・064
おわりに

第５章　近江の方形周溝墓Ⅲ（湖東・湖北・湖西地域）・・・・・・・・・・・・・・・・078
はじめに
第１節　湖東地域の方形周溝墓の様相　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・078
第２節　湖北地域の方形周溝墓の様相　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・088
第３節　湖西地域の方形周溝墓の様相　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
おわりに

第６章　近江における方形周溝墓の受容と展開　・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
はじめに
第１節　方形周溝墓の盛衰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第２節　方形周溝墓の様相と社会構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
おわりに

終章　研究の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126

謝辞

図表　目次

図 1　墓域モデル図（弥生中期）（岩松 1992a 第 1 図を引用）・・・・・・・・・・・・・・・・011
図 2　方形周溝墓の各部名称（服部遺跡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・012
図 3　方形周溝墓の形態の分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・013
図 4　方形周溝墓群の群構成分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・014
図 5　近江の方形周溝墓遺跡の地域分け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・016
図 6　近江の方形周溝墓遺跡の地域分けと行政区（市町）・・・・・・・・・・・・・・・・・017
図 7　弥生時代前期の方形周溝墓遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・022
図 8　墓域の変遷（1）　東武庫遺跡 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・023
図 9　墓域の変遷（2）　古川遺跡 5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・024
図 10　墓域の変遷（3）　北仰西海道遺跡 11・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・025
図 11　墓域の変遷（4）　コドノＢ遺跡 18・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・026
図 12　墓域の変遷（5）　山中遺跡 20・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・027
図 13　墓域の変遷（6）　荒尾南遺跡 21・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・029
図 14　重複埋葬事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・035
図 15　弥生時代前期の集団・居住域・墓域の関係の概念図・・・・・・・・・・・・・・・・036
図 16　服部遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・041
図 17　服部遺跡の方形周溝墓群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・042
図 18　服部遺跡の方形周溝墓の規模（台状部の辺長が判明したもの）・・・・・・・・・・・043
図 19　服部遺跡の変遷（概念図）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・044
図 20　複数埋葬における埋葬施設の配置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・047
図 21　湖南地域（湖南平野）の方形周溝墓遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・057
図 22　湖南地域（西岸部）の方形周溝墓遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・058
図 23　方形周溝墓の形態事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・060
図 24　方形周溝墓の群構成事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・062
図 25　烏丸崎遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・067
図 26　服部遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・067
図 27　経田遺跡・焔魔堂遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・070
図 28　湖東地域の方形周溝墓遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・082
図 29　方形周溝墓の形態事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・083
図 30　内堀遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・083
図 31　高木（浅小井）遺跡変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・084
図 32　勧学院遺跡・馬淵遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・085
図 33　川ノ口遺跡・寒藪遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・086
図 34　湖北地域の方形周溝墓遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・091
図 35　方形周溝墓の形態事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・092
図 36　塚町遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・093
図 37　越前塚遺跡遺構の変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・094

図 38　越前塚遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・095
図 39　法勝寺遺跡遺構図（全期）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・096
図 40　法勝寺遺跡遺構変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・097
図 41　黒田長山遺跡・桜内遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・099
図 42　湖西地域の方形周溝墓遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
図 43　北仰西海道遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
図 44　南市東遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
図 45　方形周溝墓遺跡の時期別分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
図 46　近江地域への方形周溝墓の伝搬ルート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
図 47　方形周溝墓群の様相と社会構造の概念図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
図 48　方形周溝墓群の様相の時期的変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122

表 1　弥生時代前期の方形周溝墓集成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・021
表 2　複数埋葬の方形周溝墓一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・048
表 3　湖南地域の方形周溝墓集成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・052
表 4　湖南地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相・・・・・・・・・・・056
表 5　湖東地域の方形周溝墓集成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・079
表 6　湖東地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相・・・・・・・・・・・081
表 7　湖北地域の方形周溝墓集成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・089
表 8　湖北地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相・・・・・・・・・・・090
表 9　湖西地域の方形周溝墓集成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
表 10　湖西地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相・・・・・・・・・・・104
表 11　方形周溝墓遺跡の継続期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117

序章　方形周溝墓研究史と研究目的

はじめに

どの時代においても、墓制は被葬者のみならずその人が生きた時代の様相や思想を強く反映している。そのため、ある時代の社会構造や変遷が墓制の研究を通して論じられることが多い。とりわけ、金石文・文書類などの記録の乏しい時代の社会様相を明らかにするには、当時の墓制を研究することが必須であろう。

本研究で対象とする方形周溝墓は、死者を埋葬しその周囲を溝で方形に区画する墓制であり､弥生時代を通して九州地方から東北地方にかけて広くみられる代表的な墓制である。この方形周溝墓の研究を通して近江の弥生時代の社会構造を復元することが、本研究の大きな目的である。

本章では、近畿地方を中心とする方形周溝墓研究史を概観するとともに、近江の方形周溝墓を研究するにあたり、その課題を抽出し具体的な研究目的を明確にしておきたい。

第１節　方形周溝墓研究史

1　方形周溝墓研究史概観

方形周溝墓の発見・命名の契機となった、1966 年の宇津木向原遺跡（東京都八王子市）の発掘調査からすでに半世紀の歳月が経っている。その間、毎年新たな調査事例が加えられ全国でその総数は 5,000 基を越えるとみられている（山岸 2015）が、各地域において検出数がまとめられているわけでなく、全国での実数を把握するのは困難な状況にある。近江地域では 2015 年度時点で、後章でも述べるが、110 遺跡・1,656 基が検出・報告されている。方形周溝墓研究史の初期の大塚・井上論文（1969）では、全国で 53 遺跡・140 基が集成されているが、その方形周溝墓の数には隔世の感がある。

方形周溝墓研究史において 1960 年代後半から 1970 年代は、方形周溝墓の検出そのものが研究であり、発掘調査方法・技術（削平された埋葬施設・周溝部の遺存状況の確定、周溝部の隣接・共有の区別、台状部の盛土の確認、周溝部の土器の遺存状況の確認など）の確立に注力した時代といえる。また、検出された少数の方形周溝墓を対象として主に被葬者像や墓の性格が論じられた。

1980 年代に入ると各地において大規模な土地開発・整備が進められ、それにともう発掘調査によって膨大な数の方形周溝墓が検出・蓄積された。多くの方形周溝墓群や広大な墓域も検出され、方形周溝墓の分析に群構成という視点が加わり、その群構成の分析を通して集団･階層そして首長層の析出などが論じられるようになった(岩松 1992a･1992b など)。

1990 年代後半には発掘調査件数の減少にともない、それまで蓄積されていた方形周溝墓の資料が、新たな分析手法・視点から再検討され、方形周溝墓研究が深化した。具体的には、方形周溝墓の分布・規模・形態・群構成・共伴遺物などの基本情報の再検討であり、

それらをもとにした方形周溝墓の発生・起源論、方形周溝墓の造墓集団・被葬者論など多岐にわたるテーマが論じられてきた（山岸 1996、近畿弥生の会 2007、河野 2007）。

2　近畿地方の方形周溝墓研究史

近畿地方での方形周溝墓研究は、副葬品の出土が少ないこともあり、方形周溝墓の規模や墓域での墓のあり様などの分析をもとにして、方形周溝墓の被葬者とその集団・階層が論じられてきた。

方形周溝墓の初現は弥生前期の東武庫遺跡（兵庫県尼崎市）であり、日本で最古の方形周溝墓と考えられている。ここでは規模の大小、被葬者の単数・複数、埋葬施設の多様性（土壙・土器棺・木棺）などが認められるが、これらはその後の弥生後期にいたるまでの方形周溝墓遺跡においても認められる。この点から、これらの諸様相が方形周溝墓制の基本的構造であるとして、すでに方形周溝墓の初現期（成立期）から階層差が存在していたとする考えがある（藤井 2007）。この問題については後章で取り上げたい。

弥生中期後葉の瓜生堂遺跡（大阪府東大阪市）はこの時期の代表的な方形周溝墓遺跡として取り上げられることが多い。瓜生堂 2 号墓の調査では大型の墳丘に土壙・土器棺・木棺がそれぞれ 6 基、計 18 基の埋葬施設が検出された。さらに供献土器・小児歯牙なども検出されており、多くの分析資料が提供された点で、方形周溝墓研究史上の貴重な遺跡といえるだろう。当該調査報告（田代 1981）では 3 世代にわたる夫婦墓（世帯墓）との評価がなされた。この瓜生堂 2 号墓の調査を契機として集団墓に関して、供献土器の分析から埋葬儀礼・被葬者像（春成 1985）、埋葬施設の切り合い関係から被葬者集団の埋葬順序の復元（大庭 2005）、さらに供献土器の破砕散布儀礼から出自集団の抽出（藤井 2016）などが論じられ、方形周溝墓の研究が大きく進んだ。その結果、瓜生堂 2 号墓の性格も家族墓・家長墓（都出 1984）という当初の評価から、クラン墓 (1)（大庭 2007）、さらに近年ではリネージ墓（藤井 2016）などの評価がなされている。ただし、近畿地方においては瓜生堂 2 号墓のように多数埋葬や豊富な出土品をもつ遺跡は例外的な事例であり、集団墓に関する上述の評価が他の地域や墓域にもあてはまるというわけではない。しかし、瓜生堂 2 号墓の研究において開発・工夫された分析手法や視点は、その後の研究を進める上で大きな推進力となっている。

弥生後期には近江では、後章でも論じるが、円形周溝墓・前方後方形周溝墓が出現し、方形周溝墓の形態が多様化し、大規模（辺長 20m 超）な方形周溝墓の出現の頻度が増えてくる。これらは、あきらかに河内平野を中心とした畿内とは異なる様相を呈する。

このように各地域の事例が増加し研究が深化するにつれて、墓域や方形周溝墓の様相も多様であることがわかってきた。つまり、対象地域が異なれば解釈も異なり、統一的な見解は困難であるという状況にある (2)。たとえば、方形周溝墓の規模、埋葬施設数、埋葬施設の配置などで社会の階層化が論じられることが多いが、極論すると、その指標はその地域限定のものと認識しておくべきであろう。このことは方形周溝墓という墓制の起源・伝搬・受容・定着・衰退が単調なものではなく、地域によって独自の経過をたどることを示唆している。したがって、地域ごとの情報整理と解釈を積み重ね、それらをもとにして、より広い地域の様相を論じることが重要であろう。そのような視点から、広域の情報を共

有するためのシンポジウムも開催されるようになってきた（福井県鯖江市教育委員会 2011 など）。

3　近江における方形周溝墓の研究

近江における方形周溝墓の発見は 1958 年、大津市南滋賀の志賀小学校運動場（南滋賀遺跡）の拡張工事にともなう発掘調査で検出された「溝状遺構」にはじまる。この遺跡は弥生前期末から中期にかけての土壙墓からなる墓域であるが、上記の調査では矩形に曲がる「溝状遺構」が検出された。周辺には 20 基以上の土壙墓や 2 基の甕棺墓が存在することから、この「溝状遺構」も墓に関連する遺構であると推定された（田辺 1959）。前述の宇津木向原遺跡での方形周溝墓の発見・命名の約 10 年前のことである。また、第 3 章でとりあげる服部遺跡（守山市）は 1974 年から 5 年間をかけた調査で、弥生中期前葉から後期にいたる、約 360 基の方形周溝墓が検出されている。南滋賀遺跡・服部遺跡のどちらも、方形周溝墓研究史において特筆されるべき遺跡であろう。

さて、近江における方形周溝墓の研究成果は、方形周溝墓遺跡の発掘調査に携わった人たちが当該報告書の「まとめ」という形で発表されている。すなわち、大橋信弥氏は服部遺跡の豊富な資料を用いて規模･形態･群構成を整理･分類して被葬者や集団を（大橋 1985）、山崎秀二氏は吉身西遺跡の墓群の配置（群構成）から集団について（山崎 1988）、伴野幸一氏は野洲川下流域の方形周溝墓遺跡出土の土器文様の分析から地域集団の抽出および墓域と集落の関係について（伴野 1990）、各々論じている。これらの論考は本研究にとって示唆に富んだ内容であるが、発掘調査報告書の一部をなすものであり、当該調査にかかわる遺跡とその周辺に限られた範囲での考察となっている。

近江全域を対象とした論考としては、吉田秀則氏が供献土器の集成・分類から器種構成の地域性を抽出し近江地域外とのつながりを（吉田 1990）、岩橋隆治氏は墓地構成の様相（埋葬施設・副葬品など）を分類し墓地構成と社会様相との関係を（岩橋 1991）、各々論じている。いずれも 1990 年代初頭の論考であり、その後の新出資料による再考が必要と思われる。

このように､近江における方形周溝墓研究は 1990 年代後半から停滞している状況にある。近年の発掘調査は調査区域が狭いこともあり、方形周溝墓研究に有効な「良い資料」も少ない。しかし、少ないながらも方形周溝墓は毎年着実に検出・蓄積されており、資料の量そのものは増加している。一人の研究者で把握・分析できない状況に陥っているのが実情であろう。

第 2 節　問題の所在と研究目的

近江における方形周溝墓研究の成果の多くは各市町村史の一節に収められている。つまり各地域の社会構造を論じるにとどまり、近江全域を対象としたテーマ、たとえば近江において方形周溝墓という墓制がどこから伝搬しどこに届いたのか、そして近江全域にどのように広がったのかという視点からの検討がなされていない。

また、当該地域のみの資料を対象とするため、たとえば方形周溝墓の規模の大小も地域的な基準で「大規模」方形周溝墓と認定されてしまった報告もある。

そこで、本稿では近江の方形周溝墓群を通して近江の弥生社会の構造（集団・階層）をあきらかにすることを目的として、

(1) 方形周溝墓の初現期である弥生前期の方形周溝墓を集成・分析し、当該期の社会像を検討する。ここでは、弥生前期の方形周溝墓が集中する近畿・東海地域の資料を対象とする。

(2) 約 360 基におよぶ方形周溝墓が検出された服部遺跡を対象とし、一つの墓域における方形周溝墓群の形成過程や群構成の分析をとおして方形周溝墓群のもつ諸様相を把握し、服部遺跡（弥生中期）の社会像を検討する。

(3) 近江を湖南・湖東・湖北・湖西地域にわけ、地域ごとの方形周溝墓を集成・分析し、各地域の社会像を検討する。

(4) 上記の (1) ～ (3) の結果をもとに、近江における方形周溝墓の受容と展開を論じる。また、近江の弥生時代の社会構造（集団・階層）、特に階層化プロセスが方形周溝墓という墓制にどのように反映されているのかをあきらかにしたい。

第３節　弥生時代の社会構造

本研究では墓域の様相から社会構造（集団・階層）を論じようとしている。そのため、人類学的な視点から構築された社会構造（サーヴィス 1979）、人骨の考古学的な視点から導かれた親族関係と社会構造（田中良之 2008）を整理・確認しておきたい。

1　新進化主義

まず、社会の進化論において集団・階層がどのように理解されているのかを確認しておきたい。進化論に関する学説は、モルガンの論じた親族集団をもとにした古典的な進化論（モルガン 1958）を経て、今日ではサーヴィスが論じた新進化主義（サーヴィス 1979）が広く受けいれられている。

新進化主義では社会組織の複雑さを基準に社会を分類している。すなわち、社会の進化をバンド社会、部族社会、首長制社会の段階にわける。バンド社会は血縁を核に結合した小集団（バンド）で移動を繰り返す狩猟採集民の社会であり、この結合原理には父系・母系がともにみられる。次の部族社会では外婚を単位として機能するいくつかの出自集団に社会が分割され、出自集団の多くは共通の祖先観念・系譜意識をもつクラン（氏族）をなす。つまり部族社会はいくつかのクランに分割され、呪術・祭祀などをとおして部族の統合をおこなうという形態をとる。この結合原理は父系・母系さらに双系（父系・母系並立の親族関係）がみられる。そして首長制社会では部族社会の親族関係を基礎にして階層分化を遂げる。したがって、社会はクランに分割されるが、そのクランの内部やクラン間に階層差が存在する社会となる。ここでは父系が優先となるが、双系や母系もある。さらに国家社会になると親族関係は社会の基礎をなさず、官僚制度を基礎として統治がおこなわれる。

2　階層化プロセス

田中良之氏の親族研究は墓から出土した人骨の遺伝的形質の分析（歯冠計測値分析）をとおして被葬者の親族関係、ひいてはその墓・墓域の存在する地域の社会構造（集団・階層）をあきらかにしようとするものである（田中 2000)。人類学的・考古学的視点をあわせもった実証的な手法であり、その結論には説得力がある。もちろん、この方法には人骨（歯冠）の存在が必須となるが、近畿地方で人骨が遺存している遺跡は少なく、本研究で対象とする近江においても同様である。しかし、その研究から導かれた結論を理解しておくことは、本研究での調査・分析を進めるうえでたいへん重要なことである。

田中良之氏は主として西日本の縄文・弥生・古墳時代の墓から出土した人骨の歯冠を計測し個体間の血縁関係の復元をおこなっている。その成果によれば、縄文時代には双系の部族社会が形成され、弥生時代には首長墓が出現し首長制社会に移行するが、古墳時代になっても人々の親族関係は双系のままであった。ようやく 6 世紀に、横穴墓などに血縁関係のない男女の合葬、すなわち父系の夫婦墓があらわれる。

このように「弥生時代には首長墓が出現し首長制社会に移行する」わけであるが、弥生時代の開始期には縄文時代から継続する部族社会であったと考えられる。いくつかのクランが統合されて地域社会を形成していたとみられる部族社会が、その地域の傑出した人物が析出する首長制社会に移行するわけであるが、上述のとおり、新進化主義では社会組織の複雑さを基準にして社会の進化過程を論じている。ここでいう社会組織の複雑さの度合いとは人口密度・集団数・集団機能、そして社会規模の拡大などをさしているが、これらの複雑さの度合が墓・墓群・墓域にどのようにあらわれるか、すなわち、弥生時代の階層化プロセスと墓・墓群・墓域の様相の関係を、田中良之氏の研究成果（田中 2000、2008）を引用して考えてみたい。

（1）クラン同士の意識が強い段階

上述のように、縄文時代の晩期から弥生時代の開始期の社会は部族社会であった。弥生時代の開始についての年代観は、よく知られるように地域的に大きく異なる。しかし、前期から中期前半には列島全域にわたり稲作が定着するとともに人口が爆発的に増加したと考えられ（禰宜田佳男 2011)、その結果、人口密度が高くなり拡大した集落から、一部の人々が新たに開発した土地に出ていくことになる。これは、母村から分村が発生するということであるが、決して無秩序に人々が母村を出ていくのではない。その実態はクランごとの分節化であり、単独のクランあるいは複数のクランとともに土地を開発して移住すると考えられる。この母村からクランが分節化することで母村と分村の間にはクランの系譜が保たれるが、分村に対して母村が常に上位の存在とはいえない。つまり、系譜的には母村の方がより古いといえるだけであり、母村と分村を含む地域社会に階層が生じているわけではない。クランは同一出自集団としての意識が強く、したがって墓・墓群の形成に際してそのような紐帯意識が表現されると推定される。

（2）選別されたクランの意識が強い段階

稲作のため高燥地域の開拓が進むと母村と分村を含む地域社会は拡大し、また複数の母村と複数の分村を含む大地域社会が出現する。地域社会・大地域社会の間で諸事を調整す

る人物が求められ、地域内では結束を高めるための祭祀や作業による共通意識の醸成がなされる。この段階では、大地域社会には複数以上のクランが存在し、諸事を調整する人物や祭祀・作業を統率する人物を輩出するクランが、他のクランの上位に位置づけられる。したがって、この人物をふくむクランの墓・墓群が他の墓とは異なる様相をもつことになろう。

（3）クランの中で選択された人物の意識が強い段階

この段階では、大地域間の調整をおこない、同時に大地域内を統率する、つまり調整と統率する人物は同一人物であり、選別されたクランの中でも他のメンバーとは異なる位置を占める。「もはや墓群には出自集団の姿はなく、より選択された人物が埋葬されているとみるべきであろう」（田中 2008）。すなわち、首長の出現に他ならない。墓においても、個人の墓として峻別されるものとなる。

おわりに

本研究では墓域の様相から社会構造（集団・階層）を論じようとするが、これは墓域の様相に当該社会の集団・階層の情報が反映されているという大前提に立って研究を進めるということである。第３節の事項は、本研究における弥生時代の社会構造を考察するための理論的背景としたい。

【註】

（1）出自集団とよばれる集団には 2 種類がある。リニージは成員間の系譜関係が相互に明確な出自集団であり、クランは氏族と同義で、成員の系譜関係が明確ではないが、同一始祖をもつと信じられている人々の集団である。

（2）『考古学ジャーナル』No.674（ニュー・サイエンス社　2015 年）では、「方形周溝墓発見と研究 50 周年」と題する特集を組み、これまでの研究の歩みと課題を載せている。そこでは各地域の研究動向が紹介されている。

【参考文献】

岩橋隆浩 1991「墓地からみた弥生社会の変質過程」『紀要』第 4 号　滋賀県文化財保護協会

岩松保 1992a「墓域の中の集団構成（前編）－近畿地方の周溝墓群の分析を通じて－」『京都府埋蔵文化財情報』第 44 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

岩松保 1992b「墓域の中の集団構成（後編）－近畿地方の周溝墓群の分析を通じて－」『京都府埋蔵文化財情報』第 45 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

大塚初重・井上裕弘 1969「方形周溝墓の研究」『駿台史学』第 24 号　駿台史学会

大橋信弥 1985「服部遺跡の方形周溝墓をめぐる問題」『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会

大庭重信 2005「方形周溝墓の埋葬原理」『考古学ジャーナル』No534　ニュー・サイエンス社

大庭重信 2007「方形周溝墓の埋葬原理とその変遷－河内地域を中心に－」『墓制から弥生社会を考える』近畿弥生の会　六一書房

河野一隆 2007「墓と階層③近畿」『弥生社会のハードウェア』弥生時代の考古学 6　同成社

近畿弥生の会 2007『墓制から弥生社会を考える』六一書房

田代克己 1981「まとめ」『瓜生堂遺跡Ⅲ（本文編）』瓜生堂遺跡調査会

田中良之 2000「墓地から見た親族・家族」『女と男、家と村』古代史の論点 2　小学館

田中良之 2008『骨が語る古代の家族　親族と社会』歴史ライブラリー252　吉川弘文館

田辺昭三 1959『大津市南志賀遺跡調査概要』大津市教育委員会

都出比呂志 1984「農耕社会の形成」『原始・古代 1』講座日本歴史第 1 巻　東京大学出版会

禰冝田佳男 2011「墓地の構造と階層社会の成立」『弥生時代（下）』講座日本の考古学 6　青木書店

春成秀爾 1985「弥生時代畿内の親族構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 5 集　国立歴史民俗博物館

伴野幸一 1990「弥生土器文様の地域的構造」『二ノ畦・横枕遺跡発掘調査報告書　益須寺遺跡発掘調査報告書』（『守山市文化財調査報告書』第 38 冊）守山市教育委員会

福井県鯖江市教育委員会 2011『日本海側の弥生墓制』

藤井　整 2007「近畿地方における方形周溝墓の基本的性格」『墓制から弥生社会を考える』近畿弥生の会　六一書房

藤井　整 2016「瓜生堂２号墓の再検討」『考古学は科学か 上』田中良之先生追悼論文集編集委員会　中国書店

山岸良二 1996『関東の方形周溝墓』同成社

山岸良二 2015「総論　新たな方形周溝墓研究へ「5 つの提言」」『考古学ジャーナル』No674　ニュー・サイエンス社

山崎秀二 1988「方形周溝墓の分析」『吉身西遺跡発掘調査報告書』（『守山市文化財調査報告書』第 32 冊）守山市教育委員会

吉田秀則 1990「滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について」『紀要』第 3 号　滋賀県文化財保護協会

L.H. モルガン（青山道夫訳）1958　『古代社会』岩波書店

(Morgan L.H, Ancient Society or Researches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization. MacMillan & Company, London, 1877)

E.R. サーヴィス（松園万亀雄訳）1979『未開の社会組織－進化論的考察－』人類学ゼミナール 12　弘文堂

(Service E.R, Primitive Social Organization: an Evolutionary Perspective. Random House, NY, 1971)

第１章　方形周溝墓の分析

はじめに

方形周溝墓の分析にあたり、弥生時代の年代観、方形周溝墓（群）の分析手法、方形周溝墓の規模・形態、方形周溝墓群の群構成、および方形周溝墓（遺跡）の集成項目などを明確にしておく。なお、本研究で使う関連用語の定義を下記に列挙しておく。

墓・墓群・墓域・墓地

墓とは文字通り個々の墓を指し、複数の墓の集合体を**墓群**とよぶ。また一つの墓群、あるいは二つ以上の墓群が占有する土地の広がりを**墓域**とよぶことにする。したがって、墓が１基のみ存在する場合には墓群や墓域という概念は成り立たない。また複数の墓が存在する場合でも個々の墓の間隔によっては墓群とよべないこともありうるが、その場合については適宜判断したい。**墓地**は墓が存在する土地の一般名称とし、墓が１基でも存在すれは、それは墓地とよぶ。

区画墓・周溝墓・方形周溝墓・従来墓

区画墓とは死者を収容する土壙・土器棺・木棺の周囲を区画・明示した墓で、溝で区画した墓を**周溝墓**とよび、周溝墓のうち方形に区画された墓のことを**方形周溝墓**とよぶ。地山を台状に整形し、あるいは椀状に盛土して明示する墓もあり、それぞれ台状墓・墳丘墓などとよばれる。**従来墓**とは方形周溝墓の出現以前の墓制の総称で、おもに縄文時代にみられる土壙墓・土器棺墓・木棺墓を指す。

第１節　弥生時代の年代観

１　畿内の弥生時代の年代観

弥生時代の開始年代については、その指標となる水稲耕作の痕跡や水田跡の相次ぐ発見と、その絶対年代を決定する自然科学的年代測定法の進展が、従来の年代観を大きく揺さぶっている。とりわけ、国立歴史民俗博物館が主導している放射性炭素 14 年代法では弥生時代のはじまりが紀元前 9～10 世紀頃とされ（藤尾 2010)、これまでの理解である紀元前 4 世紀後半（寺沢 2000）に対して 5 世紀近くもさかのぼることになる。当初、この測定法のもつ問題点として指摘されていた放射性炭素 14 の濃度の測定誤差や試料の妥当性も、質量分析器（AMS）の性能向上、試料採取の客観性の確保などで、その測定値に対する信頼性が格段に改善されている。さらに、放射性炭素 14 の測定値から得られる年代（以下、炭素年代）を暦年代に換算するために必要な較正曲線も日本の環境に合ったものが作成され（尾嵜 2009)、利便性が改善されている。近年では、この炭素年代にもとづく弥生年代観を積極的に用いる研究者も出始めており（広瀬 2007)、また一般読者向けの本においてもこの新しい年代観が用いられるようになっている（都出 2011)。しかし、測定値の精度があがってもそもそもこの手法がもつ原理的な脆弱性について問題視する自然科

学者もいる（新井 2007）。さらに、本研究で取り扱う弥生時代（とりわけ弥生時代の前期から中期に対応する時期）の較正曲線は最も平坦な区間にあたっており[(1)]、考古学界での趨勢としては、放射性炭素 14 年代法を弥生時代の暦年代決定において用いることにはなお保守的であり、年輪年代測定の結果との併用が一般的といえる。

一方、弥生時代の終末、すなわち古墳時代の開始年代についても、従来は 3 世紀後半とされていたが、定型前方後円墳の初現とされる箸墓の築造年代の研究が深まり、3 世紀中期までさかのぼると考えられている（石川 2010）。

これらを考慮して、本研究では弥生時代の年代観について、以下の武末純一氏の考えに基づくことにする（武末 2002）。すなわち、弥生時代を紀元前 6 世紀後半から紀元後 3 世紀前半までの期間とし、この期間を前期・中期・後期に区分し、畿内での土器編年様式との対応をおおむね、弥生前期－畿内第Ⅰ様式、弥生中期前葉－畿内第Ⅱ様式、弥生中期中葉－畿内第Ⅲ様式，弥生中期後葉－畿内第Ⅳ様式，弥生後期－畿内第Ⅴ様式と考え、さらに弥生末期から古墳時代初頭に庄内式、古墳時代前期に布留式を対応させる。

2　近江の弥生時代の年代観

近江での弥生時代の年代観は、この地域の土器編年と上記の畿内土器編年を対応させて論じられてきた（兼康 1990、森岡 1990）。すなわち、近江の弥生土器様式は近江第Ⅰ様式～近江第Ⅴ様式に時期区分できるが、畿内の土器様式との併行関係をみると、弥生前期が近江第Ⅰ様式と畿内第Ⅰ様式、弥生後期が近江第Ⅴ様式と畿内第Ⅴ様式の時期区分とほぼ一致する。ただ、土器様式が多様化する弥生中期にあたる近江第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式においては、畿内第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式と少し時期が異なっている。このような編年（案）は、その後も発掘事例が増加するとともに、とくに弥生中期の土器様式がさらに多様化することがあきらかとなり、近江の地域ごとに細かい時期区分が提案されている（伴野 1990、伊庭 2003、国分 2004）。

そこで、本研究では近江の弥生時代の時期区分を畿内のそれにしたがうものとし、必要に応じて、細かい時期区分を参照する。さらに、土器編年においては「畿内」・「近江」を省略し、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式と記述する。

ところで、発掘調査報告書においては報告書の発刊年度や報告者よって、弥生時代の時期の記述が統一されていない。出土土器の多寡・部位により編年作業が十分できないことによるとみられるが、たとえば弥生中期の時期区分について「弥生中期」、「弥生中期前半・後半」、あるいは「弥生中期前葉・中葉・後葉・末」などと記述されることが多々ある。そこで、これらの報告書での時期の記述について、「弥生中期前半」は第Ⅱ様式から第Ⅲ様式、「弥生中期後半」を第Ⅳ様式に、また、「弥生中期前葉」は第Ⅱ様式に、「弥生中期中葉」は第Ⅲ様式に、「弥生中期後葉」は第Ⅳ様式に、そして「弥生中期末」も第Ⅳ様式にあてた。

ところで、弥生時代の時期区分と暦年代との対応について、近江地域の資料による年輪年代測定からあきらかになった暦年代を下記に紹介しておく。第Ⅳ様式前半に盛期をもつ下之郷遺跡（守山市）では最も古いと考えられる環濠 SD-1 の底から木製盾（スギ）が検出され、紀元前 190－180 年と判定されている[(2)]。また、第Ⅳ様式後半に盛期をもつ二ノ

畦横枕遺跡（守山市）においては２基の井戸に枠材（スギ・ヒノキ）が残っており、それらが紀元前 60 年、紀元前 97 年と判定された[(3)]。さらに第Ⅴ様式前半から集落を形成する下鈎遺跡（栗東市）では掘立柱建物 SB1 の柱根が紀元後 69 年＋と判定されている。

これらから勘案すると、おおむね第Ⅳ様式から第Ⅴ様式へと変化するあたりが紀元前後と考えられる。

第２節　方形周溝墓の分析

１　墓域の分析手法

水野正好氏が、方形周溝墓が周溝を共有・隣接して配置された群構成をとることを「一家族が、時間的に継起して、数世代にわたって家族墓を営んだことを示している」（水野 1972）と指摘した。それ以来、墓域における方形周溝墓の規模・形態・群構成の様相とその変遷をとおして社会構造をさぐる手法は、今日では方形周溝墓の標準的な分析手法となり、大きな成果が得られている。

ここでは、その手法の嚆矢ともいえる高倉洋彰氏の研究、さらに本研究で参考にした岩松保氏の手法を紹介・検討したい。

（1）高倉洋彰氏の方法（高倉 1973）

九州北部の弥生時代の遺跡（主として甕棺墓・土壙墓）を対象として、そこにみられる墓域の様相を下記のように分類し、各々の様相と社会構造とを関連づけている。

1）伯玄社タイプ（福岡県春日市・伯玄社遺跡）：弥生前期の比較的小規模な墓域で、過半数におよぶ小児墓をふくみ、群構成をともなわない。これは、初期の水稲耕作の時期にあたりその生産力（量）では多くの人口を養うことができず、少人数の血縁を紐帯とする結合にとどまっていた社会を反映している。また、墓域も血縁的共同体の家族墓的性格を示している。

2）汲田タイプ（佐賀県唐津市・宇木汲田遺跡）：弥生前期末から中期の墓域で、いくつかの群構成からなり、その群相互間には副葬品の多寡・種類により格差が認められる。これは、水稲耕作技術の発達により多人数による共同作業を必要とする時期にあたり、地縁で結合した人々が造成した共同墓地の性格を示している。つまり共同墓地にみられる群構成は地縁的共同体の性格を反映している。また、群構成間でみられる格差は社会が等質的ではないことを示している。

3）立岩タイプ（福岡県飯塚市・立岩堀田遺跡）：弥生中期後半に出現する墓域で、そこには占有面積が大きく副葬品に鉄製武器がふくまれる墓があらわれ、共同墓地から特定集団が新たに独自の墓域を造成したことを示し、墓域の様相は地縁的共同体内部での有力者集団の確立を示している。

4）宮の前タイプ（福岡市・宮の前遺跡）：弥生終末に出現する墓域で、集落から離れた丘陵上に小規模ながら封土墳が造られている。これは個人が析出されていく段階の墓域の様相をもつ。

このように墓域の様相は、時代とともに伯玄社、汲田、立岩、宮の前タイプへと変遷していくと論じている。

このように墓域の様相を社会構造（集団・階層）と関連づけ、その背景には水稲耕作の深化と、それにともなう集団間の競争があるとしている。とりわけ、墓域の諸様相の中でも副葬品の有無・種類を根拠にした被葬者間の格差・階層などの論点には説得力がある。ただ、西日本では、九州北部を除いて、副葬品の出土は些少なこともあり、当時の社会での階層化を論じるには別の指標も必要である。

（2）岩松保氏の方法（岩松 1992a・1992b）

「各集落における墓域のあり方の差異を統一的に把握する」ことを目的として、墓群の構造を５段階（埋葬墓・単位墓・単位墓群・小墓域・墓域）に分解して、あらかじめ各々の段階の社会的意味づけをした上で、社会構造を論じている。この手法は方形周溝墓群だけを対象としたものではないが、本研究においても適用できるものであり、**図１**を参照しながら紹介・検討したい。まず墓群の構造を下記の５段階に分解する。

1）埋葬墓：個人墓であり、土壙墓・木棺墓・甕棺墓などのように死者が埋葬される最小の単位である。

2）単位墓：複数の埋葬墓が有機的な関連をもって配置され、空間的には小区画を占める墓で、その被葬者集団の「基本単位」を表出していると考えられる。周溝墓や台状墓などが典型例であるが、土壙墓群や土器棺墓群でも有機的な関連がみられるものはこれに該当する。単位墓を造成する集団（単位墓集団）は社会的な階層関係や血縁関係をその結合原理としていると考えられ、一世代内における家族成員の埋葬墓が累積したものである。

3）単位墓群：数基の単位墓が有機的な関連をもって群集するものをいう。周溝墓では互いに隣接し、あるいは溝を共有して列状に連なるものがみられる。これは、単位墓集団が先行の周溝墓を意識して造った墓群ととらえることができる。

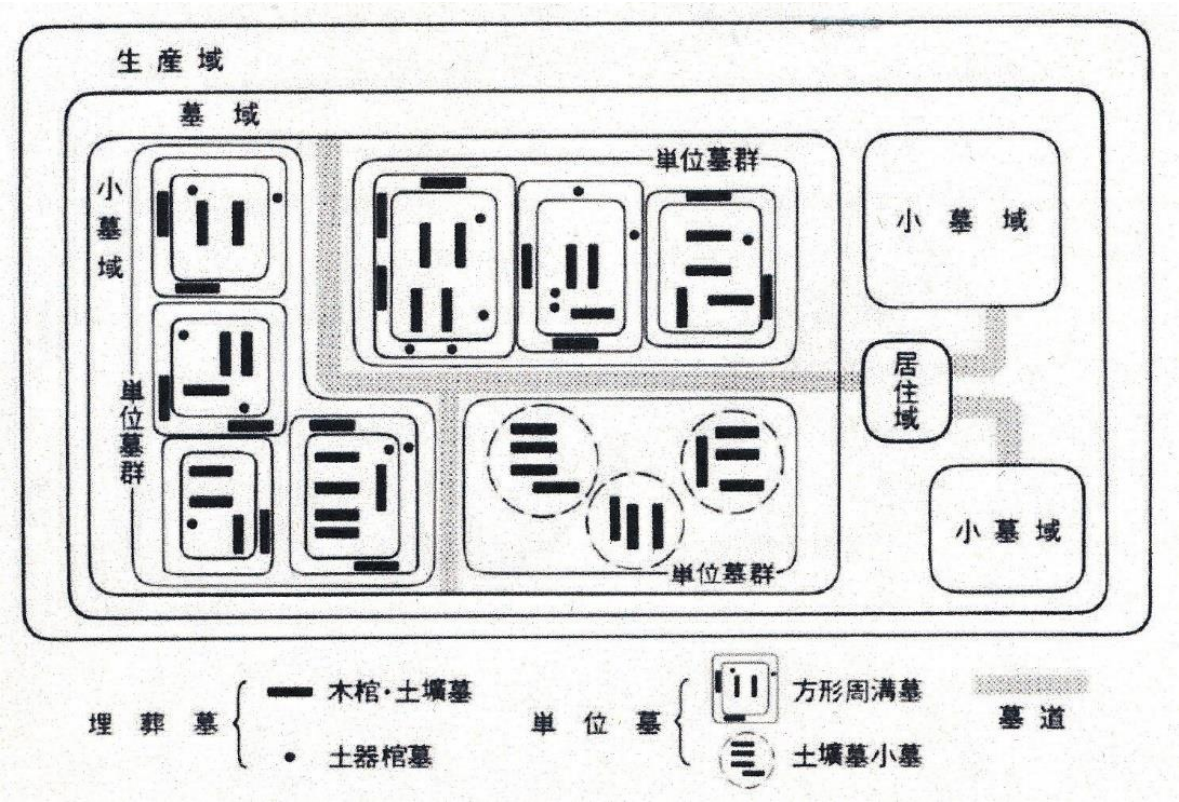


図１　墓域モデル図（弥生中期）（岩松 1992a 第１図を引用）

4）小墓域：大集落ではその居住域の周辺に複数の単位墓群が数か所にわかれて分布する。その一つ一つを小墓域とよぶ。小墓域には複数の単位墓群があることから、複数の単位墓群集団に占有された墓域といえる。これを「小墓域集団」と呼称する。小墓域を構成する単位墓（群）の組み合わせにより、単一型と混合型にわかれる。

5）墓域：居住域・生産域・山林などをふくむ広義の集落を構成する要素のうち、埋葬墓・単位墓が造られる区域をさす。基本的には居住域の外縁部を占め、生産域の内側に位置する。単独型と複数型があり、一小墓域でその集落の墓域を形成するものを単独型、複数の小墓域からなるものが複数型である。これはさらに、小墓域が集合する場合（集合型）、分散している場合（分散型）にわかれる。

以上のような各段階（埋葬墓・単位墓・単位墓群・小墓域・墓域）の定義を方形周溝墓群にあてはめると、方形周溝墓の埋葬施設が**埋葬墓**、埋葬施設の数を問わず方形周溝墓そのものが**単位墓**ということになる。また、複数の方形周溝墓が有機的に、たとえば各々が隣接したり周溝部を共有したりして配置されている墓群は**単位墓群**とよぶことができる（**図１**参照）。ただ、墓群と集落の関係で定義された小墓域については、後章において必要に応じて検討する。

2　方形周溝墓の規模・形態・群構成

方形周溝墓の各部名称は**図２**のとおりである。ここで、台状部の長辺に沿う方向を方形周溝墓の軸と定義する。台状部には盛土がなされて低墳丘となっているはずであるが、後世の削平により盛土の残存例の報告は些少である。以下、近江で観察された資料にもとづいて、方形周溝墓の基本情報である規模・形態・群構成について確認しておく。

（1）方形周溝墓の規模

方形周溝墓の規模は**図２**のように台状部の長辺の長さを基準とする。本来は周溝部をふくめた大きさを尺度とすべきである。しかし、後世の削平や隣接する周溝部の共有などによって、もとの大きさが不明なものが大半である。また、台状部においても後世の削平による変形は免れず、当初の辺長より短くなっているはずである。そこで、本研究では**図２**に示すように、台状部の大きさをもって規模をあらわすことにし、長辺の残存長を基準として方形周溝墓の規模を小規模（10m未満）・中規模（10～15m未満）・大規模（15～20m未満）・特大規模（20m以上）に区分する。なお、後章でとり扱う円形周溝墓では台状部の直径、前方後方形周溝墓・前方後円形周溝墓では前後の台状部を合わせた長さをもって、それらの規模の基準とする。

図２ 方形周溝墓の各部名称（服部遺跡）

（2）方形周溝墓の形態

方形周溝墓の形態は、正確には周溝墓の形態とすべきである。近江における方形周溝墓の形態は時代により多様であり、着目する部位によっ

て分類が異なる。ここでは**図3**のように台状部・周溝部の形態に着目して、まず方形（形態 A）・円形（形態 B）・前方後方形（形態 C）・前方後円形（形態 D）に大分類し、さらに方形周溝墓を形態 A0～A4、円形周溝墓を形態 B1・B2、前方後方形を形態 C1・C2 に細分した。

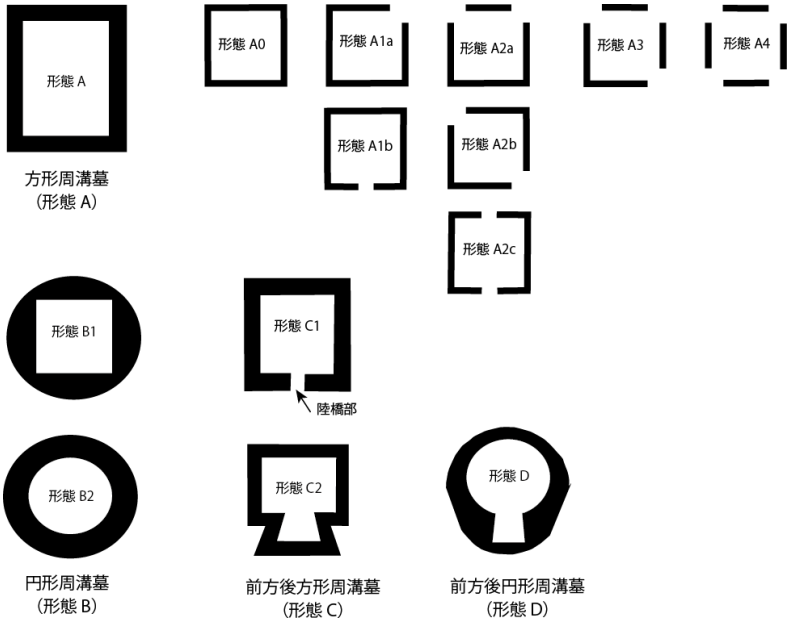


図 3 方形周溝墓の形態の分類

形態 A は台状部が正方形・長方形を問わないが、陸橋の数と位置により A0～A4 のように多様な分類となる。陸橋とは周溝の一部を掘り残した部分を指し、周溝部の中央に陸橋をもつ形態 A1b・A2c をみると理解しやすい。他の形態（形態 A1a・A2a・A2b・A3・A4）は周溝部の隅に陸橋をもつもので、総称して「隅切れ型」と分類されることもある。「隅切れ型が検出される」場合には注意が必要であり、また報告書を参照する場合にも同様である。

発掘調査では、方形周溝墓遺構は削平を受けて台状部の盛土や埋葬施設が検出されないことが多い。したがって、「方形周溝墓構築当初実際に陸橋なるものが存在したかどうかの判断には、慎重な態度が要求される」（山本 1987）。とりわけ、周溝部の隅を掘り残して陸橋としたかどうかの判断には注意を要する。周溝部の一辺を掘削する場合を考えると、その中央部での掘り込みは深く両端では浅くなる傾向にある。したがって、後世での削平が著しい遺構では周溝部の四隅（あるいはその一部）が陸橋状に検出されることがあり、その遺構が「陸橋の存在」を反映しているかどうかは即断できないし、土層観察が不十分な場合には「陸橋」の確証が得られないとみるべきであろう。

これに対して、一辺の中央部に陸橋を設ける形態 A1b・A2c には、そこを意図的に掘り残して陸橋とするわけであり、後世の削平があっても中央部の陸橋が検出される。つまり、周溝部の一辺の中央部に陸橋状の遺構が検出された場合、それは「陸橋」という事実を反映しているといえる。

形態 B は周溝部が円形で、台状部の形状により形態 B1・B2 に分類した。形態 B1 の祖形は、形態 A0 において周溝部の各辺の中央部の幅が広くなり、方形の台状部をいびつな円形の周溝部が囲う形となるものである。

形態 C は台状部による分類である。形態 C1 は台状部と陸橋部からなり、形態 A1b と同じ形態であるが、中規模以上の方形周溝墓を形態 C1 に分類した。形態 C2 は方形の台状部が前後に連なり、周溝がめぐる。形態 C2 は定型前方後方形周溝墓とよばれ、形態 C1 はその祖形とみることができる。形態 D も台状部の形状がから分類したもので、方形の台状部と円形の台状部が連なり、周溝がめぐる。

このように多様な方形周溝墓の規模・形態には、当然、被葬者の意図が反映されており、集団・階層などの社会構造の視点から、また地域性の視点から論じられている（前田 1991、石井 2015 など）。

（3）方形周溝墓群の群構成

墓域には多くの方形周溝墓からなる方形周溝墓群が形成されるが、各々の墓はある一定の法則に則って配置され墓群が形成されていると考えられ、その配置が群構成とよばれている。この群構成は方形周溝墓群に限らず、従来墓群あるいはそれらが混在する墓群でも観察されている（中村 1991）。**図 4** は、近江の方形周溝墓群で観察される群構成の分類である。方形周溝墓群において各墓の軸方位、周溝部の共有・隣接状態などをもとにして 6 種類の群構成に分類した。

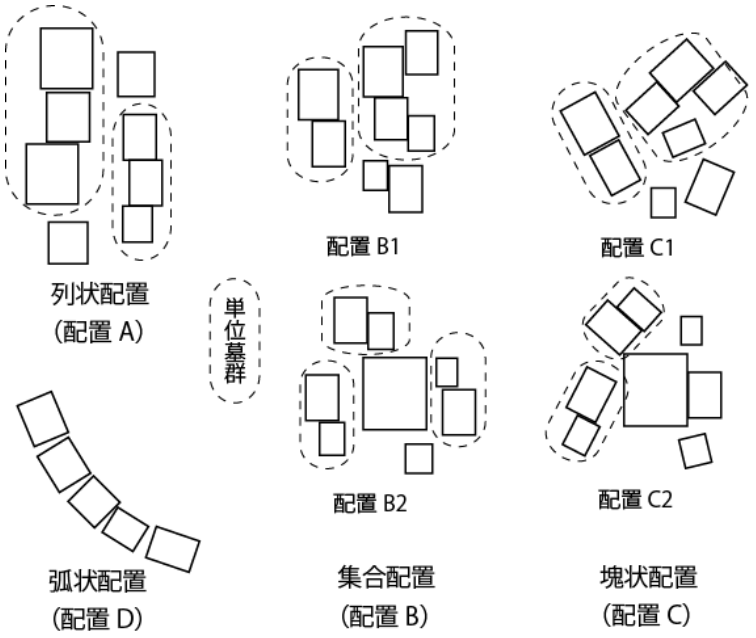


図 4 方形周溝墓群の群構成分類

列状配置(配置 A)では、いくつかの方形周溝墓が軸方位をそろえて長い列状配置（直列・並列）をとり、その列状の墓群の中にはさらに数基からなる短い列状の墓群をもつ。互いに周溝部を隣接し、あるいは共有する。

集合配置（配置 B)では、いくつかの方形周溝墓が軸方位をそろえて集合配置をとり、その中には数基からなる列状の墓群をもつ。方形周溝墓が互いに周溝部を隣接し、あるいは共有する。ほぼ同一規模の方形周溝墓が集合する群構成（配置 B1）や、比較的規模の大きい方形周溝墓を核にして集合する群構成(配置 B2)がある。

塊状配置(配置 C)では、いくつかの方形周溝墓が塊状配置をとり、その中には数基からなる列状の墓群をもつ。方形周溝墓が互いに周溝部を隣接し、あるいは共有する。ほぼ同一規模の方形周溝墓が塊となる群構成（配置 C1）や、比較的規模の大きい方形周溝墓を核にして塊となる群構成(配置 C2)がある。この配置 C の判定にあたっては、墓域において一定数の墓が一塊で存在するか否かの判断に注意を要する。

弧状配置（配置 D）では、いくつかの方形周溝墓が互いに隣接し、あるいは周溝部を共有して弧状に連なる配置をとる。ほぼ同規模のものから構成されている。

以上の配置 A・B・C をとる群構成では数基からなる墓群が基本となっており、これを単位墓群とよぶことにする。つまり、複数の単位墓群が列状・集合・塊状に配置された結果として配置 A・B・C になるということに他ならない。

このような群構成は当時の集団・階層・被葬者像などが反映されていると考えられる。墓制からその社会構造を研究するには副葬品の分析が有効であると考えられるが、方形周

溝墓では概して副葬品が少ない。その中でこの群構成のもつ情報分析はたいへん有効であり、本研究でも分析対象の中心となる。

第３節　方形周溝墓の集成

1　近江の地域分け

近江の地域は琵琶湖を基準として湖南地域・湖東地域・湖北地域・湖西地域とよばれるが、それらの地域の厳密な定義があるわけではなく、テーマごとにそれらの地域呼称が指し示す範囲（地域）が異なることが多い。

そこで、方形周溝墓（群）を集成・分析するにあたり、まず近江の地域分けをしておく。**図 5** は近江の方形周溝墓遺跡をプロットしたものであるが、方形周溝墓（群）の存在する範囲を考慮して、図のように湖南・湖東・湖北・湖西の地域分けをする。ここで、湖南地域はさらに琵琶湖の西岸部と東岸部にわかれ、広大な東岸部は湖南平野とよばれることもある。湖西地域については、厳密には湖西地域北部の方形周溝墓遺跡の存在する地域を指すことになる。これらの地域を今日の行政区からみた場合、**図 6** に示すように、湖南地域には大津市・草津市・守山市・野洲市・湖南市・栗東市が、湖東地域には近江八幡市・東近江市・彦根市・愛荘町・日野町（さらに豊郷町・甲良町・多賀町がふくまれるが、これらの地域には方形周溝墓遺跡が存在しない）が、湖北地域には米原市・長浜市が、そして湖西地域には高島市が、それぞれふくまれる。

2　集成項目

前節で論じた観点から、集成表においてとりあげる項目は方形周溝墓の規模・形態、方形周溝墓群の群構成を遺跡共通の基本情報とし、地域ごとに作成する。

なお、本研究において方形周溝墓遺跡の集成で参照した資料は、2015 年度までに発刊されている発掘調査報告書である。

おわりに

ここでは、本研究に関連する年代観・用語などの基本事項を確認した。ただ、墓の形態は時代・地域により多様であり、学史的にみても簡潔に一語で定義できるものではないようである（本間 1997 など）。後章においてでてくるその他の特別な用語などについては、その都度、説明をする。

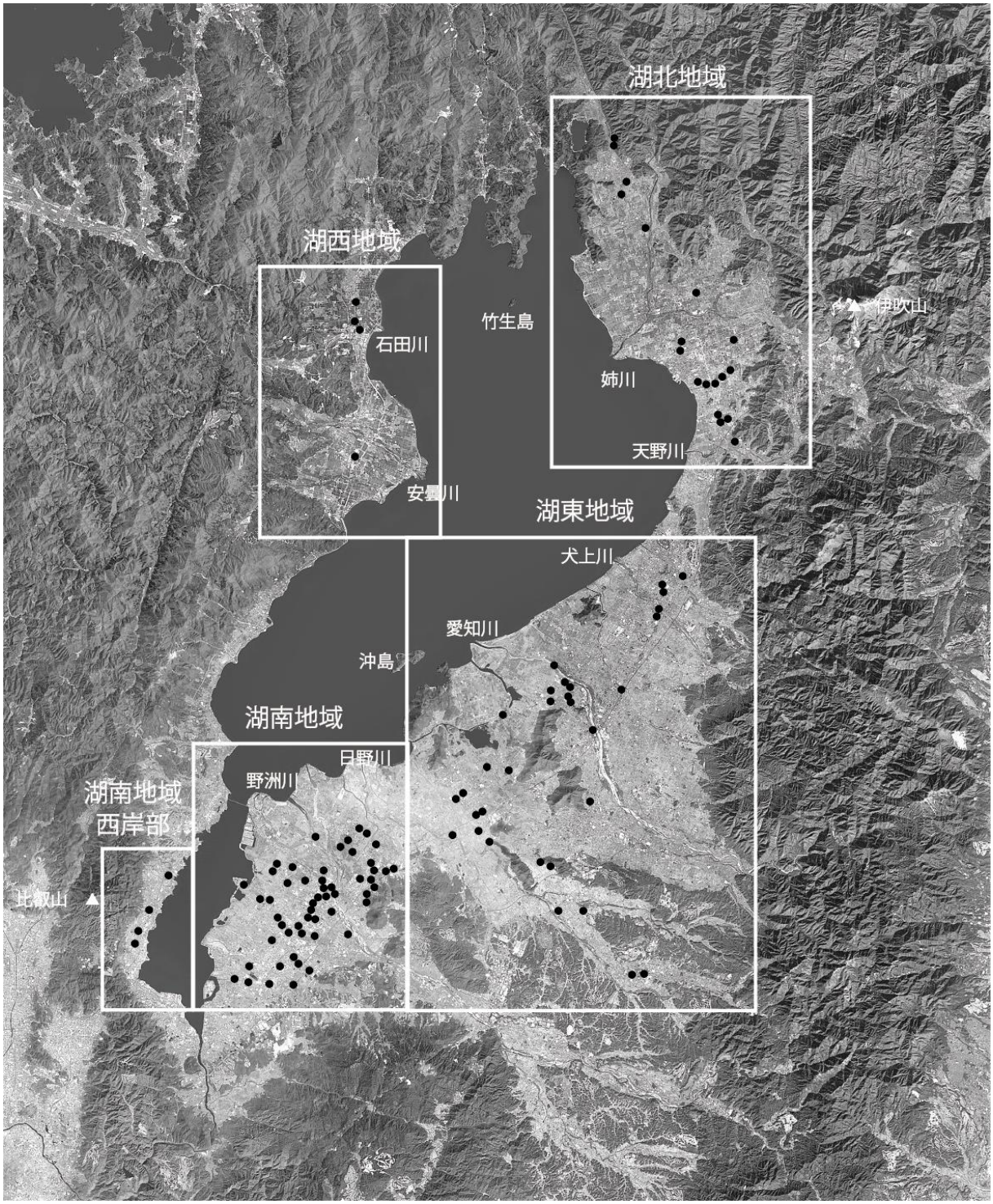


図５　近江の方形周溝墓遺跡の地域分け（●は遺跡）

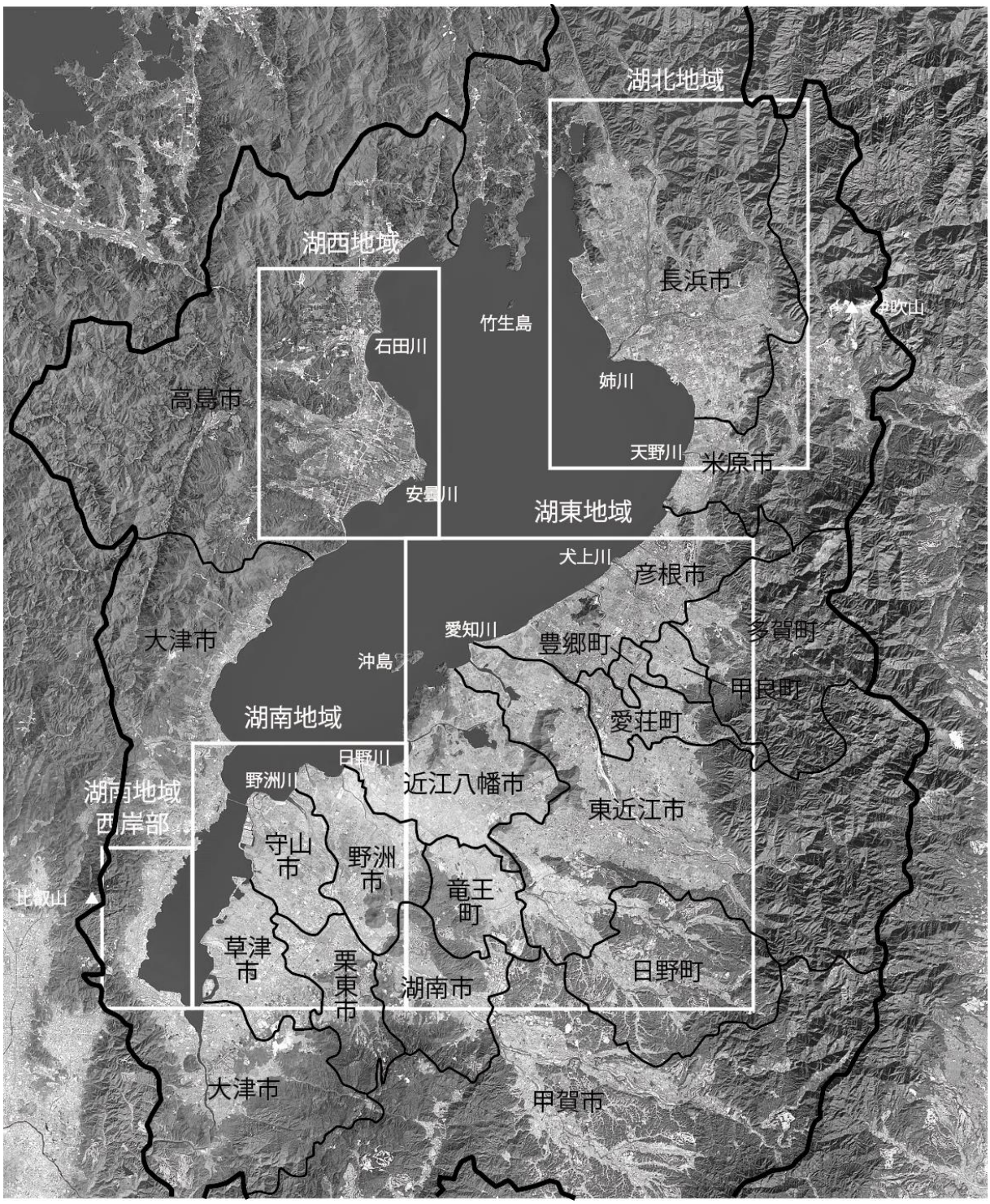


図６　近江の方形周溝墓遺跡の地域分けと行政区（市町）

【註】

（1）いわゆる「2400 年問題」と呼称されるもの。放射性炭素 14 年代法における基準年である 1950 年から 2400 年を遡った時期は暦年代では紀元前 750～前 400 年頃にあたる。

この時期には較正曲線が平坦で、炭素年代がほぼ一定の時期が約 350 年間も続く。すなわち、炭素年代がこの時期にぶつかると暦年代への換算が困難となる。

（2）守山市立埋蔵文化財センター1999『乙貞』第 103 号

（3）守山市立埋蔵文化財センター1995『乙貞』第 83 号、同 1996『乙貞』第 84 号

【参考文献】

新井　宏 2007『理系の視点からみた「考古学」の論争点』大和書房

石井智大 2015「方形周溝墓の規模・平面と埋葬施設配置の変化－伊勢湾沿岸地域における基礎検討－」『弥生研究の交差点』（『みずほ別冊』2）大和弥生の会

石川日出志 2010『農耕社会の成立』シリーズ日本古代史①　岩波書店

伊庭　功 2003「近江南部の中期弥生土器－様式と器種構成－」『古代文化』第 55 巻 5 号　古代学協会

岩松　保 1992a「墓域の中の集団構成（前編）－近畿地方の周溝墓群の分析を通じて－」『京都府埋蔵文化財情報』第 44 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

岩松　保 1992b「墓域の中の集団構成（後編）－近畿地方の周溝墓群の分析を通じて－」『京都府埋蔵文化財情報』第 45 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

尾嵜大真 2009「日本版較正曲線の作成と新たなる課題」『新弥生時代のはじまり』第４巻　雄山閣

兼康保明 1990「近江地域」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ-』木耳社

國分政子 2004「弥生土器の様式と地域性－畿内第Ⅲ様式をめぐる状況－」『古代文化』第 56 巻第 9 号　古代学協会

高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』第 20 巻 2 号　考古学研究会

武末純一 2002『弥生の村』日本史リブレット 3　山川出版社

都出比呂志 2011『古代国家はいつ成立したか』　岩波書店

寺澤薫 2000『王権誕生』日本の歴史 02　講談社

中村健二 1991「近畿地方における縄文晩期の墓制について」『古代文化』第 43 巻第 1 号　古代学協会

伴野幸一 1990「弥生土器文様の地域的構造」『守山市文化財調査報告書』38 冊　守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター

広瀬和雄 2007『考古学の基礎知識』　角川書店

藤尾慎一郎 2010「炭素一四年代と新弥生時代像」『歴史研究の最前線』　国立歴史民俗博物館
本間元樹 1997「弥生時代前期の区画墓」『田井中遺跡（1～3 次）・志紀遺跡（防 1 次）陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』(『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第 23 集）大阪府文化財調査センター
前田清彦 1991「方形周溝墓平面形態考」『古代文化』第 43 巻 8 号　古代学協会
水野正好 1972「古墳発生の論理（1)」『考古学研究』第 18 巻第 4 号　考古学研究会
森岡秀人 1990「各地域の併行関係・解説」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』木耳社
山本一博 1987『柿堂遺跡』(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 8 集）能登川町教育委員会

第２章　近畿・東海地域の弥生前期の方形周溝墓

はじめに

日本での方形周溝墓の初現は弥生前期まで遡り、当該期に優勢を占める土壙墓・土器棺墓と併行する。また、全国的な分布状況において、弥生前期の方形周溝墓は近畿・東海地域に偏在することがわかってきている。しかし、方形周溝墓という当時の「新しい墓制」の起源やその出現の背景については諸説が提出されてきたが、その決着をみていない。

近年、これまで現地説明会資料や概報のみであった遺跡の調査報告書も順次刊行され、弥生前期の方形周溝墓に関する新知見も蓄積されつつある。このような研究状況・成果・背景を念頭におきつつ、本章では近畿・東海地域の弥生前期の方形周溝墓をとりあげ、その出現状況、墓域の変遷状況、墓群の群構成を視点とした事例研究から、弥生前期の集団と階層、そして社会像を論じる。

第１節　弥生前期の方形周溝墓の集成

1　集成にあたって

弥生前期の方形周溝墓の集成作業は山田清朝氏の仕事（山田 1995）を嚆矢として、それに新出資料を追加する形で進められてきている（山田 1995、本間 1997、角南 1999、中村 2004）。

近畿・東海地域の弥生前期の方形周溝墓の集成表を**表１**に、その所在地を**図７**に示す。**表１・図７**の遺跡番号は共通で、以下、遺跡名のあとに遺跡番号を示す。方形周溝墓の各部の名称、規模の計測位置、周溝形態の分類などは第１章に示したとおりである。報告書により弥生前期の時期区分が異なることがあるが、集成表では報告書に記載の時期区分の名称を用いた。

2　弥生前期の方形周溝墓概観

弥生前期の方形周溝墓は**表１・図７**のとおり、21 遺跡・79 基にのぼる。すでに先行研究において多くの分析・考察がされているので、それらに導かれながら分布・形態などについて概観しておく。

弥生前期の方形周溝墓の分布状況は、大きくは、鈴鹿山地をはさんで近畿地域と東海地域にわかれる。両地域ともに弥生前期後葉以前のものが存在し、最古のものは大阪湾岸の東武庫遺跡 2（兵庫県尼崎市）で、弥生前期前半までさかのぼる[(1)]。また、駄坂・舟隠遺跡 3（兵庫県豊岡市）は丘陵上に造られており、立地面では他のものと異なり台状墓に分類されることもある。

表１　弥生時代前期の方形周溝墓集成

遺跡番号	遺跡名	遺跡所在地		立地	遺構名	弥生時期区分	方台部規模(m)		周溝部形状(推定含む)	埋葬施設		副葬品(土器以外)	特記事項
							長軸	短軸		種類	主体数		
1	玉津田中	兵庫県	神戸市		方形周溝墓	前期後葉							
2	東武庫		尼崎市	後背湿地	方形周溝墓1号	前期新段階古	7.8	6.3		木棺	1		
					方形周溝墓2号	前期新段階古	7.0	6.0	A1a	木棺	1	竪櫛・不定形石器	
					方形周溝墓3号	前期中段階古	9.6	7.5	A4		1		
					方形周溝墓4号	前期中段階古	11.4	9.1	A4	木棺2・土壙1	3	楔形石器	
					方形周溝墓5号	前期新段階古	3.7	2.7		土器棺	1	石鏃	
					方形周溝墓6号	前期中段階新	6.8	5.4		木棺	1		
					方形周溝墓7号	前期中段階古	5.6			木棺	1	磨製石器	
					方形周溝墓8号	前期	3.5	3.3					
					方形周溝墓10号	前期新段階古	14.0	12.3	A1a			石包丁・礫	
					方形周溝墓12号	前期中段階古	6.0	4.0					
					方形周溝墓13号	前期新段階新	4.0			？			
					方形周溝墓14号	前期新段階古	5.8	5.5		？			
					方形周溝墓15号	前期新段階新	16.0	8.5				磨石	
					方形周溝墓16号	前期新段階古	7.0	6.8				楔形石器	
					方形周溝墓17号	前期新段階新	4.3	3.5					
					方形周溝墓18号	前期新段階新	5.7	3.4					
					方形周溝墓19号	前期新段階古	6.5	3.5					
					方形周溝墓20号	前期古段階	6.5						
					方形周溝墓21号	前期新段階古	3.8					楔形石器	
					方形周溝墓22号	前期古段階	4.4						
3	駄坂・舟隠	兵庫県	豊岡市	尾根	方形周溝墓4号	前期新段階～中期初頭	7.3			木棺・土壙	2	打製石鏃1	土壙は石蓋
					方形周溝墓7号	前期新段階～中期初頭	7.2						
					方形周溝墓9号墳下層	前期新段階～中期初頭				木棺？	1	磨製石鏃2、打製石鏃5、チップ1	
					方形周溝墓11号	前期新段階～中期初頭	11.0	7.3		木棺	1	打製石鏃1	
					方形周溝墓12号	前期新段階～中期初頭	6.5	4.2		木棺	2		
					方形周溝墓13号	前期新段階～中期初頭	10.5	6.0		木棺	1	管玉125＋、打製石鏃1	
					方形周溝墓14号	前期新段階～中期初頭	11.3			木棺	1	打製石鏃1	
					方形周溝墓15号	前期新段階～中期初頭	4.0						
4	東奈良	大阪府	茨木市	微高地	方形周溝墓①	前期後葉							G-4区
					方形周溝墓②	前期後葉				壺棺	1		G-4区
					方形周溝墓④	前期後葉				土壙	1		G-4区
					方形周溝墓⑤	前期後葉				土壙	1		G-4区
5	古川	大阪府	門真市		方形周溝墓1	前期末	8.0	6.4					
					方形周溝墓5	前期末	6.0						
					方形周溝墓6	前期末				土器棺			
					方形周溝墓7	前期末							
					方形周溝墓9	前期末							
6	田井中	大阪府	八尾市	自然堤防	方形周溝墓96	前期後葉	12.4	9.3					
7	四ツ池	大阪府	堺市	丘陵	方形周溝墓	前期	7.5	7.5					1973年3区
8	池上	大阪府	和泉市	段丘	方形周溝墓I-1号	前期新段階	8.3	7.0		土壙	2		I地区
9	安満	大阪府	高槻市	氾濫原	方形周溝墓A1	前期末							近畿住宅
10	稲葉	京都府	京田辺市			前期後葉							
11	北仰西海道	滋賀県	高島市		方形周溝墓SX5	前期後葉							4次調査
12	塚町	滋賀県	長浜市		方形周溝墓SX01	前期末	7.5	7.2				石包丁	6次・7次調査
					方形周溝墓SX02	前期末	5.1						
					方形周溝墓SX03	前期末	4.8	3.9					
					方形周溝墓SX04	前期末	3.5						
					方形周溝墓SX05	前期末	4.4	4.2				扁平片刃石斧	
					方形周溝墓SX07	前期末	10.9						
					方形周溝墓SX09	前期末	9.1						
13	平城宮跡右馬寮	奈良県	奈良市	微高地	方形周溝墓SX16360	前期後葉	11.0	9.5					246次調査
14	坪井・大福	奈良県	橿原市		溝1	前期後葉							
15	多	奈良県	田原本町	微高地	方形区画墓状遺構	前期末	7.0			土壙		石包丁	第11次
16	伴堂東	奈良県	三宅町		方形周溝墓STO3	前期末	12.5	8.1					
17	松ノ木	三重県	津市	微高地	方形周溝墓3	前期末	9.0	6.0					C地区
18	コドノB	三重県	明和町		方形周溝墓SX37	前期後葉			A4				
					方形周溝墓SX86	前期後葉			A4				
19	朝日	愛知県	清須市	微高地	方形周溝墓	前期末				1			
20	山中	愛知県	一宮市	自然堤防	方形周溝墓SZ01	前期後葉	9.8	8.0	A4				遠賀川系土器
					方形周溝墓SZ02	前期後葉	10.0	7.0					
					方形周溝墓SZ03	前期後葉	10.8	10.5	A4				
					方形周溝墓SZ04	前期後葉	8.0	6.7				打製石鏃4、打製石錐1、石核剥片	
					方形周溝墓SZ05	前期後葉	5.6	4.2					
					方形周溝墓SZ06	前期後葉	6.5	5.6	A4			打製石鏃1	
					方形周溝墓SZ07	前期後葉	6.5	5.1					
					方形周溝墓SZ08	前期後葉	8.4	6.0					
					方形周溝墓SZ09	前期後葉	9.5	7.0					
21	荒尾南	岐阜県	大垣市	氾濫原	方形周溝墓SZ137	前期	2.7						
					方形周溝墓SZ138	前期後半	6.5	5.5				石器1	
					方形周溝墓SZ145	前期	7.1	6.8					
					方形周溝墓SZ153	前期	5.6	3.4				石器1	
					方形周溝墓SZ154	前期	8.2	8.2					
					方形周溝墓SZ170	前期	10.5	8.0	A4			石器1	
					方形周溝墓SZ171	前期							
					方形周溝墓SZ174	前期	3.0	2.0					
					方形周溝墓SZ192	前期	7.8	6.6	A4				

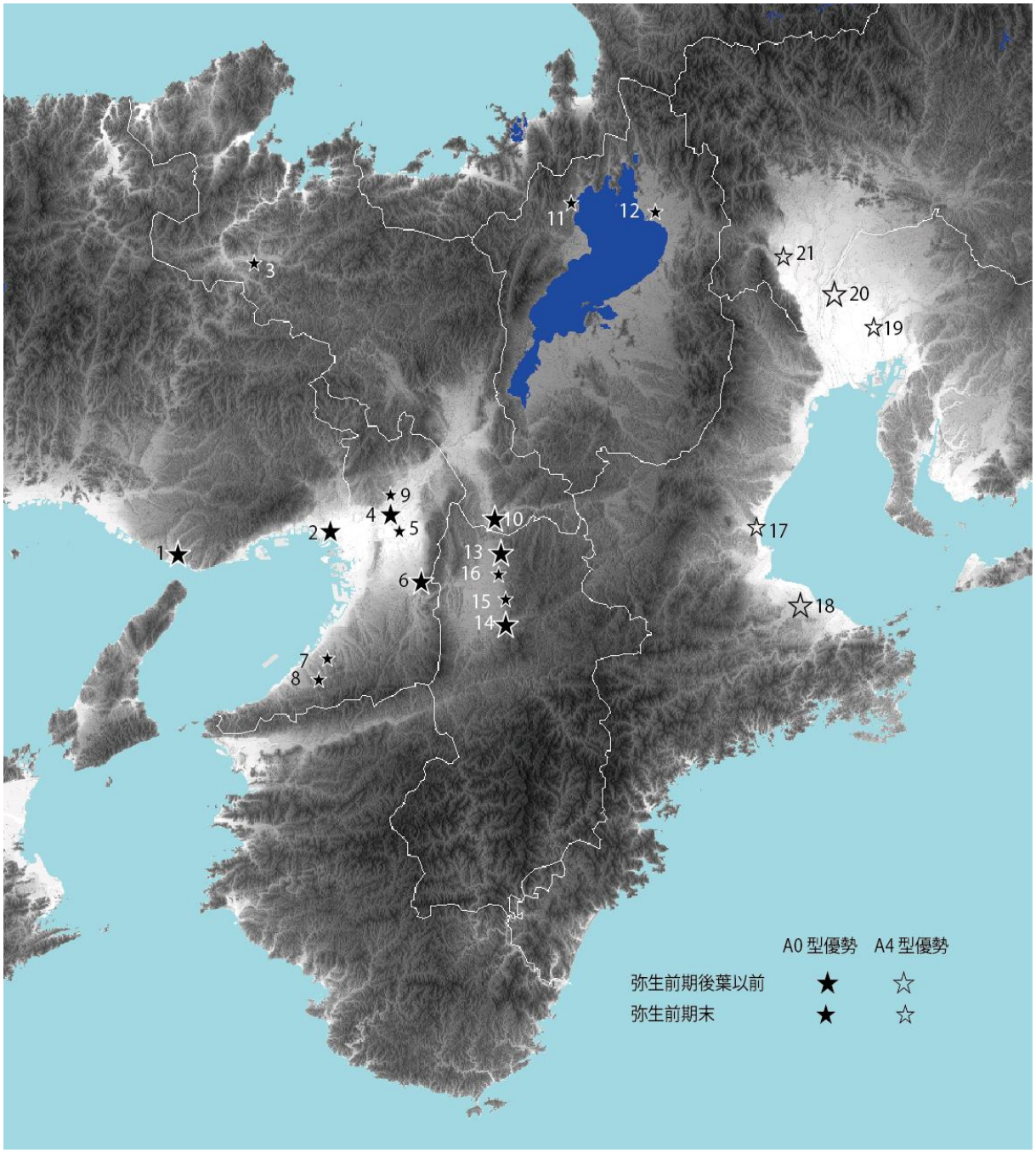


図 7　弥生時代前期の方形周溝墓遺跡分布

方形周溝墓の形態は台状部の形状で分類され、さらに周溝部の形状でも、その周溝部が全周するタイプ、周溝部に陸橋をもつタイプ（いわゆる、隅切れ型）などにわかれる。ただ、多くの墓は削平された状態で検出されるので、当初の周溝部の形態については慎重な

判断がいる（第１章参照）。このような事情を考慮した上で、弥生前期においては周溝部の形態は近畿地域と東海地域では異なり、近畿地域では周溝が全周するもの（形態 A0）が優勢を占め、東海地域では四隅が切れるタイプ（形態 A4）が優勢を占めていると理解されており（前田 1991、石黒 2009）、それぞれ近畿系・東海系とよばれることもある。

第２節　弥生前期の方形周溝墓の様相　－事例研究-

表１の遺跡には、弥生前期の方形周溝墓１基が検出されるのみで、その後の方形周溝墓遺構が検出されない遺跡がある（たとえば、稲葉遺跡 10、平城宮跡右馬寮 13 など）。そこで、**表１**のうち比較的長期にわたり墓域として継続する遺跡をとりあげ、その墓域における方形周溝墓の出現状況・変遷状況、さらに群構成などを報告書にもとづいて検討する。事例としてとりあげるのは東武庫遺跡２・古川遺跡５（大阪府門真市）・北仰西海道（きたげにしかいどう）遺跡 11（滋賀県高島市）・コドノＢ遺跡 18（三重県明和町）・山中遺跡 20（愛知県一宮市）・荒尾南遺跡 21（岐阜県大垣市）である。

１　東武庫遺跡２　（図 8）

この遺跡は弥生前期前半から中期初頭まで継続し、検出された遺構・遺物は６段階の小時期にわかれる。調査区域は約 2,000m^2 で、22 基の方形周溝墓が検出されており、その分布密度は高い。弥生中期初頭には武庫川の氾濫により廃絶する短期的な墓域である。

（1）方形周溝墓の出現状況

この墓域では数基の土壙墓が検出されているが、当初から方形周溝墓を造るための墓域であったとみられる。方形周溝墓の規模は、最大のもので 10m前後を測る。平面形態は長方形を呈するものが多く、周溝部は形態 A0・A1a・A2a・A4 型など多様なものがみられる。盛土の厚さはかなりのバリエーションがあるが、弥生中期以降と比較して、厚く盛らない傾向にあると報告されている。

埋葬施設は７基から検出されており、土壙・土器棺・木棺が検出されている（**表１**）。このうち複数埋葬は４号墓（埋葬施設数は木棺２、土壙１の計３基）のみで、単数埋葬が優勢である。単数埋葬の場合、埋葬施設はほぼ台状部の中央部にある。また層位の検討から、周溝を掘削し台状部に盛土をして、そこに埋葬施設を納めたと報告されている。つまり、埋葬施設の位置は地山面より上方にあるということである。

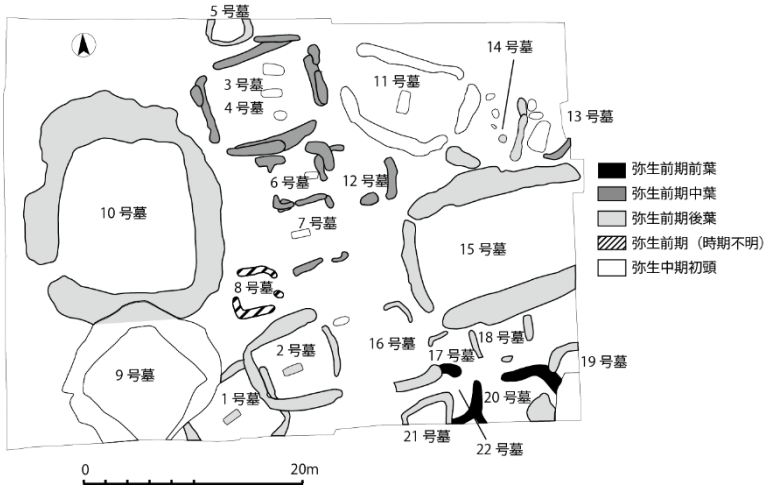


図 8　墓域の変遷(1)　東武庫遺跡 2

遺物としては周溝・土壙・溝状遺構などから土器・石器・装身具が出土した。２号

墓では周溝から在地の胎土を用いた擬朝鮮系無文土器が、埋葬施設から赤漆塗りの竪櫛が出土していることが特筆される。

（2）墓域の変遷状況と群構成

遺構の切り合い状況および供献土器から方形周溝墓 22 基の築造順序があきらかにされ、さらに台状部の軸方位を考慮して群構成が推定されている。すなわち、22 基を 5 グループにわけ、各々のグループでの築造順序を示した上で、一小時期にせいぜい数基の造墓がなされていたに過ぎないと報告されている。ここでみられる多くの切り合い状況のうち、同じグループ内の 3・4 号墓はほぼ重なるように、重複埋葬の様相を呈している。

2　古川遺跡 5（図 9）

この遺跡では弥生前期末から奈良時代までの遺構・遺物が検出されているが、弥生前期末から中期後葉と考えられる方形周溝墓群と、それを取り囲む弥生前期末から中期初頭までに掘られた区画溝が主な遺構である。時期区分としては、Ⅰ期が弥生前期末、Ⅱ期が弥生中期初頭、Ⅲ期が弥生中期後葉であり、方形周溝墓の造墓時期別ではⅠ期が 5 基（方形周溝墓 1・5・6・7・9）、Ⅱ期が 4 基（方形周溝墓 2・3・4・8）、Ⅲ期が 1 基（方形周溝墓 10）である。

なお、この遺跡では後世の削平がはげしく、個々の周溝部の区別が困難なものが多い。**図 9** は当該報告書の図 16 を引用しているが、方形周溝墓 1 以外の方形周溝墓では、遺存した溝から周溝部が推定・補足されているので、本節では周溝部についてはふれない。

（1）方形周溝墓の出現状況

この遺跡では一気に方形周溝墓が出現するが、その他には遺構がないので、ここが墓域として開拓されたといえる。細長い調査区域に 5 基が整然と配置されており、調査区域外へ広がる大きな墓群を想起させる。

（2）墓域の変遷状況

Ⅰ期からⅡ期にかけて、ほぼ同じ場所において先行の墓を意識しつつ造墓活動が続けられたものと考えられる。また、これら墓群を取り囲む区画溝が設けられていることから、計画的に墓域経営がなされていたといえるだろう。その後、空白期をおいてⅢ期になり、この区画溝の外側に 1 基ではあるが方形周溝墓が造られている。

（3）墓群の群構成

方形周溝墓の主軸に着目すると、Ⅰ期の段階では方形周溝墓 1・5・9、方形周溝墓 6・7、Ⅱ期では方形周溝墓 2・3 などの小群を抽出できるが、調査区域外への墓群の広がりを考えると、小群を構成する方形周溝墓の数はもっと多くなるといえるだろう。また、Ⅱ期になると方形周溝墓は小規模になる傾向がうかがえる。Ⅲ期は方形周溝墓 1 基のみの検出であり、群構成については不明である。

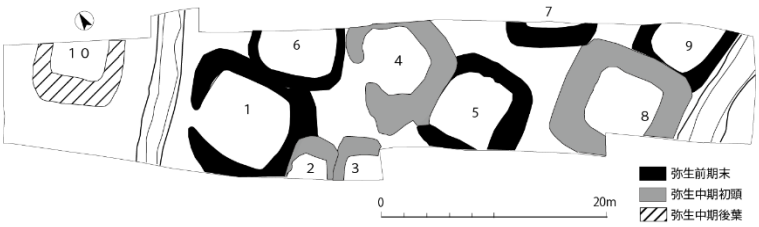


図 9　墓域の変遷(2)　古川遺跡 5

3　北仰西海道遺跡 11　（図 10）

この遺跡では縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけての遺構が検出されており、とくに縄文晩期には土壙墓群・土器棺墓群により構成される大墓域となる。さらに、調査区の隣接地にも同規模の遺構があると推定されており、長期にわたり墓域として土地利用されていたことをうかがわせる。当然、近辺にはこの遺跡を墓域とする当該期の集落の存在が予想される。

（1）方形周溝墓の出現状況

縄文晩期中葉（滋賀里Ⅲ式）前半を最古として、縄文晩期末（滋賀里Ⅴ式）にいたるまで 250 基以上の土壙墓、90 基以上の土器棺墓が営々と造られた。そして、弥生前期後葉になると方形周溝墓 SX5 が、弥生中期には SX6～SX14 が、そして弥生後期には SX2～SX4 が造られる。このように、土壙墓・土器棺墓の墓域に方形周溝墓が突然出現する状況にある（**図 10(b)**）。

（2）墓域の変遷状況

墓域として前述のとおりの変遷をへるが、方形周溝墓が出現する弥生前期後葉以降では方形周溝墓からなる墓域となり、土壙墓・土器棺墓がみられない。ただ、弥生中期中葉には方形周溝墓に併行して 15 基の土壙が検出されているが、個々の土壙が埋葬施設の主体部かどうかの判定にはいたっていない。

（3）墓群の群構成

方形周溝墓が出現する前の墓域では、土壙墓・土器棺墓とも複数の小群をもち、これらの小群が環帯状に配置される環状墓域の様相を呈している。個々の小群は 4 基前後からなるもの、10 基前後の列状配置をとるもの、並列配置をとるものなどがみられる。この様相は一つの居住域に複数の集団が存在することを示しているのだろう。ただ、報告書では他の遺跡例をふまえ、土壙墓は成人が、土器棺墓は小児が埋葬されているとはいえないと指摘している。

弥生中期中葉に方形周溝墓群の墓域として盛期をむかえるが、ここで台状部の方位に着目すると、A 群（SX5～SX10）、B 群（SX11～SX14）の二つの小群構成をもち、それらの規

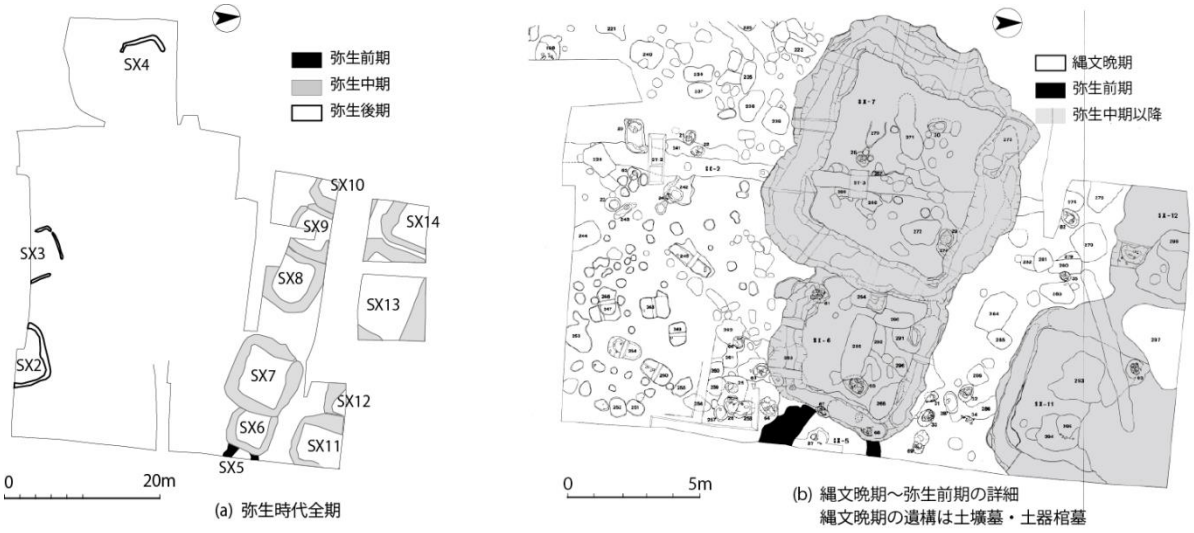


図 10　墓域の変遷(3)　北仰西海道遺跡 11

模には差がみられる。また A 群においては弥生前期の SX5 を起点として弥生中期中葉の SX6～SX10 が群構成をとることが特筆される。

4　コドノＢ遺跡 18（図 11）

この遺跡の近くでは縄文早期の集石炉がみつかっているが、本格的な土地利用は弥生前期の方形周溝墓からであり、墓域・居住域として古墳初期まで継続する。

（1）方形周溝墓の出現状況

弥生前期後葉の遺構として方形周溝墓 2 基（SX37・86）と二重の円状にめぐる柱穴をもつ平地式建物（SH92）が検出されているが、これらの先後・併行関係はあきらかではない。「前期後葉」との時期判断は土器片によるが、時期の特定できる遺物はすくない。

これらの方形周溝墓と建物はほぼ 50m 以内に存在するが、両者の間にはとくに溝などでの区分けはない。新たに開拓した土地に墓域と居住域が近接して造られたわけで、この地域には、方形周溝墓に先行する墓（たとえば土壙墓など）はなかったといえる。

（2）墓域の変遷状況

弥生前期に南北に走る浅い谷をふくむ一画に墓地が形成され、その後東西方向に墓域が拡張されている。弥生後期には東側の微高地が一旦居住域となるものの、間をおかず墓域として土地の再利用がなされている。ただし、墓域の利用についての企画性はみられない。

各方形周溝墓についてみると、台状部・周溝部の形態は弥生時代をとおしてほぼ方形である。弥生前期後葉に造られた SX37・86 は規模に差があるものの、ともに周溝部は四隅切れ型（形態 A4）である。弥生中期にはほぼ同じ地域に、先行する墓をさけるように、やはり形態 A4 の SX38・90 が造られている。さらに、弥生後期から古墳初期には場所をすこし移して 7 基（SX7・44・57・62・74・80・89）が造られるが、これらの方形周溝墓の周溝部は全周する型（形態 A0）、周溝部中央部に陸橋をもつ型（形態 A1b）などから構成されている。また、12mを測る中型規模の方形周溝墓が出現し、あきらかに弥生中期までの様相とは異なる。

（3）墓群の群構成

前述したように、この墓域では先行の墓群をさけるように新たな墓を造り、弥生中期までは群構成はみられない。弥生後期から古墳初期にかけて活発な造墓活動がはじまり、大規模な方形周溝墓 SX62 を核とした集合配置をもつ墓群が形成される。

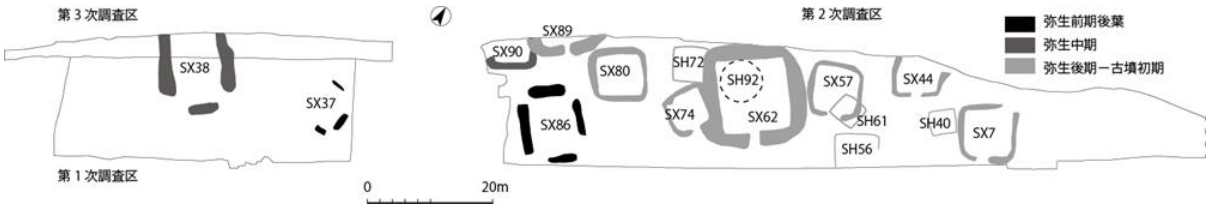


図 11　墓域の変遷(4)　コドノB遺跡 18

5　山中遺跡 20　（図 12）

この遺跡の遺構・遺物は弥生前期から中世まで続くが、ここでは弥生前期から古墳前期までを対象とする。遺構・遺物は、弥生前期で遠賀川系土器を伴わず粗製土器のみ出土する段階（A1 期）、確実に遠賀川系土器を伴う段階（A2 期）、そして弥生後期－古墳前期（B 期）の 3 時期に分かれる。層位の検討から、A1・A2 期の遺構は洪水等によって一気に廃絶し、B 期に再び墓域として土地利用されたとみられる。

（1）方形周溝墓の出現状況

A1 期では土壙墓 1 基（SK01）、A2 期では方形周溝墓 9 基（SZ01～SZ09）および竪穴建物 10 棟（SB10～SB19）、B 期では方形周溝墓 8 基（SZ10～SZ17）が検出されている。A1 期には土壙墓が 1 基あるが、A2 期に新たに方形周溝墓からなる本格的な墓域の形成が始まったといえるだろう。

A2 期の方形周溝墓の形態は周溝部が四隅切れ型（形態 A4）で、台状部の規模はせいぜい 10m程度である。B 期には四隅切れ型がなくなり、一辺に陸橋をもつ型（形態 A1b）になる。規模も最大のものは 16mを越え、前方後方形に造り変えられたもの（SZ13）もある。

（2）墓域の変遷状況

A2 期の方形周溝墓群は環濠 SD01 をはさんで反対側に竪穴建物群が存在し、墓域と居

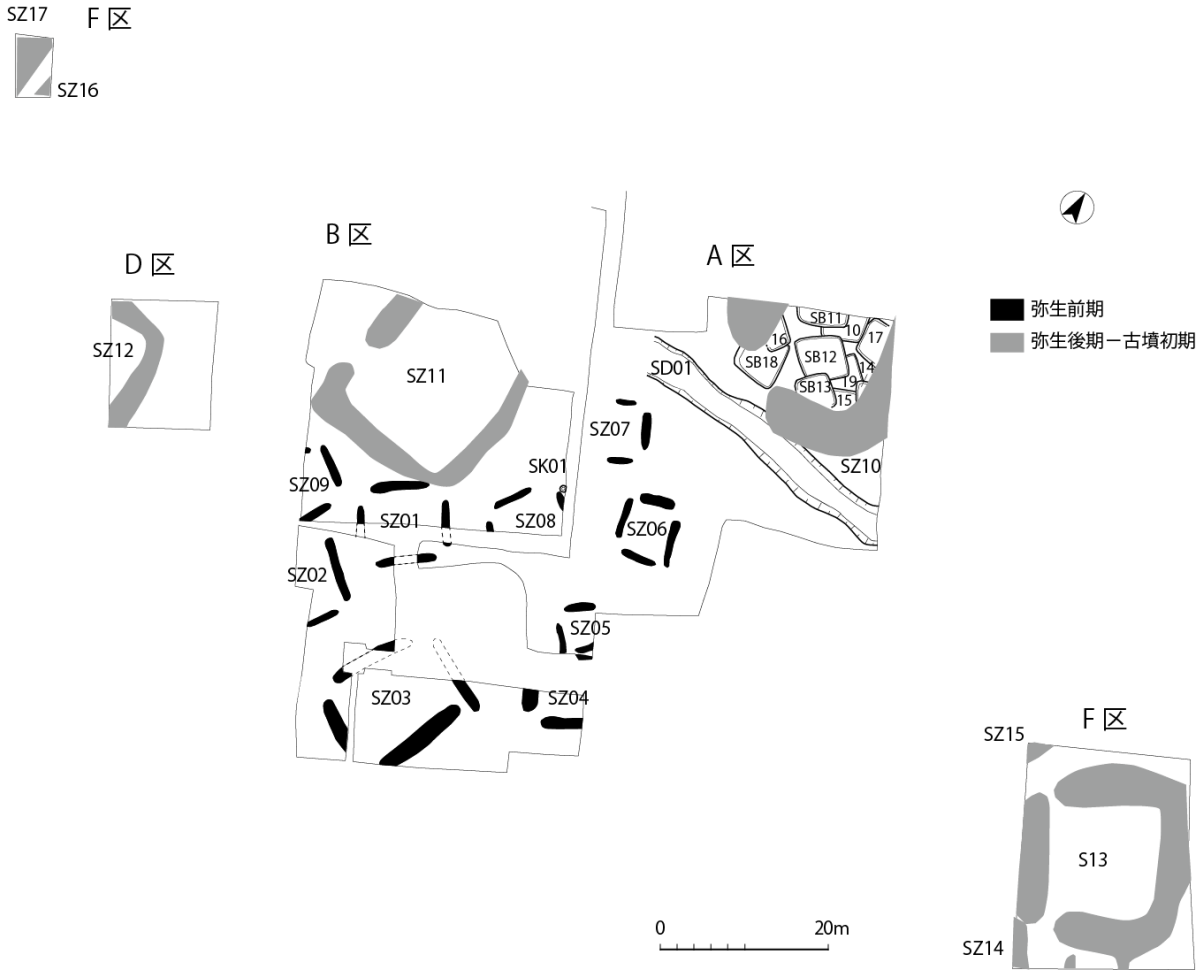


図 12　墓域の変遷(5) 山中遺跡 20

住域が明確にわかれていたことがわかる。また、調査区域B区にのみ墓群が存在していることから、この時期には墓域は集落の近くの狭い範囲に形成されていたといえる。

さらに出土土器の分析から、A2期の遺構において竪穴建物SB10・11・16～19は方形周溝墓群に先行して造られ、その後、方形周溝墓の造墓活動と併行して、竪穴建物SB12～SB15が造られたことがわかった。すなわち、この地での生活がはじまり、建物が建て替えられ、人が亡くなり墓を造り、さらに環濠を掘削して居住域と墓域を分けて暮らしていた生活空間を髣髴とさせる。

その後（弥生中期末までに）、この地域は洪水にみまわれ居住域は衰え、墓域としても土地利用がなされないまま、B期には墓域としてふたたび利用されることになる。

（3）墓群の群構成

弥生前期A2期において明確な群構成はみられない。ただ、規模に着目すると中規模のSZ03をふくむグループ（SZ01～03・09）と小規模なグループ（SZ04～SZ08）にわかれ、各々塊状に配置されているとみることもできる。B期には、各調査区域が離れているものの、群構成はもたず広範囲に散在しているといえるだろう。

6　荒尾南遺跡21　（図13）

この遺跡は弥生前期から古墳前期まで続く墓域・居住域であり、弥生中期中葉までに方形周溝墓が約230基、弥生中期後葉以降には竪穴建物・掘立柱建物約600棟からなる遺跡である。遺構・遺物は、弥生前期（Ⅰ期）、弥生中期中葉まで（Ⅱ・Ⅲ期）、弥生中期後葉以降（Ⅳ期）に分れる。調査区はA・B・C区にわかれるが、遺構の粗密を考慮して、ここではA・B区を中心に検討する。

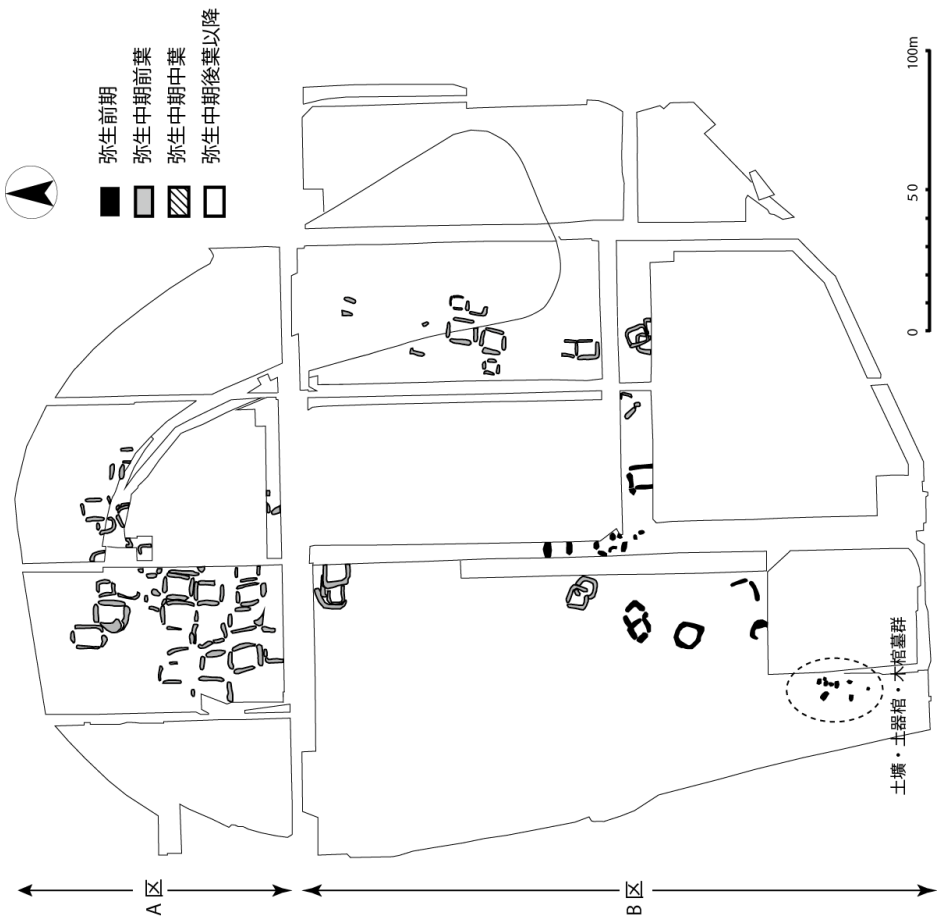
（1）方形周溝墓の出現状況

Ⅰ期にはすでに、土壙墓・土器棺墓・木棺墓からなる墓域に近接して、方形周溝墓群（9基）が形成される。一部に周溝部を共有する墓もあるが、とくに群構成をもつものはない。従来墓の形成されている墓域に方形周溝墓が現れる点において、北仰西海道遺跡11と同じ出現状況といえる。

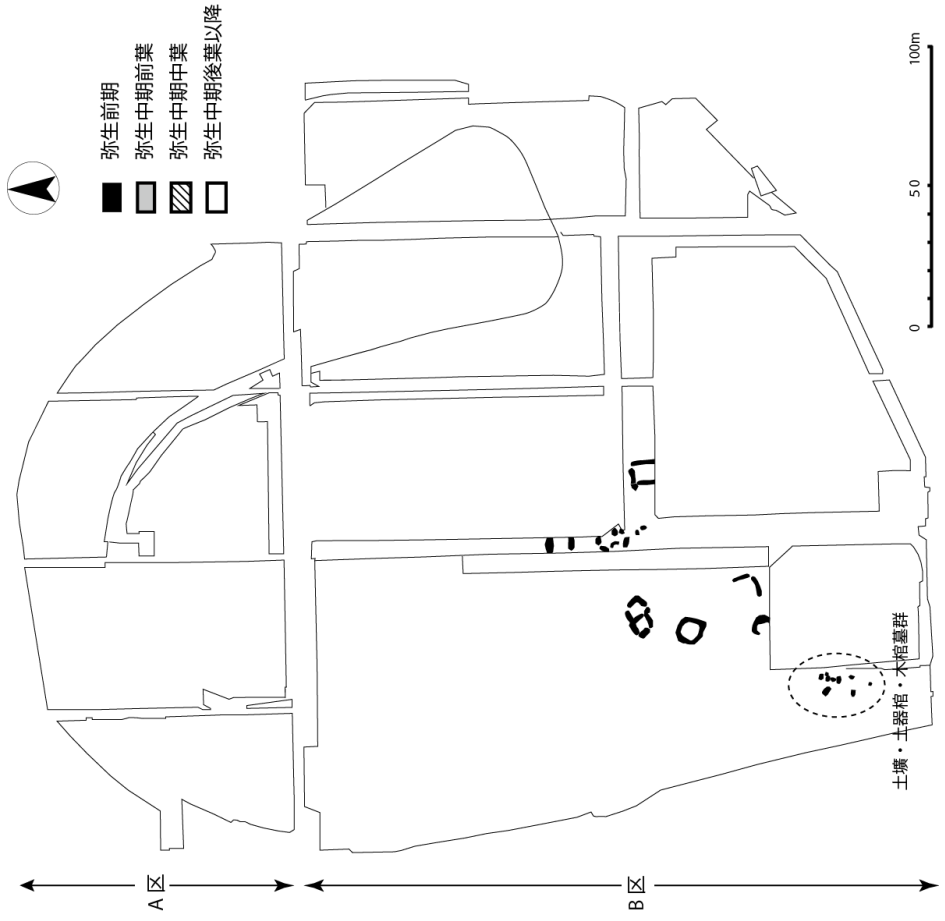
（2）墓域の変遷状況

時期ごとにこの墓域の利用をみると、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期の各時期によって墓群の分布の中心が移動している。原則、先行の墓域をさけて造墓している。Ⅰ期ではB区に偏在する。やや長方形を呈するものが多く、周溝を共有するものがあるが、重複するものはない。Ⅱ期になると、本格的な方形周溝墓の造墓活動がはじまる。周溝部は隅切れ型の形態A4が優勢で、周溝を共有するものが目立つ。先行の墓を意識した配置で群構成が明確になっている。Ⅲ期にはより整然とした列状の分布を呈し、両列の中央に南北の空閑地域がある。これは墓道の可能性もある。このような列状配置は調査区域外にも大きく広がるものとみられる。

Ⅳ期になると造墓活動はほぼⅡ期までの墓群を覆い、より広大な墓域となり、その盛期をむかえる。A区西部では台状部の軸をそろえて比較的整然と配置されているが、B区南部では濃密に分布しており、軸が異なり重複するものもある。形態はほぼ正方形で、四周に周溝がめぐる形態A0が優勢を占め、山中遺跡20と同様の変化がみられる。



（2）弥生中期前葉まで（Ⅰ・Ⅱ）



（1）弥生前期（Ⅰ）

図 13　墓域の変遷(6)　荒尾南遺跡 21　(1/2)

（4）弥生中期後葉まで（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）

（3）弥生中期まで（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

図 13　墓域の変遷(6)　荒尾南遺跡 21　(2/2)

（3）墓群の群構成

上述の変遷でもみた通り、Ⅰ期では各墓は散在するが、Ⅱ期・Ⅲ期には周溝を共有するものが多くなり群構成がみられることから、墓域の利用に企画性がうかがえる。ところが、Ⅳ期になると４基程度を単位として造墓され、これが塊状となり、場所によってその塊が連結する場合と、連結しない場合がある。あきらかにⅡ期・Ⅲ期よりも統一性が少なくなって、個別の塊状が強くなっている。また造墓に際して、先行の墓を削平・破壊している状況がうかがえる。

7　事例研究のまとめ

以上の事例研究での分析を中心に各遺跡に共通する事象、共通しない事象を以下にまとめる。

（1）方形周溝墓の出現状況

従来の墓制（土壙墓・土器棺墓）と方形周溝墓が混在する墓域（北仰西海道遺跡 11・荒尾南遺跡 21）と、方形周溝墓のみから構成される墓域がある。表１にみられるように、どちらの墓域においても出現期の方形周溝墓の数はせいぜい数基で、多くの墓域では１基の検出にとどまる。

これに対して、数基以上の方形周溝墓が検出されている墓域では東武庫遺跡 2 を典型例として、どの墓域でも狭い範囲に密集している傾向にある。そのような稠密状態の極致が、東武庫遺跡 2・荒尾南遺跡 21 にみられるような、先行墓と重複した造墓状況である（重複埋葬）。

最古の方形周溝墓群である東武庫遺跡 2 では、方形周溝墓の多様な様相がみられる。すなわち、台状部規模の差、周溝の形態での隅切れ状況、埋葬施設では土壙・土器棺・木棺、主体部数では単数・複数などの諸相である。また、埋葬施設は生活面より上、つまり台状部に盛土をしてそこに埋葬施設が設置されていると理解できる。このような弥生前期の方形周溝墓の諸相は、その後の弥生中期・弥生後期・古墳初期を通して他の地域においてもみられるもので、方形周溝墓のもつ諸相の多くがすでに出現期から存在しているといえる。

（2）墓域の変遷

弥生前期から古墳初期に至るまでの墓域の変遷をみると、短期的に利用されている墓域（東武庫遺跡 2：弥生前期～中期初期）、長期にわたり造営される墓域（北仰西海道遺跡 11・荒尾南遺跡 21；弥生前期～古墳初期）、一旦途絶えるものの再び使用される墓域（古川遺跡 5：弥生前期～中期初頭および中期後葉、山中遺跡 20：弥生前期および弥生後期以降）がある。このような墓域の変遷は対応する居住域の盛衰を反映しているといえる。

長期にわたり造営される墓域においては、時期の経過とともに方形周溝墓の規模が大型化している。また、周溝の形態について東海地域では弥生前期に周溝の一部が切れる東海系が優勢であるが、後期になると近畿地域に優勢な四周を溝がめぐる近畿系に統一される傾向が看取される。

ところで、墓域と居住域の位置関係をみると、山中遺跡 20 では溝をはさんで墓域に近接して竪穴建物跡（居住域）が検出され、この状況は古川遺跡 5 でもみられる。ところが、コドノＢ遺跡 18 では墓と建物が区分けされていない。弥生前期には墓域と居住域を明確に区分けすることが普遍化されていなかったといえる。

（3）方形周溝墓群の群構成

墓域における方形周溝墓の配置は造墓に際して先行墓の周溝を共有することがあり、また完全に重ねる重複埋葬もみられる（東武庫遺跡 2、荒尾南遺跡 21）。この事象については後章で詳論する。

墓域に密集する墓群内において周溝を共有するものや、方位をそろえた一群を抽出することができるが、この事象は弥生前期と弥生中期のように時期を隔てて出現している方形周溝墓群内においても観察され、時を経てもあきらかに群構成を意図しているものと考えられる。

第３節　方形周溝墓からみた弥生前期の社会像

以上の事例研究でえられた知見にもとづいて弥生前期の社会像、とりわけ方形周溝墓造墓集団と社会階層について考えてみたい。

１　方形周溝墓という新しい墓制

（1）どのように新しいのか

方形周溝墓は埋葬施設を溝で方形に区画するという墓制である。この平面形態にとらわれがちであるが、ここでは被葬者の埋葬位置に着目する。縄文時代の墓制、主として土壙墓・土器棺墓・木棺墓などの従来墓では死者をそのまま埋葬するか、あるいは土器棺・木棺に納めて埋葬するかの違いはあるものの、どの葬法を用いても死者を生活面よりも下、つまり地下に埋めることになる。これに対して、弥生時代の方形周溝墓は死者を生活面よりも上に置くというものである。

このように、方形周溝墓の基本要素は、(a) 埋葬施設を溝で方形に区画すること、(b) 埋葬施設を生活面よりも上におくことであり、この点が「新しい墓制」とよばれる所以であろう。これは縄文時代の墓制の延長では考えられないもので、従来墓と方形周溝墓は異質の墓制である。一般的に墓制は保守的な習俗といえるが、それにもかかわらず従来の墓制を変えるということは、その背景として社会的に大きな変化があったとみるべきであり、それは水稲耕作の伝搬・定着によりもたらされる生活様式の変化であろう。

（2）方形周溝墓の起源の問題

最古の方形周溝墓群がある東武庫遺跡 2 の２号墓で擬朝鮮系無文土器が検出されていることや、寛倉里遺跡（韓国・忠清南道保寧市）で発見された約 100 基の周溝墓の一部が紀元前 3 世紀までさかのぼりえることなどから、その起源を韓半島に求める考えがある（渡辺 1999）。しかし、韓半島から伝わったとしてもその中継地である九州北部地域・中国地域にかけて弥生前期の方形周溝墓がみられない。そもそも東武庫遺跡の方形周溝墓は弥生

前期中葉（紀元前 4～5 世紀）までさかのぼるが、韓半島ではこの時期の方形周溝墓が発見されていない。

方形周溝墓の起源を考える場合、上述の方形周溝墓の基本要素（a）・（b）をもつ墓制がどこにあるかを考えるのが重要であろう。中村弘氏は韓半島の墓制情報が水稲耕作情報とともに九州北部経由で近畿に伝わり、在地人がそれらの情報を取捨選択し既存社会に適合する墓制として方形周溝墓を創出したとする（中村弘 1998）。また、本間元樹氏は東小田峯遺跡（福岡県夜須町）の墳丘墓（前期前半）、百間川沢田遺跡（岡山市）の円形周溝墓（前期中葉）、門遺跡（島根県頓原町）の円形周溝墓（縄文晩期）、東武庫遺跡（兵庫県尼崎市）の方形周溝墓（前期中葉）など、西日本各地に墳丘墓や周溝墓が出現するが、これらは渡来人による大陸・半島情報の影響や各地域固有の社会状況を背景として、西日本の諸地域で同時多発的に成立したとする（本間 1997）。これらの議論では方形周溝墓の基本要素（a）・（b）が墓制情報の中にどのようにふくまれているのか言及されていない。

これらに対して、中村大介氏は被葬者を生活面よりも上に置くという視点から韓半島や大陸の墓制を検討し、韓半島南部の支石墓に一時期みられた地上式の埋葬施設の情報が方形周溝墓成立に影響を与えたとする（中村大介 2004）。つまり、基本情報（b）の源流について言及している。

基本要素（a）に関してはどうか。水稲耕作に伴う情報には「土地を方形に区画して水を溜める」という発想は、当然ふくまれていたのでないだろうか。つまり、「円形に区画」するのではなく、「方形に区画」するという方形周溝墓の基本要素（a）は、水稲耕作そのものであったといえるのではないか。

以上の検討から、在地人（渡来人もふくむ）が方形周溝墓の基本要素（a）・（b）をふくむ韓半島からの墓制情報を収集・咀嚼し、その社会に適合した在地固有の墓制を創出し、その一つが近畿・東海地域においては方形周溝墓という墓制であったといえるだろう(2)。言い換えると、方形周溝墓の思想的な源流は韓半島であるが、その「方形周溝墓」という形を創出したのは近畿・東海地域の人びとということになろう。

ところで、新しい墓制は長い時間をかけて受容・定着してゆくものである。したがって、方形周溝墓の創出・出現の契機となる新しい墓制情報は、その出現時期より相当早い段階に伝わっていたと想定せざるをえない。端野晋平氏は気候の寒冷化が紀元前 8 世紀後半にはじまり、それにともない韓半島から日本列島への渡来が始まって、半島・列島での双方向の情報伝達網ができあがり、そして紀元前 6 世紀半ばには気候が安定し、九州北部で水稲耕作が本格化すると論じる（端野 2014）。これらの情報網には水稲耕作とともに墓制情報も含まれていただろう。これが九州北部から東漸し近畿地域に到達・熟成するのは弥生初頭といえるのではないか。

2　方形周溝墓と集落

（1）造墓集団と集落

方形周溝墓を在地人の創出した墓制であると考えた場合、弥生前期において近畿・東海地域には従来墓をもつ集団と、方形周溝墓を創出した集団の存在が想定される。では、在地人でありながら方形周溝墓の造墓集団とはどのような人びとであったのか。

事例研究では、従来墓が優勢な墓域に新しい方形周溝墓が出現する墓域と、方形周溝墓のみが出現する墓域があった。これは、従来墓造墓集団と方形周溝墓造墓集団がどのような関係にあるのかを示唆していると思われる。つまり、両墓制が混在する墓域ではそれらに対応する居住域に両集団がいたといえるだろう。居住域は別で墓域を共有していたとも考えうるが、墓の数からみて墓域を共有していたと考えるには無理がある。

では、方形周溝墓のみからなる墓域に対応する居住域の状況はどうか。**表 1** の集成表をみても、弥生前期の段階で 4 基以上を擁する墓群が 7 遺跡あるが、そのうち 6 遺跡が方形周溝墓のみからなる墓域であり、従来墓と混在しないものが多いようである。ところで、前述の通り方形周溝墓造墓集団のメンバー全員が方形周溝墓に埋葬されるわけではない。基準は明確でないが、その集団の中の「限られた人」のみが方形周溝墓に埋葬され、他のメンバーは従来墓で埋葬されるわけである。つまり、個々のメンバーとして墓制は異なるが、方形周溝墓造墓集団として同じ居住域に住むと考えられる。

山中遺跡 20 では溝で境界を設けて墓域と居住域を分け、居住域（竪穴建物）の変遷と造墓活動が対応していることをうかがわせた。上述の議論に立てば、この居住域の住人のうち「限られた人」は方形周溝墓の墓域に埋葬されるが、他の住人は従来墓（別な地域）に埋葬されるということになる。

（2）短期的な集落と長期的な集落

墓域の変遷をみていくと、墓域には短期的なもの、長期的なもの、一時途絶えるが再び使用される墓域がみられる。これらの事象は当該の墓域に対応する居住域の盛衰を反映しており、その住人たる集団の動態を示している。短期的な墓域の多くは洪水などの自然環境の変化により廃絶したと考えられ、この時期には人為的理由（戦い）での居住域・墓域の廃絶を証左するものはみあたらない。

ここで、**図 13** の荒尾南遺跡 2 の墓域を再確認したい。この墓域は長期にわたり継続し、各時期によって墓域の中心が移動しているものの、巨視的には「荒尾南遺跡」という地域におさまっている。Ⅱ期・Ⅲ期と経るにつれて方形周溝墓の規模が大型化し、群構成もより顕在化する。この地域ではそのⅠ期の初現以来、世代の交代がなされても集団の強い紐帯意識をうかがわせる。

3　方形周溝墓からみた集団と階層

一般論として、墓制から被葬者やその属する階層を引き出すには墓の規模・形態、副葬品の多寡・奢侈がその指標となる。とりわけ、副葬品は有効な資料であるが、弥生前期の方形周溝墓では顕著な出土例がない。供献土器はともかく、そもそも副葬という習俗があったのかも疑問である。

そこで、集団と階層という問題を、従来墓・方形周溝墓の造墓集団、複数埋葬・重複埋葬という埋葬方法、および群構成の視点から考えてみたい。

（1）造墓集団からの考察

これまでの検討から、方形周溝墓という新しい墓制は進取気鋭の集団において創出・採用され、その集団の中の「限られた人」のみが埋葬されたと想定される。その造墓には従来墓よりも労働力を必要とすることから、「限られた人」は集団内の有力者といえるだろ

う。また、多くの墓域では従来墓と方形周溝墓の両墓制が混在しないということから、新たに方形周溝墓用の土地が開拓されたといえるだろう。このように、従来墓造墓集団に比して方形周溝墓造墓集団は、あえてより大きい労働力を必要とする墓制を採用しているのである。

ところで、階層とは「さまざまな社会的資源とそれを獲得する機会の配分が不平等な社会構造」（田中・佐原 2002）と定義できる。造墓のための労働力は「社会的資源」にあたるが、どの集団においても大きな労働力を整えうるというものではない。そこに両造墓集団に階層差をみることもできるが、その労働力を必要とする造墓作業は当該集団が自発的におこなうものであり、不平等な社会構造からくるものではない。したがって、造墓に対する労働力の差をもって両造墓集団の間に階層差があるとみることはできないであろう。

（2）複数埋葬・重複埋葬事例からの考察

埋葬施設の遺存状況はよくないものの、**表 1** にみるように弥生前期では単数埋葬が多いといえる。その中で、複数埋葬は例外といえるだろう。後から埋葬される人は、「限られた人」と最も近い関係にあるとの想定ができる。人骨の遺存がないので、かれらの関係（血縁・非血縁など）は実証できないが、九州北部を中心とした西日本での土器棺墓や支石墓の人骨の分析結果（田中良之 2008）から類推すれば、この時期の複数埋葬はキョウダイ（シマイをふくむ）のような血縁関係にあり、夫婦の関係ではない。

次に、重複埋葬について検討する。長期にわたる墓域では二つの墓が重複することがよく観察される。時間を経てその痕跡が消滅している場合や墓域が狭い場合などではありうることであり、普遍的なものといえるだろう。これに対して、造墓の時期が近いにもかかわらず、切り合い関係にある墓がみられる。この切り合い関係には２種類があり、ほぼ完全に重複している事例（東武庫遺跡 2 の 3・4 号墓）と、方形周溝墓の台状部の一部が重複する事例（荒尾南遺跡 21 の SZ201・202・203）である。これらは造墓の時期が近いことから、先の墓の痕跡がなくなっているわけはない。また、空閑地のある墓域においてもみられるので、単に墓域の広さの問題ではないようである。このような点を考慮すると、この重複は確たる意図をもっていると考えざるをえない。

図 14(a) の東武庫遺跡 2 は完全な重複の事例である。3・4 号墓ともに弥生前期中段階古相の所産であり、切り合い状況から造墓順序は 3 号墓→4 号墓である。両者とも規模がほぼ同じで、4 号墓の造墓に際してまるで 3 号墓を覆うように造られている。また、4 号墓では複数埋葬（3 基の埋葬施設）も検出されている。土器 1 型式の間のこのような状況から、3・4 号墓の被葬者は近い関係にあり、4 号墓ではキョウダイ原理での埋葬が行われたとみることができる

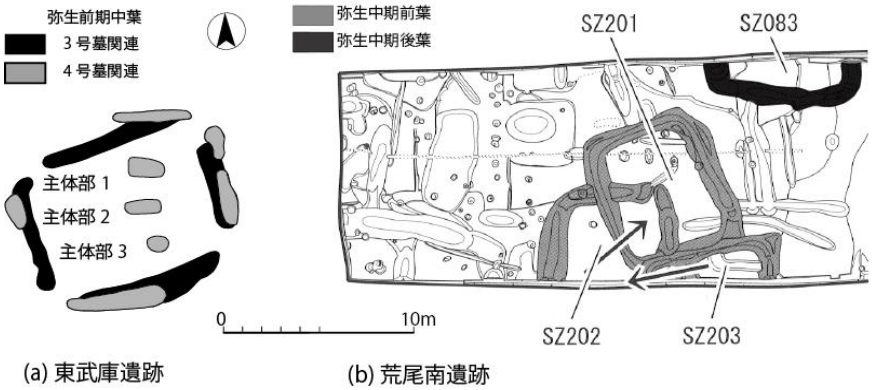


図 14　重複埋葬事例

であろう。**図 14(b)**の荒尾南遺跡 21 は部分的な重複の事例である。ともに弥生中期初頭（報告書ではⅡ期）の所産であり、切り合い関係から SZ203→202→201 の造墓順序であることがわかる。ここでは SZ203 に入れ子状に SZ202 を重ね、さらに SZ201 を同様に重ねている。短期間に重複して埋葬されているということから、これらの 3 人の被葬者は同じ集団の構成員であり、やはり近い関係であったと推定できる。ただし、先述の複数埋葬が重複埋葬よりも、より近い関係であるとみることができるであろう。

（3）群構成からの考察

多くの墓からなる墓域では、方形周溝墓の主軸の方位や群集状態を基準にグルーピングがおこなわれ、群構成が抽出されている（山田 1995、藤田 2015 など）。弥生前期の東武庫遺跡 2 では 5 グループ、山中遺跡 20 では 2 グループ、荒尾南遺跡 21 では 2 グループ[(3)]などが事例研究でわかった。

ところで、群構成とは「限られた人」を輩出した集団が、その後の埋葬に際して先行の墓を意識した配置をとった結果である。したがって、一つの墓域に複数の群構成があるということは、「限られた人」を輩出する集団が複数存在するということである。上記の事例では、どの群構成も数基からなる墓群であり、各墓の規模もせいぜい 10m以内であることから、複数の集団の間に明確な階層差をみることはできない。

4　弥生時代前期の社会像－社会構造

これまでの議論をもとに、弥生前期とくに方形周溝墓集団が出現する弥生前期中葉の社会構造を推定したい。集団・居住域・墓域の関係について、**図 15** にその概念図を示す。ここで、A1・b1 などは集団のメンバー、集団 a・集団 b などは各々の共通の祖先・系譜を意識した出自集団（クラン）であり、家族とは限らない[(4)]。また、ここでは居住域Ⅰと居住域Ⅱの墓域を別にしているが、もちろん共有していてもよい。

居住域Ⅰでは集団 a・集団 b が方形周溝墓造墓集団で、集団 c は従来墓造墓集団である。集団 a では A1、集団 b では b1・b3 が「限られた人」であり、方形周溝墓で墓域Ｘに、その他の A2・a3・b2 は従来墓で墓域Ｙに埋葬される。また、集団 c ではメンバーの全員が従来墓で墓域Ｙに埋葬される。居住域Ⅱの集団 d は方形周溝墓造墓集団であり、d2 が「限られた人」であるが、d1・d3 とともに墓域Ｚに埋葬されることを示した。

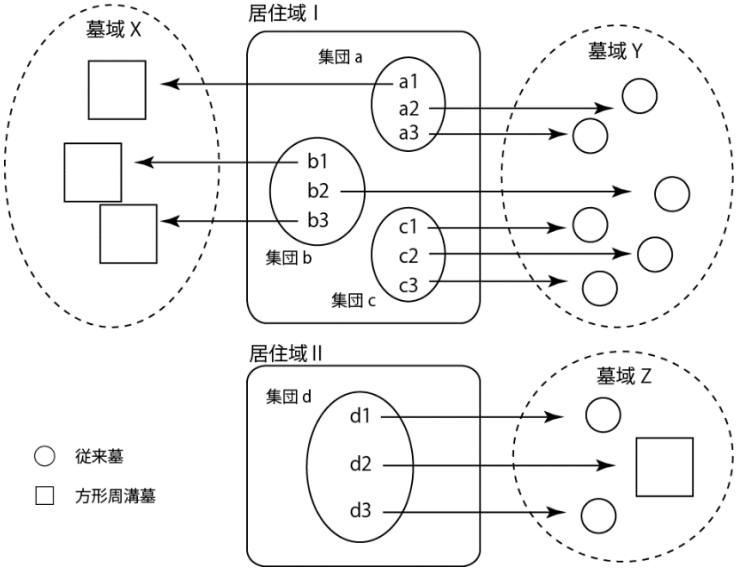


図 15　弥生時代前期の集団･居住域･墓域の関係の概念

事例研究でみた複数埋葬・重複埋葬は b1 と b3、さらに群構成は集団 b 内での紐帯を顕示しているとみられる。しかし、これまで検討してきた

ように、集団内で方形周溝墓を採用する「限られた人」と従来墓の人との間に階層差はみられない。また同様に、方形周溝墓造墓集団と従来墓造墓集団との間にも明確な階層差がみられない。

以上から、方形周溝墓が出現する弥生前期中葉の段階では、社会構造として従来墓集団と方形周溝墓集団という層別はできるが、それらに階層差を認めることはできないだろう。

おわりに

近畿・東海地域の弥生時代前期の方形周溝墓の検討をとおして、当該期の社会像を提示した。すなわち、土壙墓・土器棺墓・木棺墓・方形周溝墓など墓制は違うが、それらは集団が自ら選択しうる墓制であり、社会的資源の不平等から生まれたものではない。したがって、墓制によって階層化された社会構造にはなっていないと考える。ただ、集団内では、そのメンバーの「限られた人」のみが方形周溝墓に埋葬されるというルールがある。

【註】

(1) 東武庫遺跡の最古の方形周溝墓の時期判定については当該報告書では近畿第一様式古段階（弥生前期前葉）とされるが、判定の資料が十分ではないとして、近畿第一様式中段階（弥生前期中葉）であるとの考えもある（中村弘 1998)。

(2) 中村大介（中村 2015）によれば、近年の韓半島での調査では紀元前 9 世紀にさかのぼる周溝墓（春川泉田里遺跡）が検出されている。支石墓や方形周溝墓という墓制の成立への影響などの議論が深まると思われる。

(3) 報告書ではグルーピングに触れていない。分布状況から、SZ137・138・145・153・154、および SZ170・192・193・221 の 2 グループがあると筆者が判断した。

(4) 弥生時代前期から中期前半には水稲耕作が定着し人口が爆発的に増加する。これにともない人口密度が大きく拡大した集落からの分村が活発化する。この分村化は無秩序ではなく、その実態はクランの分節化とみられている（禰宜田 2011)。

【参考文献】

浅井良英 2015「弥生時代中期社会の一様相」『淡海文化財論叢』第七輯　淡海文化財論叢刊行会

石黒立人 2009「「四隅切れ方形周溝墓」原論」『方形周溝墓の埋葬原理』福井県鯖江市教育委員会

角南聡一郎 1999「初期区画墓と土器棺墓」『古川遺跡』(『門真市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 6 集）門真市教育委員会

田中良之 2008『骨が語る古代の家族　親族と社会』吉川弘文館

田中琢・佐原真 2002『日本考古学事典』三省堂

中村大介 2004「方形周溝墓の成立と東アジアの墓制」『朝鮮古代研究』第 5 号　朝鮮古代研究会

中村大介 2015「朝鮮半島における周溝墓の展開」『考古学ジャーナル』No.674　ニュー・サイエンス社

中村　弘 1998「近畿地方における方形周溝墓の出現」『考古学論集』上巻 網干善教先生古希記念会

禰宜田佳男 2011「墓地の構造と階層社会の成立」『弥生時代（下)』講座日本の考古学 6 青木書店

端野晋平 2014「渡来文化の形成とその背景」『列島初期稲作の担い手はだれか』すいれん舎

藤田英博 2015「方形周溝墓の様相」『荒尾南遺跡Ｂ地区　第 8 分冊』(『岐阜県文化財保護センター調査報告書』第 131 集）岐阜県文化財保護センター

本間元樹 1997「弥生時代前期の区画墓」『田井中遺跡（1～3 次)・志紀遺跡（防 1 次）陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』(『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』23 集）大阪府文化財調査研究センター

前田清彦 1991「方形周溝墓平面形態考」『古代文化』第 43 巻 8 号　古代学協会

山岸良二 2015「新たな方形周溝墓研究へ「５つの提言」」『考古学ジャーナル』No.674 ニュー・サイエンス社

山田清朝 1995「周溝墓」『東武庫遺跡』(『兵庫県文化財調査報告』第 150 冊）兵庫県教育委員会

渡辺昌宏 1999「方形周溝墓の源流」『渡来人登場』(『大阪府立弥生文化博物館図録』18) 大阪府立弥生文化博物館

【発掘調査報告書】

報告書の題名が発行機関・年度により統一されていないが、原書どおりの題名表記とした。方形周溝墓の遺構図は当該報告書に記載された図をトレース、あるいは記述にもとづいて筆者が一部を改変し作成したものである。

【あ】

荒尾南遺跡（岐阜県大垣市）

・岐阜県文化財保護センター1998『荒尾南遺跡』、同 2015『荒尾南遺跡Ｂ地区』（第１～９分冊）。本章で関係するのは、後者の第１・２・３・４・５・８分冊であるが、主に藤田英博「第７章　総括　第１節　方形周溝墓の様相」（第８分冊）を参考とした。

稲葉遺跡（京都府京田辺市）

・京田辺市教育委員会 1998『京都府京田辺市　稲葉遺跡第４次発掘調査概報』（『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第 24 集）

多遺跡（奈良県田原本町）

・奈良県立橿原考古学研究所 1985『田原本町　多遺跡　第 11 次発掘調査報告書』（『奈良県遺跡調査概報』第二分冊）

【か】

北仰西海道遺跡（滋賀県高島市）

・滋賀県今津町教育委員会 1985『今津町文化財調査報告書』第４集
・滋賀県今津町教育委員会 1986『今津町文化財調査報告書』第５集
・滋賀県今津町教育委員会 1987『今津町文化財調査報告書』第７集
・滋賀県今津町教育委員会 1989『今津町内遺跡発掘調査概要報告書』

コドノＢ遺跡（三重県明和町）

・三重県文化財センター1998『コドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡（第１次）発掘調査報告書 - 多気郡明和町上村－』（『三重県埋蔵文化財調査報告』181）
・三重県文化財センター2000『コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告書 - 多気郡明和町上村－』（『三重県埋蔵文化財調査報告』214）

【た】

田井中遺跡（大阪府八尾市）

・大阪府文化財調査研究センター1997『田井中遺跡（1～3 次）・志紀遺跡（防１次）陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第 23 集）

駄坂・舟隠遺跡（兵庫県豊岡市）

・豊岡市教育委員会 1989『駄坂・舟隠遺跡群』（『豊岡市文化財調査報告書』22）

塚町遺跡（滋賀県長浜市）

・滋賀県長浜市教育委員会 1994『塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ』（『長浜市埋蔵文化財調査資料』第８集）
・滋賀県長浜市教育委員会 2007『塚町遺跡第 47 次調査報告』（『長浜市埋蔵文化財調査資料』第 80 集）

伴堂東遺跡（奈良県磯城郡三宅町）

・奈良県立橿原考古学研究所 2001『伴堂東遺跡　京奈和自動車道「大和区間」の建設に伴う発掘調査報告書Ⅳ』(『奈良県立橿原考古学研究所発掘調査報告』第 80 冊)

【は】

東奈良遺跡

・東奈良遺跡調査会 1978『東奈良』、同 1981『東奈良発掘調査概報Ⅱ』
上記の 1978 年資料では、「弥生時代の方形周溝墓」との説明を付けて写真が掲載されている。これは市民への普及活動のための写真集で、調査報告書ではない。また、1981 年資料の第六章・まとめでは、「弥生時代前期の遺構としては、上記の中心地区より南西約 200m の G-4-G・K 地区、東方約 150m の E-7-E・F 地区の両地区に方形周溝墓が存在する」と記述するが、その詳細はわからない。本稿では田井中遺跡の資料に記載の情報（本間 1997）を引用しているが、本間元樹氏も「本遺跡の原資料（東奈良遺跡調査会 1977『東奈良遺跡第７回現地説明会資料（G-4-G・K 地区)』）は未見としている。

東武庫遺跡（兵庫県尼崎市）

・兵庫県教育委員会 1995『尼崎市　東武庫遺跡　尼崎武庫元町団地建設に伴う』(『兵庫県文化財調査報告』第 150 冊)

古川遺跡（大阪府門真市）

・門真市教育委員会 1999『古川遺跡 - （仮称）門真市保健福祉センター建設に伴う発掘調査報告書－』(『門真市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 6 集)

平城京右馬寮 246 次調査（奈良県奈良市）

・奈良国立文化財研究所 1994『平城宮跡発掘調査部　発掘調査概報』(報告；小沢毅)

【ま】

松ノ木遺跡（三重県津市）

・三重県文化財センター1993『一般国道 23 号中勢道路（９工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告書』(『三重県埋蔵文化財調査報告』115-1)

【や】

山中遺跡（愛知県一宮市）

・愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第 40 集)

第３章　近江の方形周溝墓Ⅰ（服部遺跡）

はじめに

服部遺跡（滋賀県守山市；**図 16**）は野洲川下流の改修事業にともない発見された遺跡で、1974 年から 5 年の歳月をかけて発掘調査がなされた。弥生前期から古墳前期まで長期にわたり継続する遺跡であるが、時期によってその遺構が異なる。水田・墓域・集落としての盛期があり、野洲川の度重なる大氾濫を画期としてその土地利用が変化したと考えられる。

このうち墓域として利用された時期は弥生中期前葉から弥生中期末までで、その間、約 360 基にもおよぶ方形周溝墓が造り続けられた。近江の方形周溝墓を研究するにあたり、本章ではこの服部遺跡を対象とし、その方形周溝墓群の分析をとおして方形周溝墓の実態を理解するとともに、墓群に反映された当時の社会像を考えたい。

これらの遺構については、服部遺跡発掘調査報告書[1]において、一連の調査を担当された大橋信弥氏・山崎秀二氏・谷口徹氏によって詳細な検討が加えられ、社会の様相についての言及もある。しかし、洪水等による崩壊・消滅、後世の削平により、遺構・遺物の遺存状態が良好なものは多くない。そのためであろうか、方形周溝墓研究史において約 360 基という総数が強調されるわりには、方形周溝墓（群）そのものが研究対象となることは少ないのが現状であろう[2]。ここでは、発掘調査報告書の発刊（1985・1986 年）以降の知見を援用しながら検討を進める。

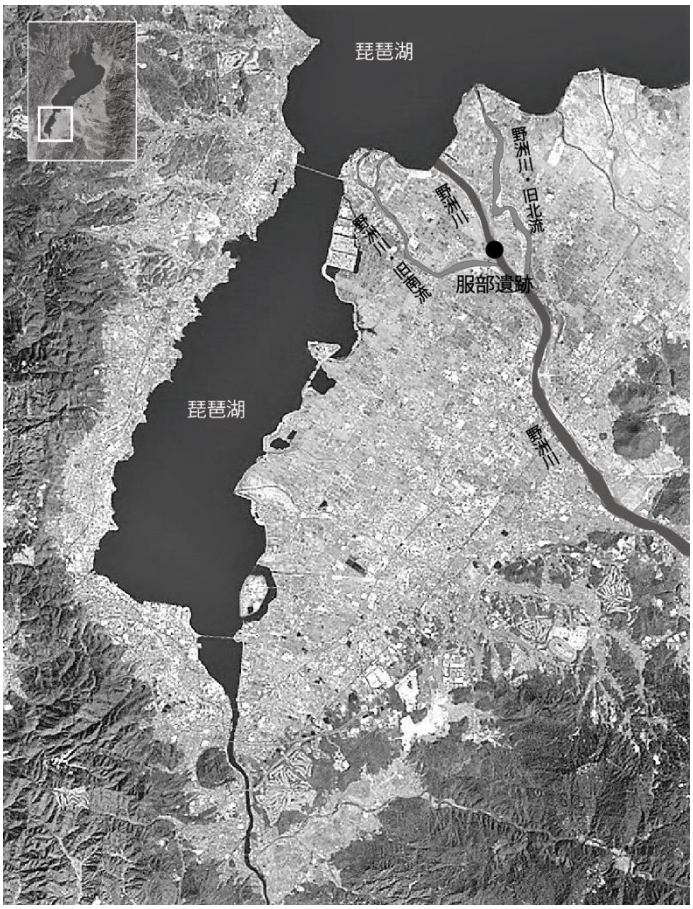


図 16　服部遺跡の位置

第１節　服部遺跡の方形周溝墓群の様相

服部遺跡における方形周溝墓遺構を**図 17**[3]に示す。弥生中期（第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式）の所産であり、総計は約 360 基にものぼる。墓群が調査区域外にもひろがっていることを考えれば、この総数はさらに増大する。『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』にもとづいて方形周溝墓の規模・

形態、方形周溝墓群の群構成および墓群の形成過程をたどり、墓域の様相をさぐる[4]。

1　方形周溝墓の規模・形態

まず、方形周溝墓の規模・形態、とくに台状部・周溝部・埋葬施設について概観する。

後世の洪水や削平による攪乱によって方形周溝墓群は甚大な影響を受け大きく変形していると考えられるが、それでも**図 17** の台状部の状況や**図 18（1）**の台状部二辺の相関図のひろがりをみると、長方形が優勢を占めるといえるだろう。**図 18（2）**には埋葬施設が検出された方形周溝墓を対象に単数埋葬と複数埋葬の墓の台状部辺長を比較しているが、両者に顕著な差はみられない。このように台状部の基本プランとしては方形であったとみられるが、造墓にあたっては厳密に方形を目指したものではなさそうである。

周溝部は隅部に陸橋をもつタイプ（いわゆる、隅切れ型）が一部にみられるものの、台状部の四周をめぐるものが優勢である。周溝の形状は方形・長方形が基本であるが、A 群（群構成に関しては後述）の一部の墓のように円形を呈するものもみられる。このような周溝部の変化は形態の時期的な変化を示すものと理解される（**図 17**）。隣り合う方形周溝墓の相対位置を周溝状況からみると、周溝部を共有・隣接するもの、さらに互いに独立しているものがあるが、周溝部を共有・隣接するものが多い。

埋葬施設に関しては、約 360 基のうち埋葬施設が検出された墓は 84 基であり、多くの墓では洪水や後世の削平によって消失している。その 84 基のうち、単数埋葬が 60 基（71%）、複数埋葬が 24 基（29%）で、複数埋葬では 2 埋葬施設が 12 基、3 埋葬施設が 11 基、4 埋葬施設が 1 基の内訳である[5]。このように服部遺跡では単数埋葬が優勢であり、複数埋葬では 2～3 人を埋葬することが多いようである。また、木棺使用は推定をふくめると、単数埋葬では 15 例、複数埋葬では 13 例を数える。ただ、埋葬施設が検出された墓でもその遺存状態が悪く、棺材を確認できる状況にはない墓も多い。このことを考慮すると、前述の事例数からみて木棺での埋葬が普及していたとみることができるだろう。

一方、埋葬施設の立面位置について、後世の削平により断定は難しいものの、周溝を掘削した土を台状部に積み上げて、その中に埋葬施設を設けた可能性が高い。削平によって消滅したという事実からも、生活面（地山面）より上に被葬者（埋葬施設）が置かれていた蓋然性が極めて高いといえる。

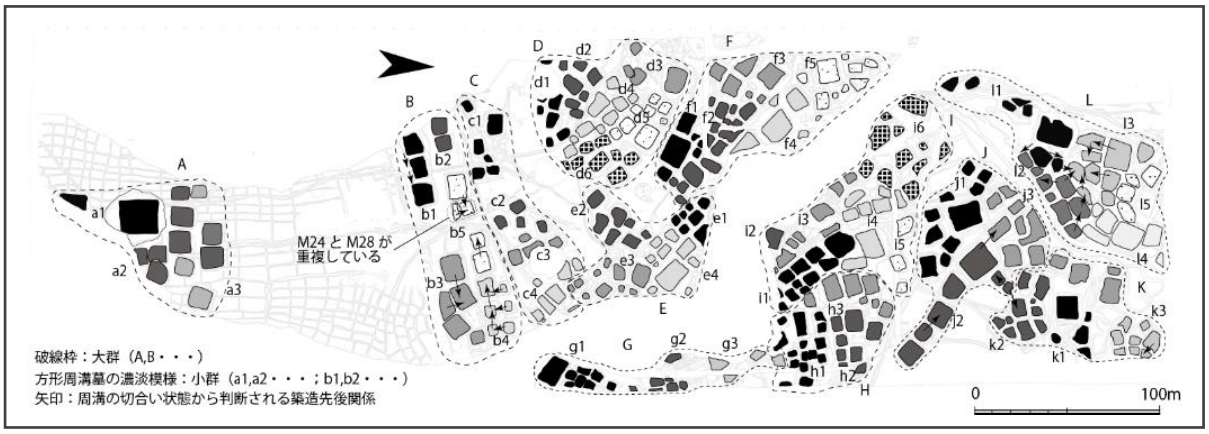


図 17　服部遺跡の方形周溝墓群

2　方形周溝墓群の群構成

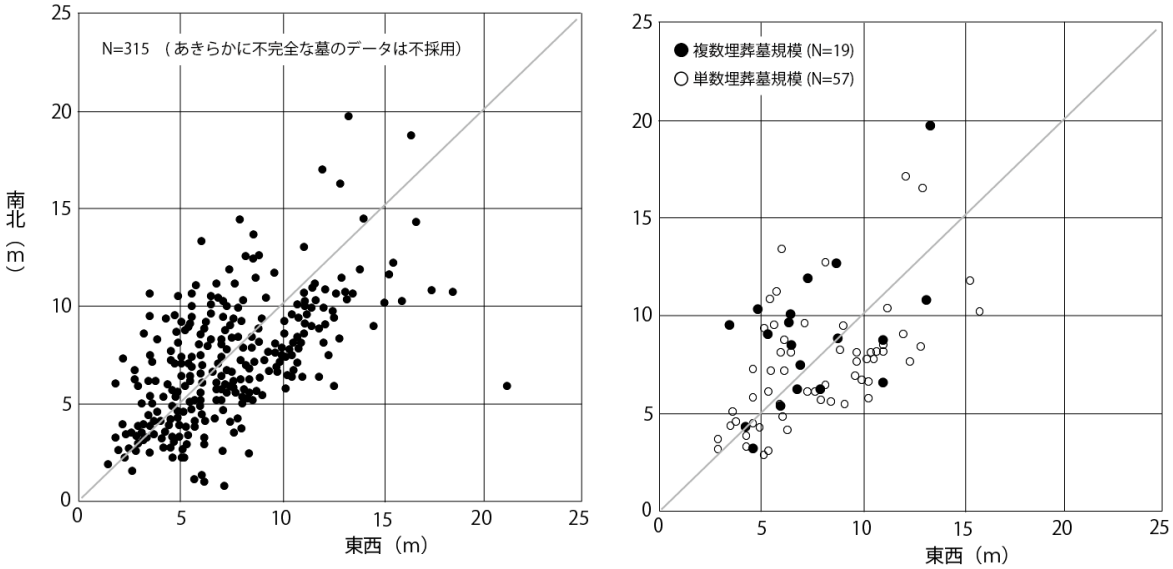
服部遺跡では**図 17** にみられるように立錐の余地もないほどの方形周溝墓群であるが、隣り合う周溝部の共有・隣接状態、空閑地状況、各墓の主軸の方向、供献土器の時期などに着目すると、約 360 基にのぼる方形周溝墓群は大きく 12 群（A～L、以下、大群とよぶ）にわけることができる。ただ、後世の削平や洪水などによって方形周溝墓そのものが変形し、その周溝も不明瞭になっているものが多く、とりわけ各群の境界域の判断にはあいまいな要素が入っていることに留意する必要がある。

さらに、大群を構成する個々の方形周溝墓の配置・配列状況に着目すると、各大群は数基の方形周溝墓群からなるいくつかの小群で構成されている。すなわち、A 群では a1～a3、B 群では b1～b5、C 群では c1～c4、D 群では d1～d6、E 群では e1～e4、F 群では f1～f5、G 群では g1～g3、H 群では h1～h3、I 群では i1～i6、J 群では j1～j3、K 群では k1～k4、L 群では l1～l5、の各小群に分けることができる。以上のように、大群は 30 余基、小群は数基の方形周溝墓で構成されている。

3　墓群の形成過程

墓群の形成過程をさぐるには各墓の造墓時期を知る必要がある。年代指標となる供献土器などがあればその編年にもとづき当該方形周溝墓の造墓時期が判明するが、どの方形周溝墓でも供献土器が出土しているわけではない。そこで、供献土器をともなう方形周溝墓の時期をもとにして、その墓をふくむ墓群の造墓開始時期を判断することにする（**図 19**）。

弥生時代前期に水田として開拓されていた土地が中期初頭にあった洪水によって埋没するが、中期前葉後半（古）[6] には墓域としての土地利用がはじまる。すなわち、C・D・I 群が存在する地域において造墓活動がはじまる。中期前葉後半（新）[7] になると、B・E・F・H 群が加わり、さらに中期中葉前半には G・J・K 群へと拡大する。



（1）全方形周溝墓の規模　　（2）単数埋葬墓・複数埋葬墓の規模

図 18　服部遺跡の方形周溝墓の規模（台状部の辺長が判明したもの）

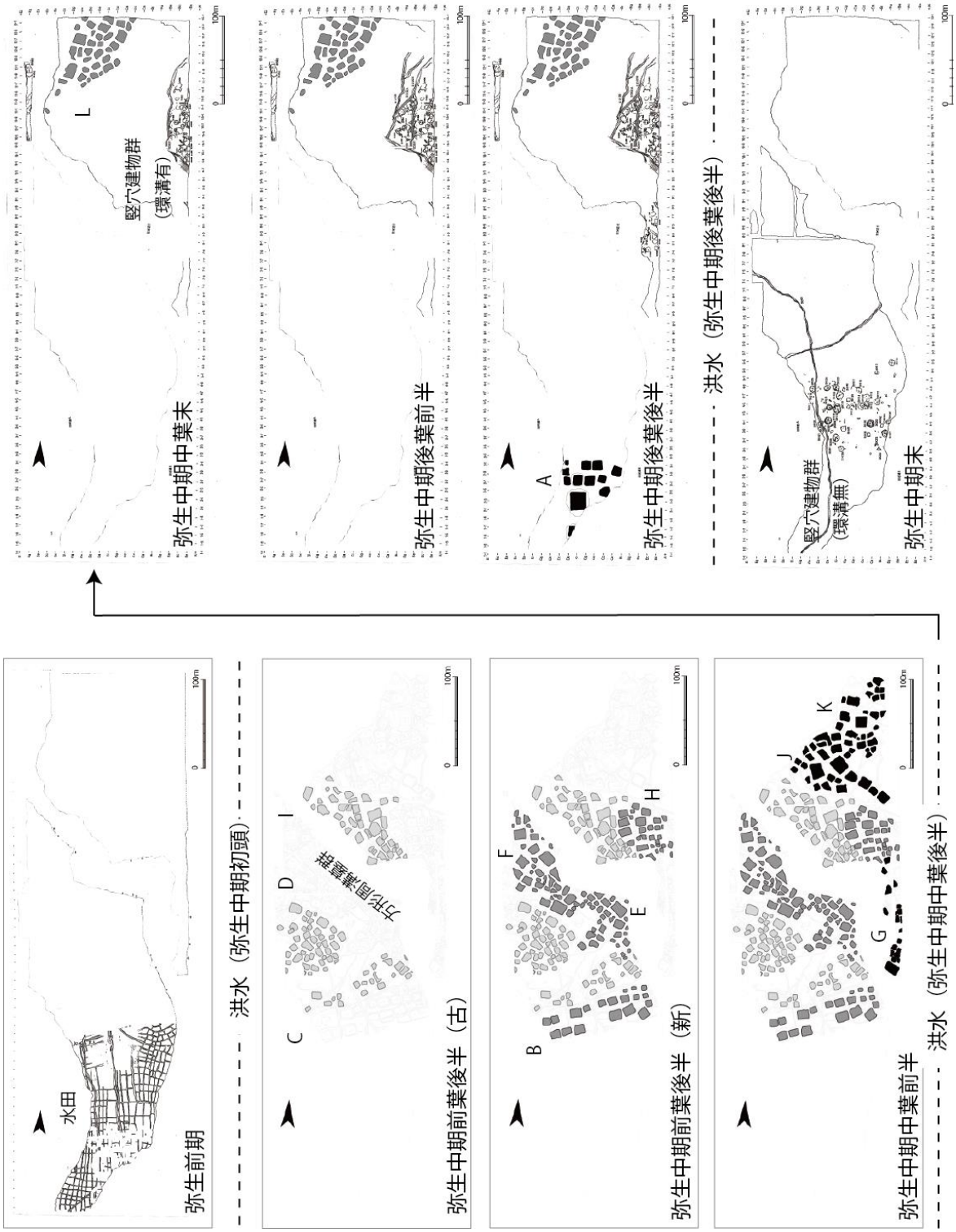


図 19　服部遺跡の変遷（概念図）

このような墓域の拡大は、たとえばC・D・Ⅰ群の造墓活動が一段落して後にB・E・F・H群に取りかかるというように順次造墓が進行するのではなく、各群の地域において並行して造墓活動が続けられるわけであり、あくまでもC・D・Ⅰ群の地域における造墓活動の着手時期が早かったということである。当然、多くの墓からなる墓群では造墓期間も長期化し、また造墓時期が並行する墓群も存在する。

その後、中期中葉後半には洪水に見舞われるが、中期中葉末になってB～K群の外側にあたるA・L群の地域に再び造墓活動が始まる。このことは前述の洪水によってもとの墓域（B～K群の地域）が壊滅したのではなく、一部に墓域の痕跡が残っていたため、そこを避けて造墓が始まったとみられる。ただ、供献土器からみるとA群よりL群の方が少し早く造墓に着手したと考えられる。また、A・L群の造墓活動と並行して、かつてのJ・K群の地域の一画に竪穴建物群が形成されている。この建物群は周囲が溝で囲まれており、「環溝集落」（この呼称は当該報告書に従う）の様相を呈し、A・L群の方形周溝墓群に関係する集落であると考えられている。

第２節　方形周溝墓からみた服部遺跡の社会像

服部遺跡の方形周溝墓群の様相を『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』にもとづいてみてきたが、このような様相が、当時の社会のどのような様相を反映しているのかを検討したい。

服部遺跡の変遷の特徴は**図19**でみられるように、野洲川の氾濫によりその土地利用が変わっていることである。そのため、生産域（水田）・居住域（集落）・墓域（墓群）の各々の継続的な変遷を考えることが難しい。その中で、弥生中期前葉後半から弥生中期中葉前半までの期間には大群B～K（10群）の一連の墓群が形成されており、しかもこれは方形周溝墓群の大部分を占めている。そこで、この大群B～Kのあり様を中心に検討し、社会の様相を考えたい。

1　墓域占有地の企画性

前述のような墓群の形成過程にもとづいて、墓群や墓域の拡大を占有地[8]という観点から考える。弥生中期初頭の洪水によって水田が埋没して以降、中期前葉後半からC・D・Ⅰ群の各地域において造墓活動が始まるのであるが、その当初において、すでに一定の間隔をおいて各群の土地の占有が行われている。つまり、あきらかに各地域では引き続き墓が造られることを想定しているのである。さらに、少し時期が遅れて造墓活動が始まるB・E・F・H群の土地の確保に際しても、C・D・Ⅰの各群が将来にわたり一定の広がりをもつであろうことを考慮していることがみてとれる。そして、各々の占有地において造墓活動が進みその累積として、中期中葉後半の洪水が起こる前の墓域の景観を呈することになる。このように各大群は造墓のため占有地を確保したうえで造墓活動を進めており、これをお互いが認め合うというルールがあったものと推察できる。

このことを、B群を例にして考える。**図17**には隣り合う方形周溝墓の切り合い状態から判断される先後関係を示した。B群ではどの小群も列状配置をもつが、各小群が併行して造墓活動が進められていることがわかる。すなわち、小群b1・b3・b4が各々独立して造墓を始めるが、あらかじめ一定の広さの占有地を確保したうえで、造墓活動が進められている様子がうかがえる。そして、造墓活動の累積結果として、ほぼ列状配置をもつ小群ができあがるわけである。このように、この墓域においてはその造墓に際して企画性が認められる。

ところで、大群Ｂ・小群 b5 においてあきらかに重複した造墓活動がみられる（墓番号 M24 と M28）。先述の企画性という解釈に対する反例である。同時期の他地域での方形周溝墓群でもみられるが [9]、今のところ明確な解釈をもっていない。

2　墓群からみた墓域・集落・集団

服部遺跡が墓域として盛期をもつ弥生中期前葉後半～中期中葉前半までを実年代でみると、100～150 年の幅、つまり一世代を 20 年とみるとほぼ 5～7 世代の幅と考えられる。この期間内に約 300 基にもおよぶ方形周溝墓群が造られたのであり、一世代で 50 余基が造墓されたことになる。

ところで、弥生中期後葉後半に盛期をもつ二ノ畦横枕遺跡 [10] は環濠集落と考えられているが、ここでは一時期の人口が 1,000 人規模と見積られている（伴野 1995）。服部遺跡の墓群に関係する集落の人口をこれと同等規模だとすれば、方形周溝墓の多くが単数埋葬であることを考えあわせると、服部遺跡に関係する集落の全構成員がこの方形周溝墓群に埋葬されたとは考えられないであろう。つまり、方形周溝墓に埋葬されるのは一部の人ということになる。また、服部遺跡を墓域とする人々も一つの集落（居住域）に住むというより、複数の集落が服部遺跡を共同墓域としていたと考えるのが妥当であろう。

このような共同墓域においては、大群や小群にみられる方形周溝墓の特徴的な配置は一定の約束事でつながる集団の紐帯を反映し、墓域の占有地は一つの集団が一定の価値観のもとに集住していることを想起させる。このような墓域の様相をみると、方形周溝墓の小群を一つの集団による墓群、そして大群をそれらの集団がいくつか集まったものとみることができる。すなわち、一つの大群は集落（複数の集団が集住する場所）を反映しているととらえることができるのではないか。また、ここでいう集団とは単なる家族・親族からなるリネージではなく、より社会性のつよい出自集団であるクランが想定される [11]。

3　墓群からみた集団・階層

服部遺跡では集団と階層を考える上で貴重な遺物である副葬品の出土がほとんどないが、上述のように単数あるいは複数の埋葬施設が遺存している。そこで、大庭重信氏の先行研究を参考としたい（大庭 1999）。この研究は埋葬施設の視点から階層構造をあきらかにしようとするもので、河内平野の事例分析から、弥生前期～中期前葉には単数埋葬が優勢であり、被葬者間の格差は各方形周溝墓の規模にあらわれているとする。また、弥生中期には複数の埋葬施設をもつ方形周溝墓が優勢となり、それらの埋葬施設が台状部にどのように配置されているかによって空間占有型・空間分有型 [12] に分類され、さらに分類された方形周溝墓の規模・埋葬儀礼などを調べ、空間占有型の被葬者がより上位階層の人物であると結論づけている。

以下に大庭氏の先行研究を指針として、服部遺跡での方形周溝墓の規模差、埋葬施設の分析を進め、弥生中期前葉後半から弥生中期中葉前半（大群 B～K の造墓活動期間）の時期の服部遺跡の集団と階層を考える。

方形周溝墓の規模差は、**図 19** のように時期とは関係なく、大群間・大群内および各大群内での小群間・小群内においても大きい。前述したように、大群＝集落、小群＝出自集団（クラン）と考えれば、集落間・集落内、さらに出自集団内においても規模差が大きいのである。それでは、出自集団の単位である小群内での規模差はどこからくるのか。**図 17** に示される小群ｂ４やｊ２などの先後関係にみられるように、各小群内においても規模の大小と造墓順序は異

なっている。つまり、その集団のより古い人物の墓が大きいとか小さいとかはいえない。規模の大小が造墓順とは一致しないということは、規模が被葬者（あるいは埋葬者）の意向で決まるということであり、小群間においても大群間においても、圧倒的な規模差をみせつけるだけの出自集団がまだでていないのだろう。

ただ、小群間で顕著な現象としてその配置をあげることができる。**図 17** において多くの小群が並列・直列からなる列状配置をもつ（むしろ、そのように群わけがなされているのだが）。このような整然とした配置は、**図 19** のように、弥生中期前葉後半（古）→同（新）→中期中葉前半と時代が進むにしたがってより顕著になる。つまり、出自集団としての紐帯意識が明確にあらわれてきたということだろう。

次に、埋葬施設を検討する。**図 20** は大庭氏の手法にもとづいて、複数埋葬における埋葬施設の配置分類と事例を示した。**表 2** は複数の埋葬施設をもつ方形周溝墓 24 基を分類整理したものである。埋葬施設の配置が確認できた 20 基のうち、16 基（80%）が空間占有型であり、複数埋葬の場合には空間占有型が標準だったといえるのではないか。また、上述のように、単数埋葬・複数埋葬ともに木棺による埋葬がひろく普及しているようである。ただ、M326 では木棺底部端に朱が確認されており、台状部長辺もほぼ 20m を測る大規模な方形周溝墓であることを考えあわせると、M326 はその小群内では「特別な人」といえるだろう。つまり、出自集団内において「特別な人」であって、大群（集落）においてより上位の階層にいる人物ということではないだろう。このように各小群内では方形周溝墓に規模差こそあるが、副葬品がなく、埋葬施設のあり様にも大きな差がない墓域の様相は、集落でのどのような様相を反映しているのだろうか。

ところで、階層という概念（第 2 章参照）は「さまざまな社会的資源とそれを獲得する機会の配分が不平等な社会構造」（田中・佐原 2002）で、「階層を墓で明らかにできるものの多くは威信的な位相、すなわち当時の人々によって認識された地位の側面である」（松木 2000）と理解される。

それでは、服部遺跡の方形周溝墓群における、「人々によって認識された地位」とは何か。造墓にあたって墓域を企画・調整する人物やそれを実行する人物たち、また集落にあっては水稲耕作の共同作業に際して諸事を調整する人物たちなどが、周囲の人々によって「認識された立場（地位）」にいる人たちであろう。集落（大群）や集団（小群）の代表者がこの任にあたるとしても、そのような役割が世襲化されるということではない。それらの人物が社会的に上位の階層を構成しているわけではないだろう。

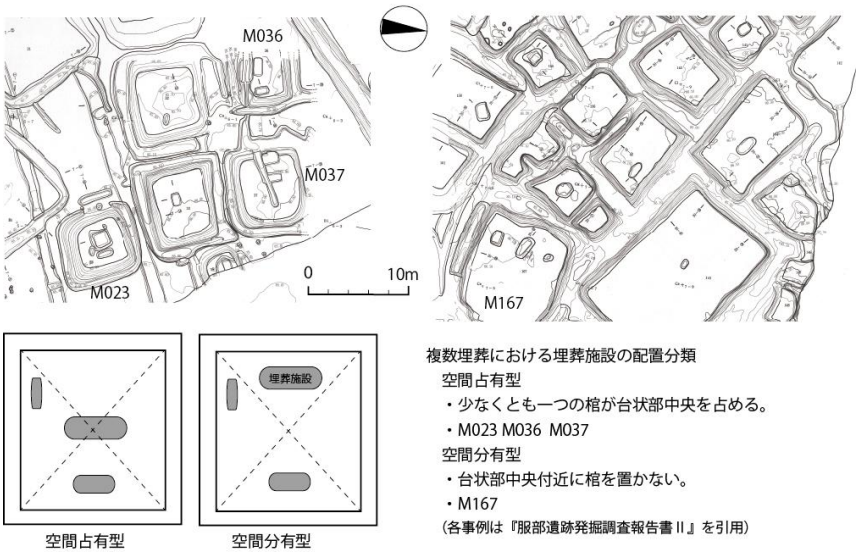


図 20　複数埋葬における埋葬施設の配置

表２　複数埋葬の方形周溝墓一覧

墓番号	弥生中期			平面形態							埋葬施設						備考
	前葉	中葉	後葉	平面形状		グループ		台状規模(m)			施設数	埋葬施設配置		施設規模(m)			
				方形	長方	大群	小群	東西	南北	面積	複数	空間占有	空間分有	東西	南北	深さ	
M023	1			1		B	3	4.3	4.3	18.49	3	1		1.6/1.5/0.2	1.6/0.3/0.35	0.65/0.19/0.11	木棺x1
M032	1			1		B	4	6.1	5.4	32.94	2	1		1.25/1.1	2.15/0.55	0.27/0.22	
M036	1				1	B	4	4.7	3.2	15.04	2	1		1.8/0.75	0.8/1.3	0.08/0.09	木棺x2
M037	1			1		B	4	6.0	5.6	33.60	2	1		1.2/0.9	1.6/1.3	0.16/0.2	
M041	1			1		C	1	7.0	7.5	52.50	3	1		1.2/0.8/0.7	1.4/1.4/1.5	0.13/0.1/0.12	
M059	1				1	C	4	4.9	10.4	50.96	2	-	-	1.2/1.6	1.9/0.8	0.35/0.13	
M084	1			1		D	3	8.8	8.9	78.32	2	1		1.8/1.1	1.1/3.1	0.2/0.33	
M085	1			1		D	3	8.8	12.7	111.76	2	1		1.3/1.4	2.1/3.1	0.17/0.30	
M110	1				1	D	5	12.0	9.1	109.20	2		1	-	-	-	木棺x1
M122	1				1	D	6	6.5	9.7	63.05	2	-	-	-	-	-	木棺x1
M123	1				1	D	6	6.5	10.0	65.00	3	1		1.6/2.7	1.0/1.1		木棺x1
M145	1				1	E	4	3.7	6.2	22.94	2	1		1.0/2.1	2.3/1.0	0.22/0.10	
M150	1				1	E	2	6.5	8.4	54.60	2	1		2.0/2.7	0.7/2.0	-	
M156	1			1		E	4	13.2	10.8	142.56	3		1	1.4/1.9/1.8	0.17/0.18/0.19	-	木棺x2
M167	1				1	E	3	11.0	8.7	95.70	3		1	2.4/1.5/0.7	0.80/0.22/0.19	-	木棺x1
M319	1			1		I	6	7.6	9.5	72.20	3	1		1.1/0.7/2.2	2.7/2.6/0.9	0.11/0.07/0.05	木棺x2
M324	1				1	I	6	8.0	6.2	49.60	2	1		2.3/0.8	1.2/1.6	0.11/0.14	
M326	1				1	I	6	13.3	19.7	262.01	3	1		3.0 /1.7/0.7	1/ 1.1/2.0	0.30/0.23/0.13	木棺x1、朱
M343		1			1	J	3	7.4	11.9	88.06	3	1		2.1/2.4/1.1	1.2/1.0/3.0	0.10/0.14/0.14	木棺x1
M357		1			1	K	3	10.6	8.3	87.98	4	-	-	3.1/3.5/2.1/3.5	2.1/1.5/ 3.1/2.0	-	
M405			1		1	L	2	5.4	9.0	48.60	2	1		1.7/0.6	1.0/1.2	0.11/0.20	
M406			1		1	L	3	3.5	9.5	33.25	3		1	1.9/0.7/1.5	1.1 1.5 0.7	0.19/0.20/0.27	
M418			1	1		L	5	6.8	6.2	50.40	3	1		1.3/2.3/1.2	2.1 1.4 0.7	0.16/0.13/0.07	
M423			1		1	L	2	11.0	6.5	71.50	3	-	-	-	-	-	

以上の検討から、服部遺跡の方形周溝墓群のＢ群～Ｋ群の時期、具体的には弥生中期前葉後半から中期中葉後半にかけて墓の規模に差があるものの、それらは各集落・各集団の個性差による多様性とみられ、厳然とした階層差があるとは考えられない。

ただ、弥生中期後葉になりあらわれる円形状の周溝部をもつ周溝墓（Ａ群）は、他との差別化を示す明確な指標と考えられ、あきらかに階層差の萌芽とみられる。さらに、この周溝墓をふくむ小群も他の小群とは階層的に区別されるものであろう。

４　服部遺跡（服部社会）の社会構造

以上の議論から、弥生中期の服部社会の社会構造を、時期を追ってまとめておく。

(1)　服部社会では方形周溝墓が墓制の標準であり、方形周溝墓群の大群は集落を、小群は集団を反映している。各集団は同一出自集団であり、複数の出自集団により集落が構成されているといえる。また、一つの墓域を複数の集落が共有するということから、服部社会は一定の共通価値観をもつ社会である。ただし、従来墓に埋葬される集団もいることから、方形周溝墓集団との間には階層差が認められる。

(2)　最初の野洲川洪水後に墓域が形成される弥生中期前葉から、２度目の洪水後の弥生中期中葉末までの墓域では、方形周溝墓群の小群にみられる特徴的な群構成（列状配置：配置Ａ）から、出自集団の紐帯が強まり、集団間では競争がはじまっていることをうかがわせる。また、集団内においても埋葬施設に朱を用いるなど、特別な被葬者の出現がみられる。しかし、そのような被葬者の有無により集団が層別され階層化されているような状況は見出せない。このように、方形周溝墓の群構成・埋葬施設などに特徴的な表象はみられるが、それらにより階層が明示されている社会構造にはなっていない。

(3)　弥生中期後葉後半に入ると、円形の周溝部をもつ円形周溝墓（形態Ｂ1）を核として整然と配置された小群（配置Ｂ2）が出現し、他の小群（集団）と明確に区別され階層化されていることが認識できる。すなわち、小群内での「特別な人」は大群（集落）でも「特別な人」であり、その人物を擁する小群（集団）は、より上位階層にあるといえるのではないか。

おわりに

服部遺跡の弥生中期の遺構である方形周溝墓群の群構成、墓群の形成過程、墓域の占有地状況から弥生中期社会の様相を考えた。服部社会では、方形周溝墓群の様相の変化から弥生中期中葉と中期後葉の間に明確な画期があり、その前後で社会の階層化が進むことがあきらかになった。

ここでは、方形周溝墓群の規模・形態・群構成が表象する当時の社会構造（集団・階層）を提示した。近江地域の他の地域の方形周溝墓群の分析と比較検討することにより、方形周溝墓からみた近江の弥生社会構造をあきらかにしたい。

【註】

(1) 本章に関係するものは；

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ−滋賀県守山市服部町所在』（方形周溝墓群関連）、　同 1986『同Ⅲ』（集落関連）

(2) 服部遺跡を対象とした研究には以下の論文がある。

丸山竜平 2003「近江湖南における弥生墓制の一試論－滋賀県服部遺跡の方形周溝墓群から－」『立命館大学考古学論集』3　立命館大学考古学論集刊行会

前田清彦 2009「方形周溝墓の造墓計画－群構成の歴史的意義－」『金沢大学考古学紀要』65　金沢大学文学部考古学講座

(3) 方形周溝墓の表示として周溝部に網掛けを施すのが通例である。服部遺跡では度重なる洪水のため各方形周溝墓の周溝部が消滅・合体しており、個々の周溝部が明確に判定できないケースが多い。そのため、周溝部ではなく台状部を網掛けして、各方形周溝墓の配置状況を明示した。

(4) 本章は上記の『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』にもとづいて記述しているが、一部、筆者の解釈が入っている。また、本研究で示す図は当該報告書の記述にもとづいて筆者がトレースあるいは一部改変し作成したものである。ともに内容の全責任は筆者にある。

(5)『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』の記述において、単数埋葬・複数埋葬事例の数値に錯綜がみられる。遺構図面・方形周溝墓一覧表を精査し、逐一、数値を確認・訂正した。

(6) 第Ⅱ・Ⅲ様式の土器が混じるが、第Ⅱ様式の土器が多い。

(7) 第Ⅱ・Ⅲ様式の土器が混じるが、第Ⅱ様式の土器が少ない。

(8) ここでは、あらかじめ確保された土地という意味をふくめて、「占有地」を使用している。

(9) 東武庫遺跡（兵庫県尼崎市）では前期の墓が重複する。「荒尾南遺跡（岐阜県大垣市）では中期前葉の墓と中期中葉、後期のものなどが重複する。

(10) ニノ畦横枕遺跡は、服部遺跡からは南へ 1Km ほどの距離にある。

(11) これに関連して、『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』では、「小群は一系列の小家族による、数世代の墓としてとらえ、ブロック（本研究での「大群」と同義）はそれらを包括した大家族」（ｐ233）として、方形周溝墓群は「対応する一集落に伴うもの」（ｐ239）との考えが示されている。

（12）空間占有型は一つの埋葬施設が台状部の中央付近に、他の埋葬施設は辺々部に配置される。空間分有型はどの埋葬施設も台状部の中央付近には配置されない。

【参考文献】

大庭重信　1999「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学　大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集』大阪大学考古学研究室

田中琢・佐原真 2002『日本考古学事典』三省堂

伴野幸一　1995「滋賀県ニノ畦横枕遺跡と伊勢遺跡」『季刊考古学』第 51 号　雄山閣

松木武彦　2000「階層」『現代考古学の方法と理論Ⅱ』同成社

第４章　近江の方形周溝墓Ⅱ（湖南地域）

はじめに

本章では、湖南地域の方形周溝墓を集成・分析する。この地域では縄文早期末にさかのぼる湖底遺跡をはじめとし、その後も継続して各時代の遺跡が存在する。琵琶湖を中心とした環境が人々の生活に適していたのだろう。弥生時代に入ると遺跡数は増加の一途をたどる。方形周溝墓遺跡についても、弥生中期前葉から古墳前期まで造墓活動が継続し方形周溝墓遺跡が密集する。その結果、近江の方形周溝墓の過半がこの地域に展開する。

それゆえ、近江の方形周溝墓の研究にとっては恰好の資料を提供してくれる地域であり、第２章で論じた服部遺跡もこの地域にある。

第１節　方形周溝墓の集成

1　湖南地域の地形

図 21 は湖南地域（湖南平野）、**図 22** は湖南地域（西岸部）の地形分類図[(1)]と遺跡分布図である。

図 21 は湖南平野とよばれる地域で野洲川がつくる広大な扇状地・氾濫原がひろがり、その先端部には大きな三角州が発達して、琵琶湖の最狭部を形づくっている。旧河道の分布に注目すると、野洲川右岸域では野洲川旧北流河口方向に向かう連続する旧河道がみられ、野洲川左岸では野洲川旧南流河口へ向かう旧河道、さらに烏丸崎（からすまざき）半島方向に連続するものが認められる。これらの分流のうち烏丸崎にむかう旧河道について、烏丸崎沖に沈水三角州が明瞭に認められることから、野洲川は「初期の頃には谷口から北西にまっすぐ流下し、一時期、古川筋が烏丸崎方面へ流下しており、その後、現河道の位置に定まったと考えられる」（池田ほか 1979）。また、この古川筋は現在の境川の河道とほぼ同一であり、「古野洲川ともいえるもので、弥生時代以前にはすでに存在していた」と考えられている（辰巳 1988）。一方、野洲川旧南流方向に向かう旧河道は江西川とよばれる古野洲川の主流で、鎌倉時代に老齢化したと考えられている（守山市 1974）。このように、古野洲川が堆積の場を徐々に北に移しながら平野を拡大し、河道を右に移しながら現在の野洲川に近づいたのである。

広大な湖南平野に対して、**図 22** の西岸部は比叡山系・比良山系から琵琶湖に向かって土砂を運ぶ中小河川によって、数多くの複合扇状地が形成されている。これらの扇状地の接合部には大小の開析谷が発達し複雑で不安定な地形となっており、湖岸に沿ってわずかな平地が南北に長く延びる、水稲耕作には適さない土地であっただろう。しかし、この地

表 3 湖南地域の方形周溝墓集成（1/5）

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形態					群構成						備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D	
201	112	坂口	滋賀県	大津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	1					1	1				1							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
2011	119	穴太	滋賀県	大津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	4					4	2			2	4							
					庄内	3					3	2	1			3							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
201	123	滋賀里	滋賀県	大津市	Ⅱ	2					2	2				2							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	2					2	2				2							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明	1					1	1				1							
201	141	南滋賀	滋賀県	大津市	Ⅱ	1					1	1				1							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
206	20	柳	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	1					1	1				1							甕棺
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
206	33	中畑	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ	5					5	5				5		1					SX1・SXは6円形周溝の祖形か
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	3					3	3				3							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明	3					3	3				3							
206	42	門ケ町	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ	23					23	23				23							1.8.9.10.18次で検出
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	2					2	2				2							22次
					布留						0					0							
					不明						0					0							
206	88	中兵庫	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	2					2	2				2							22次
					布留						0					0							
					不明						0					0							
206	89	御倉	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	2	1				3	3				3							
					庄内	1				1	2	2				2							
					布留	6	1				7	7				7			1				群構成はⅤ＋庄内＋布留で推定
					不明	11	1				12	12				12							
206	90	襖	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ		1				1	1				1							
					Ⅴ						0					0							群構成は庄内＋布留で推定
					庄内	2	1				3	3				3							3～6Cまで断続的に造成（8基）
					布留	1	3				4	4				4				1			
					不明	5				2	7	7				7							
206	98	宮前	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ	2					2	2				2							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
206	122	鳥丸崎	滋賀県	草津市	Ⅱ	12					12	12				12							
					Ⅲ	47					47	47				47	1	1	1				
					Ⅳ	1	1				2	2				2							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明					22	22	22				22							

規模（台状部辺）：小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　群構成：A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 3 湖南地域の方形周溝墓集成（2/5）

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形態					群構成						備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D	
206	124	花摘寺廃寺	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内		2				2	2				2							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
206	139	北太田(上寺	滋賀県	草津市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ-Ⅳ	22	7				29	29				29					1	1	時期は推定を含む
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	1	経田	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	2					2	2				2							
					庄内	1	1	2			4	1		3		4			1				
					布留		1	4	1		6	5		1		6							
					不明						0					0							
207	4	ニノ畦横枕	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	3					3	3				3	1						8次地点に2基、13次地点
					Ⅴ	2					2	2				2							にて1基
					庄内						0					0							
					布留	5			1		6	5		1		6			1				
					不明						0					0							
207	6	吉身西	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	25	2				27	27				27	1						下之郷・播磨田東遺跡の墓域
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	18	益須寺	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	8					8	8				8							V末
					庄内	1			1		2	1		1		2							
					布留	1					1	1				1							
					不明						0					0							
207	38	焔魔堂	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	1					1	1				1							
					Ⅴ	12	1				13	13				13				1			
					庄内	5	2		1		8	7		1		8							
					布留	6	1				7	7				7							
					不明						0					0							
207	44	伊勢	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	12					12	12				12							V末X1
					庄内	8	2				10	10				10					1		
					布留	2	1				3	3				3							
					不明						0					0							
207	47	古高	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	2		1			3	2		1		3							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	53	塚之越	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	28					28	28				28	1						V末
					庄内	9	1				10	10				10				1			下長遺跡の墓域
					布留				1		1			1		1							
					不明						0					0							
207	62	金森東	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	12					12	12				12	1						
					Ⅴ	19	3				22	22				22	1						
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	73	欲賀西	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	5					5	5				5							SX1-SX5
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							

規模（台状部辺）：小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　群構成：A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 3 湖南地域の方形周溝墓集成（3/5）

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形態					群構成						備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D	
207	87	赤野井浜	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ		1				1	1				1							木偶・盤、下半側面穿孔壺、
					Ⅳ						0					0							管状土錘
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	88	赤野井	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	11					11	11				11							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	3	2				5	5				5							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	90	弘前	滋賀県	守山市	Ⅱ	5					5	5				5							
					Ⅲ	6					6	6				6							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	92	寺中	滋賀県	守山市	Ⅱ	3					3	3				3							
					Ⅲ	4					4	4				4	1						
					Ⅳ	1				1	2	2				2							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	94	石田	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ		4				4	4				4		1					下之郷遺跡の墓域
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	100	長塚(小島)	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ	3					3	3				3							
					Ⅳ	8	1				9	9				9		1					周溝共有
					Ⅴ	1					1	1				1							
					庄内	1	2				3	3				3							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	104	播磨田東	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	4	1	1			6	4		2		6							
					布留	2					2	2				2							
					不明						0					0							
207	106	酒寺	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	3					3	3				3							木棺4号墓
					Ⅴ	6					6	6				6	1						
					庄内	2					2	2				2							
					布留						0					0							1989年調査報告書は未刊の
					不明					9	9	9				9							ため詳細不明
207	108	八ノ坪・今市	滋賀県	守山市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	2					2	2				2							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
207	125	服部	滋賀県	守山市	Ⅱ	89	4			11	104	104				104	1	1		1			
					Ⅲ	132	34	3		31	200	200				200	1	1	1	1	1		
					Ⅳ	21	12	3	1	17	54	50	4			54	1	1	1	1	1		
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
208	10	綣	滋賀県	栗東市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	14	4				18	15		3		18		1					一辺陸橋が2基
					庄内	1					1	1				1							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
208	12	霊仙寺	滋賀県	栗東市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	1					1	1				1							Ⅰ－Ⅱの土壙墓群
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明					1	1	1				1							

規模（台状部辺）；小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　群構成：A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 3 湖南地域の方形周溝墓集成（4/5）

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形態					群構成						備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D	
208	15	十里	滋賀県	栗東市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ	2		1			3	3				3							周溝内埋葬(周溝墓1)
					Ⅳ																		
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明		1			1	2	2				2							
208	42	辻	滋賀県	栗東市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内		1				1			1		1							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
208	54	坊袋	滋賀県	栗東市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	4	1				5	5				5				1			
					Ⅴ	6	2				8	8				8				1			
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
208	75	小柿	滋賀県	栗東市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0	2				2							
					庄内	2					2					0							
					布留	1					1	1				1							
					不明						0					0							
208	76	中沢	滋賀県	栗東市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	3					3	3				3							
					Ⅴ	3					3	3				3							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明	1					1	1				1							
342	2	小比江	滋賀県	野洲市 H2	Ⅱ	3					3	3				3							
					Ⅲ	9					9	9				9	1	1					
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	7	2				9	9				9				1			V末2、木棺墓(SX1109)
					庄内			1			1	1				1							
					布留						0					0							
					不明					2	2	2				2							
342	10	湯ノ部	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ		2				2	2				2							
					Ⅴ		1	1			2	2				2							Vと庄内をまとめての墓群
					庄内	7					7	7				7					1		
					布留						0					0							
					不明						0					0							
342	24	木部	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	1					1	1				1							11次
					布留						0					0							
					不明						0					0							
342	27	虫生	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	1					1	1				1							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
342	30	八夫	滋賀県	9次	Ⅱ						0					0							
			野洲市		Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	4	1	1		1	7	6	1			7				1			円形周溝墓(SM9306) 径15m
					庄内		1				1	1				1							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	35	中北	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	1				1	2	2				2							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	43	辻町	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	4	3				7	7				7	1						
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明					1	1	1				1							

規模(台状部辺)；小(～10m)・中(～15m)・大(～20m)・特大(20m～)　　形態：方形・円形・前方後方形　群構成：A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 3 湖南地域の方形周溝墓集成（5/5）

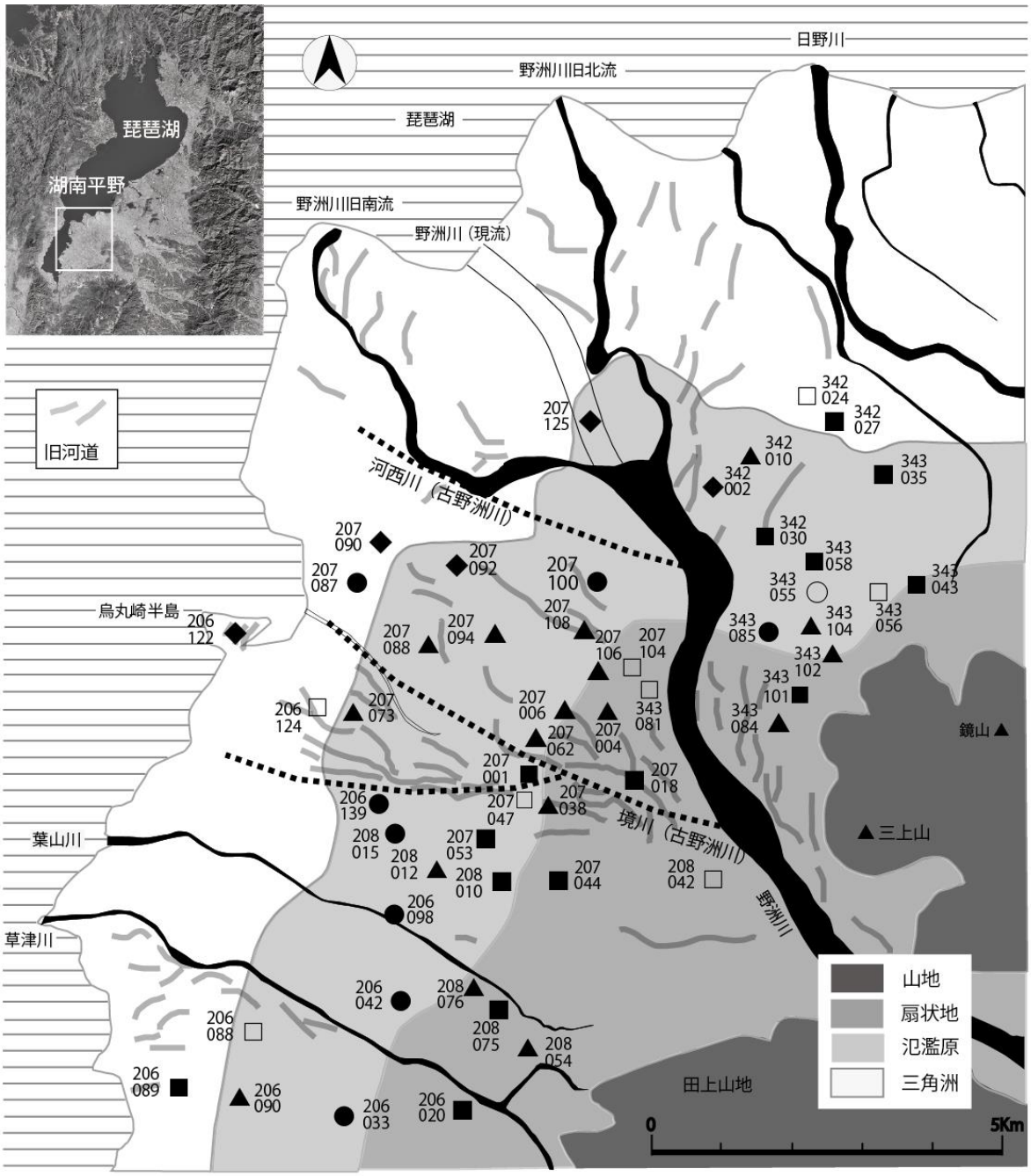
遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形態					群構成						備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D	
343	55	冨波	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内						0					0							
					布留	3	2		1		6	4	1	1		6		1	1				規模：円・中、前後・特大、墓群Bb
					不明						0					0							
343	56	冨波東	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
					庄内	9	1				10	10				10							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	58	五之里	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	3					3	3				3							V末
					庄内	8	1				9	9				9		1					
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	81	十八田	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
		野洲川左岸			Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ						0					0							
				H2.3.7	庄内	6	10			3	19	19				19				1			隣接せず
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	84	中畑古里	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ		1				1	1				1							
					Ⅴ	2					2	2				2							
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	85	市三宅東	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
			S58/59	H8/20	Ⅲ	7	3			1	11	11				11	1						
					Ⅳ	14	1			4	19	19				19	1	1		1	1		玉造工房
					Ⅴ	1					1	1				1							徐々に北方に墓群が延びる
					庄内						0					0							規模も大きくなる
					布留						0					0							
					不明					3	3	3				3							
343	101	下々塚	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ						0					0							
					Ⅴ	2					2	2				2							
					庄内	5				3	8	8				8	1						
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	102	小篠原	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
			H8 9		Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	3					3	3				3							共有、近くに土壙墓群
					Ⅴ	1					1	1				1							V初
					庄内	8	3	2			13	9	4			13							H9調査区　円形周溝墓
					布留						0					0							
					不明						0					0							
343	104	久野部	滋賀県	野洲市	Ⅱ						0					0							
					Ⅲ						0					0							
					Ⅳ	3					3	3				3							
					Ⅴ		2				2	2				2							2基が連結
					庄内						0					0							
					布留						0					0							
					不明					1	1	1				1							

規模（台状部辺）；小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　群構成：A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 4 湖南地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相

時期		土器編年	方形周溝墓の規模（基数）				方形周溝墓の形態（基数）			群構成の配置状態（遺跡数）					
							方形	円形	前方後方形	列状	集合		塊状		弧状
			小	中	大	特大	A	B	C	A	B1	B2	C1	C2	D
弥生中期	前葉	Ⅱ	110 (89)	4	0	0	125 (104)	0	0	1 (1)	1 (1)	0	1 (1)	0	0
弥生中期	中葉	Ⅲ	259 (132)	45	4 (3)	0	340 (200)	0	0	5 (1)	5 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1
弥生中期	後葉	Ⅳ	140 (21)	27	3 (3)	1 (1)	162 (50)	4 (4)	0	5 (1)	4 (1)	1 (1)	3 (1)	3 (1)	0
弥生後期		Ⅴ	151	20	2	0	171	1	3	4	1	0	4	0	0
古墳初期		庄内	94	31	7	2	125	5	9	1	1	1	2	2	0
古墳前期		布留	27	9	4	4	39	1	4	0	1	3	1	0	0

（数字）は服部遺跡におけるデータ



【草津市域】　206-020(柳)　206-033(中畑)　206-042(門ケ町)　206-088（中兵庫）　206-089(御倉)
206-090(襖)　206-098(宮前)　206-122(烏丸崎)　206-124(花摘寺廃寺)　206-139(北太田)
【守山市域】　207-001(経田)　207-004(二ノ畦横枕)　207-006(吉身西)　207-018(益須寺)　207-038(焔魔堂)
207-044(伊勢　)　207-047(古高)　207-053(塚之越)　207-062(金森東)　207-073（欲賀西）　207-087(赤野井浜)
207-088(赤野井)　207-090（弘前）　207-092(寺中)　207-094(石田)　207-100(長塚)　207-104(播磨田東)
207-106(酒寺)　207-108(八ノ坪)　207-125(服部)
【栗東市域】　208-010(綣)　208-012(霊仙寺)　208-015(十里)　208-042(辻)　208-054(坊袋)
208-075(小柿)　208-076(中沢)
【野洲市域】　342-002(小比江)　342-010(湯ノ部)　342-024(木部)　342-027(虫生)　342-030(八夫)
343-035(中北)　343-043(辻野)　343-055(冨波)　343-056(冨波東)　343-058(五之里)　343-081(十八田)
343-084(中畑古里)　343-085(市三宅東)　343-101(下々塚)　343-102(小篠原)　343-104(久野部)
【各遺跡における方形周溝墓の初現期】
★弥生前期　◆弥生中期前葉　●弥生中期中葉　▲弥生中期後葉　■弥生後期　□古墳初期　○古墳前期

図 21 湖南地域（湖南平野）の方形周溝墓遺跡分布

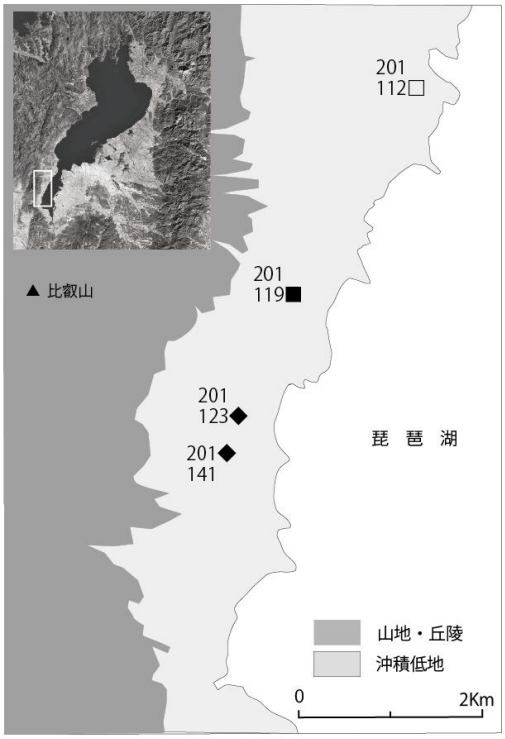
域には縄文晩期以降は人々の生活痕跡が色濃く残り、水稲耕作を中心とした対岸の湖南平野とは異なる生活手段が発達していたと考えられる。

2　方形周溝墓の集成にあたって

湖南地域に所在する方形周溝墓の集成を**表 3** に、その所在位置を**図 21・図 22** に示す。**表 3** と**図 21・図 22** の遺跡番号は共通で、以下、遺跡名のあとに遺跡番号を示す[(2)]。

表 3 の集成表には造墓時期ごとに規模・形態・群構成を記載し、**表 4** には**表 3** をもとにして規模・形態・群構成の時期別様相をまとめた。各項目については後章で詳述する。

報告書であいまいなものについては筆者が判断したものがあるが、註でその旨を明示した。



201-112 坂口　201-119 穴太　201-123 滋賀里
201-141 南滋賀
【各遺跡における方形周溝墓の初現期】
★弥生前期　◆弥生中期前葉　●弥生中期中葉
▲弥生中期後葉 ■弥生後期 □古墳初期 ○古墳前期

図 22 湖南地域（西岸部）の方形周溝墓遺跡分布

3　湖南地域の方形周溝墓概観

表 3 から、湖南地域において方形周溝墓遺跡は 57 ヶ所、方形周溝墓の総数は 1,094 基（この内、服部遺跡(207-125)が 358 基）におよぶ[(3)]。調査区域外への分布のひろがりを考えると、この数は大幅に増えるであろう。検出状況により造墓時期が不明なものも多いが、時期が判定・推定されたものをみると、中期前葉で 125 基（服部遺跡（207-125）が 104 基)、中期中葉で 340 基（同 200 基)、中期後葉で 166 基（同 54 基)、後期で 175 基、古墳初期で 139 基、そして古墳前期で 44 基となる[(4)]。

湖南地域での最古の方形周溝墓は弥生中期前葉までさかのぼり、湖南平野部（**図 21**）では烏丸崎遺跡(206-122)・弘前遺跡(207-090)・寺中遺跡(207-092)・服部遺跡(207-125)・小比江遺跡(342-002)に所在する。これらの遺跡は引き続き弥生中期中葉まで墓域として土地利用される。また、西岸部（**図 22**）では滋賀里遺跡（201-123)・南滋賀遺跡（201-141）に所在するが、これらの遺跡での造墓活動は断続的である。

滋賀県で最古の方形周溝墓は弥生前期末までさかのぼる北仰西海道（きとげにしかいどう）遺跡・塚町遺跡のもので、それぞれ湖西地域北部と湖北地域に所在する（第２章・第５章参照)。上述したように湖南地域は縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多くあり、琵琶湖周辺の中でも比較的早くから開拓が進んだと認識されている地域にもかかわらず、弥生前期の方形周溝墓は検出されていない。さらに、この地域では 1970 年代から続く土地開発にともない膨大な数の遺跡が発見・調査されている。これらのことから、この地域における方形周溝墓の出現は湖北地域よりも後になるものと考えるべきであろう。

第２節　方形周溝墓の様相

図 21・図 22・表 4 をもとにして方形周溝墓遺跡の分布、また事例をあげながら方形周溝墓の規模・形態、方形周溝墓群の群構成について検討していく。

1　方形周溝墓遺跡の分布

湖南平野部で最古の方形周溝墓遺跡は、烏丸崎遺跡(206-122)・弘前遺跡(207-090)・寺中遺跡(207-092)・服部遺跡(206-125)・小比江遺跡(342-002)である（**図 21** の◆印)。これらは三角州・氾濫原付近にみられるが、視点をかえると、境川・河西川・野洲川旧南北流などの古野洲川の流域に分布していることがわかる。すなわち、これらの墓域が早くから古野洲川の流路にはさまれた微高地に形成されていたことをうかがわせる。このように、湖南平野では方形周溝墓の墓域の開拓は古野洲川の近辺からはじまり、時期とともに湖岸から高燥地へとひろがっていく。この傾向は集落の分布傾向と一致し、当然のことではあるが、集落とともに墓域も移動していることを示している。

一方、西岸部の滋賀里遺跡（201-123)・南滋賀遺跡（201-141）は複合扇状地の端部に展開する（**図 22** の◆印)。この傾向は弥生後期以降にあらわれる他の方形周溝墓遺跡も同様の立地である。

2　方形周溝墓の規模

集成された方形周溝墓の総数 1094 基のうち 986 基の規模（推定もふくむ）について、**表 3** には各規模の方形周溝墓数を、**表 4** には方形周溝墓の規模の時期別様相を示した。

まず、小・中・大・特大規模の方形周溝墓の時期別の総基数をみると、弥生中期中葉になると方形周溝墓遺跡が増えるとともに、服部遺跡(207-125)のような広大な墓域が形成されることから、方形周溝墓の基数は爆発的に増加する。その後、弥生中期後葉から後期を盛期として古墳初期・前期には減少する傾向にある。

次に、方形周溝墓の規模ごとにみると、弥生中期前葉から古墳前期をとおして圧倒的に小規模な方形周溝墓が多い。弥生中期中葉以降になると中・大規模のものが、古墳初期には特大規模のものがあらわれる。古墳初期にみられる前方後方形周溝墓には 30ｍを越える規模のものもある。ただし、大規模・特大規模の基数は多くはない。

3　方形周溝墓の形態

湖南地域では形態分類（第１章参照）のうち、形態 A・B・C が観察される。**表 3** には各形態の方形周溝墓数を、**表 4** には形態の時期別様相を示した。

（1）形態の事例観察

図 23（1） は中畑遺跡(206-033)の事例である。ここでは 11 基の方形周溝墓が検出され、造墓時期が判明したものは弥生中期前半（SX1～SX4・SX6）と弥生後期後半（SX7・SX8・SX10）の所産にわかれる。これらの中で、SX1・SX6 では四辺の各周溝の中央部が張り出しており、外周がほぼ円形となるような周溝部をもつ方形周溝墓がみられる。これは後述する円形周溝墓（形態 B1）の祖形と考えられる。

図 23（2）は服部遺跡(207-125)における円形周溝墓（形態 B1）の事例である。この遺跡では弥生中期前葉から中期後葉の方形周溝墓が約 360 基も検出されているが、その最終時期である弥生中期後葉後半の墓群において、通例の方形周溝墓群の中に台状部辺がほぼ 19mを測る大規模な円形周溝墓（形態 B1）M002 があらわれる。

図 23（3）は八夫遺跡(342-030)における円形周溝墓（形態 B2）の事例である。この墓域では弥生中期末～後期前半、および古墳初期の方形周溝墓 8 基が検出されている。通例の方形周溝墓群の中に古墳初期の円形周溝墓（形態 B2）SM9306 がみられ、径 15mを測りこの墓群では最大の規模をもつ。

図 23（4）は綣(へそ)遺跡(208-010)における前方後方形周溝墓（形態 C1）の事例である。この遺跡では弥生後期後半から古墳初期の方形周溝墓 19 基が検出されている。調査区域が細長いため墓域の実態は十分には把握できないが、陸橋部をもつ前方後方形周溝墓（形態 C1）が 3 基（SX1・SX3・SX5）は認められ、ともに台状部が 10m余の中規模である。

図 23（5）は播磨田東遺跡(207-104)における前方後方形周溝墓（形態 C1・C2）の事例である。この調査では 4 基の方形周溝墓が検出され、SX2・SX4 において前方後方形周溝墓が確認できる。ともに台状部が 10m余の中規模ではあるが、とくに SX2 は前方後方形の台状部の全周が溝で囲われる形態 C2 を呈する。

（2）形態の時期別様相

表 4 において形態 A・B・C をあわせた方形周溝墓の時期別の総基数をみると、前節の規模の推移とほぼ同じであり、弥生中期中葉になると方形周溝墓の基数は爆発的に増加し、

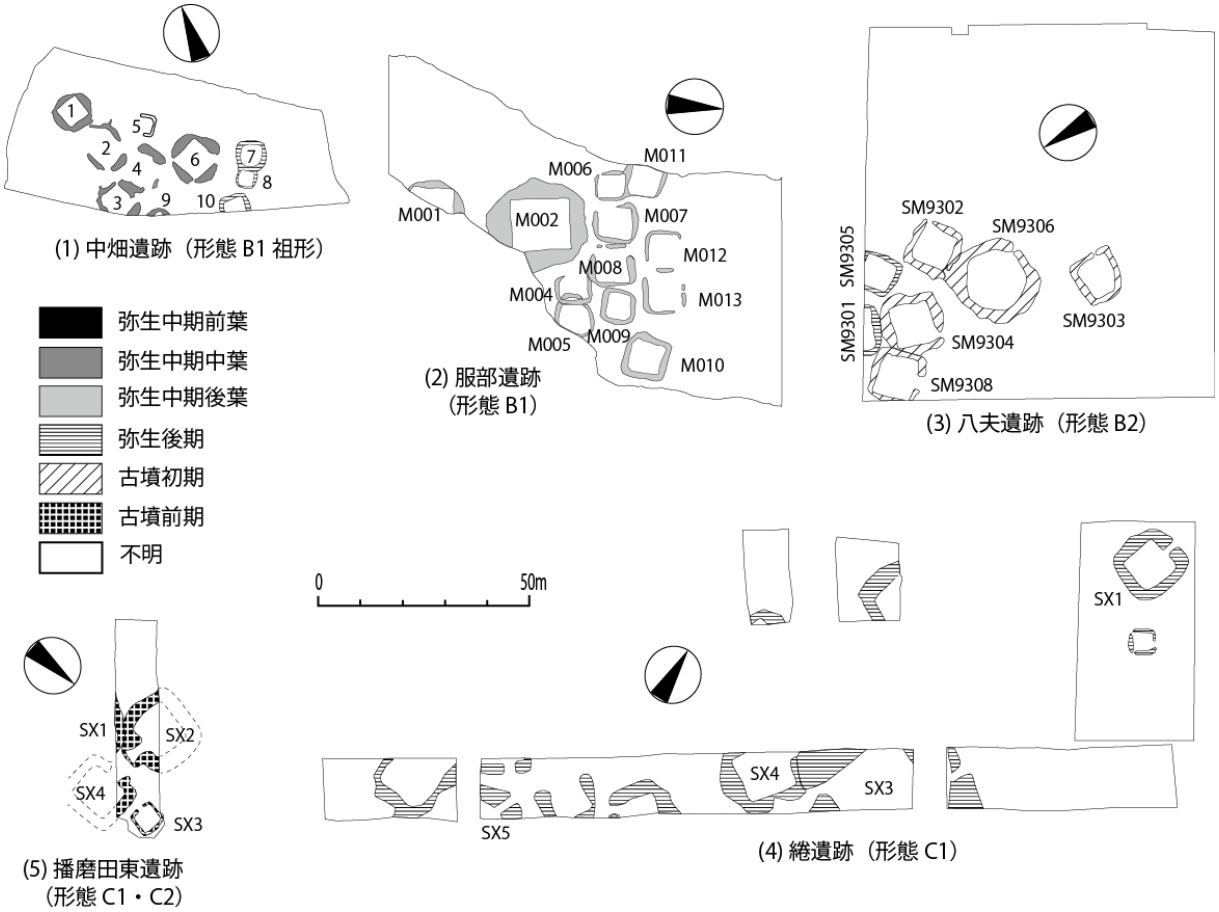


図 23 方形周溝墓の形態事例

弥生中期後葉から後期を盛期として、古墳初期・前期には減少する傾向にある。人口は増加していると考えられるが、方形周溝墓の基数は減少する。被葬者の性格を知るうえで興味深いが、これについては後章で論じる。

次に、形態ごとに時期別様相をみると、「方形周溝墓」という名称の起源となる形態Ａが弥生中期前葉から古墳初期まで安定して造営され続けるが、古墳前期には激減する。これに対して、形態Ｂ・Ｃは弥生中期後葉以降に出現の頻度が高くなってくる。

4　方形周溝墓群の群構成

湖南地域の方形周溝墓群で観察される群構成を**表 3** に示した。これは当該遺跡にその配置がみられるか否かを判断するもので、群構成（配置）の件数を示すものではない。また、分類をするために少なくとも 5 基以上の方形周溝墓からなる墓群を対象としているが、検出状況により分類できない遺跡も多くある。群構成が確認できた方形周溝墓遺跡は 28 遺跡である。なお、墓群における最新時期の方形周溝墓の造墓時期をもって、群構成（配置）の時期と判断した。**表 4** には群構成の時期別様相を示した。

（1）群構成の事例観察

図 24（1）は吉身西遺跡(207-006)における列状配置Ａの事例である[(5)]。調査域が不連続となっているので正確な方形周溝墓の数は確定できないが、少なくとも 27 基を数える弥生中期中葉から後葉にかけての所産とみられている。群構成は明確な 2 列の列状配置Ａをとり、大きく南・北の 2 群からなる。また、周溝の共有状況や列の方向などから、報告書では北群を 4 群（1～4、5～10、11～16、17-18)、南群を 4 群（19、20～23、24、25～27）の小群（本研究でいう単位墓群）にわけている。さらに、南群や北群の中央にみられる細長い空閑地は墓道の役割を果たしたとみられている。各群での土器は 1～2 型式差をもち、比較的短期間の間に各群が造営されたものとみられている。

図 24（2）は金森東遺跡(207-062)における列状配置Ａの事例である。弥生中期後葉から後期にかけての方形周溝墓が少なくとも 34 基検出されており、墓の配置や群集状態などからＡ群からＩ群まで 9 群に大別される。また、どの群も数基からなる単位墓群で形成されていることがわかる。各群での配置状況をみると、とくに顕著な列状配置をとるものとしてＡ群（A1～A7)・Ｂ群（B1～B3)・Ｄ群（D1～D5)・Ｉ群（I1～I3）を挙げることができる。出土遺物からみて、弥生中期から後期にかけてＡ群・Ｂ群が、弥生後期前半にはＣ群・Ｇ群・Ｈ群・Ｉ群が、そして弥生後期後半になってＤ群・Ｅ群・Ｆ群が形成されたと考えられる。Ａ群・Ｂ群は周溝部を共有し明確な列状配置をもつが、時代が降ると他の群でみられるように列状ではあるものの、少し離れて存在するものがみられる。

図 24（3)は長塚遺跡(207-100)における集合配置 B1 の事例である[(6)]。長方形の調査区域に総計 16 基が検出されている。墓域としては弥生末まで続くが、その盛期は弥生中期中葉から後葉にかけてである。この墓群では重複埋葬がみられる。すなわち、個々の方形周溝墓のありかたをみると、SX13 は SX12 をおおうように、SX16 は SX14 をおおうように、そして SX1 は SX2・SX7・SX8・SX9 をおおうように造られている。これは弥生中期の墓域を再利用して、弥生後期には SX2 が、弥生末以降には SX1・SX13・SX16 が造営された

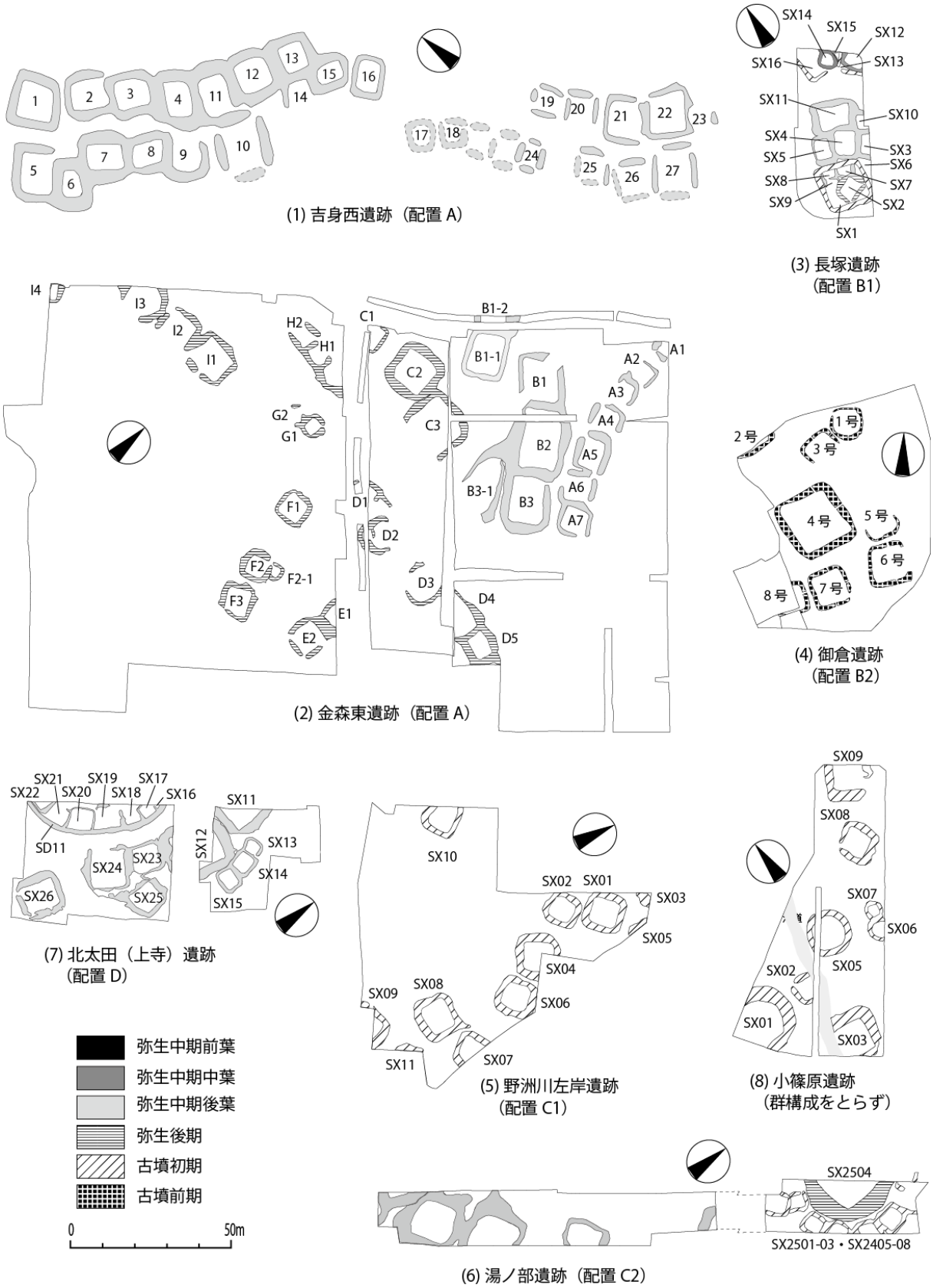


図 24 方形周溝墓の群構成事例

ものと考えられる。そこで、弥生中期の方形周溝墓のみに着目して群構成をみると、軸方位や集合状況から判断して４単位墓群（SX3～SX5、SX10・SX11、SX6～SX9、SX12・SX14・SX15）から構成され、全体の群構成としては配置 B1 をとる。

図 24（4）は御倉遺跡(206-089)における集合配置 B2 の事例である。これまでに弥生後期後半から古墳前期にかけての方形周溝墓 24 基が検出されている。平成５年の調査（2 トレンチ）では古墳前期（一部推定をふくむ）の８基が検出された。2 号～8 号周溝墓がほぼ軸方位をそろえ、この墓群で最大規模の４号周溝墓（13.6×12.6m）を核とした集合配置 B2 の群構成をとる。ここで、7 号・8 号、5 号・6 号は単位墓群とみられるが、各々隣接するものの周溝部を共有しない。なお、1 号墓は時期が不明であるが、円墳の可能性が指摘されている。

図 24（5）は十八田遺跡(343-081)（旧称：野洲川左岸遺跡）における塊状配置 C1 の事例である。平成２年の調査では古墳初期とみられる方形周溝墓が 11 基検出され、規模は 8～12m、形態はほぼ方形である。SX01～SX9・SX11 の墓群では、ほぼ２基を単位とした単位墓群を形成して長くつらなる。各墓は隣接するものの周溝部を共有せず、また軸方位が異なることから、群構成としては塊状配置（配置 C1）とみるのが妥当である。なお SX10 は別な墓群に属するものとみられる。

図 24（6）は湯ノ部遺跡(342-010)における塊状配置 C2 の事例である。南側の調査域に弥生中期後半から方形周溝墓群の形成がはじまり、弥生後期になると、北側の調査域にみられるように大規模な方形周溝墓 SX2504（長辺 15m 以上）が造られる。その後、これを取り囲むように小規模な方形周溝墓群（SX2501～SX2508）が形成されて、塊状配置 C2 の群構成をとるようになったとみられる。SX2501～SX2503、SX2405～SX2508 は単位墓群とみることができる。

図 24（7）は北太田遺跡（206-139)での弧状配置 D の事例である。ここでは弥生中期中葉から中期後葉の方形周溝墓 29 基が検出されているが、調査区域の F1・G1 トレンチでは、弧状にのびた溝 SD11 を共有して SX16～SX22 が弧状に連結した配置をとる。このような群構成はこの遺跡のみにみられる。また弥生中期後葉を中心とした墓群 SX11～SX15・SX23～SX25 では、最大規模の SX12（推定 15m）を核とした配置 C2 が観察される。

図 24（8）は小篠原遺跡(343-102)の状況である。平成９年の調査では比較的広範囲の調査がおこなわれ、古墳初期の方形周溝墓９基が検出された。規模は周溝部をふくめて約 5～20m 超、形態では３基の円形周溝墓（SX1・SX5・SX6）をふくむ。この墓域では特段の群構成はみられず散在するのみで、他の墓群を意識することなく造営されているようである。あきらかに、弥生後期の方形周溝墓の墓域の様相とは異なる。

（2）群構成の時期別様相

表 4 の群構成の時期別様相をみると、配置 A・配置 B は弥生中期中葉から弥生後期を盛期として古墳前期まで通してみられる。また、弥生中期中葉から後葉の墓群では周溝部を共有するのに対して、弥生後期以降では周溝部を共有しない傾向にある。配置 A と配置 B はともに軸をそろえて配置される墓群であり、調査域の大小を勘案すれば、本質的には同じ分類と考えるのが妥当だろう。配置 C は弥生中期後葉以降に出現頻度が高くなり、各方形周溝墓は隣接するものの周溝部を共有しない傾向にある。規模の大きな墓を核とする配

置 B2・配置 C2 は古墳初期・古墳前期にはより顕著となる。弥生後期以降の墓域では、方形周溝墓の基数は多くても明確な群構成をとらずに一定の範囲に散在する遺跡が多いようである。

第３節　方形周溝墓からみた湖南地域の社会像

前節で観察・分析した方形周溝墓の規模・形態、墓群の群構成などの様相にもとづいて湖南地域の弥生中期から古墳前期の社会像を考えていく。まず、方形周溝墓からみた当該社会の集団・階層の問題を検討し、次に時期を追って社会像を考えていきたい。

1　方形周溝墓からみた集団

（1）群構成からの考察

墓域における方形周溝墓の造営プロセスをみると、まず第 1 の方形周溝墓が造られ、第 2・第 3・・・と造られるにつれて、墓群での墓の配置がより明瞭となり、最終的には特徴をもつ群構成が形成される。このプロセスは事情により、第 1 や第 2 で終了することもある。このような群構成は造墓活動が継続された結果として偶発的にできあがった配置状態とみるより、当初から意図的に造営されてきたとみるべきであろう。先行の墓の配置を意識して次の墓を造るのである。

墓域にみられるこのような群構成が居住域（集落）での集団関係・集団構成を反映しているということは、多くの先行研究であきらかにされている（岩松 1992a・1992b、伊藤 1996 ほか）。**図 24（1）**にみた吉身西遺跡(207-006)は弥生中期中葉から後葉にいたる墓域で、墓群は大きく北群・南群にわかれるが、両群とも墓道とみられる細長い空閑地をはさんで東側・西側に列状の群構成（配置 A）をとる。伴野幸一氏は、各方形周溝墓から出土した供献土器の文様種（直線・列点・波状、それらの組み合わせなど）の使用頻度が東側・西側の墓群で異なることから、群構成に「血縁的な系譜関係をもつ居住集団相互間の共同体への帰属関係が、土器製作過程における文様構成を通して意識化され、再生産される関係を読みとることができる」と指摘している（伴野 1990）。群構成をもつ墓群は一つの集団の血縁的な系譜を反映しているということである。吉身西遺跡(207-006)の近くでは弥生中期中葉末に環濠集落を形成する下之郷遺跡が出現し、この遺跡を母村として弥生中期後葉には播磨田東遺跡(207-104)や二ノ畦横枕遺跡(207-004)へと分枝していくが（山崎 1990）、これらの集落の墓域の一つが吉身西遺跡(207-006)であったとみられる。集落のこのような分枝動向をみると、墓群にみられる土器の文様構成の特徴は婚姻を介した母村（母集団）からの分枝を反映していると考えられる。このように、特徴的な群構成をもつ墓群の被葬者は同一出自集団 (7) のメンバーで、その紐帯の強さの証として明確な群構成をとると考えられる。

（2）単位墓群からの考察

単位墓群を構成する方形周溝墓の数は墓群の大きさによって異なるが、2～5 基程度のところが多い。これらの方形周溝墓では周溝部を共有・隣接しており、一方向で隣接するものは一辺、あるいは一辺の一部を共有している。また 2 方向（3 方向）で隣接するもの

は２辺（３辺）を共有している。このような造墓方法は、単位墓群の周囲に空閑地があることから、墓域のスペースを節約しているというよりも意図的に連結させていると考えられ、単位墓群の被葬者の間に特別な関係があるとみることができる。

山崎秀二氏は吉身西遺跡(207-006)の発掘調査において、各小群（本研究でいう単位墓群）の端には隣接するが周溝部を共有しない単独の方形周溝墓が存在することに着目し、この方形周溝墓が契機となり小群が形成されると推定した上で、この小群は家族単位の墓であり、その長の墓が小群を造る契機となったと考えている（山崎 1988)。しかし、小群が短期間で造営されていることを考慮すれば、家族単位の墓というより兄弟姉妹などの同世代の親族関係（以下、キョウダイと呼ぶ）の墓とみるほうが妥当ではないか。つまり、小群（単位墓群）は累世代の墓というより同世代の墓といえるのではないか。

ところで、一つの方形周溝墓には何人くらいの人を埋葬するのであろうか。湖南地域で最大の墓域を形成する服部遺跡(207-125)では弥生中期前葉末から中期後葉にかけて約360 基にもおよぶ方形周溝墓が検出されているが、84 基において埋葬施設（主体部）が残っていた。それらのうち、複数の埋葬施設をもつものは 24 基（2 主体部；12 基、3 主体部；11 基、4 主体部；1 基）であり、他の 60 基は単数埋葬であった（第３章参照)。これまでの発掘調査において方形周溝墓の主体部が検出される（残っている）例は多くはないが、この服部遺跡(207-125)の調査結果から湖南地域の弥生中期では単数埋葬の傾向が強いといえるのではないか。また、古野洲川左岸に所在するニノ畦横枕遺跡（207-004）は弥生中期後葉後半から後期にかけての集落遺跡であるが、ここでは一時期に 1,000 人規模が集住していたとの報告がある[(8)]。したがって、単位墓群をなす方形周溝墓の被葬者が同一出自集団であるとしても、集団のメンバーすべてが方形周溝墓という墓制で埋葬されているわけではないようである。

2　方形周溝墓からみた階層

（１）規模・形態からの考察

方形周溝墓の構成要素として被葬者の階層を反映すると思われるものは、規模・形態・埋葬施設・副葬品、および墓群の群構成であろう。とりわけ、埋葬施設・副葬品については階層に関する情報量は豊富であるが、その残存状況や発掘調査事情によって十分な情報をえることは困難である。

まず、規模の視点から検討する。**表 4** のように、どの時期においても小規模な方形周溝墓が優勢を占めるが、時期が降るにつれて規模の大きいものが出現する。とりわけ、15m 以上の大規模・特大規模の墓は、弥生後期以降になるとあきらかに出現頻度が増してくるようであり、このような突出した規模の墓が同一墓群において複数基はみられないことから、この被葬者は当該墓群においてより上位階層の人物であっただろう。

次に、形態の視点から考える。弥生中期中葉以降になると、通例の方形周溝墓群の中に中畑遺跡(206-033)のようにいびつな円形状の周溝部をもつ周溝墓が出現する。弥生後期末にはいると、小篠原遺跡(343-102)のように明確な円形周溝墓に加えて前方後方形周溝墓があらわれ、墓域には通例の方形周溝墓と円形周溝墓、あるいは前方後方形周溝墓からなる景観がうまれる。とりわけ、前方後方形周溝墓（形態 C2）は相対的に規模が大きく

複雑な形態をもっており、その造墓に際しては設計力・技術力・労働力をより多く必要とし、それを実現しているという点において、通例の方形周溝墓の被葬者よりも上位階層にある。

（2）群構成からの考察

群構成の視点から階層をどのようにとらえることができるだろうか。前述のとおり、弥生中期中葉以降にみられる明瞭な群構成（配置 A）を例にして、その単位墓群はキョウダイ集団の墓と推察したが、それらの集団間での階層化は明確ではない。

これに対して、弥生中期末になると比較的大規模な方形周溝墓を核にして集合配置をとる群構成があらわれる（配置 B2・C2）。たとえば、**図 24（6）**の湯ノ部遺跡(342-010)では古墳初期になると大規模な SX2504 を取り囲むように小規模な方形周溝墓が形成される。また、後述する**図 27** の焔魔堂遺跡(207-038)では前方後方形周溝墓を核として小規模な方形周溝墓が形成されていることがわかる。このように、前方後方形周溝墓や円形周溝墓を核とする墓群を形成する集団は、他の集団との差別化をはかる手段として特異な形態を墓群の核として採用しており、より上位の階層にある集団といえるのではないか。

以上のように、方形周溝墓の諸属性のうち、規模・形態から集団内での階層化、群構成から集団間での階層化を考えた。すなわち、弥生中期中葉以降にみられる形態変化とゆるやかな大規模化から、集団内での階層化が進み、弥生後期末以降にみられる前方後方形周溝墓・円形周溝墓や大規模方形周溝墓を核とする墓群の出現は、集団間での階層化が進んでいることを反映していると考えられる。

3　方形周溝墓群からみた社会像

湖南地域では方形周溝墓は弥生中期前葉から古墳前期までみられる墓制であるが、時期によってその規模・形態・群構成などの様相にいくつかの顕著な変化がみられた。

これらの方形周溝墓群の様相の変化はその被葬者の属していた社会の変化を反映しているとみることができ、墓域の様相を分類しそれらの各様相と当該社会の発展段階とを結びつけようとする研究は早くからみられる（第１章参照）。滋賀県では、岩橋隆浩氏が湖北の墓域を対象として方形周溝墓のみならず土壙墓・木棺墓・石棺墓をふくめた墓域の様相を検討・分類しているが、「資料数の不足は否めない。そのため十分な分析を加えることが出来なかった」（岩橋 1991）と述べている。ここでは、時期を追って方形周溝墓群の様相とその変化を検討し、湖南地域の社会像を考えてみたい。

（1）墓域に方形周溝墓があらわれる段階（弥生中期前葉）

日本において最古の方形周溝墓とされる東武庫遺跡（兵庫県尼崎市）は弥生前期前葉までさかのぼる[9]。滋賀県での出現は遅れて弥生前期末となり、湖西地域北部・湖北地域において北仰西海道遺跡や塚町遺跡にあらわれる。湖南地域ではさらに遅れて弥生中期前葉に烏丸崎遺跡(206-122)や服部遺跡(207-125)などがあらわれる。

図 25 は烏丸崎遺跡(206-122)の湖岸西部地区における弥生中期前葉から後葉の状況である。弥生中期前葉から造墓活動がはじまり、数基を単位とした墓群が互いに離れて形成される。先行の墓に隣接する、あるいは周溝部を共有するように造墓が繰り返され、各墓群は拡大を続ける。しかし、中期後葉には琵琶湖の水位上昇により墓域は廃絶する。その

間、約 60 基もの方形周溝墓群が形成されるが、墓群の所在位置によって 6 群にわけられる。中期中葉までには配置 A・B1・B2 のような群構成が確認できる[10]。

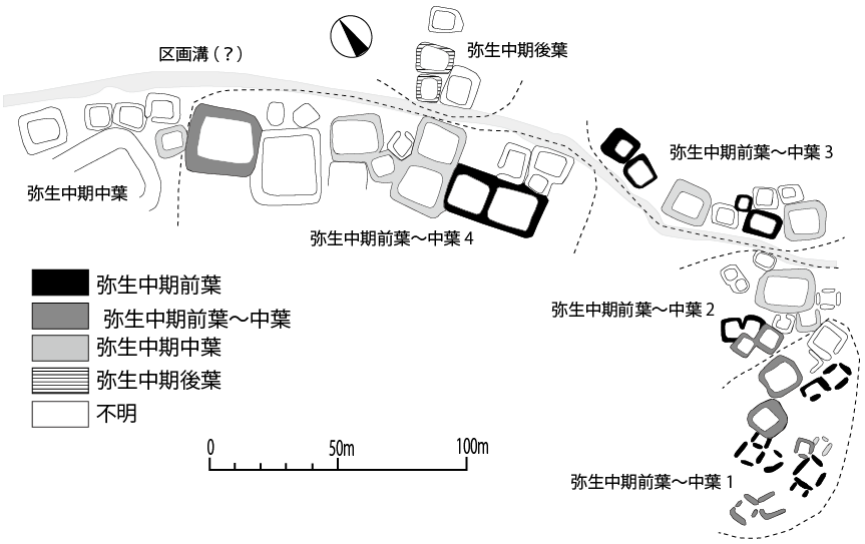


図 25 烏丸崎遺跡遺構図

図 26 は服部遺跡(207-125)の弥生中期前葉後半までの状況である（第３章参照）。約 150 基もの方形周溝墓が造られ、造墓時期や墓群状況にもとづいて 7 群にわけられる。さらに、各墓群はいくつかの小群（本研究では単位墓群とよんでいる）にわけることができ、配置 A・B1・B2 の群構成も確認できる。この後、中期中葉後半には大洪水により墓域は壊滅するが、中期中葉末から再び造墓活動がはじまり中期後葉後半の大洪水まで継続する。墓域として利用された弥生中期前葉から後葉まで総計で約 360 基が造られ、12 群の墓群からなる広大な墓域が形成される。最終時期の弥生中期後葉後半には**図 23（2）**にみられるように、円形周溝墓 M002 を核とした群構成（配置 B2）もあらわれる。

以上のように、烏丸崎遺跡(206-122)や服部遺跡(207-125)では方形周溝墓（群）の数に多寡があるものの、その受容・展開・衰退がほぼ同じ経過をたどり、各時期の方形周溝墓群の様相も似ている。このような状況が現出するのは、長期にわたりここを墓域とする多くの集団がいたからであろう。ただ、それらの集団が居住域を同じくする必要はない。これらの墓域（遺跡）が異なる居住域（集落）に住む集団の共同墓地という性格をもつと考

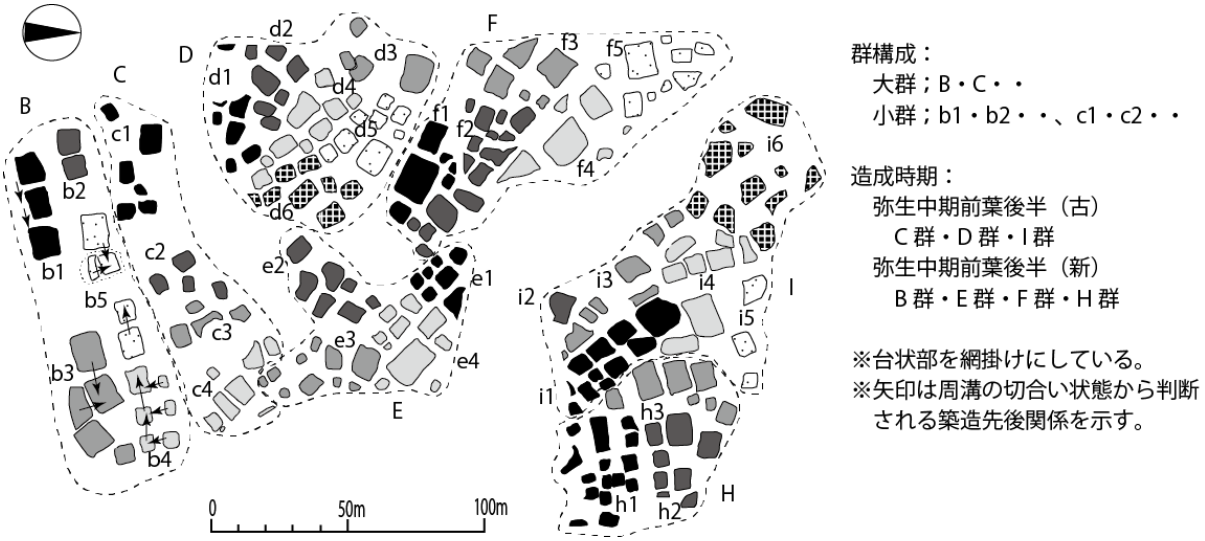


図 26 服部遺跡遺構図

えられるのである（浅井 2015）。初現期において方形周溝墓を採用した集団が、共同墓地においてそのアイデンティティを特徴的な群構成で表象しはじめたということだろう。

このように、湖南地域での方形周溝墓の様相をみると、その初現期である弥生中期前葉の段階で方形周溝墓がその社会の墓制としてひろく受容され定着しており、多くの人が方形周溝墓に埋葬される。一方、このような状況においても従来墓に埋葬される人々がいる。方形周溝墓を継続して造るには墓域の割当や調整をする能力、さらに多数の墓を造営するための大きな労働力などの点において、より多くの社会的資源を必要とすることから、方形周溝墓集団と従来墓集団との間には階層差が発生しているといえるであろう。

近畿・東海地域に集中する弥生前期の方形周溝墓遺跡の分析をとおして、その初現期においては方形周溝墓を採用するかどうかは集団が任意に選択でき、方形周溝墓を採用する被葬者と従来墓を採用する被葬者、さらには各々の属する集団の間には階層差はないと考えた（浅井 2016）。しかし、湖南地域での方形周溝墓の初現期である弥生中期の状況をみると、方形周溝墓の受け入れ態勢は地域の社会構造（集団内や集団間での階層化の進度など）に大きく影響されると考えられる。つまり、方形周溝墓を受容する時期や地域によりその様相は大きく異なるということであろう。

（2）墓域において方形周溝墓群の群構成が明確になる段階（弥生中期中葉～中期後葉）

方形周溝墓の数が急増するとともに墓域にはいくつかの墓群が形成されるが、もっとも顕著な変化として、短期的な墓域においても墓群に明確な群構成がみられることである。とりわけ、列状配置（配置 A）・集合配置（配置 B1）・塊状配置（配置 C1）は軸方位をそろえた単位墓群からなり、また弧状配置（配置 D）では円状にめぐる溝を共有する特異な群構成をとる。

墓域全域にわたり同じ配置で統一されているわけではない。このことは烏丸崎遺跡(206-122)や服部遺跡(207-125)などのように多くの方形周溝墓群からなる墓域の様相をみれば明瞭であるが、10～20 基程度からなる小比江遺跡(342-002)・湯ノ部遺跡(342-010)などの墓域においても、いくつかの種類の配置が認められる。むしろ、異なる群構成をもつ墓群からなる墓域（遺跡）の方が普遍的といえる。また、長期的に存続する墓域は必然的に多くの方形周溝墓が造られ、群構成も多様化する傾向にある。前節で検討したとおり、このような明確な群構成をもつ墓群は同一出自集団の墓、単位墓群はキョウダイ（同世代親族）の墓と考えられる。方形周溝墓という墓制が定着するなかで、明確な群構成をとることで出自集団の紐帯意識、親族・家族への帰属意識をアッピールするとともに、集団間での同列化意識から抜け出すことを意図しているともみえる。

このように、湖南地域では出自をより強く意識する集団や親族があらわれ、他の集団を差別化しようとする社会が形成されつつあるといえる。また、方形周溝墓という墓制が一般化しつつあるなかで従来墓に埋葬される集団があるということから、方形周溝墓集団と従来墓集団との間で階層化が進んでいるといえるだろう。

（3）墓域において方形周溝墓の形態が多様化する段階（弥生中期末～後期）

群構成をとる方形周溝墓群のなかに、通例のものに比していびつな形態の方形周溝墓があらわれる。まず、周溝部の形態に変化がみられ、周溝部の各辺の中央部の幅が広いもの、あるいは台状部を円形の溝で囲うもの（形態 B1）など、周溝部の形態が多様化す

る。また、周溝の形態だけでなく、台状部そのものが円形の周溝墓（形態 B2）もみられる。このような周溝部の形態変化は**図 23（1）**に示した中期中葉の中畑遺跡(206-033)にその萌芽が認められるが、弥生後期に入るとその傾向は顕著となる。また、これらの墓群では規模がやや大きいようであり、群構成でも塊状配置 C2 のように墓群で核となる方形周溝墓がみられる。

このような変化は、**図 23（3）**の八夫遺跡(342-030)において観察できる。この墓域は弥生中期末～古墳初期までの方形周溝墓で構成されているが、時期とともに規模が拡大し、古墳初期には中規模の円形周溝墓 SM9306（形態 B2）があらわれ、さらに一辺の中央部に陸橋をもつ SM9308（形態 C1）もみられる。このような形態の変化とともに群構成にも顕著な変化が認められ、墓群の中でやや大きな方形周溝墓を核として塊状配置 C2 をとる。これは形態の異なる方形周溝墓をふくむ墓群が他の集団とは差別化された有力な出自集団の墓であること、そして形態の異なる方形周溝墓や墓群の核となる大規模な方形周溝墓の被葬者はキョウダイの中でも、より「有力な人」とみることができるだろう。

方形周溝墓の基数がピークに達し、また形態・群構成が多様化する弥生中期末～後期は、湖南地域では方形周溝墓の規模・形態や群構成によって集団の出自や階層が明示される、いわば方形周溝墓社会とでもよべる社会が現出している。

（4）墓域において前方後方形周溝墓が出現する段階（弥生後期末～古墳前期）

形態が円形周溝墓に変化するのに加え、前方後方形周溝墓（形態 C1・形態 C2）が出現する。とくに、形態 C2 の前方後方形周溝墓は後の前方後方墳と同じ形態のものであるが、墳丘・葺石・埴輪などをともなわないなど、古墳としての定義を満たさないことから前方後方形周溝墓とよばれる[11]。この特異な前方後方形周溝墓は弥生後期末から古墳前期の一時期にみられる形態で、湖南地域では経田遺跡(207-001)・益須寺遺跡(207-018)・焔魔堂遺跡(207-038)・塚之越遺跡(207-053)・播磨田東遺跡(207-104)などで 10 数基が確認されている。

ここでは**図 27** の経田遺跡(207-001)・焔魔堂遺跡(207-038)を事例とし、その形態変化と被葬者、そしてその社会背景を考えてみたい。これらの遺跡は古野洲川と考えられている境川流域の左岸域にあり、**図 27（1）**のように約 500ｍの距離を隔てているが、当時は同じ生活空間にあったものと考えてよいであろう。縄文後期以来の痕跡があるが、その盛期は弥生中期から古墳前期までとみられ、弥生中期～後期にかけての集落（居住域）と墓域、古墳前期の集落と墓域が検出されている。一部の地域では弥生後期の竪穴建物を壊して古墳前期の方形周溝墓が造られている。方形周溝墓の造墓時期としては大きく 3 時期にわかれ、弥生中期中葉（1 基）、弥生後期（4 基）、弥生後期末～古墳前期（29 基）である。これらはトレンチ調査により検出された地域もふくむので、実際の方形周溝墓の数はこの数倍にもおよぶとみるべきであろう。**図 27（2）**は経田遺跡(207-001)の第 2・3・6・7 次調査の遺構図である。時期的には弥生後期（SX4・SX8）、古墳初期（SX6・SX7・SX11・SX12）、古墳前期（SX1～SX3・SX5・SX9・SX10）に分かれる。古墳初期には周溝の一辺に陸橋部を設ける形態 C1（SX11・SX12）がみられ、群構成も軸方位をそろえた集合配置 B1 をとる。古墳前期には前方後方形の台状部を溝が囲う形態 C2（SX3）があらわれる。どちらの時期においても通例の方形周溝墓が併存しているが、古墳前期になると個々

の方形周溝墓の規模が大きくなり、明確な群構成をとらないようである。**図 27（3）**は焔魔堂遺跡(207-038)の第 4 次調査の遺構図である。時期的には古墳初期（SX1～SX10）、古墳前期（SX11～SX13・SX15）にわかれる（SX14 は不明）。古墳初期では小規模な墓群が塊状配置 C1 をとる。古墳前期では規模が大きくなり、形態 C2 の前方後方形周溝墓（SX15）[12] が出現するが、通例の方形周溝墓（SX11～SX13）も存在する。これらの方形周溝墓は軸方位をそろえるが明確な群構成をとらない。

以上、同じ生活空間にあるとみられる二つの遺跡の検討から、古墳前期には他の方形周溝墓群に束縛されることなく、前方後方形周溝墓（形態 C2）を中心に大規模な方形周溝墓からなる墓群が形成されるが、明確な群構成をとらない。これは出自集団への帰属意識が薄くなり、前方後方形周溝墓という特異な形態そのものに被葬者個人を顕示するモニュメントの役割が付与されているといえるのではないか。先にみた有力な出自集団という枠組から被葬者個人が析出し、「特別な人」となったということだろう。**図 27（1）**にみる地域では二人の「特別な人」が析出したといえる。湖南地域では前方後方形周溝墓は野洲川左岸の扇状地端に沿うように一定の距離をおいて点在し、有力集団から析出した「特別な人」の墓を核とする墓群が形成されていることをうかがわせる。当然、この「特別な人」はその出自集団においても、その地域においても自他ともに認める最上位階層、すな

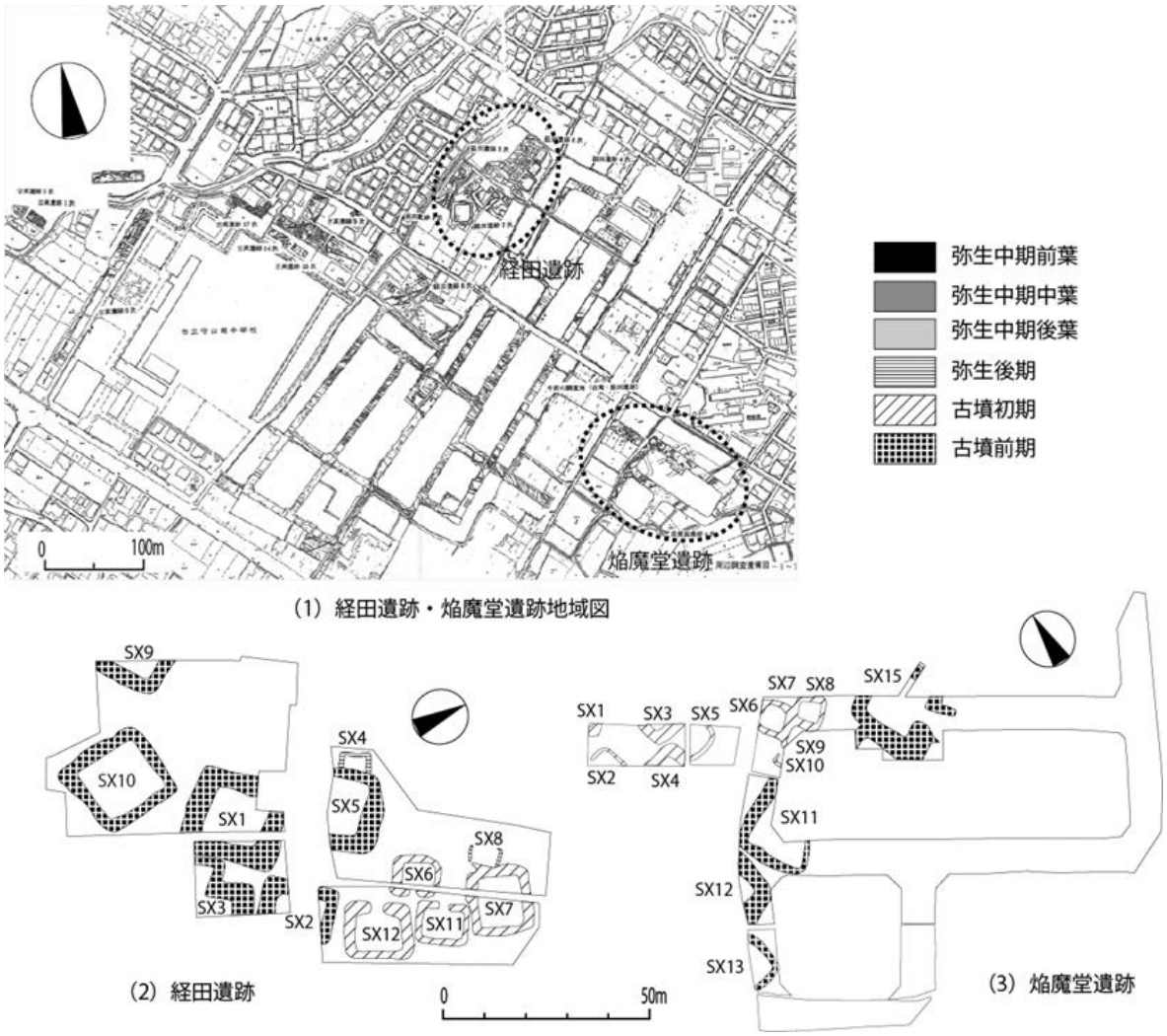


図 27 経田遺跡・焔魔堂遺跡遺構図

わち湖南地域における「小地域」の首長といえるのではないか[13]。さらに、この時期においては方形周溝墓の基数が激減していることから、方形周溝墓という墓制そのものに希少価値がある。つまり、有力集団以外では方形周溝墓という墓制を採用することができない社会に変貌しているのではないか。

おわりに

湖南地域の方形周溝墓の集成・分析をとおして当時の社会像を検討した。方形周溝墓という墓制からみると社会の変遷は 4 段階に分かれると考えられる。この変遷は、当然、近江内外の他の地域との交流によってできあがったものであるが、それは後章で論じる。

【註】

(1) 地形分類図・旧河道分布図は下記文献より引用し、そこに遺跡をプロットした。
辰巳勝 1988「野洲川河流の地形および地質・土壌の概要」『昭和 62 年度中主町遺跡分布調査（Ⅱ）概要報告書』中主町教育委員会

(2) 遺跡番号は滋賀県教育委員会『滋賀県遺跡地図』2011 年版に準拠した。

(3) 服部遺跡では 358 基にもおよぶ方形周溝墓が検出されており（第 3 章参照)、本文中で基数の多寡を論じる場合には、服部遺跡のデータを併記する。

(4) 下記の報告書によれば、襖遺跡(206-090)では 24 基の方形周溝墓が検出され、少なくなくとも 8 基の造墓時期が古墳中期から後期と報告されている。この時期まで降る方形周溝墓は少ないが、方形周溝墓の終焉に関する事例として貴重な資料と考えられる。しかし、その性格を論じるには当該期の古墳との比較検討も必要であり、本研究ではその準備ができていないので、古墳前期までの方形周溝墓を主として論じることにする。
草津市教育委員会 2000『襖遺跡発掘調査報告書 1　昭和 63 年度・平成 3 年度・平成 8 年度調査分』(『草津市文化財調査報告書』37)

(5) 関連報告書により、一部（SX17・SX18 など）の配置が異なるが、ここでは下記の報告書によった。
守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター1988『吉身西遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 32 冊)

(6) この資料は下記の報告書の小島遺跡のものである。長塚遺跡の範囲内にあるため、1983 年に長塚遺跡と名称変更されている。
守山市教育委員会・守山市埋蔵文化財センター1983『守山市文化財調査報告書』第 8 冊

(7) 出自集団にはリネージとクランの 2 種類の集団がある。リネージは成員間の系譜関係が相互に明確な出自集団、クランは成員の系譜関係が明確ではないが同一始祖をもつと信じられている人々の集団（氏族と同義)。クランはリネージより大きな集団を指すと考えられるが、ここではこれらを使いわけない。

(8) 伴野幸一氏によれば、「集落の継続期間は土器型式で 3 小期が想定され、同一時期に存在していた住居は 300～400 棟前後と推定される」とした上で、「一時期の人口は千

人をゆうに超えるもの」と考えている。

伴野幸一 1995「滋賀県ニノ畦横枕遺跡と伊勢遺跡」『季刊考古学』第 51 号　雄山閣

(9) 兵庫県教育委員会 1995『東武庫遺跡』では、最古の方形周溝墓の時期を「近畿第一様式古段階（弥生前期前葉)」と報告されているが、判定の資料が十分ではないとして近畿第一様式中段階（弥生前期中葉）とする意見もある。

中村弘 1998「近畿地方における方形周溝墓の出現」『考古学論集』上巻　網干善教先生古希記念会

(10) 小竹森直子氏は下記調査報告書において、中期前葉から中葉に造営される小 1 群・2 群・3 群・4 群のうち、「小 4 群は玉類の副葬品を伴うものをふくむ大規模方形周溝墓で構成されており、小群間の格差が存在している」と指摘している。

小竹森直子 2008『烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』(『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財調査報告書』9) 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会

(11) 植田文雄氏は、庄内式併行期（紀元 200 年頃）からみられる前方後方形周溝墓を出現期の前方後方墳ととらえ、前方部長や墳丘高により形態分類をおこない、前方後方墳を中心とする社会を論じている。

植田文雄 2007『「前方後方墳」出現社会の研究』学生社

(12) 溝は全周しないが、陸橋部が発達しているので形態 C2 と判定した。

(13) 禰宜田佳男氏（2011）は、階層社会を考えるうえで必要な用語を次のように定義している。

単独で集落を構成することができるまとまりを「集団」(＝世帯共同体)、集団が複数結合して形成される集落を「拠点集落」、拠点集落とそれを核として衛星的に存在する集団をあわせたまとまりを「核地域」、さらに核地域が一つの河川流域等を通してできるまとまりを「小地域」(＝農業共同体)、そして小地域が平野等によって形成されたまとまりを「大地域」(＝部族共同体）とする。首長とはこれらの地域をそれぞれ統括する人物として重層的に存在し、階層社会とはこれらの首長間で格差が認識できる状態をいう。

【参考文献】

浅井良英 2015「弥生時代中期社会の一様相－滋賀県守山市服部遺跡の方形周溝墓群の分析を通して－」『淡海文化財論叢』第七輯　淡海文化財論叢刊行会

浅井良英 2016「方形周溝墓からみた弥生時代前期社会の様相－近畿・東海地域を中心として－」『人間文化』第 40 号　滋賀県立大学人間文化学部

池田碩・大橋健・植村善博・吉越昭 1979「近江盆地の地形」『滋賀県の自然』滋賀県自然環境研究会

伊藤敏行 1996「群構成論」『関東の方形周溝墓』同成社

岩橋隆浩 1991「墓地からみた弥生社会の変質過程」『紀要』第 4 号　滋賀県文化財保護協会

岩松保 1992a「墓域の中の集団構成（前編）－近畿地方の周溝墓群の分析を通じて－」『京都府埋蔵文化財情報』第 44 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

岩松保 1992b「墓域の中の集団構成（後編）－近畿地方の周溝墓群の分析を通じて－」『京都府埋蔵文化財情報』第 45 号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

辰巳勝 1988「野洲川下流の地形および地質・土壌の概要」『昭和 62 年度中主町遺跡分布調査（Ⅱ）概要報告書』中主町教育委員会

禰宜田佳男 2011「墓地の構造と階層社会の成立」『弥生時代（下)』(『講座日本の考古学』6）青木書店

伴野幸一 1990「弥生土器文様の地域構造」『二ノ畦・横枕遺跡発掘調査報告書　益須寺遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 38 冊）守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター

守山市史編纂委員会 1974『守山市史』上巻

山崎秀二 1988『吉身西遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 32 冊）守山市教育委員会・守山市埋蔵文化財センター

山崎秀二 1990「野洲川流域遺跡群の構造」『二ノ畦横枕遺跡発掘調査報告書・益須寺遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 38 冊）守山市教育委員・守山市埋蔵文化財センター

【発掘調査報告書】　湖南地域

報告書の題名が発行機関・年度により統一されていないが、原書通りの題名表記とした。方形周溝墓の遺構図は当該報告書に記載された図をトレース、あるいは記述にもとづいて筆者が一部を改変し作成したものである。

【あ】

穴太遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1994『一般国道 161 号（西大津バイパス）建設に伴う　穴太遺跡発掘調査報告書 I』

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1995『一般国道 161 号（西大津バイパス）建設に伴う　穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1997『一般国道 161 号（西大津バイパス）建設に伴う　穴太遺跡発掘調査報告書Ⅲ』）

焔魔堂遺跡

・守山市教育委員会 2005『焔魔堂遺跡　第 4 次発掘調査概要報告書』

・守山市教育委員会 2006『焔魔堂遺跡　第 5 次発掘調査概要報告書』

・守山市教育委員会 2006『焔魔堂遺跡　第 6 次発掘調査概要報告書』

【か】

金森東遺跡

・守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター1984『金森東発掘調査報告書』

・守山市教育委員会 1987『金森東遺跡発掘調査報告書』（『守山市文化財調査報告書』第 25 冊）

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1988『県立守山高校屋内運動場増築に伴う金森遺跡発掘調査報告書』

・守山市教育委員会 2005『金森東遺跡第 30 次　金森遺跡第 2 次発掘調査概要報告書』

・守山市教育委員会 2007『金森東遺跡第 43 次　発掘調査報告書』

烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1996『烏丸半島基盤整備に伴う烏丸崎遺跡発掘調査報告書』

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2008『烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』（『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財調査報告書』9）

北太田遺跡（上寺遺跡）

・草津市教育委員会 1986『上寺遺跡発掘調査概要報告書』（『草津市埋蔵文化財調査報告書』10）

小比江遺跡

・滋賀県文化財保護協会 1991『滋賀文化財だより』No156

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1994『小比江遺跡・大田遺跡』

小篠原遺跡

・野洲町教育委員会 1997『1997 年度　野洲町埋蔵文化財調査報告書』

・野洲町教育委員会 1998『平成 9 年度　野洲町内遺跡発掘調査概要』
・野洲町教育委員会 2005『小篠原遺跡発掘調査報告書』
・滋賀県野洲市教育委員会 2012『平成 23 年度　野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』

【さ】

坂口遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2000『坂口遺跡発掘調査報告書』

酒寺遺跡

・守山市教育委員会 1994『守山市文化財調査報告書　平成 5 年度国庫補助対象遺跡』
・守山市教育委員会 1995『守山市文化財調査報告書　平成 6 年度国庫補助対象遺跡』

十八田遺跡（野洲川左岸遺跡）

・野洲町教育委員会 1991『野洲川左岸遺跡発掘調査報告』3

滋賀里遺跡

・大津市教育委員会 2017『滋賀里遺跡発掘調査報告書Ⅵ』(『大津市埋蔵文化財調査報告書』(110))

寺中遺跡

・守山市教育委員会 1982『寺中遺跡他』(『守山市文化財調査報告書』第 11 冊)
・守山市教育委員会 1986『守山市文化財調査報告書』
・守山市教育委員会 1994『守山市文化財調査報告書　平成 5 年度国庫補助対象遺跡』
・守山市教育委員会 2010『守山市文化財調査報告書　平成 20 年度国庫補助対象遺跡』

【た】

塚之越遺跡

・守山市教育委員会 1995『乙貞』第 82 号

【な】

長塚遺跡（小島遺跡）

・守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター1983『守山市文化財調査報告書』第 8 冊

中畑遺跡

・滋賀県教育委員会 2002『中畑遺跡Ⅰ』

【は】

服部遺跡

・滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
・滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

播磨田東遺跡

・守山市教育委員会 1984『播磨田東遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 13 冊)
・守山市教育委員会 1997『乙貞』第 93 号
・守山市教育委員会 2010『播磨田東遺跡第 17 次発掘調査報告書』

弘前遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2008『弘前遺跡Ⅰ』

襖遺跡

・草津市教育委員会 1996『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書（Ⅹ）』(『草津市文化財調査報告書』27)

・草津市教育委員会 2000『草津川放水路関連　襖遺跡発掘調査報告書Ⅰ（昭和 63 年度・平成 3 年度・平成 8 年度調査分)』(『草津市文化財調査報告書』37)

・草津市教育委員会 2005『草津川放水路関連遺跡発掘調査概要報告書 6　襖遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(『草津市文化財調査報告書』56)

古高遺跡・経田遺跡

・守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター1988『守山市文化財調査報告書　古高遺跡発掘調査報告書』

・守山市教育委員会 1992『守山市文化財調査報告書』第 44 冊

・守山市教育委員会 1990『経田遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 36 冊)

・守山市教育委員会 1994『古高遺跡第 7 次発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 52 冊)

・守山市教育委員会 2005『古高遺跡・経田遺跡発掘調査概要報告書』

・守山市教育委員会 2005『古高遺跡・経田遺跡　今宿・古高土地区画整理区域の遺跡調査』

綣遺跡

・滋賀県文化財保護協会 1998『滋賀文化財だより』No243

・栗東市文化体育振興事業団 1989『埋蔵文化財発掘調査　昭和 63 年度年報』

・栗東市文化体育振興事業団 1990『埋蔵文化財発掘調査　1990 年度年報』

・栗東市教育委員会・栗東市文化体育振興事業団 2008『綣遺跡発掘調査報告書』(『栗東市文化財調査報告書』第 7 冊)

【ま】

御倉遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1997『御倉遺跡発掘調査報告書』(『草津川改修事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ』)

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2004『御倉遺跡Ⅱ』(『草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報書Ⅵ』)

南滋賀遺跡

・大津市教育委員会 1959『大津市南滋賀遺跡調査概報』

・大津市教育委員会 1998『南滋賀遺跡発掘調査報告書』(『大津市埋蔵文化財調査報告書』(28))

【や】

益須寺遺跡

・守山市教育委員会 1988『乙貞』第 41 号

八夫遺跡

・中主町教育委員会 1992『中主町文化財調査報告書』第 35 集

・中主町教育委員会 1994『中主町文化財調査報告書』第 41 集

・中主町教育委員会 2000『八夫遺跡第 9 次発掘調査報告書』(『中主町文化財調査報告書』第 59 集)

・中主町教育委員会 2003『中主町文化財調査報告書』第 64 集

・中主町教育委員会 2004『中主町文化財調査報告書』第 70 集

湯ノ部遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1995『湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1997『湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1998『湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1999『湯ノ部遺跡Ⅳ・西河原宮ノ内Ⅰ』

吉身西遺跡

・守山市教育委員会 1986『吉身西遺跡発掘調査報告・吉身北遺跡発掘調査報告・吉身南遺跡発掘調査報告』

・守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター1988『吉身西遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 32 冊)

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2000『県立病院施設整備事業に伴う発掘調査報告書　吉身西遺跡』

第５章　近江の方形周溝墓Ⅲ（湖東・湖北・湖西地域）

はじめに

ここでは湖東地域・湖北地域・湖西地域の方形周溝墓を集成・分析する。各地域の地形分類や遺跡の詳細は各節で述べる。また、方形周溝墓の規模・形態・群構成の諸様相と集団・階層などの社会構造との関連は、第４章の考察でえられた結果を援用して分析を進めていく。

第１節　湖東地域の方形周溝墓の様相

この地域には日野川・愛知川・宇曽川・犬上川・芹川などが造る扇状地がひろがり、湖東平野ともよばれる地域である（**図 28**）。地形分類の面からは複雑な様相を示しており、湖岸に入り組んだ内湖や、中生代末期の火山活動によって生じた断層による孤立峰が散在する。

1　湖東地域の方形周溝墓の概観

湖東地域に所在する方形周溝墓の集成表を**表 5** に、その所在位置を**図 28** に示す。**表 5**・**図 28** の遺跡番号は共通で、遺跡名のあとの数字は遺跡番号を示す。**表 5** の集成表には造墓時期ごとに規模・形態・群構成を記載し、**表 6** には**表 5** をもとにして規模・形態・群構成の時期別様相をまとめた。

この地域における方形周溝墓の分布は、**図 28** のように河川の流域、内湖や低湿地帯周辺に多く分布する。ただ、散在する孤立峰によって河川の流路が規制され、上・中流域でも小規模な扇状地が形成されており、そこに人々の居住域があり方形周溝墓群が形成されている（野辺遺跡（383-031）・内池遺跡（383-036）など）。

表 5 から、湖東地域において方形周溝墓遺跡は 31 ヶ所、方形周溝墓の総数は 216 基を数える。各調査区域外への分布のひろがりを考えると、この数は大幅に増えるであろう。検出状況により造墓時期が不明なものも多いが、時期が判定・推定されたものをみると、**表 6** のように弥生中期中葉で 26 基、中期後葉で 120 基、後期で 42 基、古墳初期で 16 基となる。この地域では方形周溝墓の初現が弥生中期中葉であり、他の地域に比べてやや遅い。

さらに、**表 5** よりどの遺跡も墓域としての土地利用が短期間であるといえる。また、方形周溝墓基数も弥生中期後葉に突出しており、その前後の時期には基数は少ないことが特筆される。

表 5　湖東地域の方形周溝墓集成（1/3）

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形　態					群構成						遺物	備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D		
202	12	品井戸	滋賀県	彦根市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内		2				2	2				2								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
202	15	福満	滋賀県	彦根市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内	3					3	3				3								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
202	44	下沢	滋賀県	彦根市	Ⅱ						0					0								1次調査
					Ⅲ						0					0								SZ01 埋葬施設有
					Ⅳ						0					0								SZ02 周溝内埋葬
					Ⅴ						0					0								３基とも同軸・共有せず
					庄内	3					3	3				3								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
202	123	神ノ木	滋賀県	彦根市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内	1				1	2	2				2								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
202	131	掘南	滋賀県	彦根市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内	3					3	3				3								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
204	99	馬場前	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	7	2			2	11	11				11				1				Ⅳ末～Ⅴ初
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
204	115	森ノ前	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	1					1	1				1								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
204	120	馬淵	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								千僧供廃寺
	122	勧学院			Ⅲ	16					16	16				16								2次調査（隅切れ優勢）
					Ⅳ-Ⅴ	24	3	1			28	27		1		28			1	1				4次・5次調査区域
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
204	187	寒藪	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								
	189	川ノ口	滋賀県	近江八幡	Ⅲ						0					0								
					Ⅳ-Ⅴ	15	5	2		5	27	23	2		2	27		1			1			対辺周溝に中央陸橋
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
204	194	鷹飼	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								第8次調査
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ					3	3	3				3								
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
204	206	高木	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								
		（浅小井）			Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	6	2				8	8				8								
					Ⅴ				1		1			1		1								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明	1					1	1				1								
381	14	小中	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内	3					3	3				3								
					布留						0					0								
					不明						0					0								

規模（台状部辺）：　小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　　群構成：　A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表５　湖東地域の方形周溝墓集成（2/3）

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形　態					群構成						遺物	備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D		
381	27	大中の湖	滋賀県	近江八幡	Ⅱ						0					0								矢板・杭列・4水田遺構
					Ⅲ	3					3	3				3								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
205	15	五反田	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ	3					3	3				3								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
205	22	内堀	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ	2				1	3	3				3								
					Ⅳ	1	1				2	2				2		1						
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明	1				2	3	3				3								
205	66	日吉	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
		（上日吉）			Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	1					1	1				1								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
382	28	野瀬	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
				（蒲生）	Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	9					9	9				9								
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
382	37	市子	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
				（蒲生）	Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	7	10			9	26	26				26		1						細いトレンチ調査
					Ⅴ			1		8	9	9				9								のため全貌は不明
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明	2	1			2	5	5				5								
402	73	簗瀬	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	1	1				2	2				2								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
403	12	柿堂	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								対辺周溝に中央陸橋
					Ⅴ		5				5	5				5								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
403	13	今安楽寺	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ					1	1	1				1								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
403	26	殿衛	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
				（能登川）	Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	4				3	7	5			2	7								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
403	34	信願寺	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ					4	4	4				4								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
403	76	法堂寺	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
				（能登川）	Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ		2				2	2				2								6次調査
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								

規模（台状部辺）：　小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　　群構成：　A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 5　湖東地域の方形周溝墓集成（3/3）

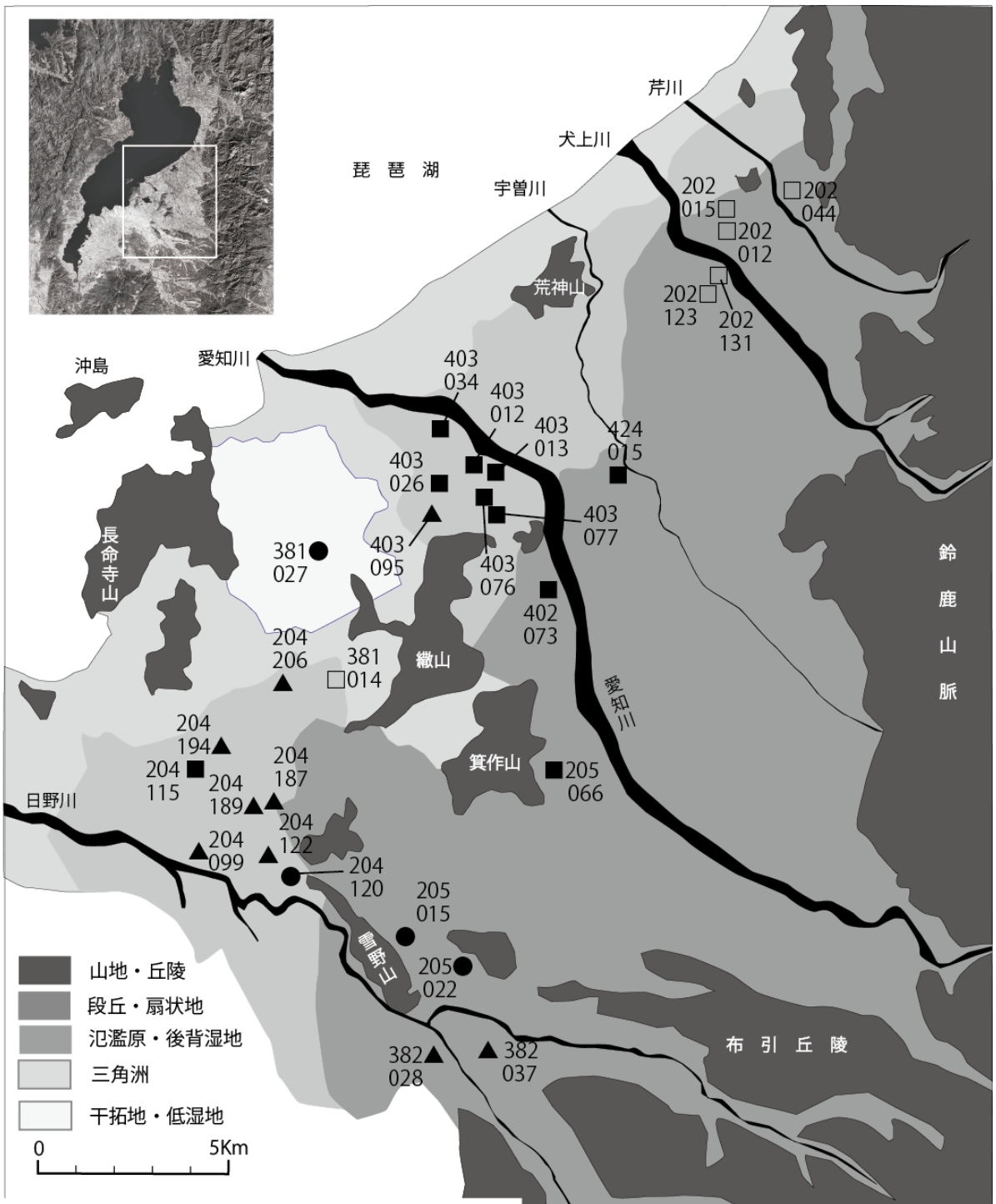
遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形　態					群構成						遺物	備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D		
403	77	中沢	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	2				1	3	3				3								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
403	95	西浦	滋賀県	東近江	Ⅱ						0					0								対辺周溝に中央陸橋
				（能登川）	Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	1					1	1				1								
					Ⅴ	3					3	3				3								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
383	31	野辺	滋賀県	日野	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ	1					1	1				1								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明	1				2	3	3				3								
383	36	内池	滋賀県	日野	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	5					5	5				5		1						周溝部を隣接　集合
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
424	15	なまず	滋賀県	愛荘町	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	2				1	3	3				3								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								

規模（台状部辺）：　小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　　群構成：　A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 6　湖東地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相

			方形周溝墓の規模（基数）				方形周溝墓の形態（基数）				群構成の配置状態（遺跡数）					
							方形	円形	前後	不定	列状	集合		塊状		その他
		土器編年	小	中	大	特大	A	B	C		A	B1	B2	C1	C2	D
弥生前期		Ⅰ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生中期	前葉	Ⅱ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生中期	中葉	Ⅲ	25	0	0	0	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生中期	後葉	Ⅳ	75	23	3	0	115	2	1	2	0	4	1	2	1	0
弥生後期		Ⅴ	14	8	1	1	39	0	1	2	0	0	0	0	0	0
古墳初期		庄内	13	2	0	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0
古墳前期		布留	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

規模（台状部辺）：　小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　　形態：前後＝前方後方形



【彦根市】　202-012 品井戸　202-015 福満
202-044 下沢　202-123 神ノ木　202-131 堀南
【近江八幡市】　204-099 馬場前　204-115 森ノ前
204-120 馬淵　204-122 勧学院　204-187 寒藪
204-189 川ノ口　204-194 鷹飼　204-206 高木（浅小井）
381-014 小中　381-027 大中の湖
【東近江市】　205-015 五反田　205-022 内堀
205-066 日吉　382-037 市子　382-028 野瀬
402-073 簗瀬　403-012 柿堂　403-013 今安楽寺　403-026 殿衛　403-034 信願寺　403-076 法堂寺
403-077 中沢　403-095 西浦　【日野町】383-031 野辺　383-036 内池　【愛荘町】 424-015 なまず
【各遺跡における方形周溝墓の初現期】
★弥生前期 ◆弥生中期前葉　●弥生中期中葉 ▲弥生中期後葉　■弥生後期　□古墳初期　○古墳中期

図 28　湖東地域の方形周溝墓遺跡分布

2　方形周溝墓の規模・形態

方形周溝墓の規模は**表 6** に示すようにどの時期も小規模が優勢であるが、弥生中期後葉から中規模･大規模な墓が頻出する。ただ、方形周溝墓の規模は時期的な変化よりも、墓群（墓域）内での大小により重要な意味をもつと考えられるので、各事例を観察する中で詳述していく。

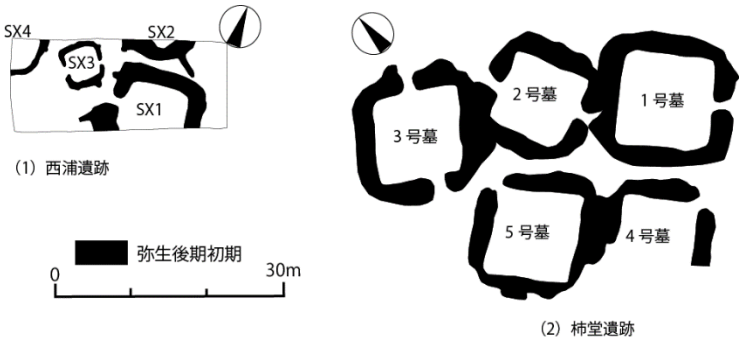


図 29　方形周溝墓の形態事例

方形周溝墓の形態は、湖東地域では通例の方形周溝墓のほかに、弥生中期後葉になると周溝部と台状部がともに円形の円形周溝墓（形態 B2)、台状部が前方後方形を示す前方後方形周溝墓（形態 C1・C2）がみられる。さらに、弥生後期には通例の方形周溝墓の対向する 2 辺の中央部に陸橋をもつもの（形態 A2c）があらわれる。**図 29** はその事例で、西浦遺跡（403-095）では SX3、柿堂遺跡（403-012）では 1 号～3 号墓が形態 A2c を示す。これは湖東地域における周溝部の特徴としてあげることができる。また、円形周溝墓（形態 B2）としては川ノ口遺跡（204-189）の円形周溝墓 6 号･9 号など、前方後方形周溝墓（形態 C1）では勧学院遺跡（204-122）の 4 次調査での SX2、さらに定型化した前方後方形周溝墓（形態 C2）として高木（浅小井）遺跡（204-206）の SX01 がある。これらの遺跡については後節で詳細に検討する。

3　方形周溝墓群の事例観察

遺存状況のよい遺跡（墓群）を事例として、時期を追って墓域での墓群の形成過程、および形態や群構成を検討する。

（1）内堀遺跡（205-022）**図 30**

弥生中期中葉～弥生中期後葉

湖東地域での方形周溝墓の初現は弥生中期中葉であり、他の地域と比べてやや遅い。この内堀遺跡（205-022)は弥生中期中葉から中期後葉まで短期間であるが、墓域として機能する。墓群は占地状況や軸方位から 2 小群（1 号～3 号、4 号～7 号）にわかれ、各小群は各々ほぼ同じ規模から構成され、同一軸方位をもった集合配置（配置 B1）をとる。また、周溝部を共有・隣接する様相なども共通しており、各小群に対応する集団内・

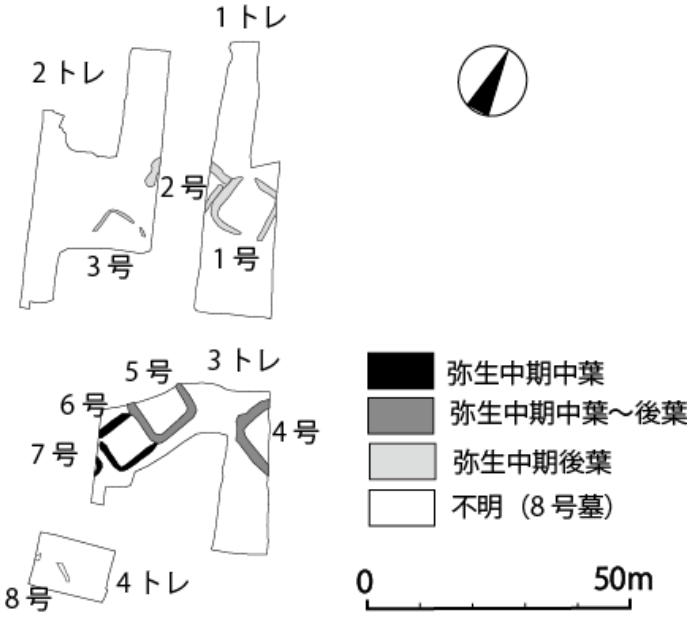


図 30　内堀遺跡遺構図

集団間において格差はみられない。

（2）高木（浅小井）遺跡（204-206）**図 31**　弥生中期後葉～弥生後期中葉

この遺跡では弥生中期後葉に方形周溝墓群が形成されるが、その後の造墓活動が途絶え、後期中葉になって前方後方形周溝墓が出現する。

図 31 に墓域の変遷を示した。弥生中期後半にはこの地が墓域として利用される。トレンチ T28 と T30 をよぎる溝 SD30 は幅 3.2m・深さ 1.2m で断面 V 字形を呈し、T29 の方形周溝墓群と T30・T31 の土壙群とを区画する溝と考えられている[(1)]。方形周溝墓群では 2 小群（南群：SX02・05・06・08・09、北群 SX03・04・07）が形成されており、二つの集団の存在がうかがえるが、とくに南群では構成する 5 基すべてが周溝部を共有し、群中で最大規模の SX06 を核とした集合配置（配置 B2）をとる。一方、土壙群では骨片などをふくむものが 20 基ほどあり、土壙墓の可能性が高い。すなわち、墓域において方形周溝墓群と土壙墓群が明確に区画されている。

弥生後期中葉には先行の土壙群を切って、定型化した前方後方形周溝墓 SX01 が造墓される。規模は全長 35m・幅 25m・周溝幅約 5m の特大規模の周溝墓である。さらに、溝 SD31 と SD38 は幅 2m・深さ 0.25ｍで、SX01 をめぐる一連の溝と考えられている。この溝は先行の方形周溝墓群を避けて造墓されている点が特筆される。

湖東・湖北地域では前方後方形周溝墓（形態 C2）として長浜市・法勝寺遺跡（464-002）SDX23 が著名であり（後出）、高木（浅小井）遺跡（204-206）SX01 と比較検討すると、造墓時期はともに弥生後期中葉～後葉、規模では法勝寺 SDX23 が全長 22m、高木 SX01 は全長 35m を測り、規模差が大きい。次に、墓域における各々のあり様をみると、法勝寺 SDX23 の場合には一群の方形周溝墓群の中に配置され、その中での核として群構成を形成している（配置 C2）。高木 SX01 は単独で存在し、周囲には溝をめぐらせて他の方形周溝墓群とは明確に区分けしている。このように、方形周溝墓の隔絶した規模、墓域におけるそのあり様から、この高木 SX01 の被葬者は、周囲の方形周溝墓集団からあきらかに析出された個人であると想定できる。

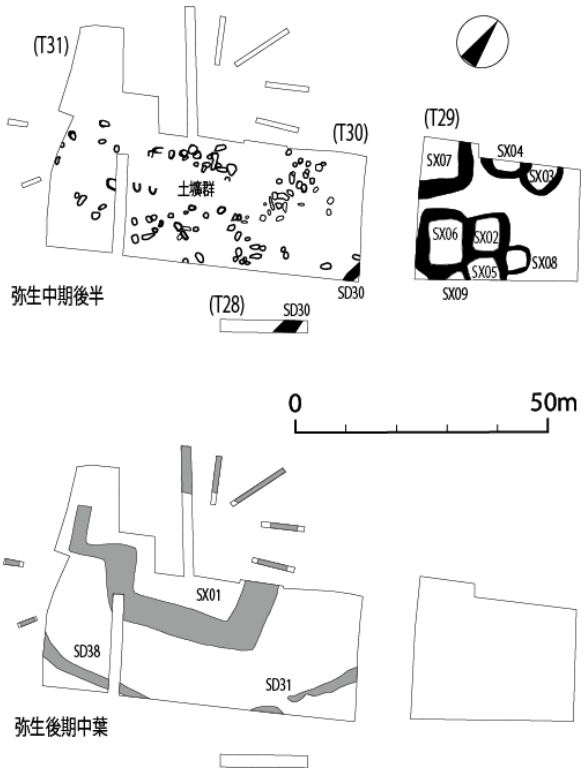


図 31　高木（浅小井）遺跡変遷図

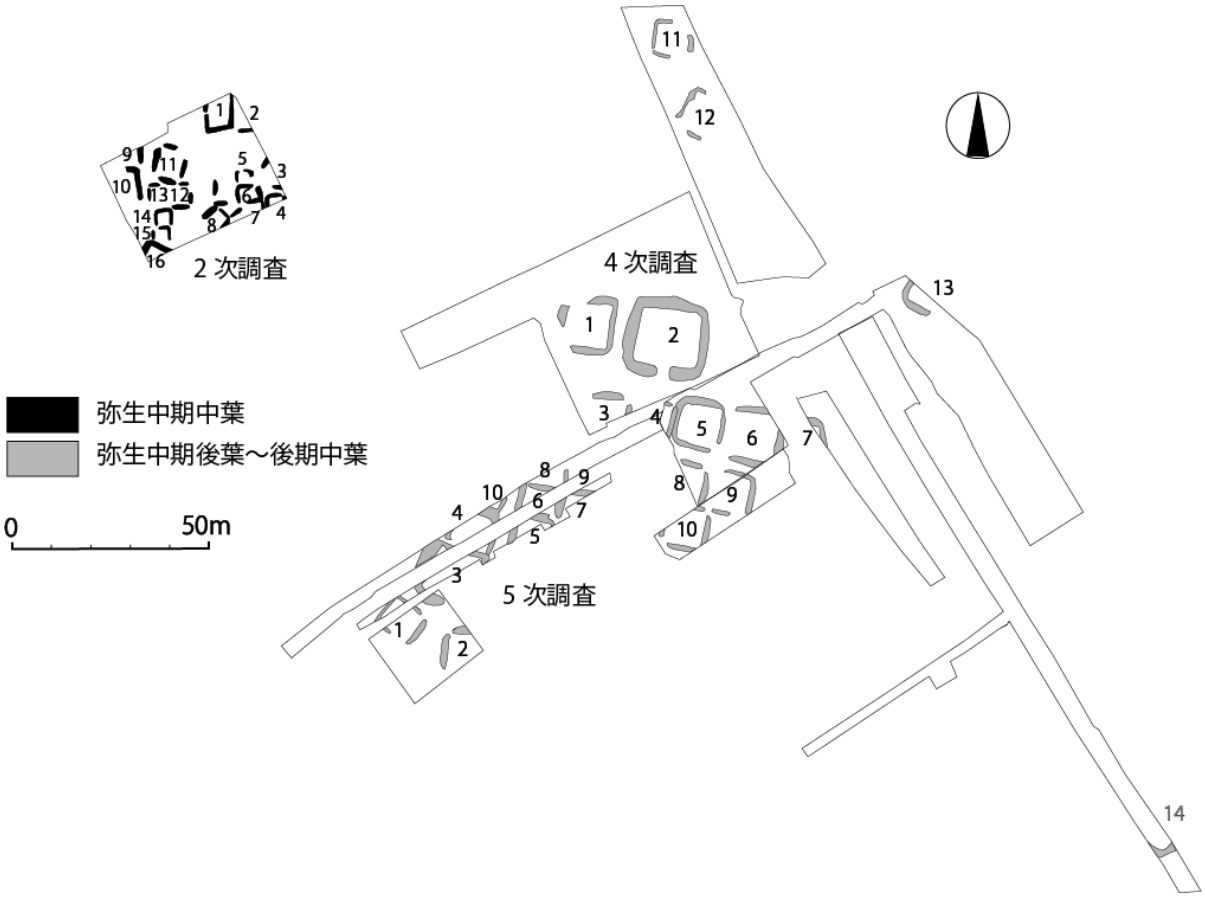


図 32　勧学院遺跡・馬淵遺跡遺構図

（3）勧学院遺跡（204-122）・馬淵遺跡（204-120）**図 32**　弥生中期中葉～弥生後期

この遺跡群では弥生中期後葉から後期にかけて総計 40 数基が検出されている。後世の削平がはげしいが、2 次・4 次・5 次調査区においては比較的残存状態がよく、規模・形態・群構成の判定ができる状況にある。

2 次調査区では弥生中期中葉の小規模な方形周溝墓が造られており、大きく 5 小群（SX1・2、SX3～8、SX9～10、SX11～15、SX16）にわかれ、集合配置（配置 B1）や塊状配置（配置 C1）をとる。周溝形態は隅切れ型の形態 A4 がみられるが、削平がはげしく正確な判別はむずかしい。

4 次・5 次調査区では弥生中期後葉～後期中葉までの方形周溝墓が造られている。4 次調査区では 2 小群（SX1・2、SX3～10）、5 次調査区では 2 小群（SX1・3～10、SX2）が抽出できる。ともに小規模な方形周溝墓が多くふくまれるが、あきらかに 2 次調査区のものより規模が拡大している。また、4 次・5 次調査区では軸方位をそろえて、一部で周溝を共有する集合配置をとるが、4 次調査区では大規模な方形周溝墓（4 次 SX2）を、5 次調査区では中規模の方形周溝墓（5 次 SX3）を核とした群構成をもつと考えられる（集合配置 B2）。これらの方形周溝墓群で最大規模の方形周溝墓（4 次 SX2）は周溝部の一辺の中央部に陸橋をもつ前方後方形周溝墓（形態 C1）であり、この群を構成する集団の上位にたつ人物の墓と推定される。

なお、この墓域ではどの調査区においても周溝部に隅切れ型をもつ方形周溝墓が頻出していることが特筆される。

（4）川ノ口遺跡（204-189）・寒藪遺跡（204-187）**図 33**　弥生中期後葉～弥生後期中葉

この遺跡群では弥生中期後葉から後期中葉にかけての 26 基の方形周溝墓が検出されているが、一部の方形周溝墓を除いて個々の方形周溝墓の造成時期は明確ではない。方形周溝墓群の重複がないことから、この地域が一貫して墓域として認識されてきたと考えられる。また、この遺跡群は微高地に所在し、この西側に集落域が想定されている[(2)]。

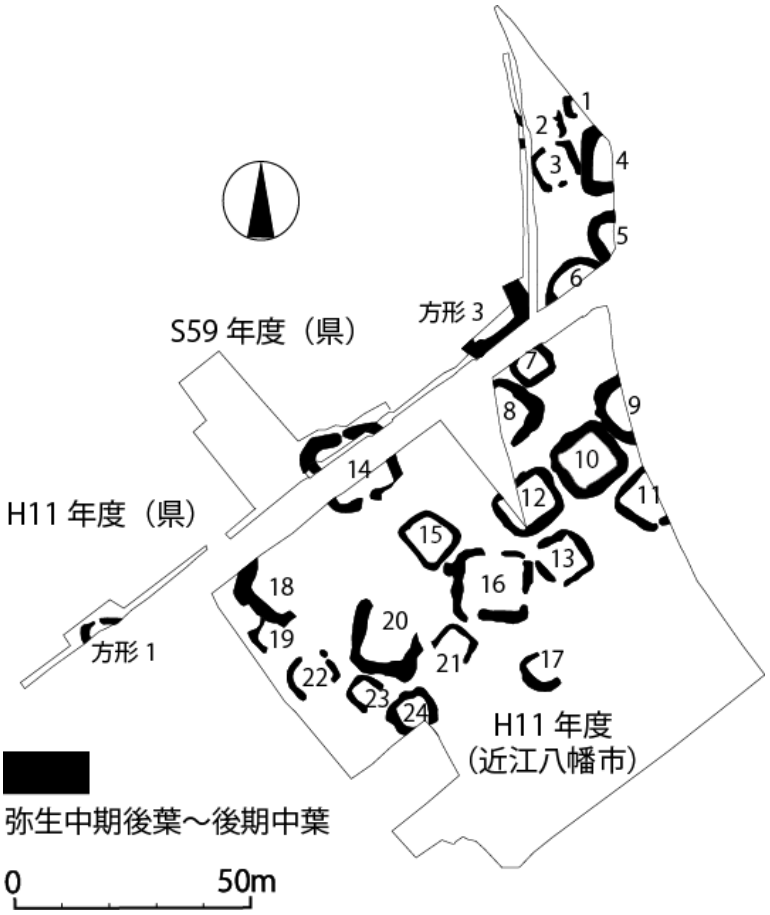


図 33　川ノ口遺跡・寒藪遺跡遺構図

後世の削平や攪乱がはげしいが、方形周溝墓の規模では中規模が 6 基（方形周溝墓 4・6・8・10・20・方形 3）、大規模が 2 基（方形周溝墓 14・16）あり、他は小規模な方形周溝墓と判定できる。また、墓域での分布から方形周溝墓 1～4、方形周溝墓 5～8･方形 3､方形周溝墓 9～13、方形周溝墓 18・19、方形周溝墓 20～24、などの小群を抽出することができる。この墓群では明確な群構成はとらず、ゆるやかな集合配置か塊状配置をとると考えられる。小群（方形周溝墓 5～8・方形 3）と小群（方形周溝墓 9～13）は集合配置（配置 B1）をとるが、小群（方形周溝墓 20～24）では、まず方形周溝墓 20 が造られ、これを核として周りの方形周溝墓が順次造墓された（塊状配置 C2）といえるだろう。

さらに、この墓域では対辺に陸橋をもつ形態 A2c（方形周溝墓 14)、円形周溝墓形態 B2（方形周溝墓 6・9）があらわれていることが特筆される。

ところで、勧学院遺跡（204-122）・馬淵遺跡（204-120）・川ノ口遺跡（204-189）・寒藪遺跡（204-187）は 700ｍほど以内に所在する遺跡群であり、同じ生活圏に属する集団、すなわち地縁的集団とみられる。しかし、前述のように墓域の様相では形態が似ているものの群構成では異なり、墓域を共有する集団ではないようである。

4　方形周溝墓からみた湖東地域の社会像

先に指摘したとおり、この地域の方形周溝墓群の大きな特徴として、方形周溝墓遺跡が多いにもかかわらず基数が少ないことをあげることができる。これは墓域として機能する期間が短いことと関係している。つまり、方形周溝墓集団の移動、あるいは居住域の盛衰がはげしいといえるのではないか。

以上の事例観察をまとめると、以下のような画期を指摘することができる。(1) 墓域に方形周溝墓があらわれる段階、(2) 墓域において円形周溝墓や前方後方形周溝墓が出現する段階。これらを基準として、社会像を検討していく。

(1) 墓域に方形周溝墓があらわれる段階（弥生中期中葉）

この地域での方形周溝墓の初現期は弥生中期中葉であり、他の地域に比べてやや遅い感がある。もちろん、今後の調査でもう少し早まる可能性はあるが、この地域ではこれまでも開発事業・発掘調査が活発であったことを勘案すれば、「遅い」ということは事実と考えざるをえない。

初現期にあたる弥生中期中葉の様相は勧学院遺跡（204-122）の２次調査の事例でもみられるように、規模は小さいものの小群にわかれ、各小群で集合配置 B1・塊状配置 C1 などの群構成をとる。このような配置は出自集団の紐帯が群構成に示されているとみられ、すでに方形周溝墓が墓制として定着している社会であることをうかがわせる。この事象は在来集団が方形周溝墓を受容し徐々に墓制として定着させたと考えるよりも、方形周溝墓集団が他の地域から移住してきたとみる方が理解しやすいのでないか。この地域の墓域の特徴として短期間しか機能しないということからも、他地域からの方形周溝墓集団の移住・移動が想定されるのではないか。

(2) 墓域において円形周溝墓や前方後方形周溝墓が出現する段階（弥生中期後葉）

表 6 のように、弥生中期後葉には造墓基数がピークとなり、その後の弥生後期には激減する。その間、円形周溝墓（形態 B2）・前方後方形周溝墓（形態 C1）など形態の多様化がみられ、さらには高木（浅小井）遺跡（204-206）SX01 のような定型化した前方後方形周溝墓（形態 C2）が出現する。

このような造墓活動の活発化から、弥生中期後葉では方形周溝墓集団と従来墓集団との階層化が急速に進んでいることがうかがえる。また、形態の多様化は被葬者の属する集団内での格差とともに、集団間での階層化が進んでいることを反映しているのではないか。

そして、弥生後期中葉には定型前方後方形周溝墓の被葬者は形態 C2 により他の被葬者との差別化をはかり、また、高木遺跡 SX01 ではさらなる差別化を進めるため墓域の周囲を溝で区画している。この被葬者は方形周溝墓群の集団から抜け出した「特別な人」で最上位の人物とみることができるだろう。

以上のように、この地域における方形周溝墓の様相の変化を２段階にわけたが、もちろん弥生中期中葉から弥生後期にいたる連続した変化である。すなわち、方形周溝墓の初現・定着・衰退という様相の変化が短期間で展開しているところにこの地域の特性があり、すでに方形周溝墓集団内・集団間で析出した有力集団や上位階層の集団が湖南・湖北などの地域から移住・移動してきたとみることができるだろう。

第２節　湖北地域の方形周溝墓の様相

湖北地域は姉川・高時川・余呉川・天野川などにより形成された湖北平野からなる（**図 34**）。南北にひろがる平野であり、小地域にわけると、高時川により形成された扇状地・氾濫原と余呉川による後背湿地からなる湖北平野北部、姉川により形成された扇状地・氾濫原・三角州からなる湖北平野中央部、さらに天野川による氾濫原・三角州からなる地帯がひろがる湖北平野南部に分れる。また、湖北平野中央部は姉川の下流域をふくむ肥沃な地帯であり、長浜平野とよばれることがある。今日の行政区域では長浜市・米原市がふくまれる。

1　湖北地域の方形周溝墓の概観

湖北地域に所在する方形周溝墓の集成表を**表 7** に、その所在位置を**図 34** に示す。**表 7**・**図 34** の遺跡番号は共通で、遺跡名のあとの数字は遺跡番号を示す。**表 8** には、**表 7** をもとにして規模・形態・群構成の時期別様相をまとめた。

表 7 から、湖北平野において方形周溝墓遺跡は 18 ヶ所、方形周溝墓の総数は 314 基を数える。調査区域外への分布のひろがりを考えると、この数は大幅に増えるであろう。検出状況により造営時期が不明なものも多いが、時期が判定・推定されたものをみると、**表 8** のように弥生前期末で 7 基、中期前葉で 10 基、中期中葉で 10 基、中期後葉で 54 基、後期で 124 基、古墳初期で 47 基、そして古墳前期で 12 基となる。弥生後期をピークとして古墳初期以降になると激減する。近江で最古にあたる弥生前期末の方形周溝墓が長浜平野に所在する塚町遺跡（203-22）で検出されており、近江での方形周溝墓の受容を考える上で興味深い地域であるといえる（詳細は後章で論じる）。

この地域における方形周溝墓の分布は、**図 34** のように湖北平野中央部・南部に多く分布する。ただ、湖北平野北部の山間部に所在する黒田長山遺跡（502-042）・桜内遺跡（502-043）においても方形周溝墓群が形成されていることが特筆される。また、地形分類図の視点からは、当然のことながら多くの方形周溝墓群は三角州・氾濫原に所在しており、当時の居住域の分布と相似している。

2　方形周溝墓の規模・形態

方形周溝墓の規模は**表 8** に示すようにどの時期も小規模が優勢であるが、弥生中期後葉から中規模・大規模な墓が頻出する。ただ、方形周溝墓の規模は時期的な変化よりも、墓群（墓域）内での大小により重要な意味をもつと考えられるので、各事例を観察する中で詳述していく。

方形周溝墓の形態は、湖北地域では通例の方形周溝墓の他に弥生後期以降になると円形周溝墓・前方後方形周溝墓・前方後円形周溝墓が観察される。とくに、前方後円形周溝墓（形態 D）は湖北のみでみられるもので、円形の台状部に造り出し部があり、古墳前期以降にみられる帆立貝式古墳あるいは前方後円墳の祖形にあたる。

表７　湖北地域の方形周溝墓集成（1/2）

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形　態					群構成						遺物	備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D		
203	22	塚町	滋賀県	長浜市	Ⅰ	6	1				7	7				7		1					磨製石剣・有孔円板	
					Ⅱ	6					6	6				6								
					Ⅲ	3					3	3				3								
					Ⅳ	6					6	6				6								
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留																			
					不明	1					1	1				1								
203	29	大辰巳	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
	37	大戌亥			Ⅲ						0					0								
	38	鴨田			Ⅳ	3					3	3				3								
					Ⅴ	10					10	10				10		1		1				
					庄内	5	1			4	10	10				10								散在している
					布留	1	1	1	1	1	5	4		1		5								SX01前方後円形
					不明	2					2	2				2								
203	66	大東	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	6	1				7	7				7								同軸・共有無
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
203	80	越前塚	滋賀県	長浜市	Ⅱ		1				1	1				1								
					Ⅲ	1					1	1				1								
					Ⅳ	2	1			1	4	3	1			4								
					Ⅴ	30	6			1	37	37				37		1			1		東海系土器	
					庄内	5	1				6	5	1			6			1					
					布留	3	1				4	3	1			4		1						
					不明	9				1	10	8			2	10								古墳中期以降3基
203	135	十里町	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
	132	（列見町）			Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								木棺直葬土壙
					Ⅴ	2	1			2	5	5				5							1号：バレススタイル	
					庄内					1	1	1				1							東海系が多い	
					布留						0					0								
					不明						0					0								
482	16	五村	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	3					3	3				3								
					庄内	8	1				9	9				9		1						
					布留				1		1		1			1								造り出し円形
					不明						0					0								
501	59	高月南	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	7					7	7				7								
					庄内	5					5	5				5								
					布留	2					2	2				2								
					不明	6					6	6				6								
501	130	横山	滋賀県	長浜市	Ⅱ	2	1				3	3				3								
					Ⅲ	6					6	6				6								
					Ⅳ	7					7	7				7								
					Ⅴ		2				2	2				2		1						墓・建物が混在か？
					庄内	1					1			1		1								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
502	42	黒田長山	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0							ガラス玉22個 C号墓	・埋葬施設は木棺直葬
					Ⅴ					6	6				6	6							ガラス玉406個 E号墓	主として一人埋葬
					庄内					1	1				1	1								・北陸台状墓に近似する
					布留						0					0								
					不明					10	10				10	10								・規模は10m前後か
502	43	桜内	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ						0					0								
					庄内	9	3			2	14	12			2	14								V末～古墳初期か
					布留						0					0								
					不明																			
502	47	黒田B	滋賀県	長浜市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ					2	2	2				2								溝遺構
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明											0								
464	2	法勝寺	滋賀県	米原市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	25	5				30	30				30		1		1				
					Ⅴ	34	2	2			38	37		1		38								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明					16	16	13			3	16								

規模（台状部辺）：　小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　　形態：方形・円形・前方後方形　群構成：　A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表７　湖北地域の方形周溝墓集成（2/2）

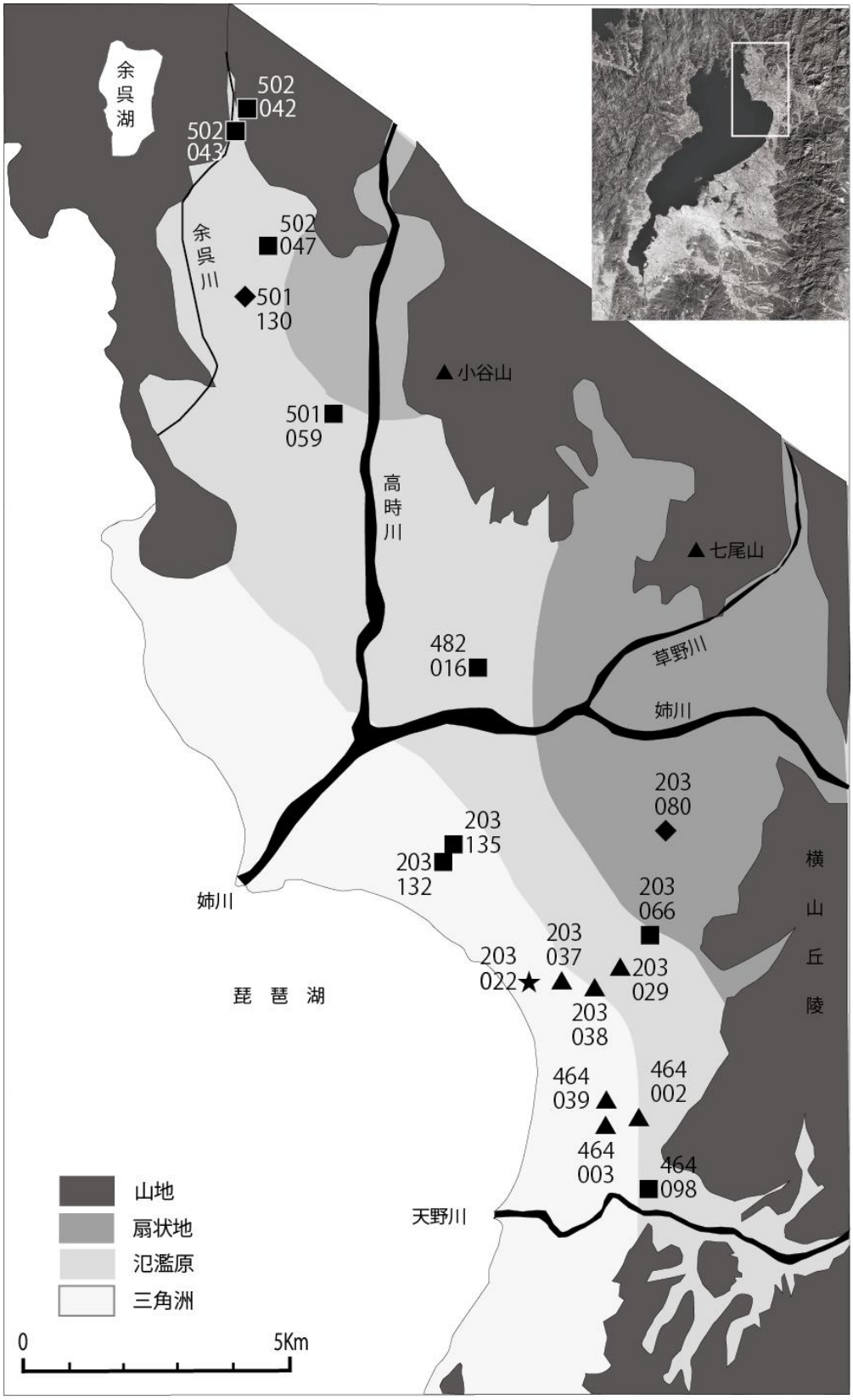
遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模(台状部)						形　態					群構成						遺物	備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D		
464	3	狐塚	滋賀県	米原市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	1				1	2	2				2								
					Ⅴ	3	1				4	4				4								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明					1	1	1				1								
464	39	奥松戸	滋賀県	米原市	Ⅱ						0					0								G･H区
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	2					2	2				2								
					Ⅴ	1					1	1				1								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明	1				3	4	4				4								
464	98	埋塚	滋賀県	米原市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ						0					0								
					Ⅴ	1				1	2	2				2								A1
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								

規模(台状部辺)：小(～10m)・中(～15m)・大(～20m)・特大(20m～)　　形態：方形・円形・前方後方形　　群構成：A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表８　湖北地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相

時　代	土器編年	方形周溝墓の規模(基数)				方形周溝墓の形態(基数)				群構成の配置状態(遺跡数)					
						方形	円形	前後	不定	列状	集合		塊状		その他
		小	中	大	特大	A	B	C		A	B1	B2	C1	C2	D
弥生前期	Ⅰ	6	1	0	0	7	0	0	0	0	1	0	0	0	0
弥生中期　前葉	Ⅱ	8	2	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生中期　中葉	Ⅲ	10	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生中期　後葉	Ⅳ	46	6	0	0	53	1	0	0	0	1	0	1	0	0
弥生後期	Ⅴ	97	13	2	0	117	0	1	6	0	3	0	1	1	0
古墳初期	庄内	33	6	0	0	42	0	1	3	0	1	1	0	0	0
古墳前期	布留	6	2	1	2	9	2	1 ※	0	0	1	0	0	0	0

※前方後円形周溝墓



【長浜市】　203-022 塚町　203-029 大辰巳　203-037 大戌亥　203-038 鴨田
203-066 大東　203-080 越前塚　203-132 列見町　203-135 十里町　482-016 五村
501-059 高月南　501-130 横山　502-042 黒田長山　502-043 桜内　502-047 黒田 B
【米原市】　464-002 法勝寺　464-003 狐塚　464-039 奥松戸　464-098 埋塚
【各遺跡における方形周溝墓の初現期】
★弥生前期　◆弥生中期前葉　●弥生中期中葉　▲弥生中期後葉　■弥生後期
□古墳初期　○古墳中期

図 34　湖北地域の方形周溝墓遺跡分布

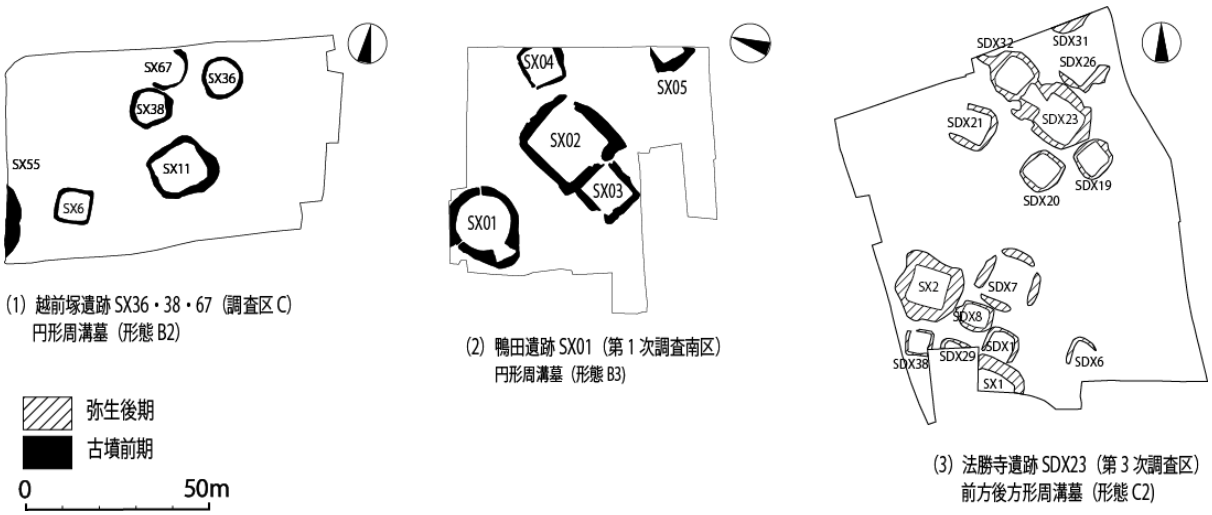


図 35　方形周溝墓の形態事例

図 35（1）は越前塚遺跡（203-080）の円形周溝墓（形態 B2）SX36・38・67 の事例である。ほぼ同じ規模のものが塊状に配置されている。造墓時期はともに古墳前期である。**図 35（2）**は鴨田遺跡（203-038）での前方後円形周溝墓（形態 D）SX01 である。規模は全長 23m・最大幅 18m を測る。造墓時期は古墳前期である。**図 35（3）**は法勝寺遺跡（464-002）の前方後方形周溝墓（形態 C2）SDX23 である。規模は全長 21m・前方部幅 6m・後円部幅 12m を測る。造墓時期は弥生後期末～古墳初期とみられている。

3　方形周溝墓群の事例観察

遺存状況のよい遺跡（墓群）を事例として、時期を追って墓域での墓群の形成過程および群構成を検討する。

（1）塚町遺跡（203-022）**図 36**　弥生前期～弥生中期後葉

この遺跡では弥生前期末から中期後葉までの方形周溝墓 23 基（3 次調査で 14 基、6 次・7 次調査で 9 基）が検出されている。とりわけ、6 次・7 次調査区域では弥生前期末までさかのぼる近江で最古期の方形周溝墓が検出されている。

墓群としては 3 次調査区（西）、3 次調査区（東）、6 次・7 次調査区の、大きく 3 グループにわれる。各グループでの方形周溝墓の造墓の時期から、6 次・7 次調査区→3 次調査区（西）→3 次調査区（東）の順に墓域が形成されたものとみられる。具体的には弥生前期末に造墓活動がはじまり、一時、洪水にみまわれ活動は停滞するが、中期前葉には再び造墓がはじまり、墓域の中心を移しながら中期後葉まで継続する。

規模では時期的な変化よりも墓群による規模の差が大きい。また、周溝形態は弥生前期末の方形周溝墓では四周をめぐる形態 A0 であるが､弥生中期には東海地域でひろくみられる四隅切れ型も観察される。また、当該報告書（丸山 1994）では、弥生前期末の方形周溝墓からの土器は細片しか出土しないのに対して、中期の墓からは完形土器の出土もあることから、社会変革にともない供献形態が変化した可能性を示唆している。

6 次・7 次調査区グループでは弥生前期末の方形周溝墓群（SX01～05・07・09）をふくみ、規模が異なる方形周溝墓により構成され、さらに群構成をもつことが特筆される。各方形

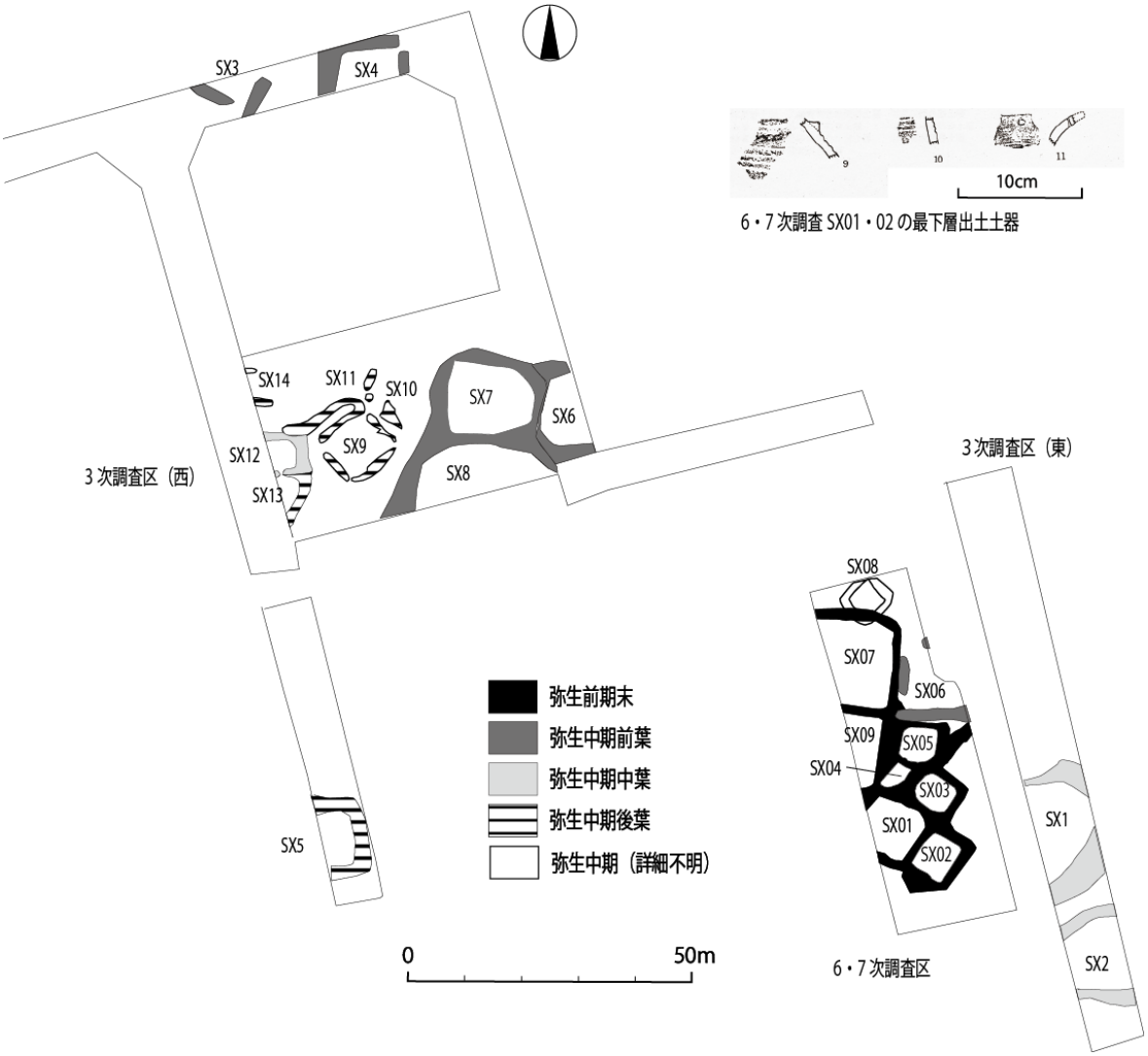


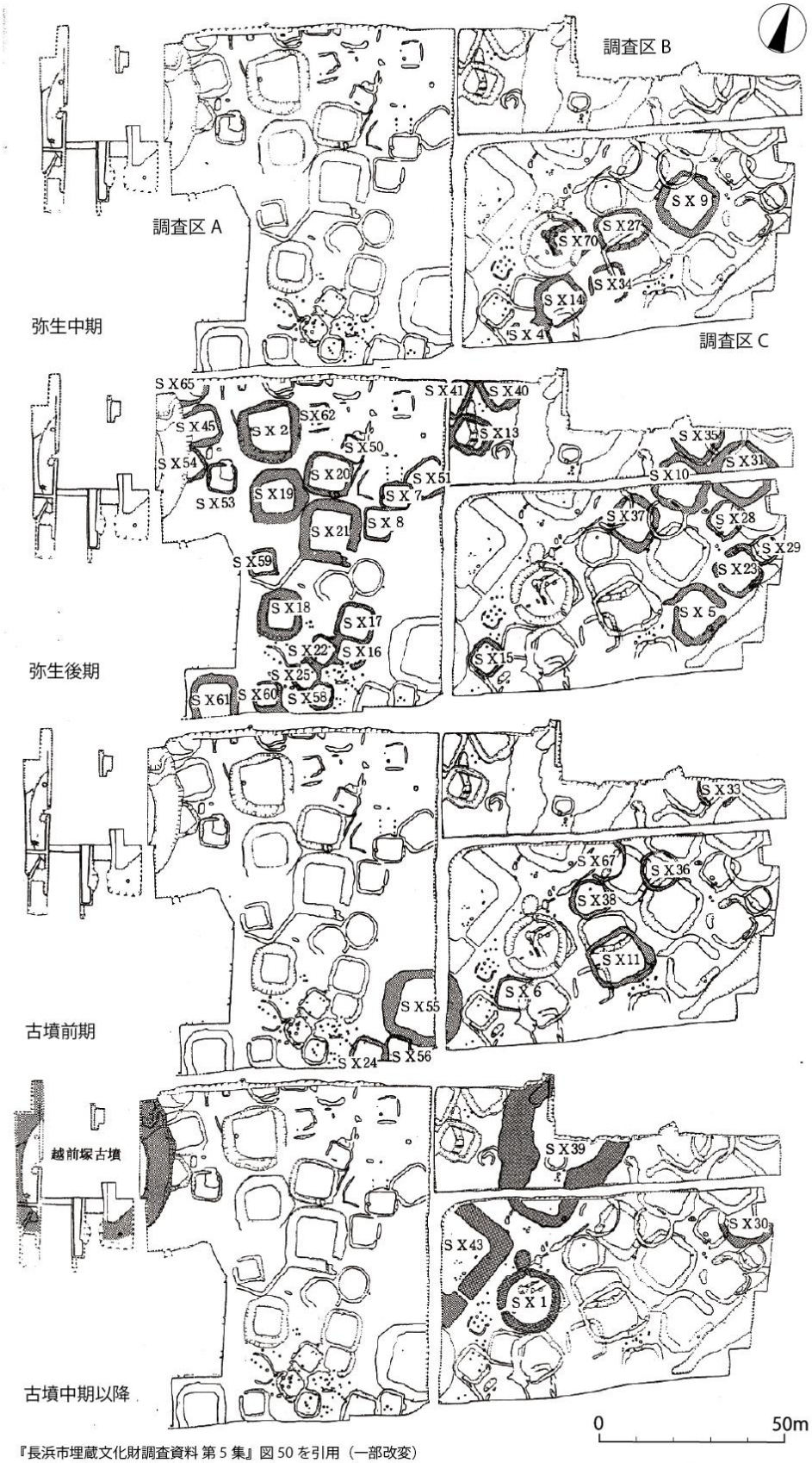
図 36 塚町遺跡遺構図

周溝墓は周溝部を共有・隣接する状況にあるが、軸方位を考慮すると SX01～04、SX05・09・07 の小群にわかれ、どちらの墓群も集合配置 B1 の群構成をとる。弥生前期にさかのぼる方形周溝墓は近畿・東海地域に限られる（第 2 章参照）が、塚町遺跡のように明確な群構成をとるところはなく、この集団の紐帯意識の高さをうかがわせる。

（2）越前塚遺跡（203-080）**図 37・図 38**　弥生中期後葉～弥生後期

この遺跡は弥生中期から古墳後期まで継続して墓域として土地利用され、間断なく方形周溝墓・古墳が造営され総計 66 基におよぶ。**図 37** のように、弥生中期・後期をとおして先行の墓を意識して整然と造墓活動が継続されるが、古墳初期になると先行の墓を切り込んで造墓するようになる。ここでは、弥生中期から弥生後期までの方形周溝墓群を対象とし、群構成の形成過程を観察する（**図 38**）。

造墓時期が明確になったものは 53 基（推定をふくむ）を数える。この墓域では弥生中期前葉から造墓がはじまり、SX14（弥生中期前葉）、さらに SX27（中期中葉）、SX4・9・34・70（中期後葉）と造営される。弥生後期に入ると造墓活動が活発となり、後期初期には SX10・16・22・23・35・40・59 が造営され、各々を中心にして墓域（墓群）をひろげてい



『長浜市埋蔵文化財調査資料 第５集』図 50 を引用（一部改変）

図 37　越前塚遺跡遺構の変遷図

く。ただし、この墓域の開拓時期である弥生中期前葉・中葉には各時期に１基の散発的な造墓活動であり、中期後葉に入って継続的な造墓活動がはじまる。その後、後期にはその盛期をむかえ、いくつかの墓群が形成される。

図 38 にみられるように墓域での群集状況や空閑地（古墳初期になると方形周溝墓・古墳などが造営される）の位置を考慮すると、大きくはＡ群・Ｂ群・Ｃ群・Ｄ群の４群にわけられる。このうち、Ｃ群では弥生中期後葉の方形周溝墓（SX9 など）に引き続き、後期初期の SX10・23・35 が、さらに後期の方形周溝墓群が造営されたと考えられるので、もっとも早く墓域の形成がなされたと考えられる。

方形周溝墓の規模をみると、各群間よりも群内での規模差が大きい。そこで、各群内において群構成を検討する。軸方位や時期的な配置を考慮して、各群において複数の小群を抽出することができる。ここでは、Ａ群では小群 A1、Ｃ群において小群 C1・C2、Ｄ群では小群 D1 を明示したが、他にも抽出が可能であろう。これらの墓群の形成に際しては、当然、各墓群での起点となる墓を中心に墓群が拡大すると考えられる。

小群 D1 は周溝部の切り合い関係が明確となっているので、墓群が拡大していく過程を読みとることができる。すなわち、図中に矢印で示すように、弥生後期初期の SX22 を起点として周溝部を共有・隣接しながら造墓が進められ、集合配置 B1 の群構成を形成している。小群 C1・C2 においては切り合い関係が明確ではないが、D1 と同様、各群での弥生後期初期の方形周溝墓を起点として墓群を形成したと考えられる。すなわち、小群 C1 では SX10・31 などが、小群 C2 では中期後葉の SX9 が起点となって墓群が拡大し、軸方位をそろえる典型的な集合配置 B1 を形成したといえる。

これらの群構成に対して、Ａ群での様相はやや異なる。小群 A1 はほぼ同規模の墓からなる集合配置 B1 をとるが、他の方形周溝墓群は中規模の SX2・19・21 を核とした塊状配置（配置 C2）の群構成をとっている。弥生後期の段階で、Ａ群の集団では有力集団が台頭しているのに対し、Ｂ・Ｃ群の集団では集団間で大きな格差がみられない状況であるといえるだろう。

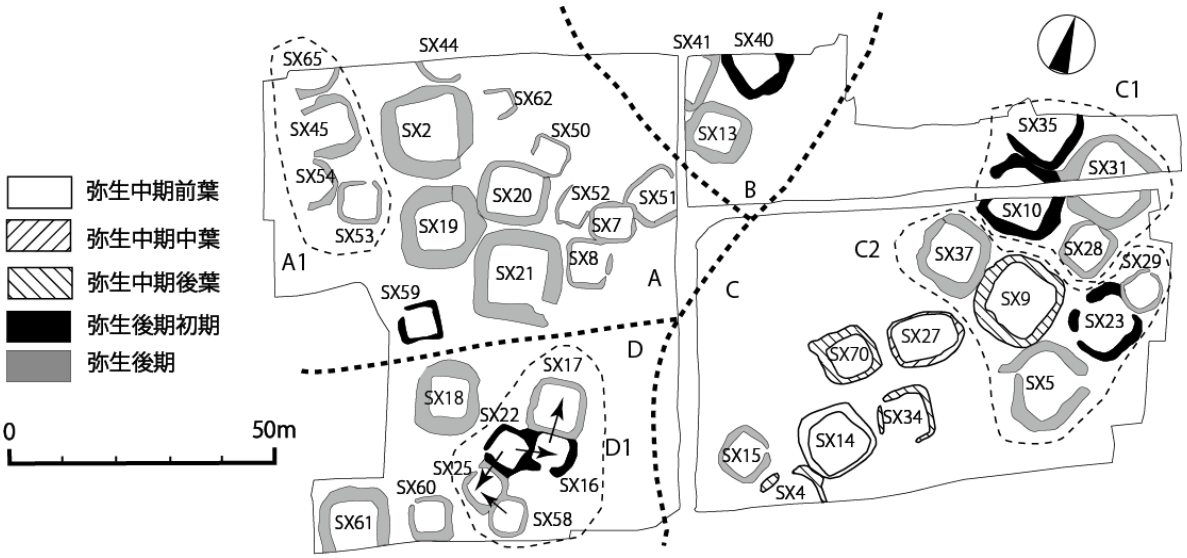


図 38　越前塚遺跡遺構図（弥生中期～後期）

ところで、C 群（SX35）・D 群（SX16）では東海系土器がみられるが、これらの方形周溝墓は各墓群での起点となっていることを考えると、越前塚遺跡は外来集団（近江外からきた集団）と在地集団との共同墓地とみることもできる。

（3）法勝寺遺跡（464-002）**図 39・図 40**　　弥生中期後葉～弥生後期

この遺跡は近接する狐塚遺跡（464-003）・奥松戸遺跡（039）とともに一群をなし、法勝寺遺跡群とよばれることもある。**図 39** は法勝寺遺跡の方形周溝墓遺構図であるが、法勝寺遺跡群の方形周溝墓約 100 基のうち、この法勝寺遺跡から 80 余基が検出されている。

図 40 に法勝寺遺跡における墓域の変遷を示す。弥生中期後葉前半から方形周溝墓の造墓活動がはじまり中期後葉後半まで継続するが、その後は活動が途絶え、後期後半になって再開され後期末に終焉をむかえる。その間、造られた方形周溝墓は少なくとも 84 基を数え、その終末期にあたる弥生後期後半には全長 25m 超の前方後方形周溝墓 SDX23 があらわれる。

この遺跡での大きな特徴として、**図 40** の 3 次・4 次調査区の遺構に顕著にみられるように、弥生後期後半の遺構が先行する中期後葉の遺構を切っていることがあげられる。方形周溝墓を継続して造営する場合、先行する墓を避けて後続の墓を造営するのが通例であり、この区域においても中期後葉前半（**図 40（1）**）から中期後葉後半（**図 40（2）**）にかけての遺構（方形周溝墓）は重複することはない。したがって、上記の遺構の切り合い関係は何かの事情があったとみられる。

発掘調査を担当した宮崎幹也氏はこの時期（弥生中期末～後期初頭）における他地域の事例を引用しながら、新たな堆積土が遺構を埋没させ、その後別な遺構が構築されたこと

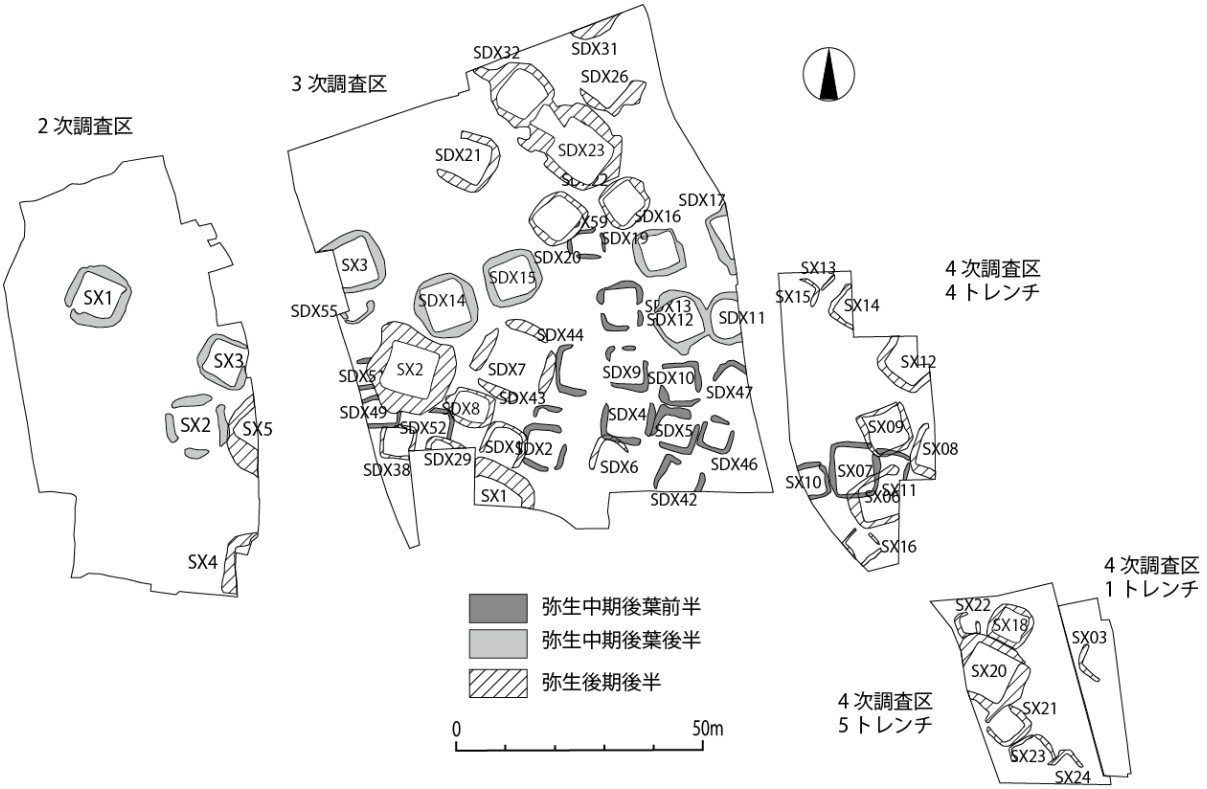


図 39　法勝寺遺跡遺構図（全期）

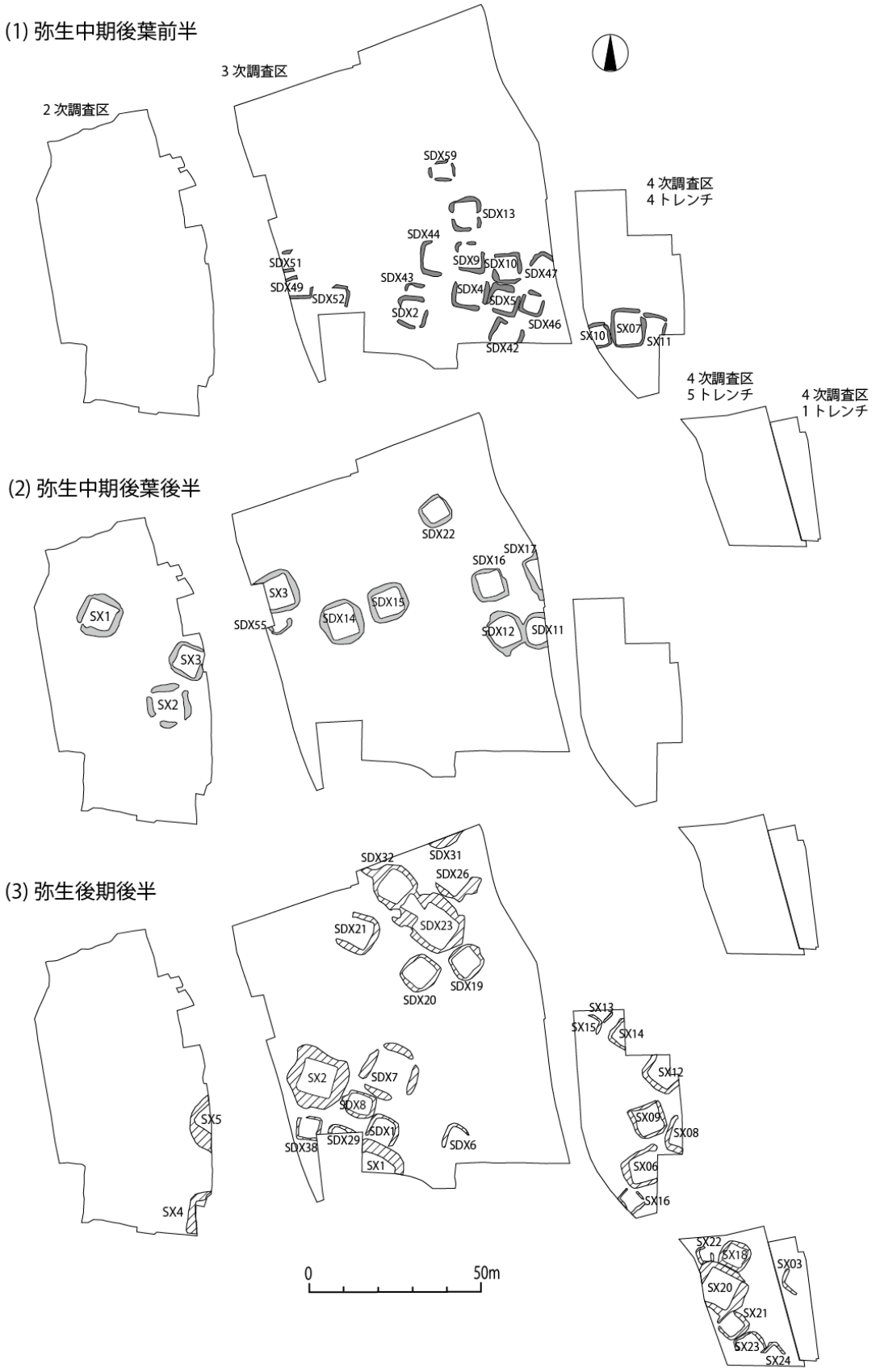


図 40　法勝寺遺跡遺構変遷図

を指摘している（宮崎 1993）。つまり、後期後半の造営の際には、先行する方形周溝墓が埋没してしまい視認できない状況にあったということである。具体的には、「広域にわたる自然災害によって多数の集落が壊滅し、時期をあけて再構成されたもの」と考え、この災害発生時期を弥生後期初頭と推定している。**図 40（3）**のように、本遺跡の変遷でも弥生後期前半の遺構がない（あるいは、検出されていない）のは、この自然災害により集落が壊滅し、方形周溝墓が造営されなかったと考えられるのである。

以上の状況を念頭に、**図 40** において方形周溝墓群の様相（規模・形態・群構成）の変遷を考えていきたい。**図 40（1）**にみられるように、弥生中期後葉前半に方形周溝墓の造墓活動がはじまる。規模が 10m 程度以下の小規模なもので、軸方位や隣接状況からみて 5 小群（SDX49・51・52、SDX2・43・44、SDX4・9・10・13・59、SDX5・42・46・47、SX07・10・11）にわけられるが、前述のように後世での災害・削平によって消滅したものがあることを考慮すれば、さらに多くの群が存在したであろう。どの群においても周溝部の共有・隣接の傾向があり、群構成としては軸方位をそろえた集合配置（配置 B1）をとる。各群は出自集団の紐帯を示しているのであろう。大局的にはどの群内・群間においても顕著な差を見出せず、方形周溝墓集団内・集団間において大きな格差のない社会であるといえるだろう。

図 40（2）の弥生中期後葉後半には、先行の墓を避けつつ方形周溝墓の造営が継続され、墓域は西方にひろがり、分布は緩やかに東西にのびる。分布状況からみて、3 小群の存在が推定できる。個々の方形周溝墓の規模は大きくなり、10m 超の中規模な墓があらわれる。周溝部は幅広となり共有・隣接するものは少ないが、各小群では塊状配置（配置 C1）をとる。このように、墓域は継続しているものの方形周溝墓の様相（規模・形態・群構成）には継続性はみられない。より有力な集団があらわれたことを示しているのではないか。

弥生後期前半における一時期の空白期をおいて、**図 40（3）**の後期後半には方形周溝墓の造墓活動が再開されるが、先述したとおり、先行の遺構（埋没した）を切って造られる。分布状況からみて 3～4 小群に分かれ、3 次・4 次調査区での分布を考えると墓域は東方にも大きくひろがり、さらなる小群の存在が想定される。規模は 15m 超の大規模な方形周溝墓（SX2）や 20m 超の前方後方形周溝墓（SDX23）があらわれる。どの群においても前方後方形周溝墓や大規模な方形周溝墓を核とした強い集合配置 B2・塊状配置 C2 をとる。また、各小群内では規模の大小があるものの、周溝を共有・隣接し出自集団としての紐帯を誇示しているようである。この状況は規模・形態・群構成において弥生中期後葉での様相とは全く異なるものであり、有力集団があらわれている状況がうかがえる。

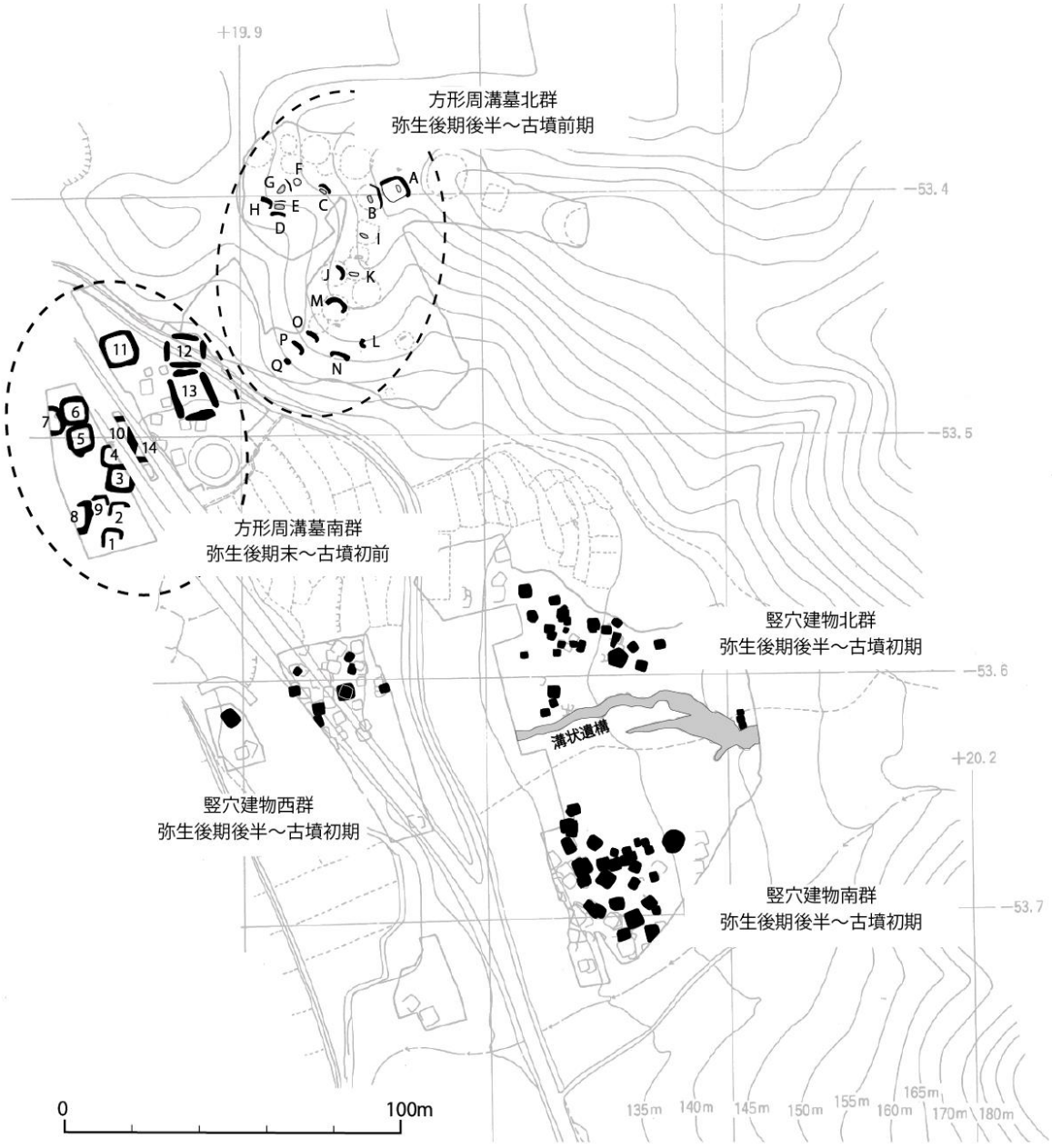
（4）黒田長山遺跡（502-042）・桜内遺跡（502-043）**図 41**　弥生後期後半～古墳初期

これらの遺跡では方形周溝墓群が山塊の尾根から斜面およびその麓にかけて形成されており、近江における方形周溝墓群の墓域の立地としては他に類をみない。これらの遺跡は柳ケ瀬地溝帯によりできた谷筋にあり、湖北平野から北陸方面へ往還する道筋の出入り口にあたる交通の要衝にある。遺跡は古墳中期以降も存続するが、以下では弥生後期後半から古墳初期にいたる遺構について検討する。

図 41 に遺構の分布を示す[(3)]。北側に墓域が、小谷をはさんで南側に居住域があり、明確に居住域と墓域とを分離している。

方形周溝墓群は北群・南群に分かれ、北群は山塊の斜面、南群は麓の緩斜面に分布する。両群の時期差は大きくはないが、出土土器の様相から造墓活動は北群が先行するとみられている。北群は尾根の頂上付近で弥生後期後半に造営がはじまり、総計 17 基（A 号墓～Q 号墓）が確認されている。順次斜面をくだるようにして造墓されていることから、尾根の頂上付近の A 号墓・B 号墓を起点として、西側斜面に C～H 号墓が、南側斜面に I～Q 号墓が造墓されたと考えられる。C～H 号墓では密集するが、I～Q 号墓では緩やかにくだる尾根に沿って墓が分布している。この分布状況の違いは西側斜面と南側斜面との地形の違いに起因していると考えられるが、このように二手方向に墓群が形成されることから、少なくとも二つの集団を想定することができる。

古墳中期後半以降には、これら方形周溝墓のために造成された地形を利用して古墳が築



桜内遺跡下層遺構および黒田長山遺跡遺構分布図
（『北陸自動車道関連関連遺跡発掘調査報告書XI』の図 284 を引用し、一部改変した）

図 41　黒田長山遺跡・桜内遺跡遺構図

造されているため、方形周溝墓そのものがほとんど削平されている。しかし、埋葬施設の情報は比較的多く残っており[(4)]、4 基の方形周溝墓の埋葬施設（土壙）から木棺が検出され､その他の墓でも木棺の痕跡があるため､すべてが木棺直葬であったと推定されている。また、E 号墓からは一つの埋葬施設（土壙）に並列して 2 基の木棺が納められており、この墓域では単数埋葬を基本としながら複数埋葬もあることを示している。ただし、通例の複数埋葬では方形周溝墓の台状部に複数の土壙を掘り被葬者ごとに埋葬する方式をとるので、E 号墓のような埋葬方式は異質である。さらに、ガラス玉が C 号墓では 22 個、E 号墓では 406 個が出土しているが、これらは副葬品というより被葬者の装飾品（着装品）と考えられている。このような状況から、E 号墓の被葬者はより上位の階層の人物とみることができるだろう。

このように、尾根からその斜面に沿った立地、一つの墓壙への複数の並列埋葬、装飾品を着けた被葬者など､湖北平野における方形周溝墓の様相とはまったく異なるものであり、北陸で盛行する台状墓に通じる墓制といえるのではないか（御嶽 2011）。

これに対して､方形周溝墓南群は湖北平野に造営される通例の墓域の様相を示している。軸方位や空閑地を考慮すると、大きく 4 小群（SX1・2・8・9、SX3・4・10・14、SX5・6・7、SX12・13）に分かれるので、少なくとも四つの集団の墓域といえるだろう。いずれも周溝部を共有・隣接して、集合配置 B1 の群構成をとる。ただ、SX12・13 は規模が大きく周溝が四隅切れ型（形態 A4）で、他とは異なる集団といえる。

次に、墓群と竪穴建物群の関連について検討する。方形周溝墓群とは小谷をはさんで南側の緩斜面には居住域がある（**図 41**）。この居住域はその中央に存在している溝状遺構をはさみ、南北に竪穴建物群が形成されている（竪穴建物南群・北群）。さらに、緩斜面をくだったところには竪穴建物西群が形成されている｡北群は小さい建物で構成されるものの、やや規模の大きい五角形の建物がある。南群では規模の大きい建物が多く、また大規模な円形建物がある。西群では大小の建物が散在する。このように、各竪穴建物群で様相が一様ではないが、これはそこに居住する集団の特長を反映しているのであろう。上述したように、墓群においても墓域の占地や方形周溝墓の規模・群構成の違いなどに集団の特長がみられた。つまり、五角形建物・円形建物などはその住人の集団内での階層や序列を示しており、彼らの死後、生前の階層・序列などが墓域での墓の規模や群構成の違いに反映されると考えられるのである。

ところで、この墓域・居住域は弥生後期後半から古墳初期の所産であるが、一つの竪穴建物での生活者の人数および検出された建物数と方形周溝墓数を勘案すると、大部分の人が方形周溝墓に埋葬されていないということになる。また、湖北平野において弥生後期末には方形周溝墓の数が激減していることを考慮すると、この黒田長山遺跡・桜内遺跡の社会では方形周溝墓の被葬者は少数の上位階層の人物であったといえるのではないか。

4　方形周溝墓からみた湖北地域の社会像

以上の事例観察をまとめると、以下の画期を指摘することができる。(1) 墓域に方形周溝墓があらわれる段階。(2) 墓域に方形周溝墓群の群構成が明確になる段階。(3) 墓域に

おいて円形周溝墓・前方後方形周溝墓が出現する段階。これらの画期をもとにして社会像（集団・階層）を検討していく。

（1）墓域に方形周溝墓があらわれる段階（弥生前期末）

表 8 にみられるように、弥生中期中葉までは方形周溝墓の数は少ない。しかし、弥生前期の方形周溝墓の出現という点で画期的である。**図 36** の塚町遺跡の事例観察でみたように、弥生前期末に造営された方形周溝墓群においてすでに群構成がみられた。すなわち、墓域としては大きな群を構成しているが、さらに二つの小群にわかれる。どちらの小群も大小の規模の方形周溝墓から構成され、群構成は集合配置 B1 をとる。また、方形周溝墓の形態は台状部がほぼ正方形の形態 A1 である。これらの事象は弥生中期・後期をとおしても観察されるものであり、方形周溝墓の初現期においてその後の方形周溝墓群がもつ各種の要素をそなえていることになる。つまり、従来墓造墓集団がもっていた群構成という概念が方形周溝墓集団となっても持続され、墓域に表現されているといえる。

近江における方形周溝墓という墓制は湖北地域に比較的早くにあらわれたが、その後の弥生中期前葉～中期中葉には造墓活動は散発的となり、方形周溝墓が墓制として定着しなかったといえるだろう。この事情は横山遺跡（501-130）においてもみられる。ここでは弥生中期前葉に造墓がはじまるが墓域には土壙墓も造られ、方形周溝墓の造墓活動が活発化するのは弥生中期後葉からである。

このように、弥生前期末に方形周溝墓の造営がはじまるが散発的なものであり、同じ墓域には従来墓も造られる。このことから、方形周溝墓造墓集団は発生しているものの定着した墓制とはならず、従来墓集団との間に確たる階層差はみあたらないといえる。

（2）墓域に方形周溝墓群の群構成が明確になる段階（弥生中期後葉）

表 8 のように、弥生中期後葉から方形周溝墓の基数は急増し、弥生後期にはピークに達する。方形周溝墓の規模も中規模が頻出し、大規模もあらわれ、形態には円形周溝墓もみられる。この時期の特徴は、墓群にあきらかな群構成を示すことが一定の約束事であるかのような状況であり、出自集団の紐帯の強さを顕示しているものとみることができる。

この状況は弥生後期まで継続するが、墓域の様相を注意深く観察するとその変遷は一様ではない。**図 40** の法勝寺遺跡の墓域では方形周溝墓集団の出現、有力な方形周溝墓集団の出現、有力な家族の析出という社会構造の変化をみてとることができる。また、この湖北地域では弥生中期末になると、近江型甕とともに東海系土器（パレススタイル）も数多く出土する。東海地域をはじめ他地域からの有力な方形周溝墓集団の移住があったとも考えられるのではないか。

この時期は、在地集団の中から有力集団へと成長するものとともに外来の集団も墓域を形成し、方形周溝墓が主たる墓制として定着した段階である。方形周溝墓の規模・形態・群構成が各集団の強弱を表象する方形周溝墓社会といえる状況を呈している。

（3）墓域において円形周溝墓・前方後方形周溝墓が出現する段階（古墳初期）

表 8 のように、古墳初期になると方形周溝墓の基数は激減するのに対して、規模の拡大、形態の多様化（円形周溝墓・前方後方形周溝墓）が顕著となる。

たとえば、**図 35（2）**に示した鴨田遺跡（203-038）の SX01 の被葬者はこの地域での首長クラスの人物であろう。また、ここでは各周溝墓が散在するなかで、最大規模の SX02 が SX03 と周溝部を共有することから、SX02・03 の被葬者間に特別な関係があるとみることができる。つまり、少なくとも SX01～03 の被葬者は同一家族の成員と考えられ、ここに有力家族の析出を認めることができるだろう。

この時期の墓域の特徴として、弥生中期から後期をとおして形成された先行の墓群を切って、造墓活動がなされていることである。この行為は先行する時期の集団とは異なる論理の集団の登場を示唆しているのではないか。さらに、黒田長山遺跡（502-042）・桜内遺跡（502-043）にみられるように山間部に立地し、北陸地域の墓制に類似した台状墓が造営されていることも、外来集団との交流・混合が盛んになったことを示しているのではないか。

第３節　湖西地域の方形周溝墓の様相

琵琶湖の西岸には野坂山地・比良山地が南北に走り、いずれの山塊も湖岸まで迫る。概して狭い平地が湖岸に沿って延びているが、安曇川や石田川の流域には広い沖積平野が広がり、縄文時代の痕跡も残る（**図 42**）。

湖西地域とはこのような琵琶湖の西岸一帯を指すが、本研究では方形周溝墓遺跡の存在する湖西地域北部を指すことにし、今日の行政区域としては高島市の北部地域（旧安曇川町・旧今津町）をふくむ。

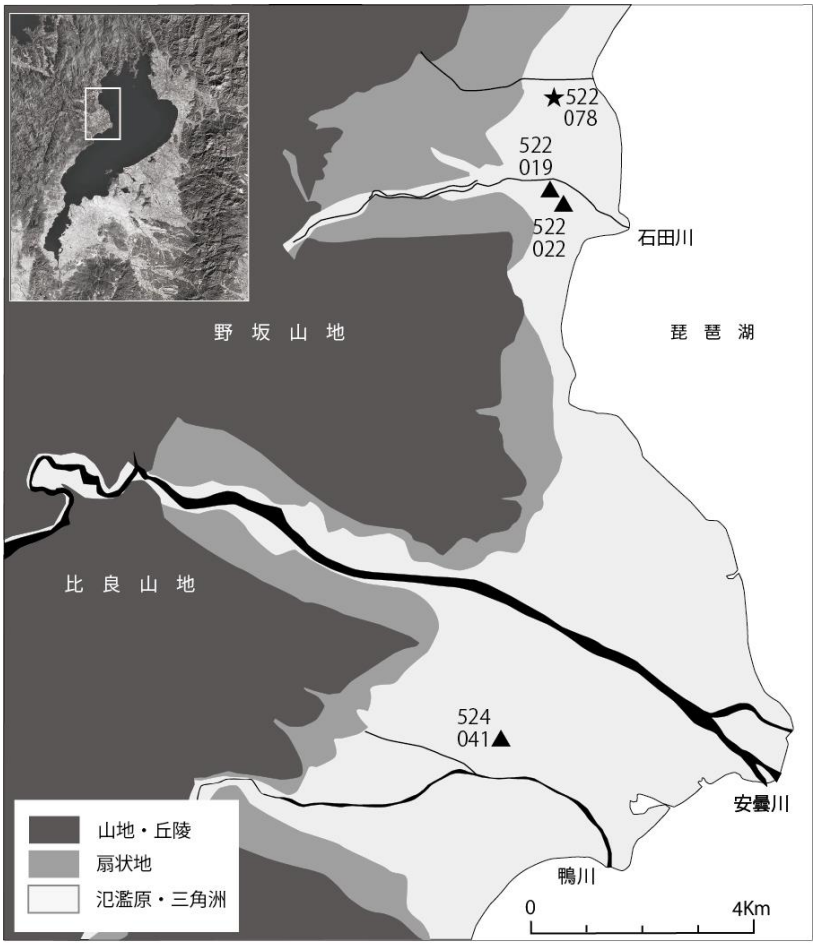
1　湖西地域の方形周溝墓の概観

湖西地域に所在する方形周溝墓の集成表を**表 9** に、その所在位置を**図 42** に示す。**表 9・図 42** の遺跡番号は共通で、遺跡名のあとの数字は遺跡番号を示す。**表 10** には、**表 9** をもとにして規模・形態・群構成の時期別様相をまとめた。各項目については後節で詳述する。

表 9 から、湖西地域において方形周溝墓遺跡は 4 ヶ所、方形周溝墓の総数は 32 基を数える。時期が判定・推定されたものをみると、表 10 のように弥生前期末で 1 基、中期中葉で 9 基、中期後葉で 3 基、後期で 18 基、そして古墳初期で 1 基となる。この中で、弥生前期にさかのぼる北仰西海道遺跡（522-078）は近江で最古の事例として、近江での方形周溝墓の受容を考えるうえで貴重である。

この地域の方形周溝墓遺跡の分布は**図 42** に示すように、石田川流域と安曇川・鴨川流域に偏在する。他の弥生遺跡もほぼこの地域に偏在する。

このように、湖南・湖東・湖北地域と比べて方形周溝墓遺跡が少なく、したがって方形周溝墓基数も極端に少ない。竪穴建物・掘立柱建物遺構や遺物包含層もふくめた弥



【大津市】522-019 高田館　522-020 弘川 B　522-078 北仰西海道　524-041 南市東
【各遺跡における方形周溝墓の初現期】
★弥生前期　◆弥生中期前葉　●弥生中期中葉　▲弥生中期後葉　■弥生後期
□古墳初期　○古墳中期

図 42　湖西地域の方形周溝墓遺跡分布

表 9　湖西地域の方形周溝墓集成

遺跡番号		遺跡名	遺跡所在地		時期	残存規模（台状部）						形　態					群構成						遺物	備考
						小	中	大	特大	不明	計	方形	円形	前後	不定	計	A	B1	B2	C1	C2	D		
522	78	北仲西海道	滋賀県	高島市	Ⅰ	1					1	1				1								
					Ⅱ						0					0								
					Ⅲ	9					9	9				9	1							
					Ⅳ	0					0	0				0								
					Ⅴ	4					4	4				4								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
522	19	高田館	滋賀県	高島市	Ⅱ						0					0								
	20	弘川B			Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	1	1				2	2				2								2号:14m
					Ⅴ						0					0								
					庄内						0					0								
					布留						0					0								
					不明						0					0								
524	41	南市東	滋賀県	高島市	Ⅱ						0					0								
					Ⅲ						0					0								
					Ⅳ	1					1	1				1								
					Ⅴ	14					14	13			1	14		1						
					庄内	1					1	1				1								
					布留						0					0								
					不明						0					0								

規模（台状部辺）：小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：方形・円形・前方後方形　　群構成：A 列状配置、B 集合配置、C 塊状配置、D 弧状配置

表 10　湖西地域の方形周溝墓の規模・形態・群構成の時期別様相

			方形周溝墓の規模（基数）				方形周溝墓の形態（基数）				群構成の配置状態（遺跡数）					
							方形	円形	前後	不定	列状	集合		塊状		その他
		土器編年	小	中	大	特大	A	B	C		A	B1	B2	C1	C2	D
弥生前期		Ⅰ	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生中期	前葉	Ⅱ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生中期	中葉	Ⅲ	9	0	0	0	9	0	0	0	1	0	0	0	0	0
弥生中期	後葉	Ⅳ	2	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生後期		Ⅴ	18	0	0	0	17	0	0	1	0	1	0	0	0	0
古墳初期		庄内	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
古墳前期		布留	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

規模（台状部辺）：小（～10m）・中（～15m）・大（～20m）・特大（20m～）　形態：前後＝前方後方形

生時代の遺跡そのものが少なことから考えて、方形周溝墓遺跡も少ないことが実態であろう。

2　方形周溝墓の規模・形態

高田館遺跡（522-019）で中規模（14m）の方形周溝墓 1 基が検出されているが、他の遺跡ではすべて小規模の方形周溝墓群で構成されている。また、方形周溝墓の出現期から終末期をとおして通例の方形周溝墓の形態を呈し、その多様化はみられない。この地域では方形周溝墓遺跡・方形周溝墓基数が少ないので、規模の大小よりも方形周溝墓そのものの存在に希少価値があるといえる。

3　方形周溝墓群の事例観察

この地域では墓群の事例は少ないが、10 数基以上の墓群が存在する遺跡を対象として、時期を追って墓域での墓群の形成過程および群構成を検討する。

（1）北仲西海道（きたげにしかいどう）遺跡（522-078）**図 43**　弥生前期末～弥生後期

この遺跡はすでに第 2 章でもふれたが、ここでは墓域の状況と集団との関連について検討しておく。この遺跡では縄文晩期中葉前半と考えられる地震跡（噴砂跡）が検出されている。この噴砂跡を切り込んで土壙墓・土器棺墓が造られているので、地震の後に墓群の形成がはじまったといえる。その後、縄文晩期をとおして土壙墓 250 基以上、土器棺墓 90

基以上からなる集団墓が形成される。数基の墓からなる小群が環帯状に配置されており、小群に対応する複数の集団の存在が想定されている（葛原秀雄 1987）。弥生前期末には先行の土壙墓・土器棺墓を切って方形周溝墓（SX5）が出現し、さらに弥生中期中葉にSX6～14、弥生後期にSX2～4が造墓される（SX1 造墓時期は不明）。このように、縄文晩期の土壙墓・土器棺墓（従来墓）からなる集団墓の墓域に弥生前期末には方形周溝墓が出現する状況にあり、弥生前期前半には造墓活動が一旦途絶えるものの、この地が墓域として認知されていたのであろう。

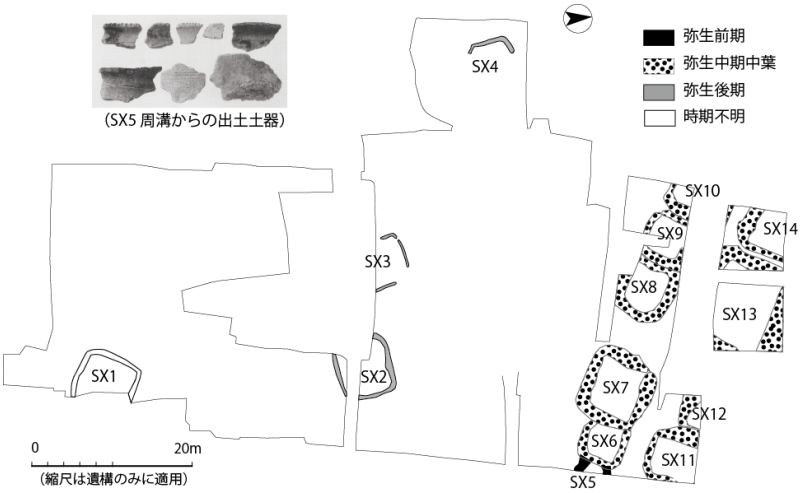


図 43　北仰西海道遺跡遺構図

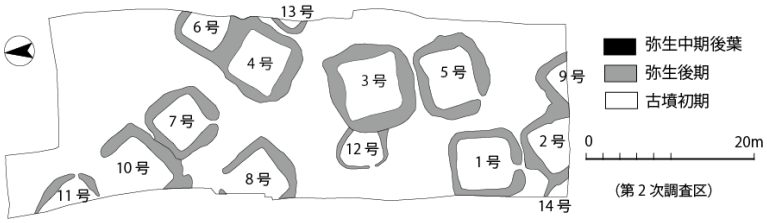


図 44　南市東遺跡遺構図

弥生前期末から中期中葉にかけての方形周溝墓群では軸方位や空閑地に着目すると、小群（SX5～7、SX8～10、SX11・12、SX13・14）を抽出できる。これらの群構成は列状配置（形態 A）をとり、小群を構成する各集団の紐帯意識を示しているといえる。これに対して、後期になると方形周溝墓は散在している。集団内での紐帯意識以上に個人の顕示意識が強くなるという傾向をあらわしているのではないか。

（2）南市東遺跡（524-041）**図 44**　弥生中期中葉～古墳初期

南市東遺跡は JR 安曇川駅の東方にひろがる、安曇川と鴨川との間の微高地に所在する。ここでは方形周溝墓 16 基が検出され、弥生中期末 1 基、後期 14 基、古墳初期 1 基と推定されている。ほぼ同規模の方形周溝墓が軸方位をそろえ、数基を単位として小群を構成している（集合配置 B1）。調査区域内では 3 小群（1・3・5 号、4・6・13 号、7・8・10・11 号）が抽出できる。

ところで、同じく安曇川により造成された沖積平野の北部の湖岸には、弥生後期の遺跡群としてよく知られた針江南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡が存在する。これらは南北につらなる一連の遺跡で、大溝で画された環濠集落を形成していたと考えられている。この環濠の外側に木棺墓 8 基が検出されているが、方形周溝墓の埋葬施設ではないことも確認されている（林博通 1998）。このように、弥生後期の環濠集落が形成されているが、墓制は従来墓も採用されているとみられる。

（3）高田館遺跡（522-019）・弘川Ｂ遺跡（522-020）　弥生中期後葉

石田川右岸に位置する高田館遺跡（522-019）では弥生中期後葉の中規模（14m）の方形周溝墓１基が、弘川Ｂ遺跡（522-020）では弥生中期後葉の小規模（8m）の方形周溝墓１基が検出されている。また、弘川Ｂ遺跡（522-020）では方形周溝墓に近接して同時期の木棺墓１基も検出されており、従来墓と方形周溝墓が混在した墓域であったといえる。これらの遺跡は近接する遺跡であり、同じ生活圏に属していたと考えられる。

4　方形周溝墓からみた湖西地域の社会像

この地域における方形周溝墓からみた画期は、北仰西海道遺跡（522-078）にみられるように、従来墓からなる墓域に方形周溝墓が出現する弥生前期末をあげることができる。しかし、その後は単発的かつ局地的に造墓されるだけで、方形周溝墓群とよべるほどの墓域は形成されず、方形周溝墓という墓制が湖西地域にひろく定着した形跡は現資料からはたどれない。また、弥生後期に入っても他の地域でみられるような規模の拡大や形態の多様化がみられない。この地域では、方形周溝墓という墓制そのものに価値をおかない社会であったともいえるのではないか。

おわりに

湖東・湖北・湖西地域の方形周溝墓の集成・分析をとおして当時の社会像を検討した。方形周溝墓という墓制からみた社会の変遷は地域により大きく異なるが、後章で近江内での交流および他の地域との交流について論じたい。

【註】

（1）近江八幡市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986『県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書 3－浅小井（高木）遺跡－』

（2）滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2002『川ノ口遺跡』（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』29－3）

（3）滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1981『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ　－伊香郡余呉町所在黒田長山古墳群－』の図 284 を引用した。本研究では桜内遺跡と黒田長山遺跡を一連の遺跡として観察・検討・説明するため、便宜上、一部の呼称を改変した。各報告書では、方形周溝墓北群は「黒田長山遺跡」、方形周溝墓南群は桜内遺跡調査区「77C・78e・78f」、竪穴建物群北群は同「79」、竪穴建物群南群は同「80・81g」、そして竪穴建物群西群は同「77b・77・81h」と記述されている。

（4）方形周溝墓を覆うように古墳が築造されているにもかかわらず、方形周溝墓の埋葬施設が良好な形で遺存している。方形周溝墓を山塊の斜面に造成する場合には、埋葬施設（土壙）が深く掘りこまれているということであり、たとえば、A 号墓（方形周溝墓）と 3 号墳（円墳）の検出状況からも理解される。

【参考文献】

近江町史編さん委員会 1989「第１編　古代」『近江町史』近江町役場
葛原秀雄 1987「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第７集
禰宜田佳男 2011「墓地の構造と階層社会の成立」『弥生時代（下)』(『講座日本の考古学』6）青木書店
林博通 1998『古代近江の遺跡』サンライズ出版
丸山雄二 1994「第Ⅴ章　塚町遺跡の方形周溝墓に関する一考察」『塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ』(『長浜市埋蔵文化財調査資料』第８集）長浜市教育委員会
御嶽貞義 2011「コシの弥生墓制」『日本海側の弥生墓制』福井県鯖江市教育委員会
宮崎幹也 1993「西円寺遺跡」(『近江町文化財調査報告書』第 16 集）近江町教育委員会

【発掘調査報告書】　湖東・湖北・湖南地域

報告書の題名が発行機関･年度により統一されていないが､原書通りの題名表記とした。方形周溝墓の遺構図は当該報告書に記載された図をトレース、あるいは記述にもとづいて筆者が一部を改変し作成したものである。

【あ】

市子遺跡

・蒲生町教育委員会 1990『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ　市子遺跡』(『蒲生町文化財資料集』(9))

・蒲生町教育委員会 1991『市子遺跡発掘調査報告書』(『蒲生町文化財資料集』(14))

・蒲生町教育委員会 1994『町内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』(『蒲生町文化財資料集』(18))

・東近江市教育委員会 2009「第 3 節　市子遺跡」『国営日野川農業水利事業に伴なう調査』(『東近江市埋蔵文化財調査報告書』第 11 集)

埋塚遺跡

・近江町教育委員会 1991『埋塚遺跡 2』(『近江町文化財調査報告書』第 9 集)

内堀遺跡

・八日市市教育委員会 1983『内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』(『八日市市文化財調査報告』2)

内池遺跡

・滋賀県文化財保護協会 1983『滋賀文化財便り』No.74

大戌亥遺跡

・長浜市教育委員会 2002『大戌亥遺跡・鴨田遺跡調査報告書』(『長浜市埋蔵文化財調査資料』第 40 集)

大東遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1994『大東遺跡Ⅲ・八反田遺跡・中町田遺跡　長浜市今川町・七条町・八条町所在』(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』21－1)

息長古墳群（※法勝寺遺跡関連として）

・近江町教育委員会 2000『息長古墳群 1－遺跡詳細分布調査報告書－』

【か】

柿堂遺跡

・能登川町教育委員会 1987 『柿堂遺跡』(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 8 集)

神ノ木遺跡

・彦根市教育委員会 1997 『神ノ木遺跡』(『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第 30 集)

鴨田遺跡

・長浜市教育委員会 1988『十里遺跡・鴨田遺跡調査』(『長浜市埋蔵文化財調査資料』第 4 集)

・長浜市教育委員会 2002『大戌亥遺跡・鴨田遺跡調査報告書』(『長浜市埋蔵文化財調査資料』第 40 集)

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1994『鴨田遺跡他・在士北遺跡』(『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書』10-3)

川ノ口遺跡

・滋賀県埋蔵文化財センター1999『寒藪・川ノ口遺跡』(『滋賀埋文ニュース』第 236 号)

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2002『川ノ口遺跡』(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』29-3)

勧学院遺跡

・近江八幡市教育委員会 1985『勧学院遺跡発掘調査報告書』(『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書』8)

・近江八幡市教育委員会 2014『勧学院遺跡　5 次調査概要報告書』(『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書』50)

寒藪遺跡

・滋賀県埋蔵文化財センター1999『寒藪・川ノ口遺跡』(『滋賀埋文ニュース』第 236 号)

北仰西海道遺跡

・今津町教育委員会 1985『今津町文化財調査報告書』第４集

・今津町教育委員会 1986『今津町文化財調査報告書』第５集

・今津町教育委員会 1987『今津町文化財調査報告書』第７集

・今津町教育委員会 1989『今津町内遺跡発掘調査概要報告書』

黒田 B 遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2003『黒田 B 遺跡　伊香郡木之本町黒田』(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』30-1)

黒田長山遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1981『北陸自動車道関連遺跡　発掘調査報告書Ⅵ　－伊香郡余呉町所在黒田長山古墳群－』

越前塚遺跡

・長浜市教育委員会 1988『越前塚遺跡発掘調査報告書』(『長浜市埋蔵文化財調査資料』第 5 集)

【さ】

坂口遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1975『坂口遺跡発掘調査報告書』

桜内遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1989『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅺ　－伊香郡余呉町桜内遺跡－』

品井戸遺跡

・彦根市教育委員会 1981 『品井戸遺跡』(『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第 2 集)

・彦根市教育委員会 1985 『竹ケ鼻廃寺・品井戸遺跡（第 4 次)』(『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第 8 集)

下沢遺跡

・彦根市教育委員会 2012 『下沢遺跡』(『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第 51 集)

信願寺遺跡・中沢遺跡・千僧供廃寺遺跡（勧学院遺跡・馬淵遺跡にふくめる）
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2001『千僧供廃寺遺跡発掘調査報告書』(『白鳥川中小河川改修工事関連遺跡調査報告』3)

【た】

大中の湖南遺跡
・安土城考古博物館 2015『よみがえる弥生にムラ』

鷹飼遺跡
・近江八幡市教育委員会 1990「鷹飼遺跡（第 8 次調査)」『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書』21

高木（浅小井）遺跡
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986『浅小井（高木）遺跡』(『県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査』3)
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1989『浅小井（高木）遺跡』(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』16－2)

高田館遺跡
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1991『一般国道 161 号（湖北バイパス）建設に伴う高田館遺跡』

高月南遺跡
・高月町教育委員会・長浜市教育委員会 2010『高月南遺跡Ⅰ　高月南遺跡 14 次・16 次・17 次調査報告』

塚町遺跡
・長浜市教育委員会 1994『塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ』(『長浜市埋蔵文化財調査資料』第 8 集)
・長浜市教育委員会 1995『地福寺遺跡・塚町遺跡発掘調査報告書』(『長浜市埋蔵文化財調査資料』第 11 集）※第 1 次から 4 次までの調査報告

殿衛遺跡
・能登川町教育委員会 2003 『殿衛遺跡（1 次)』(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 54 集)
・能登川町教育委員会 2005 『殿衛遺跡（2 次)』(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 59 集)
・能登川町教育委員会 2006 『殿衛遺跡（4 次)』(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 61 集)
・能登川町教育委員会 2006 『殿衛遺跡（6 次)』(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 62 集)
・東近江市教育委員会 2010「殿衛遺跡（8 次)」『東近江市埋蔵文化財調査報告書』第 14 集

【な】

中沢遺跡
・東近江市教育委員会 2010「中沢遺跡（19 次)」『東近江市埋蔵文化財調査報告書』第 13 集

・東近江市教育委員会 2014「中沢遺跡（24 次）」『東近江市埋蔵文化財調査報告書』第 25 集
・能登川町教育委員会 1987 『中沢遺跡・信願寺遺跡・善教寺遺跡・伊庭御殿遺跡』（『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 7 集）

なまず遺跡

・愛知川町教育委員会 2002『なまず遺跡－第 4 次なまず遺跡発掘調査報告書－』（『愛知川町埋蔵文化財発掘調査報告書』第 10 集）

西浦遺跡

・能登川町教育委員会 1993『西浦遺跡』（『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 29 集）
・能登川町教育委員会 2002 『西浦遺跡（2 次）石田遺跡 12 次・13 次・14 次・15 次・16 次）』（『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 53 集）

野辺遺跡

・日野町教育委員会 2005 『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第 22 集

【は】

馬場前遺跡

・近江八幡市教育委員会 2016『馬場前遺跡 1 次調査報告書』（『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書』56）

弘川 B 遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1981『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』8－3

日吉遺跡

・八日市市教育委員会 1981『八日市市文化財調査報告』1

福満遺跡

・彦根市教育委員会 1987 『福満遺跡』（『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第 13 集）
・彦根市教育委員会 2008 『福満遺跡Ⅹ・Ⅺ』（『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第 40 集）

法勝寺遺跡・東松戸遺跡・狐塚遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1987『西火打遺跡・狐塚遺跡』（『一般国道 8 号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書』Ⅳ）
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1988『狐塚遺跡・法勝寺遺跡』（『一般国道 8 号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書』Ⅴ）
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1989『奥松戸遺跡』（『一般国道 8 号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書』Ⅵ）
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1990『法勝寺遺跡－坂田郡近江町－』（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』17－1）
・近江町教育委員会 1990『法勝寺遺跡』（『近江町文化財調査報告書』第 6 集）
・近江町教育委員会 1993『西円寺遺跡』（『近江町文化財調査報告書』第 16 集）
・近江町教育委員会 1996『狐塚遺跡発掘調査報告書』（『近江町文化財調査報告書』第 19 集）

法堂寺遺跡

・能登川町教育委員会 1996 『法堂寺遺跡（6・8 次）』（『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第 38 集）

掘南遺跡

・彦根市教育委員会 1992 『堀南遺跡』（『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第 22 集）

【ま】

馬淵遺跡

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1991『馬淵遺跡発掘調査報告書』（『白鳥川中小河川改修工事関連遺跡調査報告』2）

南市東遺跡

・安曇川町史編集委員会 1984『安曇川町史』安曇川町

・安曇川町教育委員会 1979『南市東遺跡発掘調査概報』

【や】

築瀬遺跡

・五個荘町教育委員会 2005『築瀬遺跡Ⅱ（第 2 次・3 次）』（『五個荘町文化財調査報告』43）

横山遺跡

・高月町教育委員会 2008『横山遺跡Ⅰ（七郷遺跡群１）横山遺跡 1 次・2 次・3 次調査報告　報告編・考察編』

第６章　近江における方形周溝墓の受容と展開

はじめに

前章までに近畿・東海地域の弥生前期の方形周溝墓群、近江の各地域の方形周溝墓群の様相を観察・検討し、それらの墓群の様相とその背景にある弥生の社会構造（集団・階層）を考えてきた。本章では各地域での様相を整理し、それらの結果を踏まえて近江全域の視点から、方形周溝墓という墓制がどのように受容され、定着し、衰退したのかを検討し、方形周溝墓からみた近江の弥生社会を考える。

第１節　方形周溝墓の盛衰

第４章・第５章で集成した近江の方形周溝墓の総数は 110 遺跡・1,656 基を数える。**図 45** にはこれらの方形周溝墓遺跡を時期ごとにプロットした。遺跡の新出・消滅や分布の偏りは方形周溝墓集団の動態を反映しているのであろう。**表 11** は墓域としての継続期間を方形周溝墓遺跡ごとに示した。遺跡によっては数時期にわたるものがあれば短期のものもあるが、それらは方形周溝墓集団の造墓活動期間の長短を示している。第３～５章において方形周溝墓の規模・形態・群構成などの様相が地域により大きく異なることをみたが、**図 45・表 11** からみると、その分布・造墓活動期間にも地域性があることがわかる。

ここで、近江における方形周溝墓の盛衰について、**図 45（1）・（2）**の弥生前期末～中期中葉を受容時期、**図 45（3）・（4）**の弥生中期後葉～弥生後期を定着時期、**図 45（5）・（6）**の古墳初期～前期を衰退時期と考えることにする。

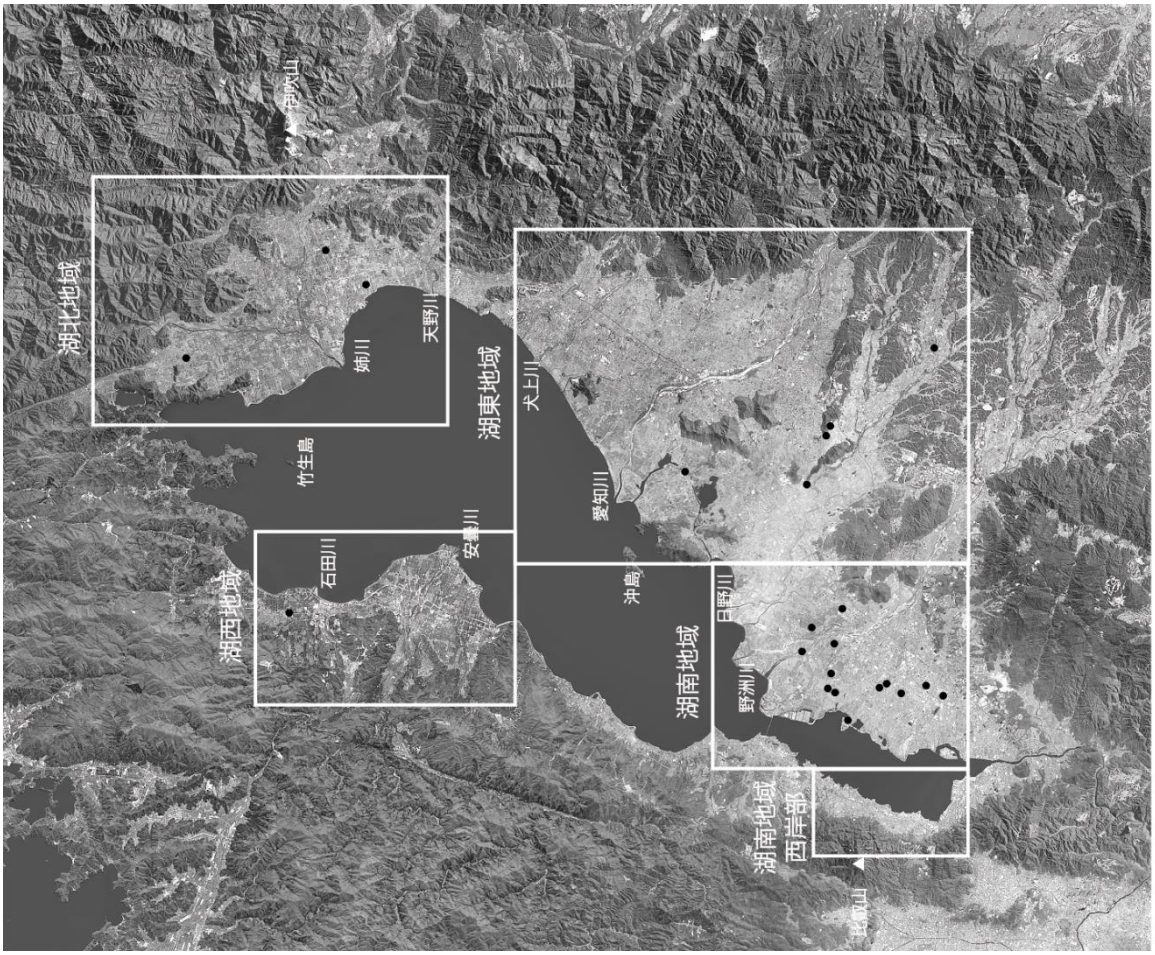
1　方形周溝墓の受容

（1）近江への方形周溝墓の伝搬ルート

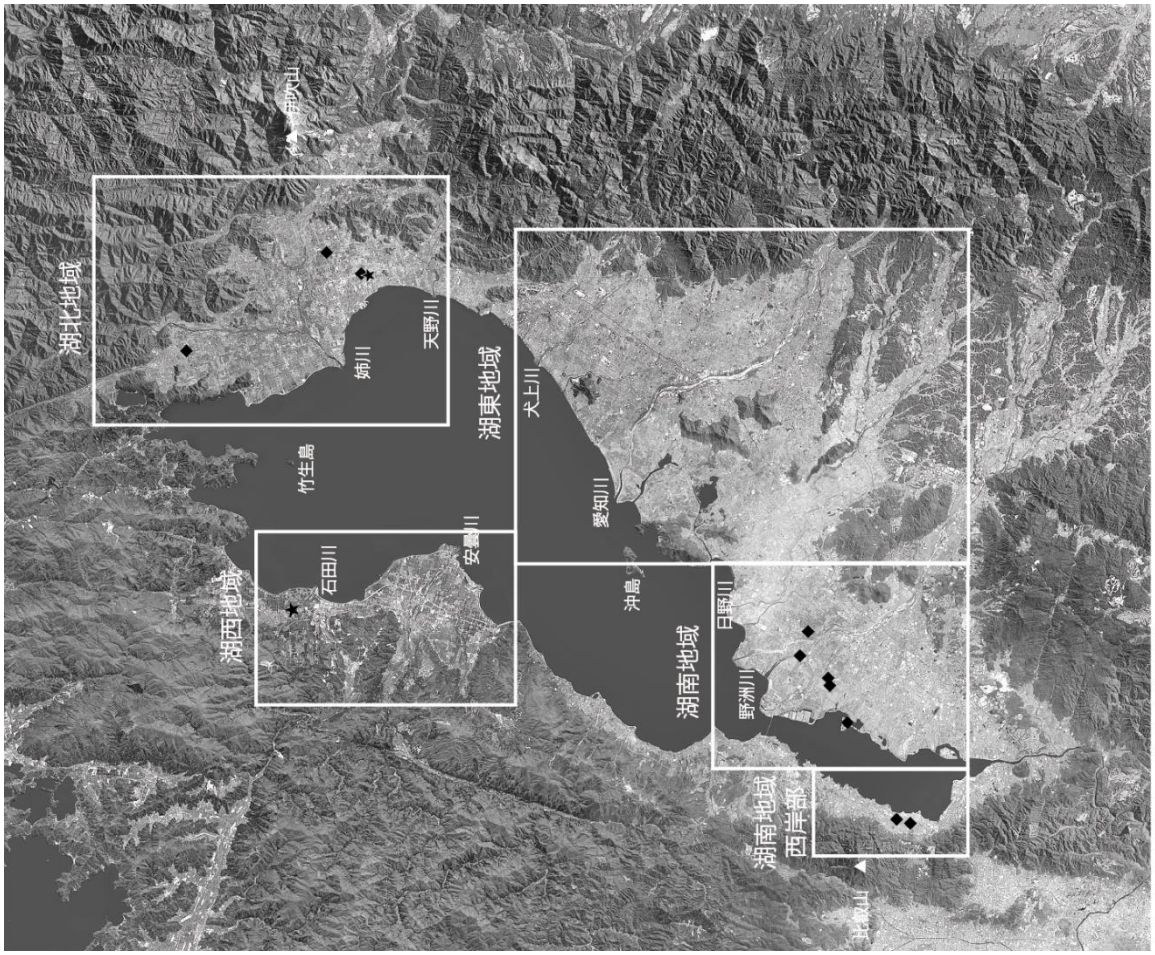
水稲耕作の伝来とともに中国大陸・韓半島での墓制の情報が日本に伝わり、国内において水稲耕作の東漸の過程において各地域で墓制情報の取捨選択がなされ、たとえば近畿・東海地域では方形周溝墓という墓制が創出されたと考えられる（第２章参照）。ここでは、近畿・東海地域で創出された方形周溝墓という墓制が、どのようなルートで近江に伝わったのかを考える。

近江でも湖北地域・湖南地域ではすでに縄文晩期から弥生前期の遺跡（遺物包蔵地をふくむ）において、近畿（主として河内）・東海地域の土器が検出され、近江との間に交流があったことが確認されている（兼康 1990 など）。近江に水稲耕作の伝搬とともに墓制情報がもたらされる素地はできあがっていたのである。

図 46 は近畿・東海地域における弥生前期の方形周溝墓遺跡（つまり日本において最古の方形周溝墓遺跡）をプロットとした（第２章参照）。近江では弥生前期末の塚町遺跡 12

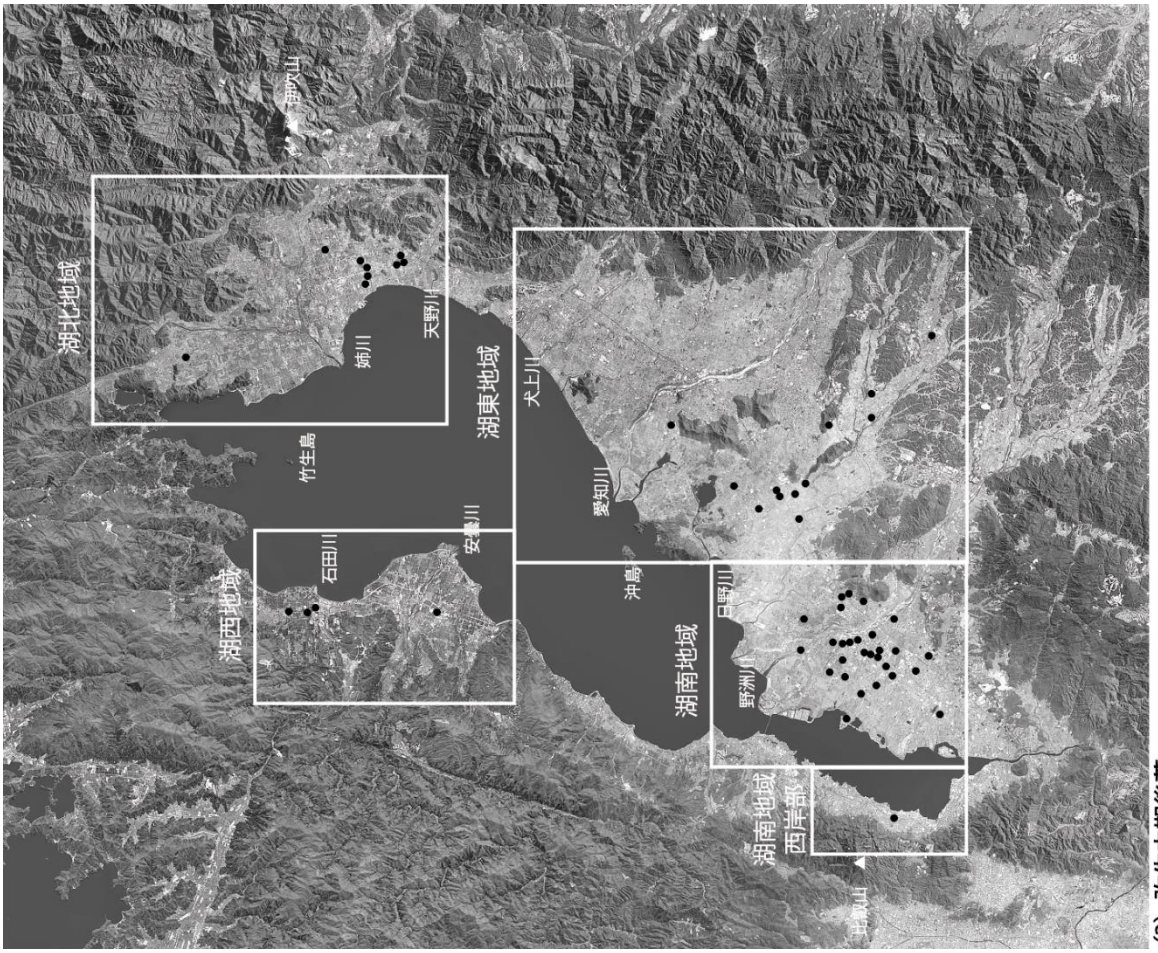


(2) 弥生中期中葉

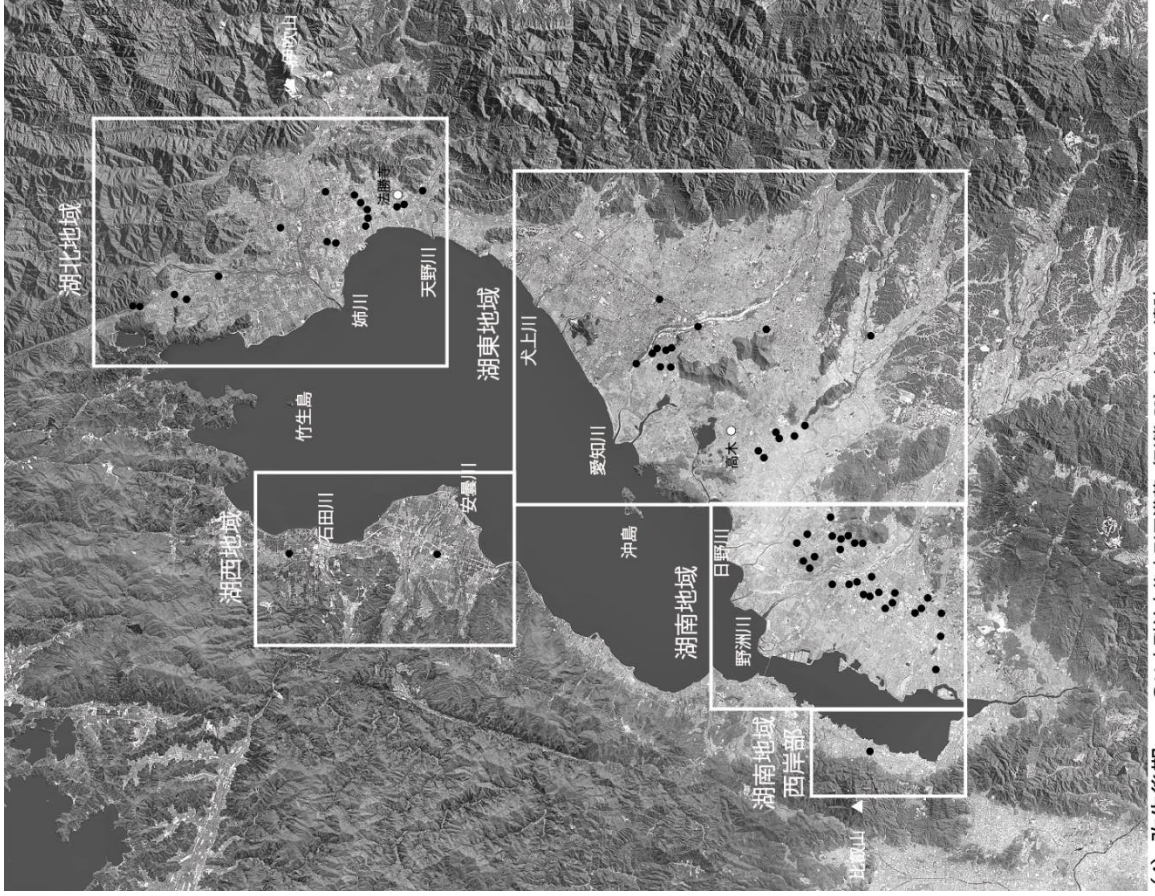


(1) 弥生前期末～弥生中期前葉

図 45　方形周溝墓遺跡の時期別分布（1/3）

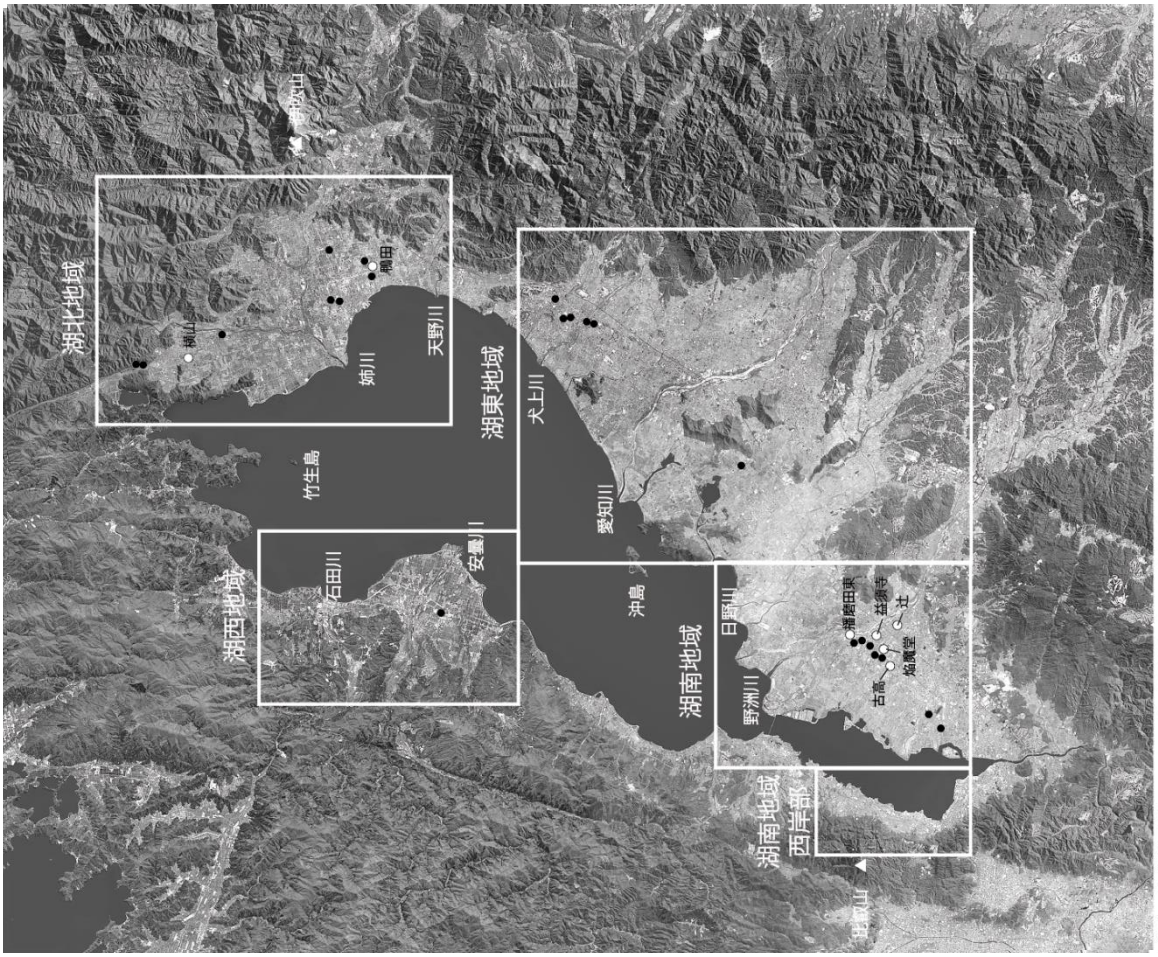


(3) 弥生中期後葉

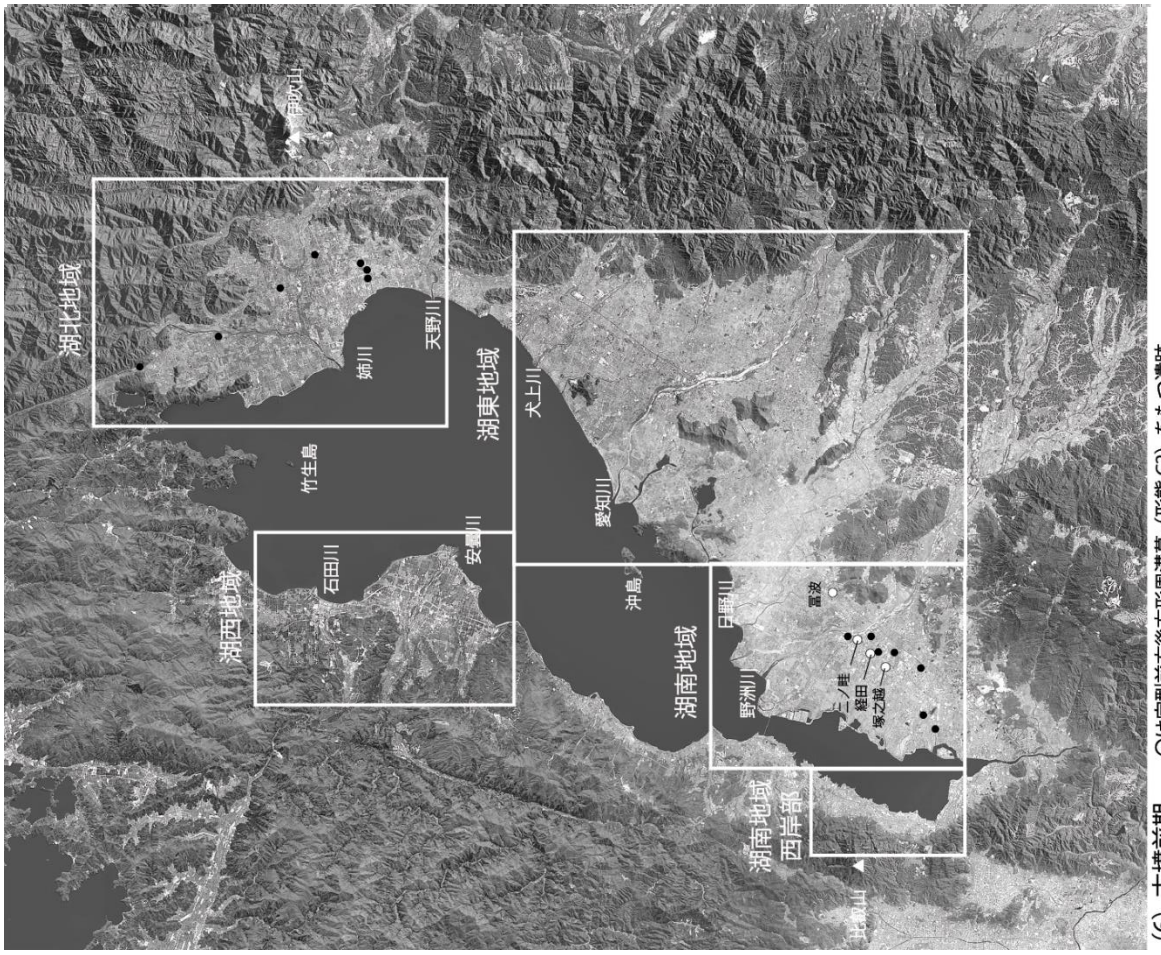


(4) 弥生後期　○は定型前方後方形周溝墓（形態 C2）をもつ遺跡

図 45　方形周溝墓遺跡の時期別分布（2/3）



(5) 古墳初期　○は定型前方後方形周溝墓（形態 C2）をもつ遺跡



(6) 古墳前期　○は定型前方後方形周溝墓（形態 C2）をもつ遺跡

図 45　方形周溝墓遺跡の時期別分布（2/3）

表 11　方形周溝墓遺跡の継続期間

遺跡番号		遺跡名	所在地	弥生					古墳	
				前期	中期			後期	初期	前期
					前葉	中葉	後葉			
【湖南地域】										
201	112	坂口	大津市					■	■	
201	119	穴太	大津市					■	■	
201	123	滋賀里	大津市		■		■			
201	141	南滋賀	大津市		■					
206	20	柳	草津市					■		
206	33	中畑	草津市			■				
206	42	門ケ町	草津市			■			■	
206	88	中兵庫	草津市						■	
206	89	御倉	草津市					■	■	■
206	90	襖	草津市				■		■	■
206	98	宮前	草津市			■				
206	122	烏丸崎	草津市		■	■	■			
206	124	花摘寺廃寺	草津市						■	
206	139	北太田(上寺)	草津市			■	■			
207	1	経田	守山市					■	■	■
207	4	ニノ畦横枕	守山市				■			■
207	6	吉身西	守山市				■			
207	18	益須寺	守山市					■	■	■
207	38	焔魔堂	守山市				■	■	■	■
207	44	伊勢	守山市					■	■	■
207	47	古高	守山市						■	
207	53	塚之越	守山市					■	■	■
207	62	金森東	守山市				■	■		
207	73	欲賀西	守山市				■			
207	87	赤野井浜	守山市			■				
207	88	赤野井	守山市				■		■	
207	90	弘前	守山市		■	■				
207	92	寺中	守山市		■	■	■			
207	94	石田	守山市				■			
207	100	長塚(小島)	守山市			■	■		■	
207	104	播磨田東	守山市						■	■
207	106	酒寺	守山市				■	■	■	
207	108	八ノ坪・今市	守山市				■			
207	125	服部	守山市		■	■	■			
208	10	総	栗東市					■	■	
208	12	霊仙寺	栗東市				■			
208	15	十里	栗東市			■				
208	42	辻	栗東市						■	
208	54	坊袋	栗東市				■	■		
208	75	小柿	栗東市					■		■
208	76	中沢	栗東市				■	■		
342	2	小比江	野洲市		■	■	■	■		
342	10	湯ノ部	野洲市				■	■	■	
342	24	木部	野洲市						■	
342	27	虫生	野洲市					■		
342	30	八夫	野洲市					■	■	
343	35	中北	野洲市					■		
343	43	辻町	野洲市					■		
343	55	冨波	野洲市							■
343	56	冨波東	野洲市						■	
343	58	五之里	野洲市					■	■	
343	81	十八田	野洲市						■	
343	84	中畑古里	野洲市				■	■		
343	85	市三宅東	野洲市			■	■	■		
343	101	下々塚	野洲市					■	■	
343	102	小篠原	野洲市				■	■	■	
343	104	久野部	野洲市				■	■		

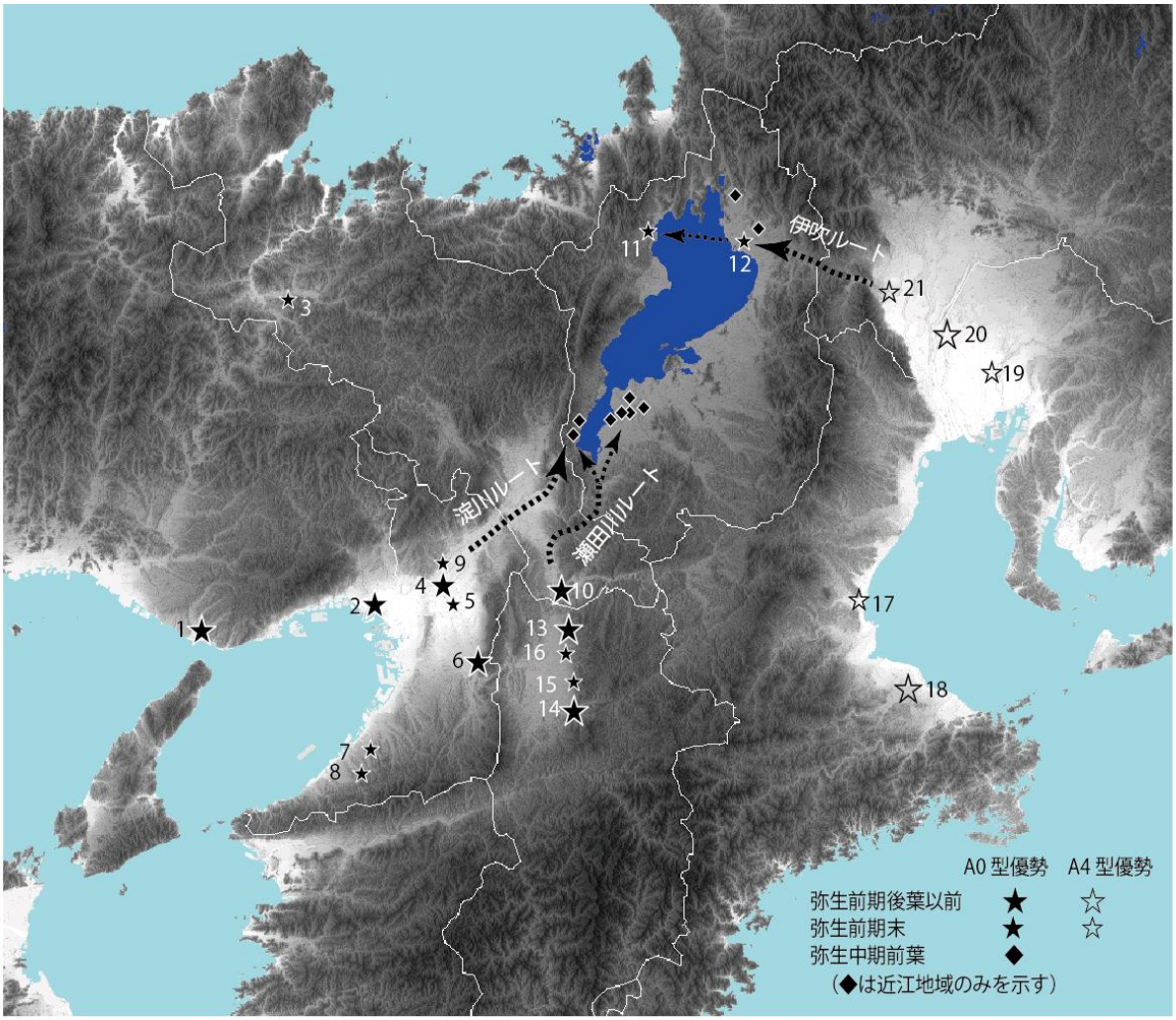
遺跡番号		遺跡名	所在地	弥生					古墳	
				前期	中期			後期	初期	前期
					前葉	中葉	後葉			
【湖東地域】										
202	12	品井戸	彦根市						■	
202	15	福満	彦根市						■	
202	44	下沢	彦根市						■	
202	123	神ノ木	彦根市						■	
202	131	掘南	彦根市						■	
204	99	馬場前	近江八幡				■			
204	115	森ノ前	近江八幡					■		
204	120	馬淵	近江八幡			■	■	■		
204	122	勧学院	近江八幡				■	■		
204	187	寒藪	近江八幡				■	■		
204	189	川ノ口	近江八幡				■	■		
204	194	鷹飼	近江八幡				■			
204	206	高木	近江八幡				■	■		
381	14	小中	近江八幡						■	
381	27	大中の湖	近江八幡			■	■			
205	15	五反田	東近江市			■				
205	22	内堀	東近江市			■	■			
205	66	日吉	東近江市					■		
382	28	野瀬	東近江市				■			
382	37	市子	東近江市				■	■		
402	73	簗瀬	東近江市					■		
403	12	柿堂	東近江市					■		
403	13	今安楽寺	東近江市					■		
403	26	殿衛	東近江市					■		
403	34	信願寺	東近江市					■		
403	76	法堂寺	東近江市					■		
403	77	中沢	東近江市					■		
403	95	西浦	東近江市				■	■		
383	31	野辺	日野町			■				
383	36	内池	日野町				■			
424	15	なまず	愛荘町					■		
【湖北地域】										
203	22	塚町	長浜市	■	■	■	■	■		
203	29	大辰巳	長浜市				■	■	■	■
203	37	大戌亥	長浜市				■	■	■	■
203	38	鴨田	長浜市				■	■	■	■
203	66	大東	長浜市					■		
203	80	越前塚	長浜市		■	■	■	■	■	■
203	135	十里町	長浜市					■	■	
203	132	列見町	長浜市					■	■	
482	16	五村	長浜市					■	■	■
501	59	高月南	長浜市					■	■	■
501	130	横山	長浜市		■	■	■	■	■	
502	42	黒田長山	長浜市					■	■	
502	43	桜内	長浜市					■	■	■
502	47	黒田B	長浜市					■	■	
464	2	法勝寺	米原市				■	■		
464	3	狐塚	米原市				■	■		
464	39	奥松戸	米原市				■	■		
464	98	埋塚	米原市					■		
【湖西地域】										
522	78	北仰西海道	高島市	■		■	■	■		
522	19	高田館	高島市				■			
522	20	弘川B	高島市				■	■		
524	41	南市東	高島市				■	■	■	

（遺跡名の後の番号は図中番号）・北仰西海道遺跡 11 の事例が初現であり、湖北地域・湖西地域北部に所在する。弥生中期前葉には引き続き湖北地域において方形周溝墓遺跡があらわれ、湖南地域（湖南地域西岸もふくむ）にも新たにあらわれる。

一方、近江外の弥生前期の方形周溝墓の状況をみると、近畿地域では河内平野・大和盆地に弥生前期中葉から後葉にかけて多くの遺跡があらわれている。東海地域では濃尾平野にも同時代の方形周溝墓が所在する。また、近江から離れるが、北近畿地域では弥生前期末には丘陵上に台状墓（京都府京丹後市・七尾遺跡）や方形周溝墓（兵庫県豊岡市・駄坂舟隠遺跡 3）があらわれるが、その後、台状墓・四隅突出墓などの独自の墓制を展開させる（福井県鯖江市教育委員会 2011 など）。

近江内外のこのような状況から、方形周溝墓の伝搬ルートとして河内・南山城方面から淀川・木津川・瀬田川に沿って北行するルート（淀川ルート・瀬田川ルート）、尾張・美濃方面から伊吹山南麓を経て西行するルート（伊吹ルート）が想定できるであろう。ただ、湖西地域北部（北仰西海道遺跡 11）への伝搬は陸路より湖上を経由したと考えた。湖上交通についは、湖岸沿いの縄文後期・晩期の遺跡（尾上浜遺跡・松原内湖遺跡・長命寺遺跡・元水茎遺跡・赤野井湾遺跡・入江内湖遺跡）から丸木舟が出土しており、また、滋賀県文化財保護協会の主導で丸木舟での湖上交通が実験的に復元・確認されている（横田 1990、滋賀県文化財保護協会 2007）。

このような伝搬ルートを想定したが、東海地域と湖北地域（塚町遺跡 12・北仰西海道遺跡 11）では周溝形態が異なる。すなわち、弥生前期において東海地域では周溝部の隅に陸橋を設ける（いわゆる隅切れ型）形態 A4 であるのに対して、湖北地域・湖西地域北部では陸橋部を設けない形態 A0 であり、近畿地域に多くみられる周溝形態をもつ。このことは、方形周溝墓の情報をもとに近江の在地集団が方形周溝墓を造りはじめたのか、移住してきた集団が造ったのかという点もふくめて、今後の課題である。



1 玉津田中　2 東武庫　3 駄坂・舟隠　4 東奈良　5 古川　6 田井中　7 四ツ池　8 池上
9 安満　10 稲葉　11 北仰西海道　12 塚町　13 平城宮跡右馬寮　14 坪井・大福　15 多
16 伴堂東　17 松ノ木　18 コドノ B　19 朝日　20 山中　21 荒尾西

図 46　近江地域への方形周溝墓の伝搬ルート

（2）近江での方形周溝墓の伝搬

湖南・湖北地域にそれぞれ異なるルートで伝搬した方形周溝墓がどのように近江内部に拡散したのだろうか。**図 45（2）**の弥生中期中葉には、湖南地域では弥生中期前葉の方形周溝墓遺跡を中心にして野洲川流域にひろがり、さらに扇状地端に沿って南部へとひろがっている。湖北・湖西地域では遺跡数は増えないが、各遺跡で継続した造墓活動が続く。

これに対して方形周溝墓の空白地域であった湖東地域での方形周溝墓の出現は弥生中期中葉であり、他地域と比べてやや遅れる。その分布も稲作の適地と考えられる湖岸近くの低湿地帯よりも、日野川上・中流域の小規模な沖積平野により多く分布する。湖南・湖北・湖西地域では、方形周溝墓の初現がまず琵琶湖岸の近くにみられるのとは状況が異なるようである。ただし、これはあくまでも方形周溝墓遺跡の有無であり、この地域の湖岸付近にはすでに弥生前期前葉の遺跡（竪穴建物跡など）があり、人々の生活が厳然としてあったことが確認されている。

では、湖東地域への方形周溝墓の伝搬はどのように考えられるだろうか。**図 46** のように伊勢湾岸には弥生前期から中期前葉の遺跡（三重県津市・松ノ木遺跡 17 など）が知られている。ただ、この遺跡から鈴鹿山地を越えて近江に向かえば野洲川上流域に入ることができるが、日野川上流域は筋違いのルート上にある。また、湖北地域から湖岸沿いを南下して伝わったとすれば、その伝搬ルート上にある犬上川・愛知川流域の扇状地にもこの時期の方形周溝墓遺跡が存在するはずであるが、その痕跡はみられない。このような状況から、湖東地域へは湖南地域から伝搬したとみるのが妥当であり、その実態は湖南地域の方形周溝墓集団が湖岸付近の稲作適地をさけて、日野川上・中流域にその墓制を持ち込んだのではないか。その背景には湖岸付近にいた湖東地域の在地集団が方形周溝墓という墓制を採用しなかったということではないか。

2　方形周溝墓の定着

（1）方形周溝墓の定着とは

図 45（3）・（4）のように地域差はあるものの、ほぼ近江全域にわたり方形周溝墓遺跡がみられ、この墓制が定着したことをうかがわせる。ただ、微視的には分布の中心が移動したり、新たな分布がみられたりする。湖南地域では氾濫原から扇状地へ、さらに高燥地へと分布が移動している。湖東地域では日野川下流域にも点在し、さらに愛知川下流域に新たに大きな分布があらわれる。湖北・湖西地域では先行の分布の中心周辺にも小規模な分布があらわれる。とりわけ湖東地域では、方形周溝墓の墓制が湖南地域から北上し、また湖北地域からは南下するように、その空白地域が埋められていく様子がわかる。

このように、方形周溝墓という墓制が定着している状況にあるが、その具体的な現象として墓域と居住域（集落）との関係についてみていきたい。当然墓域が単独に存在するわけではなく必ず近くに居住域があるわけであるが、それらが対応して検出される事例は多くはない。そこで、多くの場合、方形周溝墓遺跡が検出されると近隣にある同時期の集落遺跡（建物跡遺構をもつ遺跡）を居住域と想定するようである。

居住域と墓域のあり様は１対１の関係が通例のようであり、たとえば湖北地域に所在する鴨田遺跡（203-038）は弥生中期後葉から古墳前期まで墓域として機能するが、居住域

としては近接する大戌亥遺跡（203-037）であると考えられている（林博通 1998）。これに対して、複数の居住域（集落）が墓域を共有することもある。すでに論じたように、湖南地域の服部遺跡（207-125）は弥生中期前葉から中期後葉にかけての大墓域であり、近接する複数の居住域の共同墓地と考えられるのである（第３章参照）。もちろん、この共同墓地は同一出自集団だけのものではなく、近隣の集団、いうなれば地縁集団の墓域である。このように、方形周溝墓という墓制を前提に共同墓地を営むほど、方形周溝墓が定着しているといえる。また、弥生中期後葉の環濠集落の下之郷遺跡（守山市）では環濠の内側は居住域のみであり、そこには墓域を造らない。周辺に所在する同時代の方形周溝墓遺跡である吉身西遺跡（207-006）・金森東遺跡（207-062）・酒寺遺跡（207-106）が下之郷遺跡の墓域と考えられている（伴野幸一 1990）。つまり一つの居住域に対して複数の墓域が形成され、方形周溝墓という共通の墓制でつながる集団が居住域を同じくするほどに、方形周溝墓が定着しているとみることができるであろう。このように、出自が異なる集団によって造られた方形周溝墓という墓制で社会が構成されている。

（2）方形周溝墓体制の確立

それでは、このような方形周溝墓が定着した社会構造（集団・階層）はどのようになっていたのだろうか。

方形周溝墓の群構成の顕在化は、方形周溝墓が定着した社会において地縁集団の中での各出自集団の顕示意識のあらわれである。さらに、規模の大型化と形態の多様化はそれらの集団間の中から特定集団が顕在化したことを示すといえる。社会の序列化・統制化を明示する装置としての役割を方形周溝墓が担っていたといえるのではないか。これは、方形周溝墓体制とよぶべき社会体制ができあがっていたことを示唆しているのであろう。

3　方形周溝墓の衰退

（1）特定集団から個人の析出

図 45（5）・（6）にみられるように、方形周溝墓遺跡の数が急激に減少することをここでは「衰退」とよんでいる。方形周溝墓遺跡数の減少とともに顕著な兆候として、特大・大規模方形周溝墓や定型前方後方形周溝墓（形態 C2）の出現・増加がある。つまり、多様化した方形周溝墓の形態が前方後方形周溝墓に集約されるのである。とくに、定型前方後方形周溝墓は、湖東地域では**図 45（4）**の高木遺跡（204-206）、湖北地域では法勝寺遺跡（464-002）ですでに弥生後期末に出現しはじめ、湖南地域では**図 45（5）**のように古墳初期に入ると一挙に出現しその分布もひろがる。

ところで、このような特大規模の方形周溝墓や前方後方形周溝墓の墓域でのあり様を観察すると、二通りのケースがみられる。上述の法勝寺遺跡（464-002）では前方後方形周溝墓 SDX23 を核として小規模な方形周溝墓が軸方位をそろえた集合配置（配置 B2）をとる。このケースは湖南地域の前方後方形周溝墓のあり様と同じである。これに対して、湖東地域の高木遺跡（204-206）の前方後方形周溝墓 SX01 はその周囲に溝をめぐらせて他の墓群と区分けしている。この二通りのケースは前方後方形周溝墓という特異な形態によってその被葬者個人を特別視する点では同じことを意図しているが、後者は墓域での埋葬位置においても他の人物からは隔絶していることを表明しているようにみえる。

このような状況から、特大・大規模方形周溝墓や定型前方後方形周溝墓の出現・増加は、地縁集団（複数の出自集団）から特定集団が抜け出し、さらにその特定集団から「特別な人」が抜け出したことを示していると推定できる。また、各地において特定集団の中から析出した「特別な人」の間でもすでに階層差が発生しており、高木遺跡（204-206）の前方後方形周溝墓 SX01 の被葬者は、最上位の階層にいる「特別な人」とみることができるだろう。このように墓域の様相と社会構造（集団・階層）とを関連づけると、この時期には特定集団のみが方形周溝墓を採用することができるという社会ルールができあがり、その結果、**図 45（5）・（6）**にみられるように近江全域において方形周溝墓の数が激少するという現象がおこったと理解できるのではないか。

（2）方形周溝墓の衰退とは何か

方形周溝墓遺跡の数が急激に減少することを「衰退」とよんでいるが、その実態は、前述のように特定集団のみが方形周溝墓という墓制を採用することができるという社会ルールが確立され、方形周溝墓体制が崩壊しそれにかわる新たな社会秩序ができつつあるということである。すなわち、古墳社会という階級社会への序章がはじまったということである。

第２節　方形周溝墓群の様相と地域の社会構造

1　方形周溝墓群の様相と社会構造（集団・階層）

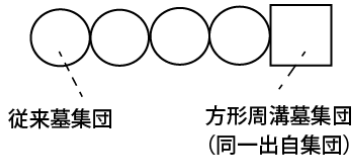
近江における方形周溝墓の受容・定着・衰退の過程をみてきた。その結果、観察された方形周溝墓群の様相と社会構造の対応について、様相Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの段階にわけることができる。図 47 にはその概念図をしめす。また、近江の各地域における方形周溝墓群の様相の時期的変遷を**図 48** にしめす。

様相Ⅰ：墓域に方形周溝墓があらわれる段階

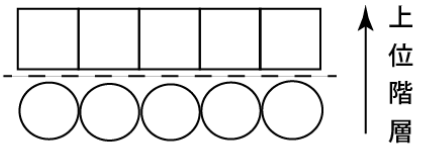
この段階では、従来墓群の中に方形周溝墓群があらわれる墓域、方形周溝墓のみからなる墓域があり、また方形周溝墓の造墓活動も一時的（短期的）なものが多い（第２章参照）。従来墓集団と方形周溝墓集団という区別もあいまいであり、両者には確たる格差がみられない。

墓域では方形周溝墓群に複数の群構成がみられることから、複数の出自集団の存在が想定できる。また、方形周溝墓の被葬者像としては「限られた人」であり、出自集団内の埋葬論理によって葬られる。ここでいう埋葬論理について確たる根拠をしめすことはできないが、集団の構成員全員が方形周溝墓に埋葬されるわけではないので、集団としての埋葬論理があるのは確かであろう。

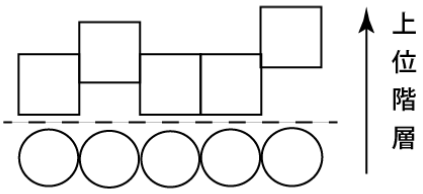
様相Ⅰは、近畿・東海地域という広域の視点からみると弥生前期の墓域の様相であり、近江では湖北地域の塚町遺跡（203-022）と湖西地域の北仰西海道遺跡（522-078）の方形周溝墓があらわれる弥生前期末の墓域の様相にあたる。塚町遺跡（203-022）は方形周溝墓群だけの墓域で、すでに軸方位をそろえる群構成がみられる。北仰西海道遺跡（522-078）では従来墓群の墓域の中に単体の方形周溝墓が混在する状況であり、方形周溝墓の造墓活動は一時的である。



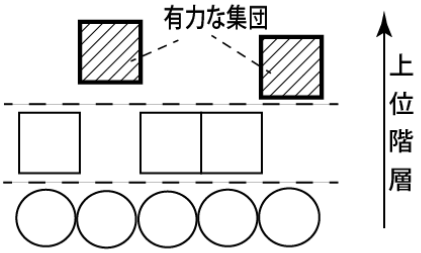
【様相Ⅰ】　方形周溝墓の出現
【社会構造】従来墓集団と方形周溝墓集団の間に格差はない



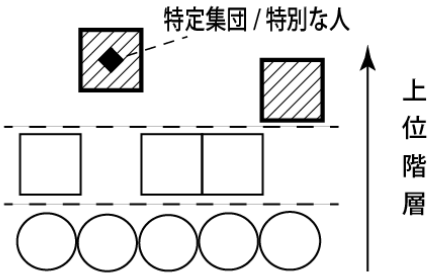
【様相Ⅱ】　方形周溝墓が普及 / 単位墓の出現
【社会構造】従来墓集団と方形周溝墓集団の間に階層差



【様相Ⅲ】　明確な群構成の出現
【社会構造】出自集団間での階層化



【様相Ⅳ】　規模の大型化 / 形態の多様化
【社会構造】有力な出自集団の析出 / 集団内での格差



【様相Ⅴ】　定型前方後方形周溝墓の出現
【社会構造】特定の出自集団の析出 / 特別な人の析出

図 47　方形周溝墓群の様相と社会構造の概念図

図 48　方形周溝墓群の様相の時期的変遷

様相Ⅱ：方形周溝墓群に複数の単位墓群があらわれる段階

方形周溝墓群が従来墓群と区域を違えて存在する墓域や、方形周溝墓群だけからなる墓域が観察されるが、両者が混在する墓域は少ない。つまり、方形周溝墓集団と従来墓集団はあきらかに区別されている状況にある。

方形周溝墓群において複数の単位墓群による群構成が認識でき、企画性のある造墓活動が展開されている。方形周溝墓が標準的な墓制として定着してきているのであろう。多数の方形周溝墓の造墓労働力・造墓技術力・造墓企画調整能力の必要性などを考慮すると、従来墓集団と方形周溝墓集団との間には階層差が発生しており、後者の方が上位にあるといえる。

群構成における単位墓群の出現は、出自集団としての紐帯意識の強まりをうかがわせるが、出自集団内・集団間での格差は認識できない。方形周溝墓という墓制が定着していることを考えれば、集団の多くのメンバーがこの墓制で埋葬されていたと考えられ、その意味では、被葬者像としては「一般の人」といえるだろう。もちろんメンバー全員ということではなく、集団内での埋葬論理で埋葬される人物が決められている。

様相Ⅱは、近江の各地域において顕著にあらわれるが、その時期は異なる。湖南地域では弥生中期前葉、湖東・湖北・湖西地域では中期中葉に顕著となる。

様相Ⅲ：方形周溝墓群に明確な群構成があらわれる段階

方形周溝墓群に列状配置・集合配置などの明確な群構成が認識できる。同一出自集団ごとに配置パターンを工夫し、出自集団への帰属意識の強まりと、各集団間での競争意識の高まりがうかがえる。墓域には群構成をもつ墓群からはずれて散在する方形周溝墓もみられるが、これらは一定の墓群を形成することなく造墓活動が途絶えた方形周溝墓集団の存在を示唆しているようにもみえる。このように、独自の配置パターンで出自を明示する集団と、そうではない集団を区別することができ、両者には格差が認識できるとともに、方形周溝墓集団間での階層化が進んでいると考えられる。

様相Ⅲも、近江の各地域においてみられ、湖南地域において弥生中期中葉に顕著となる。湖東地域では弥生中期後葉に、湖北・湖西地域では弥生後期に顕著となる。とりわけ、湖南地域での群構成の多様さは目覚しく、北太田遺跡（206-139）でみられる弧状配置（配置 D）は特徴ある群構成の中でも特異な構成であり、当該集団の高い技術力がうかがえる。

様相Ⅳ：方形周溝墓の形態が多様化し規模が大型化する段階

墓域に通例の方形周溝墓に混じって円形周溝墓（形態 B1・B2）・前方後方形周溝墓（形態 C1）があらわれ、形態が多様化するするとともに、台状部辺が 15m を越える大規模な墓があらわれる。また、それらの墓を核とした群構成が形成される（配置 B2・C2 など）。このような配置 B2・C2 をとる集団は、同列状態にあった多くの集団から抜け出したことを示しているのだろう。つまり、方形周溝墓集団の間での階層化が進むとともに出自集団のメンバーの間にも格差がみられ、その被葬者は「有力な人」として異なる形態の墓に埋葬されるのではないか。

様相Ⅳは、湖南・湖東地域では弥生中期後葉に、湖北地域では弥生後期に顕著となるが、湖西地域では明確ではない。

様相Ⅴ：　定型前方後方形周溝墓があらわれる段階

大規模方形周溝墓・前方後方形周溝墓（形態 C2）・前方後円形周溝墓（形態 D）をふくむ墓群が形成されるが、明確な群構成はとらない。このような規模・形態の墓は近江の各地域に数基のみ存在するだけであり、その被葬者は近江の各地域において「特別な人」といえるだろう。つまり、出自集団での「有力な人」から、地域での「特別な人」が析出したことをしめしている。

様相Ⅴは、湖南地域では古墳初期に、湖東・湖北地域では弥生後期に顕著となる。湖西地域では明確ではない。この様相Ⅴを経て、湖南地域では古墳前期に、湖東・湖北・湖西地域では古墳初期に方形周溝墓の数が激減する現象がおこり、方形周溝墓という墓制そのものが衰退期に入り、墳墓が優勢する古墳時代の景観となる。

2　社会構造（集団・階層）の地域性

図 48 のように、方形周溝墓群の様相Ⅰ～Ⅴの変遷は決して直線的なものではなく、また段階的でもない。これらを墓域とする集落の継続性やその墓域が共同墓地かどうかなど、地域の事情によって各様相のあらわれる時期が異なるのである。

ところで、社会の階層化という視点からすれば、様相Ⅱでは従来墓集団と方形周溝墓集団との間では、あきらかに階層化がおこっている。また、方形周溝墓集団に限って考えてみると、様相Ⅱでは階層化が明確ではないが様相Ⅲでは出自集団の間で階層化がみられる。そこで、方形周溝墓集団間で階層化が明確となる様相Ⅲ以降の変遷を、序章で述べた階層化プロセスにあてはめて、検討してみたい。

湖南地域では方形周溝墓群の様相Ⅲ～Ⅴが時期を追ってあらわれる。クラン同士の意識が強い段階から、選別されたクランの意識が強い段階、そしてクランの中で選別された人物の段階へと順次段階を踏んで進化する社会である。

湖東地域では様相Ⅲ→Ⅳの変遷がほぼ同時期におきている。紐帯意識が強いクランがそのまま特定のクランとして選別されるのであろう。また、湖北地域では様相Ⅲ→Ⅳ→Ⅴの変遷がほぼ同時期におきている。紐帯意識の強いクランが、特定のクランとして選別され、そのクランから特別な人物が選択されるという社会である。湖西地域ではこれらの階層化が明確ではなく、クランの紐帯意識は強まる（様相Ⅲ）が、そこに特定クランや特定の個人が選別されることがない社会である。

また、湖南地域では様相Ⅳ→Ⅴへの変遷が他の地域に比べて時間を要しているようにみえる（**図 48**）。ここでは方形周溝墓の基数、墓群・単位墓群の数も圧倒的に多く、様相Ⅴにおいても多くの前方後方形周溝墓（形態 B2）が造られる地域である（**図 45（5）・（6）**）。すなわち、有力なクランが林立し、「特別な人」が多い競争社会であったと考えられる。湖南地域の立地面、つまり野洲川下流域の広大で豊饒な扇状地を背景として、近江と他の地域とのヒト・モノ・情報の出入口にあたるという立地面での優位性がより有力なクランを生んだと考えられる。

以上の検討から、突出した規模、特異な形態、明確な群構成（配置）などの様相が、集団や階層といった社会構造の指標となっている。つまり、当該社会での階層化プロセスが方形周溝墓の様相の変化によって可視化されているといえるだろう。

おわりに

近畿・東海地域の方形周溝墓遺跡の状況を考慮して、近江への方形周溝墓の伝搬ルートを考えた結果、淀川・瀬田川ルート（湖南地域へ伝搬）、伊吹ルート（湖北・湖西地域へ伝搬）の二つのルートが想定される。湖東地域への伝搬については、湖北地域からではなく、湖南地域からの伝搬の可能性が高いと考えた。

また、近江における方形周溝墓群の様相を時期・地域の視点から整理し、各様相と社会構造（集団・階層）の関連性を検討した結果、方形周溝墓群にあらわれる様相の変遷は、社会構造とその階層化プロセスそのものであること、その階層化プロセスは地域性をもつことが明らかになった。

【参考文献】

兼康保明 1990「近江地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編』木耳社

滋賀県文化財保護協会 2007『丸木舟の時代 －びわ湖と古代人－』サンライズ出版

林博通 1998『古代近江の遺跡』サンライズ出版

伴野幸一 1990「弥生土器文様の地域構造」『二ノ畦・横枕遺跡発掘調査報告書　益須寺遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第 38 冊）守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター

福井県鯖江市教育委員会 2011『考古学フォーラム記録集　日本海側の弥生墓制』

横田洋三 1990「縄文時代復元丸木舟（さざなみの浮舟）の実験航海」『紀要』第 4 号　滋賀県文化財保護協会

終章　　研究の成果と課題

近江における方形周溝墓の研究を通して近江の弥生社会の構造（集団・階層）をあきらかにすること目的として、本研究をすすめた。以下に、その成果と課題をまとめる。

成果

（1）第２章では、方形周溝墓という墓制の初現期にあたる弥生前期の方形周溝墓遺跡が集中する近畿・東海地域の方形周溝墓を集成・分析し、当該社会像を推定した。

弥生前期には土壙墓・土器棺墓・木棺墓・方形周溝墓など墓制は異なるが、それらは集団が自ら選択しうる墓制であり、社会的資源の不平等から生まれたものではない。したがって、墓制からみると階層化された社会構造にはなっていないと考える。ただ、集団内ではそのメンバーの「限られた人」のみが方形周溝墓に埋葬されるというルールがある。

（2）第３章では、弥生中期前葉～中期後葉までの、約 360 基におよぶ方形周溝墓が検出された服部遺跡（守山市）を対象として、一つの墓域における方形周溝墓群の形成過程や群構成を分析し、当該社会像を推定した。

服部社会では方形周溝墓が墓制の標準であり、方形周溝墓群の大群は集落を、小群は集団を反映している。また集団は同一出自集団で、複数の出自集団により集落が構成されている。一つの墓域を複数の集落が共有するということから、服部社会は一定の共通価値観をもつ社会である。ただし、従来墓に埋葬される集団もいることから、方形周溝墓集団との間には階層差が認められる。

（3）第４章・第５章では、近江全域を湖南・湖東・湖北・湖西地域にわけて各地域の方形周溝墓の集成と分析をおこない、方形周溝墓群の様相から各地域での社会構造（集団・階層）を推定した。

湖南地域では方形周溝墓の初現は弥生中期前葉で、中期中葉には墓域での群構成が明確となり、中期後葉末から形態が多様化し、大規模方形周溝墓・円形周溝墓を核とした群構成がみられる。弥生末～古墳初期には方形周溝墓の数が激減するとともに、特定集団・特定個人の析出を表象すると考えられる定型前方後方形周溝墓があらわれる。このように方形周溝墓群の様相は段階をふんで変化し、序章で論じた社会の階層化プロセスと対応させて説明ができる。

湖東地域では方形周溝墓の初現は弥生中期中葉で、近江地域ではもっとも遅い。弥生中期後葉には形態の多様化がはじまり、円形周溝墓・定型前方後方形周溝墓をふくむ墓群が出現する。湖北地域では方形周溝墓の初現は弥生前期末で、近江ではもっとも早く方形周

溝墓を受容する。弥生中期後葉には群構成が明確となり、古墳初期には形態が多様化し円形周溝墓・前方後方形周溝墓が出現するとともに、地域外（北陸地域など）からの影響を示す様相（台状墓など）もみられる。湖西地域では方形周溝墓の初現は弥生前期末にさかのぼるが、その後は単発的な造墓活動はあるものの、明確な群構成や形態の多様化がみられず、方形周溝墓が定着した痕跡は確認できない。

このように、方形周溝墓の初現から特定集団・特定個人が析出する定型前方後方形周溝墓の出現までの段階は地域により大きく異なる。

（4）６章では、第２章～第５章までの結果を基に、近江における方形周溝墓の伝搬・盛衰を論じた。

近江への方形周溝墓の伝搬は二つ考えられる。弥生中葉初頭に畿内地域から淀川・瀬田川を経て湖南地域への伝搬（淀川・瀬田川ルート）、および弥生前期末に東海地域から伊吹山南麓を経て湖北地域・湖西地域への伝搬である。

また、近江での方形周溝墓の拡散・定着については、弥生中期中葉には湖南地域から湖東地域へ伝搬し、各地域に粗密はあるが、近江全域に方形周溝墓が定着する。その後、古墳初期には全域において方形周溝墓の数は急減するものの、大規模方形周溝墓・円形周溝墓・前方後方形周溝墓などが出現し、弥生時代の墓制としての方形周溝墓の衰退がはじまる。

（5）さらに、第６章では、近江全域の方形周溝墓群の様相を分類し、各様相とその社会構造（集団・階層）の関連について論じた。

方形周溝墓群のあり様は、様相Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの段階にわけることができる；

様相Ⅰ：墓域に方形周溝墓があらわれる段階

様相Ⅱ：方形周溝墓群に複数の単位墓群があらわれる段階

様相Ⅲ：方形周溝墓群に明確な群構成があらわれる段階

様相Ⅳ：方形周溝墓の形態が多様化し規模が大型化する段階

様相Ⅴ：定型前方後方形周溝墓があらわれる段階

これらの様相は集団と階層という視点からすれば、様相Ⅱでは従来墓集団と方形周溝墓集団との間ではあきらかに階層化がおこっている。また、方形周溝墓集団の間では、様相Ⅱでは階層化が明確ではないが、様相Ⅲでは出自集団の間で階層化がみられる。

この様相は当該の社会構造（集団・階層）を反映していると考えられる、つまり、当該社会での階層化プロセスが、方形周溝墓の様相の変遷によって可視化されていると考えられる。

課題

（1）社会構造（集団・階層）の解明を目的とする本研究では、近江全域での方形周溝墓を比較検討するため、どの遺跡においても共通情報として存在する基本情報、すなわち規

模・形態・群構成を中心に検討し、集団・階層を論じた。とりわけ、群構成（これも調査区域の広さや方形周溝墓の検出数に左右されるが）を詳細に検討し、集団・階層と関連づけて論じた。しかし、そもそもそのような社会構造となった背景について、水稲耕作の定着過程での一般的な社会事情を推定したのみで、方形周溝墓遺跡とその周辺遺跡の調査・分析をしていない。とりわけ、墓域と居住域（狭義の集落）との関係は重要であり、残された大きな課題と考えている。

（2）本研究では、階層（被葬者）に関する多くの情報をもつ埋葬施設からのアプローチができていない。これは、出土資料の状況に大きく依存するので、今後の調査に期待するところが大きい。また、被葬者像、とくにその精神面（葬礼祭祀）を知る上で供献土器からのアプローチが有効である。供献土器は検出される遺跡も多く遺跡間での比較検討も可能であり、新たな視点も与えてくれるはずである。ただ、筆者の土器観察に関する習熟度は十分ではなく、今後スキル向上に向けて精進したい。